

---

# 魔法少女リリカルなのは ViVid symphony

天海澄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Vivid symphony

### 【Nコード】

N1871Y

### 【作者名】

天海澄

### 【あらすじ】

これは、ヴィヴィオがアインハルト達と出会う一年前の話。あ  
るいは、少し別の世界のお話。

これは、ヴィヴィオが本当の意味で“高町ヴィヴィオ”になる物語。大切な人から受け継いだ強くて優しい心と、自分自身の想いを胸に。大切な人のために全力全開で戦う、強くて優しい物語。

自サイトEXBreakerからの過去作転載。  
EXBreaker側では本作本編のほかにも、外伝や短編百合S  
S、その他各種同人イベント参加告知なども行っています。  
興味がある方は、そちらも訪問していただけると嬉しいです。  
(2011/11/13現在、サイトリニューアル。未編集部分も  
逐次更新)

## 第一話 始まりの夏休み

ザンクト・ヒルデ魔法学院。

ミッドチルダ北部ベルカ自治区に位置する、古代ベルカの聖王を祀る聖王教会が管理するミッションスクール。初等教育を行う初等部が5年制、中等教育を行う中等部が2年制で設置されており、更に上位の教育も2年おきに進学が可能。最終的には学士資格まで取得可能な大型学院である。

その初頭部の、3年生。

高町ヴィヴィオが、そこにいた。

「みなさん、もう夏季休暇が近いからといって、羽目を外しすぎて怪我をしたりしないように注意しようね」

季節は夏真っ盛り。一年で一番暑い時期である夏は、いわゆる夏季休暇の始まる時期でもある。生徒達のやる気や体調に配慮したためなのか、夏季休暇というものは学生という身分が存在する世界である限り、いかなる時空世界にも存在していた。

もちろん、ザンクト・ヒルデ魔法学院もその例外ではない。

『ハーイ』

教室中に、子供達の元気な声が響き渡る。それも、いつものようにただ元気なだけではなく、教室全体の空気がどこかそわそわしていた。

「それでは、ごきげんよう」

『ごきげんよう』

魔法学院の夏服に身を包む生徒たちがもう待ちきれないとも言わんばかりに一齐に立ち上がるとほぼ同時に、学院全体に鐘の音が響き渡る。その瞬間、それまでの若干張りつめていた教室の空気が一気に緩み、他でもないその空気を形作っていた子供達が、これから始まる長い夏休みに心躍らせる放課後の風景となった。

それもそのはず。普段の授業だ勉強だと抑圧された生活が、これから一ヶ月以上自由に過ごせる夏休みが始まるのだから。

高町ヴィヴィオも、その例外ではない。

鐘の音が鳴ると同時に、ヴィヴィオの元には仲のいい友達が集まってくる。彼女たちと仲良くおしゃべりをしながら、首都クラガナに延びる快速レールウェイに乗って帰るのが、もう3年目となる彼女の日課だ。

「ヴィヴィオ、明日からとうとう夏休みだよ！」

「そうだね。みんな予定とか決まってるの？」

「私ね、あさってからおばあちゃんの家泊まりに行くの」

「コロナのおばあちゃん家って、確か南部だっけ？」

「そう。アルトセイム地方に住んでるの。自然が残った静かないい

ところなんだよ」

「あ、いいな。私もアルトセイム地方に行ってみたい」

おしゃべりの内容は、他愛も無い年相応のものである。そのおしゃべりの話題も、時期柄自然と明日からの夏休みのものとなる。

楽しそうにおしゃべりしながら、ヴィヴィオたちは帰り支度を整えた。

「ヴィヴィオは夏休みの予定とかないの？」

ヴィヴィオの親友の一人、口元からのぞく八重歯がトレードマークのリオが、教室のドアに手をかけながら尋ねた。

「私は、どうかな。ママたちは忙しいから、案外どこにも行けないかもしれない」

「あー、そっか。そうだよな」

「片や管理局航空部隊のエースオブエース、片や管理局次元航行部隊のエリート執務官、だもんね。やっぱり忙しいよね」

ヴィヴィオのもう一人の親友、コロナが残念そうに言う。

「うん、まあね」

コロナの言葉にヴィヴィオは少し寂しそうに笑っしかなかった。

高町ヴィヴィオ。

管理局のエースオブエース、高町なのはとフェイト・Ｔ・ハラオウンを両親に持つ、少し特殊な生まれをした子供である。管理局の第一線で働き続けるヴィヴィオの両親はやはり多忙であり、普段はともかく有事の際などのことを考えると、容易に長期休暇を取れない立場にあるのだ。それが分かっているヴィヴィオではあったが、それでも、夏休みに一緒に遊びに行けないのは残念であった。彼女もまだ９歳の女の子なのである。まだまだ、両親に甘えたい年頃なのだ。

「仕方ないよね」

二人に聞こえないように、ヴィヴィオは一人ごちた。

『生徒の呼び出しをします』

仲良くおしゃべりをしながら下駄箱のところまできたヴィヴィオ達だったが、突然聞こえてきた校内放送に少し足を止めた。いつもならばそれはほとんど回りの喧騒と同じものであるが、今回のそれは少々特別な意味を持っていたからだった。

『初等部３年１組の高町ヴィヴィオさん。至急、第一応接室まで来てください。繰り返しします。初等部３年１組の高町ヴィヴィオさん、至急第一応接室に』

「……私？」

左右で色の違う瞳を見開いて、ヴィヴィオが呟いた。

「……みたいだね」

「応接室ってことは、お客さん？」

「なの、かな？」

自分の下を訪れる客人など、ヴィヴィオには心当たりがなかった。確かに自分には少々特殊な知り合いが大勢いるが、だからといってわざわざ学校まで尋ねてくる意味がわからない。

用事があるのなら、自分が持つ携帯端末に直接連絡を入れればいいのに。

ヴィヴィオは首を傾げつつも、

「……とりあえず、行ってくるよ。遅くなるかもしれないから、二人は先に帰っててね」

なにがなんだか良く分からないが、ヴィヴィオはとりあえず応接室に向かうことにした。

ザンクト・ヒルデ魔法学院はかなりの広さを誇るが、それでも初等部応接室と下駄箱まではそこまで離れてはいない。ヴィヴィオの足でも、すぐに応接室に着くことができる。



応接室の前には、なぜか緊張した面持ちの担任の先生が、直立不動の姿勢でヴィヴィオのことを待っていた。

「……どうしたんですか、先生」

それはもう、ヴィヴィオが思わず声をかけてしまうほどに。

先生はヴィヴィオが来たことに気付くと、すごい勢いでヴィヴィオに詰め寄った。普段から喜怒哀楽の激しい先生だが、さすがのヴィヴィオもこれには面食らった。思わず、私になにか悪いことしたかな、と学生が呼び出しを喰らってまず思い浮かべることを考えてしまう。

しかし、そのヴィヴィオの予測は大幅に外れていた。

「どうしたもなにも、高町さん、あなた一体どういう交友関係を持っているの!？」

「え、え？」

そんなことを言われても、ヴィヴィオにはなにがなんだか理解できなかった。

「まさか、あの人たちがここに来るなんて……!？」

そういう先生の表情は、例えるならば、憧れの先輩に突然出会った女学生のような、驚きと戸惑いと喜びの感情が入り混じったような複雑なものだった。ついこのあいだまで学生をしていたほどに若い先生なので、学生の気が抜けないのはある意味当然ではあるのだが、そんな表情を向けられた生徒はたまったものではない。

「こらこら、エミリアさん。そんなに詰め寄ったら、ヴィヴィオさんが困るでしょ？」

応接室の扉が開き、中から一人の落ち着いた雰囲気的女性がでてきた。彼女は修道服に身を包み、ヴィヴィオに詰め寄るエミリア先生を優しく諫めるような表情をしていた。

「あ、シスターシャツハ」

「ヴィヴィオさん、ごきげんよう。お久しぶりですね」

協会流の淑やかな挨拶をし、シャツハはとても上品に微笑んだ。まさに、修道女を絵に描いたかのような仕草である。

「じ、ごきげんよう」

ヴィヴィオも慌ててあいさつを返すも、やはりシャツハのような自然さは現れない。これが年期と信仰心の差なのかな、とヴィヴィオは心の中で考えた。

あいさつを返して、ふと、ヴィヴィオは思う。

シャツハさんは、一体どんな用事でわざわざ自分のことを訪ねてきたのだろうか。

「ヴィヴィオさん。この学院での毎日はどうですか？」

「え？ …… ええ、凄く楽しいです。お勉強も分かりやすいですし、仲の良いお友達もいますし。周りも、自然に囲まれていて、とても

いい学校だと思います」

「そうですか。それは良かったです。この学院を推薦した甲斐があるというものです」

シャツハの話も他愛のない世間話であり、ますますヴィヴィオの疑問は膨らんだ。

まさか、自分と世間話をしに来たわけでもあるまいし。

「……さて、ヴィヴィオさん。実は私が今日ここに来たのは、あなたに特別な用があるから、というわけではありません」

ますます意味が分からない。

ならば、どうしてわざわざ校内放送まで使って、自分のことを呼び止めたのだろうか。以前出会ったヴェロツサさんならともかく、生真面目なシスターシャツハが、よもや世間話をするためだけにこんなことをするとは、考えにくかった。

「厳密に言えば、ヴィヴィオさんに用があるのは、私ではなく別の人なんです。私は、その人の付き添いでここまで来ただけなんです」

シャツハの言葉に、ヴィヴィオもピンときた。

なぜなら、シャツハがつき従う人間など、一人しかいないのだから。

「さあ、ヴィヴィオさん。その方が、お待ちかねですよ」

シャツハはとても優雅な、しかし無駄のない滑らかな動きで、応接室の扉を開いた。

ヴィヴィオは軽く息を吸い、応接室に足を踏み入れた。

かくしてそこには、ヴィヴィオの予想通りの人物がいた。

「ヴィヴィオさん。ごきげんよう。お久しぶりですね」

そこには、まるで絵画のごとく優雅に微笑む、カリム・グラシアの姿があった。

「失礼します」

ヴィヴィオは部屋に入ると、できる限りの丁寧なあいさつをし、カリムの前に座った。黒壇で作られた机を中心に、ヴィヴィオとカリムは向き合う形となる。シャツハは、いつの間にかカリムの傍らに控えていた。

ヴィヴィオは応接室の革張りのソファに座って姿勢を整えると、改めて眼前の人物に視線を向けた。

カリム・グラシア。

ザンクト・ヒルデ魔法学院のOGであり聖王協会騎士団の騎士、そして時空管理局では小将相当の権限を与えられている、聖王教会

の重鎮である。立場柄カリムは多くの人に出会うことがあるが、その身に纏う言葉にできない威圧感を放つ彼女に相対して、いつもの自分を出せるものはごく十数名に限られるだろう。

そしてヴィヴィオは、彼女の前でもいつもの自分でいられる、数少ない一人である。

とは言え、そもそもが目上の人なので、少し緊張してしまうのだが。

「あの、カリムさん」

ヴィヴィオは開口一番、優雅に紅茶を口にするカリムに、幾分遠慮気味に話しかけた。

それに対し、カリムはゆっくりとティーカップから口を離し、受け皿の上に置き、微笑んだ。

「はい、なんですか？」

それは、あまりにも美しい、まさに聖母のごとき微笑みだった。

それゆえに幾分話しかけ辛い雰囲気を醸し出しているのだが、それはある意味仕方のないことだろう。カリム本人は、もっと色々な人に気軽に話しかけて欲しいそうだが、中々難しいものである。

「……どうして、私のことをわざわざ訪ねてきたんですか？」

それは、至極当然の疑問。

ヴィヴィオとカリムは幾度か面識があるとは言え、両親を介さなければ接点などほとんどないし、自分の個人的な連絡先は伝えてある。それだけでなく、ヴィヴィオには聖王教会の幹部クラスになど呼ばれる覚えはないのだ。そのため、ヴィヴィオにはこれからなにが起こるのか、まったく想像もつかなかった。

「そうですね。回りくどいことなど言わず、単刀直入に言いましょう」

カリムの表情が引き締まった。数瞬前までの微笑みは消え去り、真面目な表情となる。それと同時に、部屋の中の空気すら引き締まった。歓談とした雰囲気から、一切の雑念すら許されない空気に切り替わる。

ヴィヴィオも、思わず崩れてもいない姿勢を正し、気持ちを切り替える。

「ヴィヴィオさん。古代ベルカ式の魔法に、興味はありませんか？」

「……え？」

唐突な質問に、ヴィヴィオはその意味を測りかねた。

「順を追って説明しましょう」

言い、カリムは両手を握り、姿勢を若干前に崩した。

「今、聖王教会の上層部を中心に、失われてしまった聖王の技術を取り戻そう、という機運があります。ですが、その機運はなにも最近になって始まったことではありません。私たちは古代ベルカの聖

王を信仰する聖王教会です。ですので、失われてしまった聖王の技術を復活させよう、という思想が生まれるのはむしろ当然のことです。しかし、聖王の技術は本来は古代ベルカ王族の持つ固有スキル模倣しようと思ってもできるものではありません。そもそも、現代では古代ベルカ式魔法を習得している人からほとんどいないのです。そういった機運こそあれど、その復活はほとんど不可能だと言われているました」

「しかし、そこにヴィヴィオさん、あなたが現れたのです」

シャツハが、カリムの話を受け継いだ。

「古代ベルカの王族の遺伝子から生み出され、『聖王の印』を持ち、魔力光は虹色のカイゼル・ファルベ、そしてすでに古代ベルカ王族の固有スキル『聖王の鎧』を所持している、高町ヴィヴィオ。あなたの生まれの詳細を知っているのは聖王教会では上層部のみですが、その上層部が今あなたに注目しています。聖王の一族の固有スキルを復活しうる人材、と」

「もちろん、これはあなたに強要するものではありません」

しかしカリムは、言葉とは裏腹に溜息をついた。まるで、これは自分の本意ではない、といった具合に。

「ですが、教会の上層部の一部は、あなたが失われた古代ベルカ王族の魔法を復活させることを強く望んでいます。中には、例え強制させてでも習得させるべきだ、という強硬派の意見もあります。そして、その考えに賛同する管理局の一派の存在も浮上しました。：おそらく、近いうちにその強硬派の勢力が何らかの形で接触を図ってくるでしょうし、最悪強制される、ということもありえないと

は言い切れません。私個人としては、あなたの魔法はあなた自身で決めて欲しいのですけど……。そうはいかないのが、現実です。だから今日、私はあなたに会いに来たのです。せめて、自分の周りになんが起きているのか、知ってもらうために」

カリムとシャツハの話を聞いたヴィヴィオはしかし、すぐには反応できなかった。

ヴィヴィオは元々聡い子供である。二人の話を過不足なく正しく理解するだけの能力を有し、それ故に言葉を失ってしまったているのだ。しかしそれも仕方のないことだろう。いくら聡いといっても、ヴィヴィオはまだ9歳なのである。そんな巨大な陰謀の渦中に自分が巻き込まれているなんて、理解できたところで即座に納得できるものではない。

「……ヴィヴィオさんは、どの魔法形態を習得するつもりなのですか？」

カリムが、混乱しているヴィヴィオに優しく話しかける。

ヴィヴィオはそれに、いったん呼吸を整えてから、答えた。

「……実はまだ、決めてないんです。私の魔法適正は本来なら古代ベルカ式の純粹魔力の射出・放出系ですけど、あの、ゆりかごのときに、私は両親の魔力資質とベルカ式の近接戦闘の資質を手にいれました。ですので、現状では私はミッド式でも近代ベルカ式でも古代ベルカ式でも習得できるんです。それに、最近友達と一緒に身体を動かすのも楽しくて」

「そういえば、シスターシャンテやオットー、デードも言ってい



ましたね。ヴィヴィオさんは、最近S Aに興味があると」

「はい。それに、無限書庫で本を読んだり調べたりするのも楽しいから、魔導師じゃなくて学者になるのもありかな、って思うんです。だから、迷っちゃって」

ヴィヴィオは普通の女の子ではない。厳密に言えば、肉体的には普通の女の子なのだが、その生まれ方が特殊だった。

その正体は、古代ベルカ王族の遺伝子から、時空管理局を転覆させかけた大犯罪者ジェイル・スカリエッティによって生み出された特殊なクローン体である。そのため、現代においてはほとんど衰退してしまっただ古代ベルカ式の魔法資質、それも古代ベルカでも更に稀な純粹魔力の射出・放出系魔法の適正と、古代ベルカの王族の固有スキルを持っている。さらに、かつてゆりかごで『聖王の器』として改造され操られた結果、両親である高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの魔力資質と、本来持たないベルカ式近接戦闘の資質を手に入れたのである。

つまり、今のヴィヴィオは、すべての魔法形態の資質を持っていることになる。

もちろん、生まれつきの資質である古代ベルカ式の純粹魔力の射出・放出系魔法が一番適正が高いのだが、ヴィヴィオが憧れている両親の魔法形態はミッド式であり、さらに言えばヴィヴィオの資質は高速並列運用型の適正も有しており、総合的には現在の無限書庫司書長のような学者型が向いている、と評することもできる。多才であるが故に、どの進路を選べばいいのか、ヴィヴィオは迷っていたのだ。

「一応、どの進路を選んでもいいように、両方の勉強はしていたんですけど……」

幸いなことに、ヴィヴィオの母親である高町なのはは時空管理局の戦技教導官であり、時空管理局無限書庫の司書長ユーノ・スクライアとも親しいことから、ヴィヴィオは魔法技術を教えてくれる人にも資料にも困らなかった。故にこれまで、どちらを選んでもいいように両方の魔法形態の勉強をしてきたのである。

「……そうですか」

カリムはヴィヴィオの話を聞くと、どこか安心した風に溜息をついた。

「ヴィヴィオさんはまだ若く、将来も有望です。才能もあるし、それを生かそうとする努力もできる人です。今ヴィヴィオさんはさらっと言いましたが、すべての魔法形態を勉強するなんて、そんなこと容易にできることはありません」

「そうなんですか？」

「ええ。ミッド式魔法と一緒に、ミッド式のエミュレートである近代ベルカ式を習得することはそれほど難度の高いことではありませんが、それに古代ベルカ式魔法を加えたら話は別です。ミッド式と古代ベルカ式は、まるで別の魔法体系なんですから。……ですので私は安心しました」

カリムは懷に手を入れ、何かを取り出した。

「あなたならきっと、自分で自分の魔法の『つかいかた』を選ぶこ

とができるでしょう。だから私は、安心してこれをあなたに託すことができます」

それは、ひし形を4つ組み合わせて作られた十字架だった。綺麗な銀色をしていて、十字架の中心、ひし形同士を繋いでいる部分には透明の宝玉が埋め込まれている。ベルカの紋様である剣十字をさらに簡略化したような形状で、本体と同じ銀色の鎖によって、首から提げることができるようになっていた。

「それは？」

「古代ベルカの王族が使用していたと言われている、アームドデバイスです。これを、あなたに」

「……私、に？」

「ええ。これは本来、あなたが持つべきなのです。……心配しなくても、これをあなたに、古代ベルカの魔法を復活させる可能性のある、高町ヴィヴィオに託すことは上層部でも決定していることです。これを持っていれば、強硬派の一派にとりあえず問答無用で古代ベルカ式魔法を強要されることはないでしょう」

「古代ベルカ式の聖王のデバイスを持っていることで、あなたが聖王の魔法を復活させる意思を持っている、と思わせることができるのです。この状態で下手にあなたを刺激すると、せっかく出したやる気を失う可能性もあるのでから」

カリムはソファから立ち上がり、ヴィヴィオの正面来ると、座っているヴィヴィオと同じ目線にしゃがんで、ヴィヴィオの首にデバイスを提げた。

「さきほども言いましたが、最終的にあなたの魔法を決めるのはあなたなのです。よく考えて、決めてください」

ヴィヴィオは、自分の首に下げられたデバイスをじっと見つめた。

未だに頭の中はまとまらない。

普段からどの魔法形態を学ぶかで迷っていたのに、こんな形で心を決めないといけないとは。そんなに急に、大きな期待を向けられても、ヴィヴィオにはどうしようもなかった。そんな期待に答える自身もないし、ミッド式の魔法にも未練がある。こんなことで古代ベルカ式を選んでいいのかどうかも、今のヴィヴィオには分からなかった。

でも、とりあえず。

「……カリムさん」

「はい」

「……この子の名前、なんて言うんですか？」

ヴィヴィオは、今日から自分の相棒となるかもしれないデバイスを指差した。

「ああ、忘れるところでした」

カリムはヴィヴィオの瞳を見据え、厳かに、デバイスの名前を告げた。

「『希望の光』ザイフリート。それが、その子の名前です」

「……はあ」

帰り道。

ヴィヴィオは、ため息をつきながら家路についていた。今の時刻は十五時ちよつと過ぎ。あの話の後、カリムとシャツハと食事をすることになり、なんだかんだで帰るのはこの時間になってしまったのだ。

無論、ヴィヴィオがため息をついたのは帰るのが遅れたことではない。

カリムがわざわざ自分のことを訪ねてまで告げた、言葉の意味である。

ヴィヴィオは自分の首から下げられたひし形十字を見つめる。アームドデバイス『ザイフリート』。本来アームドデバイスは人工知能を有しているのだが、ザイフリートはヴィヴィオになんの反応も示さなかった。

そのことについては、昼食を食べながら、カリムが説明してくれた。

ヴィヴィオはカリムの言葉を思い出す。

『ザイフリートは、古代ベルカ時代に特殊な魔法を使う王族のために特注されたアームドデバイスです。故に古代ベルカ王族以外には使用できず、旧暦の時代に王族が滅んでからかれこれ五百年近く起動されていません。どんなに科学が発展しようと、デバイスに関しては起動ができなければ対話もできませんし、なにより内部の機器の換装ができません。魔法的に封印されているのに等しいわけですから』

『なら、どうやってこの子を使えばいいんですか？』

『それはおそらく、ザイフリートがヴィヴィオさんのことを？忠義をかけるに値する主？』だと認識すればいいんだと思います』

『……随分、曖昧な答えですね』

『ごめんなさい、ヴィヴィオさん。ザイフリートに関しては古い文献に少ししか記録が残っていないくて、分かっていることは先ほどお伝えしたことで、形態、それとマスターの認定パスワードくらいなんです。ですから、その子がどんな性格で、本当はどんな主を求めているのか、現状ではまったく分からないんです。それを知ることができると可能性のある人物も、現状ではヴィヴィオさんしかないわけですし』

話の結論はつまり、現状ではザイフリートは使用不可能、ということだった。

「……………はあ……………」

再び、ため息が漏れた。

こういつとき、自分の将来に関わることだし、普通なら両親に相談するところなのだろう。

しかしこんなときに限って、なのは泊まり込みの教導任務中、フェイトも長期の次元航行任務に出発したばかりだ。今すぐ決めなくてはいけない、ということでもないわけだし、仕事の邪魔をしてもいけない。わざわざ連絡を入れるのも躊躇われた。

そうなると他に相談に乗ってくれそうな身近な大人となると……。

「ユーノさんか、リンディさん、かなあ……………」

そのくらいしか、今のヴィヴィオには思いつかなかった。

「でもなあ……………」

どうしてかヴィヴィオは、彼らに相談する気分にはなれなかった。

ユーノもリンディも、相談すればきつと親身になって答えてくれるだろう。でも、それはあくまでも参考であって、答えにはならない。

いくら相談しようと、最終的に決めるのはヴィヴィオ自身。

結局は、自分の問題なのだ。

「はあ……」

だから、気が重い。

自分がいろんな人から期待されていることを、ヴィヴィオは知っていた。生まれが特殊だった、ということもあるが、あの高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの子供、ということが、ヴィヴィオの注目度を押し上げていた。

そしてなりより。

なのはとフェイトは、血の繋がらない自分のことを本当の親子以上に愛してくれている。

そんな彼女たちの期待に答ええないといけない、というのが、ヴィオの無意識下にプレッシャーを与えていた。もちろん、なのはもフェイトもヴィヴィオが魔法を習得することすら強要していないだから、それはただのヴィヴィオの気持ちの問題なのだが。

「私、どうして魔法の勉強をしようと思ったんだっけなあ……」

ぽつりと、ヴィヴィオが呟いた。

小さな頃、まだ自分が高町の姓を貰っていなかった頃。

ヴィヴィオは確かに、魔法を勉強したいと、心の底から強く願った。

あの頃はただ純粹に、漠然と、魔法を勉強したいと思っていたわ



けだけでも。

あの頃の自分は一体、どうしてそう思うようになったのだろうか。

「どうして、だったのかな……」

今までがむしゃらに、どんな魔法形式を選んでもいいように勉強してきた。

それは一体どうして、なんのためだったのか。

あの時の自分は、どうしてあんなにも魔法を使うことを望んでいたのだろうか。

今この時まで、勉強することに夢中で、肝心なことを忘れてしまっていた。

(……もしかしたら、あの時の気持ちを思い出せば、答えが見つかるかもしれないなあ……)

ヴィヴィオが当時の純粋な想いを思い出そうとした、

その時。

《……て……誰……、……け……》

「？」

何かが、ヴィヴィオの脳裏をよぎった。

それは自分の中にある記憶から生み出されたものではなく、明らかに外部からヴィヴィオの脳裏に直接送られたものだった。

ヴィヴィオはこの感覚に覚えがあった。

思念通話。

魔法の力で言葉を介さずに心と心で会話する、魔導師の基本技能だ。

今の思念通話はノイズだらけで、録に聞き取れたものではなかったけど。

「……気のせい、かな？」

《……て……誰……、……け……》

「！」

再び、ヴィヴィオの頭の中に、ノイズだらけの思念通話が送られてきた。

気のせいではない。

それは確かに、ヴィヴィオに向けて送られてきたものだった。

ヴィヴィオは意識を集中して、ノイズだらけの思念通話を、誰かの心の声を聞こうとした。

手にした鞆を足元に置き、両手を広げ、瞳を閉じる。

ヴィヴィオの両手の先に、思念波を確実に受信するためのミッド式の環状魔法陣、そして足元にはノイズキャンセラーの効果을付与したベルカ式の正三角形の魔法陣が展開される。それぞれの魔法陣を構成する魔力の色は、光り輝く虹色。

《……けて……誰か……、助けて！》

「！？」

相変わらず、ノイズ交じりで聞き取り辛い。

しかし、最後の言葉だけははっきりと聞き取ることができた。

助けて、と。

それは、誰かの心からの悲痛な叫び。

誰かが今苦しんでいて、自分に助けを求めている。

ヴィヴィオはほぼ反射的に、足もとにミッド式の魔法陣を展開、探査魔法を発動させる。

『エリアサーチ！』

それはなのはから教わった、周囲を探索するためのミッドチルダ式基本魔法。ヴィヴィオはそれを、デバイスの補助なしに純粋な自分の力だけで発動させた。これも、時間があるときにしてもらっているのはこの練習の成果。

まもなく、周囲にばら撒いたサーチャーからの情報が、視覚情報としてヴィヴィオの脳内に直接送信される。

その情報は、近くの森の中で、一人の自分と同じぐらいの年頃の女の子が必死の表情で走っている姿と、その女の子を追いかけている、いかにも怪しい大男の姿。

画像情報の画質はあまり良くなかったが、今までヴィヴィオが集めた少ない情報と総合しなくても、大男が悪意を持って少女を追っているのは明らかだった。

ヴィヴィオはエリアサーチを終了すると、足もとの鞆を持って、すぐに走り出した。

迷わなかった。躊躇わなかった。

誰かを助けに行くことに。

目指すは、サーチャーが対象を発見した場所。

すべては、泣いている子を、助けるために。

『デバインシューター、シュート!』

ザンクト・ヒルデ魔法学院敷地内の森の中。

ヴィヴィオが現場に駆け付けた時には、まさに大男が少女に手を

かけようとしているところだった。

それを視認した瞬間、ヴィヴィオは走りながら右手を伸ばしその先端にミッド式環状魔法陣を展開、瞬時に三個のティバインスフィアを形成、それらを一息に、大男の右腕めがけて射出した。

ヴィヴィオの右手から放たれたティバインスフィアは全弾大男に命中、右腕が弾き飛ばされ、突然のことに反応できない大男を尻目に、ヴィヴィオはさらに接近、

『ブリッツアクション』

今度は魔法陣を形成せず、純粹な魔力を両足に収束、そして瞬間解放。生身の人間では発動できない瞬間的な高速で大男の前を通過すると同時に襲われていた少女を回収、足もとに魔法陣を展開、大男から距離を取ってスピードを殺すと同時に衝撃を吸収。

大男がヴィヴィオの姿を視認した時には、すでにヴィヴィオは大男から十メートル以上離れた場所にいた。

「……ふう。良かった、間に合った」

ヴィヴィオは助け出した女の子を抱きかかえたまま、大きく息を吐いた。

それから、腕の中にいる少女を見つめた。

「大丈夫です……か？」

少女の無事を確認しようとして、しかしヴィヴィオはそれ以上先の言葉がでてこなかった。

なぜならその少女の顔に、ヴィヴィオは見覚えがあったからだ。

「……アリカ……ちゃん？」

「……………ヴィヴィオ？」

相手もそのことに気付いたらしく、緊急事態でありながら、二人の思考は数秒間完全に停止してしまった。これが戦場だったりしたら、二人とも死んでいるところである。

何も言えず、見つめあう二人。

先に思考力を取り戻したのは、ヴィヴィオの方だった。

「……あ！ と、とりあえず、大丈夫、アリカちゃん？」

「え、ええ、うん、大丈夫よ？」

ヴィヴィオはとりあえず、腕に抱えたままだったアリカを下ろし、まじまじと彼女を見つめた。

アリカ・フィアット。

ヴィヴィオと同じザンクト・ヒルデ魔法学院の同じ学年でありながら、一度も同じクラスになったことがない女の子である。

クラスが違えば当然接点もなく、本来ならちゃん付けで呼び合うような親しい仲にはならいし、そもそも顔を覚えているかどうかすら怪しいものだ。なのにどうしてヴィヴィオとアリカはちゃん付け

で呼び合うような仲なのか、というと、その理由はアリカの両目にあった。

アリカの右の瞳は紅玉のように紅いの、左の瞳は空のごとく蒼いのである。

つまりアリカもヴィヴィオと同じオッドアイで、その他の要因も重なって二人はクラスは違えど自然と仲良くなったのだ。

しかし、どうして彼女が、謎の大男に襲われていたのだろうか。

「アリカちゃん、なにがあつたの？」

動揺と混乱で乱れる心を無理矢理押さえつけ、ヴィヴィオは尋ねた。

しかしアリカは、首を横に振った。

「……分からない、の」

「分から、ない？」

「うん。一人で学院から帰ろうとしてたら、突然あの人に追いかけて、逃げたけどつかまって、無理矢理ここに連れてこられたの。もがいても全然ビクともしないし、助けを呼ぼうとしても必死で走りながらだったし、声が出なかった。怖くて、でも私は、誰かに助けてもらおうと思って、夢中で、習ったばかりの思念通話を送った。誰か助けて、って」

ヴィヴィオに事情を話すアリカの全身は小刻みに震えていて、顔

面蒼白で、今にも泣き出しそうだった。

ヴィヴィオは自然と、アリカのことを優しく抱きしめていた。

「ヴィヴィオ……？」

「大丈夫だよ、アリカちゃん。私が、あなたのことを助けるから」

「え……？」

ヴィヴィオは力強く言うと、アリサから数歩だけ離れる。ヴィヴィオの眼前、五メートル先に立っているのは、右腕を抑えたままこちらを睨みつけている大男。改めて近くで見ると、その男はやはりかなり大きかった。見上げないとその顔を見据えることができない。身長はヴィヴィオの二倍ほどか。ヴィヴィオの身長はほぼ平均的な値だから、約二メートルと半分以上の大きさがあることになる。その人並み外れた巨体から延びる四肢も、もしかしたらヴィヴィオの胴回りよりも太そうだった。この大きさになると、もはや純粋な人間なのかどうかも怪しい。

しかし、ヴィヴィオは怯まない。脅えない。

大切な友達を守るためだ。怖いなんて、言っていられない。

ヴィヴィオは大男を見据え、キッと睨みつけ、なるべく強い口調で尋ねた。

「……あなた、何者なの？」

「……普通、攻撃した後それを聞くか？」



対する大男は、ヴィヴィオに怯むことなく、むしろどこか呆れた風にヴィヴィオに答えた。

「随分とまた、好戦的なお嬢さんだな……」

「なッ!？」

痛いところを突かれ、思わずたじろぐヴィヴィオ。無意識の内に自分の思考パターンが母親のそれに段々似てきていることに、まったく気づいていなかった。

ついカッとなつてしまった頭を、しかしヴィヴィオは冷静に抑える。

今大事なのはそんなことではない。

問題なのは、どうしてヴィヴィオが知る限り普通の女の子であるアリカが襲われていたのか、ということだ。

その件に関しては、ヴィヴィオには心当たりがあった。

脳裏に浮かぶのは、ほんの三時間前の、カリムとの会話。

『中には、例え強制させてでも習得させるべきだ、という強硬派の意見もあります。おそらく、近いうちにその強硬派の勢力が何らかの形で接触を図ってくるでしょうし、最悪強制される、ということもありえないと言ひ切れません』

古代ベルカ王族の固有スキルを復活させうる人物として、教会上

層部の一部勢力はヴィヴィオを狙っている。最悪、今のアリカみに襲われ、拉致され、洗脳される可能性さえあったから、カリムはそのことをヴィヴィオに伝えたのだ。

それだけならば、ヴィヴィオでなくアリカが襲われた原因の説明にはならない。

しかし、アリカがヴィヴィオと同じく、左右色の違う瞳、オッドアイを有しているのならば、話は別になる。

左右で色の違う瞳は、古代ベルカにおいて『聖者の印』として尊ばれていた。オッドアイであるだけで『聖王に近い存在』あるいは『聖王の一族、聖王様』として扱われるのだ。その信仰は、ほぼ間違いない現代でも通用するだろう。オッドアイは、聖王様に通じる神聖なものだ、として。

ならば、アリカが襲われた理由はふたつありうる。

ひとつは単純に、ヴィヴィオと同じオッドアイ『聖王の証』を持つアリカが、本物の聖王の資格を持つヴィヴィオと間違えられて襲われた。

そしてもうひとつ。

強硬派の勢力は、少しでも聖王に通じるものを持っている人物を手当たり次第にかき集めている。だから、『聖王の証』を持つアリカが襲われた。

後者の理由だったら、ぞっとしない。

ヴィヴィオは、カリムから強硬派の話を聞いていた。どこの時空世界でも宗教やそれに基づく信仰は存在し、そして、その信仰が行き過ぎてしまうこともまた、よくあることなのだ。

そして、ヴィヴィオの存在を契機に、あらゆる手段を駆使して、聖王に少しでも通じる人物を集めて、聖王の魔法を復活させることを強要するかもしれない、と。

無論これは推測の域を出ない仮説である。

だが、もしかしたら、強硬派はそこまでして、古代ベルカ王族の固有スキルを復活させようとしているのかもしれない。

すべては、信仰に殉じるために。

「……あなたは、聖王教会上層部の関係者なんですか？」

自然と、ヴィヴィオの語気が強くなる。

何かを信じることも、信仰に殉じるのも、個人の自由だとヴィヴィオは思う。

だけ。

そのために、自分勝手な願いのために、大切な友達を傷つけるのは、許せない。

大男はヴィヴィオを睨みつけたまま、答えない。

それは無言の肯定なのか。

数秒の間、二人は睨み合い続けた。

両者の間に、一触即発の空気が流れる。

それから、ほんの数瞬後。

不意に、

大男が、ヴィヴィオの視界から消え去った。

「！」

ヴィヴィオの両の瞳が脳に情報を送り、それを認識するまでのわずかな時間。

それだけの時間で、大男はヴィヴィオの背後についていた。

人間離れた巨体に似合わない、俊敏な動き。

至近距離に感じる魔力の流れ。

ヴィヴィオは反射的に振り向き、バックステップを踏んだ。同時に、右手からベルカ式魔法陣を起動。虹色に輝く魔法陣に、魔力を注ぎ込む。更に、左手にミッド式魔法陣を展開。こちらへの魔力供給は二の次、この瞬間はベルカ式魔法陣に魔力・意識共に集中。

『パンツァーシルト！』

だが、反応が数瞬遅れたヴィヴィオに、シールドに相手の攻撃に

耐え得るだけの魔力を注ぎ込む時間はなかった。大男の魔力の籠った打撃に耐えきれず、パンツァーシルトが音をたてて砕け散る。至近距離でシルドを破壊されたその反動で、ヴィヴィオの体制が崩れた。

にやりと、いやらしい笑みを浮かべる大男。

二撃目を叩き込むための準備が完了しているのは明らか。振りかぶられた左腕が、風をきる鈍い音をたててヴィヴィオに迫る。

『デイベインシューター・ストレイトシュート!』

迫りくる左腕に向けて、ヴィヴィオは自身の左腕を伸ばす。その先にはあらかじめ用意していたミッド式の魔法陣と、ひとつだけ形成された、虹色に輝くデイベインスフィア。ヴィヴィオの掛け声と共に、デイベインスフィアが放たれる。デイベインスフィアは直線の軌道を描き、大男の左腕に正面から命中する。魔力と魔力の激突。破裂音をあげ、デイベインスフィアがはじけ飛ぶ。同時に大男の左腕の勢いも相殺。一瞬だけ動作が停止する。

それだけの時間があれば十分だ。

ヴィヴィオは再び両の足に魔力を収束。イメージするのは、光の羽根。

『フライアーフィン』

ヴィヴィオの両足の靴の外側にそれぞれ二枚の魔力の羽根が生成された。地面を蹴らず、飛ぶように地面の上を滑りながら間合いを開く。同時に二つ以上の動作をこなすのは、魔導師の必須スキルだ。

十分な間合いをとってから、ヴィヴィオはフライアーフィンを解除。地面に両足を着く。

しかし、足に思ったほど力が入らず、思わずヴィヴィオは片膝を付きかけた。なんとか耐えるも、両足に残るのは電気にも痺れた感覚。それは、自分が良く知っている感覚。

それは明らかに、雷撃を喰らったときの痺れ方だった。

ヴィヴィオは大男の両腕を凝視する。その両腕に感じるのは、電気エネルギーに変換された魔力の流れ。どうやら、両腕に魔力で精製した電気を帯電させ、攻撃を与えた相手を電氣的に麻痺させる付加効果があるらしい。

そして、その効果は多少離れていても通じるようだ。ヴィヴィオがそれを喰らってしまったのは、おそらく相手の二撃目、ディバインシューターで破壊力を相殺した時。勢いは相殺できても、付加効果までは相殺できなかったようだ。

『デイスペル』

ヴィヴィオはミッド式魔法陣を展開、初級の回復魔法を発動し、身体にかかった電気を解除した。

魔法陣に魔力を込めながら、ヴィヴィオは思っ。

これが、実戦。

命と命の、やりとりか。

これまで訓練は受けてきたが、この身体での実戦はヴィヴィオは

初めてだった。

確かに自分には魔法戦闘の経験があるが、それは『聖王ヴィヴィオ』としての経験だ。高町ヴィヴィオ、としての戦闘は、優しくて厳しい教官たちとの模擬戦しか経験したことがない。

なのに、それほど恐れがないのは、やはり『聖王ヴィヴィオ』としての経験が、記憶が、無意識下に埋め込まれた情報がそうさせるのか。

聖王ヴィヴィオとしての、生体兵器としての、能力。

いや、そんなはずはない。ヴィヴィオは頭を振った。

これは、自分がなのはママたちに教えてもらった魔法だ。間違はなく、自分で学んだ、大切な人たちを守るための力だ。戦うための力じゃなく、誰かを助けるための、優しい魔法だ。

私は生体兵器じゃない。高町なのはと、フェイト・T・ハラオウンの娘の、高町ヴィヴィオだ。

そう、ヴィヴィオは考えた。自分に言い聞かせるように。

その一瞬の思考が、命取りだった。

ほんの一瞬だけ、思考の世界に陥ったため、大男の次の行動に反応できなかったのだ。

ヴィヴィオが気付いた頃には、すでに大男の拳が、自身のすぐ目の前まで迫っていた。

反射的にベルカ式魔法陣を起動し、魔力を込める。

だが、間に合わない。

魔法が形を成す前に、ヴィヴィオの身体に、大男の拳が撃ち込まれた。

「……………」

意識が途切れた。

苦痛を通り越して、何も考えることすらできない。

魔力を込められた渾身の一撃にヴィヴィオの小柄な身体は軽々と弾き飛ばされた。ほとんど勢いを失わず、ヴィヴィオの小さな身体は後ろに生えていた大樹に激突し、ようやく停止した。

大樹に激突した衝撃と痛みで、途切れていたヴィヴィオの意識は再覚醒した。しかし、意識を取り戻したヴィヴィオの思考を支配するのは、全身を襲う激痛。拳を叩き込まれた腹部が、大樹に激突した背中が、痛い。腕も足も、痺れて動かせない。口の中に鉄錆に似た血の味が広がる。

右の頬に、生暖かい感触を感じる。右目の視界も紅いということは、頭から血が流れているということか。木に叩きつけられたときに頭を切ったのだろうか。

身じろぎすることもできないのに、大男の気配が近づいてくる。何をされるのか良く分からないが、どう考えてもろくな事にはなら



ない。全身がヴィヴィオの理性に警告を告げていた。ぼんやりとした視界に映るのは、下卑た笑みを浮かべながら近づいてくる大男。痛みにはほとんど支配された思考の隅で対抗策を考えるが、何も思いつかなかった。魔力を収束する余裕も、痛む身体を回復させる魔法を発動する余裕も、最早残されていない。

こういうとき、どうすればいいんだろう。薄れゆく思考の隅で、必死に考える。

最後に残された僅かな力で、ヴィヴィオの脳裏に浮かんだのは、優しく強い、憧れの人の姿。どんなことがあっても、なにがあっても、いつだって、どんなときだって、自分を助けたいと言ってくれた人。ヴィヴィオが大好きで、こうなりたいと強く願った、ヴィヴィオの憧れと愛しさ、そして強さの象徴。

なのはママ。

この人みたいになりたいと、いつ頃から思っていたんだろう。

ゆりかごで助けられたとき？ 違う。

教導の映像資料を見たとき？ 違う。

訓練の様子を見学したとき？ 違う。

……そうだ、あのときだ。

初めて出会ったとき。私に優しく接してくれて、力強く抱きしめてくれた、あの時からだ。

……そうだよ。

どうして、今まで忘れていたんだろう。

どんな魔法を習得してもいいように、すべての魔法形式を勉強してきた理由。

魔法を覚えようと、強く願ったわけ。

なのはママみたいに、なりたいからだ。

なのはママみたいに、優しく強い人になりたいからだ。

なのはママみたいに、泣いている誰かを助けるために、魔法を使いたいと、思ったからだ。

ヴィヴィオは考える。

こんなとき、なのはママならどうするんだろう。

きつとなのはママなら、こんなことで諦めない。妥協しない。絶対に、屈しない。

泣いてる子を助けるためなら、最後まで自分の意思を貫き通す。それが、なのはママなんだ。

だから、私も諦めない。

泣いてる子を助けるために。

大切な友達を、護るために。

こんなところで、絶対に、諦めるもんか！

『かしこまりました、お嬢様』

不意に、聞いたことのない声を聞いた。

それは、落ち着いた初老の男性の、どこか機械的な響きを持った声。

次の瞬間、ヴィヴィオの視界は、白い光に包まれた。

「!？」

あまりに強い輝きに、思わず両目を閉じる。

それから数秒が過ぎて、ようやく光が消えた頃、ヴィヴィオはおそるおそる瞳を開けた。

痛みで瞳が麻痺しているのか、それとも光がまだ眼球に焼き付いているのか。未だはつきりしない視界に映るのは、危険を感じて咄嗟に離れたのだろう、ヴィヴィオから少し離れた場所でこちらを警戒した表情で見つめる大男と、おそるおそるこちらを見つめている、ヴィヴィオからも大男からも離れた場所にいるアリカの姿。

そして、自分の目の前に浮かんでいる、ひし形十字のペンダント。

騎士カリムから託された『希望の光』

「あ……………」

『お嬢様の想い、確かに受け取りました』

ザイフリートから放たれるのは、落ち着いた初老の声。

『ベルカ式アームデバイス、？希望の光？ザイフリート、只今この瞬間を持ちまして、あなた様を主と認識します。これより、お嬢様の楯と為り剣と為り、この身滅びるまで、お嬢様と共に在ることを誓います』

ザイフリートより生み出される言葉に、ヴィヴィオは聞き入る。

『さあお嬢様、私めの起動パスワードを、お唱え下さい』

ザイフリートの言葉に操られるように、背後にある大樹を支えにして、震える足と身体に力を込めて、ヴィヴィオは立ち上がった。

瞳に写るのは、強い意志と、希望の光。

決意と共に、ヴィヴィオはザイフリートの起動パスワードを紡いだ。

「風は空に、星は天に、輝く光はこの腕に、不屈の心はこの胸に！」

奇しくもそれは、高町なのはが魔導師として、一番初めに唱えた言葉とまったく同じものであり。

「希望の光・ザイフリート、セットアップ！」

次の瞬間、虹色の光がヴィヴィオを包み込んだ。

ヴィヴィオが感じるのは、今までに感じたことのない魔力の流れ。身体を包み込む衣服が魔法的に分解され、新たに魔力の加護を受けて再構成されていく。イメージするのは、強くて優しいあの人たちの姿。

白を基調とし、しかし黒と黄色の意匠があしらわれたバリアジャケット。足元を包むのはロングスカート、そして左腕には銀色の籠手。髪の毛は頭の片側で結びあげられたサイドポニーに。

ザイフリートはひし形十字ペンダントの姿から、ひし形十字をかたどった魔導師の杖にその姿を変化させる。十字の中央には、虹色に輝く宝玉。最後の夜天の主の持つシュベルクロイツと似た、しかしそれとはまた違う趣を見せる杖へと変化した。

その姿をあえて表現するならば、静謐。

ヴィヴィオを包み込んでいた七色の光の渦がはぜ、新たにバリアジャケットに包まれたヴィヴィオがその姿を現した。

管理局最強の教導官と、管理局最速の執務官を彷彿とさせるその姿。

ヴィヴィオは力強く、眼前に浮かぶザイフリートを握りしめた。

体が軽い。

さきほどまでのダメージが嘘みたいに引いている。それどころか、まるで身体の底から魔力が無限に湧き出しているような感覚すら感じる。全身に力がみなぎる。これなら、負ける気がしない。

心に満ちるのは、ひとつの想い。

友達を、アリカちゃんを、助ける。

ただそれだけの純粋な気持ちだが、ヴィヴィオの力を更に底上げす

る。

眼前の敵は、友達を襲った大男。誰かを泣かせる、災厄の根源。

ヴィヴィオは驚愕の色に染まった大男にザイフリートを向け、言い放った。

「あなたを倒して、詳しいお話、聞かせてもらいます」

## 第二話 そして夏休みが始まった

「あなたを倒して、詳しいお話、聞かせてもらいます」

ザイフリートを手に、眼前の大男に言い放つヴィヴィオ。

身体が軽い。痛みも無い。体中から澄んだ魔力が充ち溢れ、魔力の動かし方が自然と頭に浮かんでくる。

そしてなにより、心が想いに満たされている。

ヴィヴィオはようやく、魔法使いを始めた理由を思い出した。

カリムの言っていた、自分の魔法の『つかいかた』を、ようやく理解することができた。

この力は、大切な人を護る力。

泣いてる誰かを、助ける力。

私は、なのはママみたいに、誰かのために、自分の魔法を使うんだ。

強い意志と、決意の籠った瞳で、ヴィヴィオは大男を睨みつけた。

大男は突然のヴィヴィオの変遷に驚いているのか、警戒しているのか、それとも怯んでいるのか、ヴィヴィオと一定の間合いを保ったまま動こうとしない。



お互いに睨み合ったまま、硬直状態が続く。

不意に、二人の間を一陣の風が吹き抜けた。風に木々の枝が揺られ、さわさわと静かな音が森全体に鳴り響く。一枚の木の葉が宙を舞い、ひらひらと降下し、やがて、地面に降り立った。

それが合図であつたかのように、大男は、そのヴィヴィオの胴回りよりも太そうな拳を構えた。今までの構えと違い、その腕には視覚で判断できるほどの電気がまとわれ、更に、大男の背後には5つの雷球が生成されていた。

そして、大男から放たれるのは、圧倒的な殺気。思わず視線をそらして逃げ出してしまいたくなるほどのプレッシャー。まるで胃の中に鉛でも流し込まれたかのような重圧と、全身の神経を針で刺されたような、痛くて嫌な感覚。それほど暑いわけでもないのに、全身に汗が滲む。

これが、この男の本気。

さきほどまでのそれは、大男は本気を出していなかったということか。本物の魔導師にとって、先刻までのヴィヴィオなど、お遊び程度の相手でしかなかったということか。事実、ヴィヴィオは最初の一撃以外は大男に先手を取られてばかりで、それなりに渡り合っているように見えたのは、ただ対応が上手くいっただけにすぎない。結果だけ見れば、自身がダメージを負うだけで、相手は一切の無傷だったのだから。

それが今になってようやく本気を出したということは、ヴィヴィオの存在を驚異と認識したということ。

自分が『魔法の上手なただの女の子』から、『想いを持った魔導師』に、なのはママみたいな存在に、近づくことができたということか。

そのことを少し嬉しく思いつつも、ヴィヴィオは気を緩めなかった。

相手は本気。間違いなく、今まで以上の攻撃が来る。

ならばこちらも、今まで以上で反撃しないといけない。

普通だったならそんなことできるわけがない。でも、今はできる。自信に充ち溢れている。

今の私は、一人で戦っているわけじゃないんだから。

「……よろしくね、ザイフリート」

『はい。お嬢様』

心にあるのは決意と想い。

手にしたのは魔法の力とパートナー。

ザイフリートを一層強く握りしめ、  
ヴィヴィオは、反撃を開始した。

「アクセセルシューター！」

ヴィヴィオの周囲に、一瞬で虹色のデバインスファイアが生成される。その数は、五。

「シュート！」

間髪入れず、掛け声と共にザイフリートを振り抜き、デバインスファイアを射出する。最初に使用したデバインシューターよりも、威力も速さも誘導性能も魔力消費量も増したアクセルシューター。魔力の弾丸は風を切り、ヴィヴィオに認識できる最大速度で大男に喰らいかかる。

対し、大男は表情も変えず、瞬間加速によってデバインスファイアを左に回避する。それだけでなく、高速横移動のベクトルを一瞬で縦移動のベクトルに変換、ヴィヴィオとの距離を詰め、自身の得意な近距離線に持ち込もうとする。わずか半秒でヴィヴィオとの距離は残り半分まで詰められ、デバインスファイアは目標を失い、かつて大男がいた場所のはるか後方を通り抜けた。このままでは、先ほどまでの展開と変わらずヴィヴィオの劣勢。

かに見えた。

『Stinger Snipe』

しかし、ヴィヴィオはすでに追撃の準備を終えていた。耳に心地よく響くのはザイフリートの音声。魔力が淀みなく流れ・変換される。単独並列処理をしていた今までとは、明らかに違う感覚。

よもすればいささか変化の大きすぎる、デバイスを使うという感覚に、ヴィヴィオはすでに対応していた。

「シュート！」

生成されたのは、小型誘導魔力弾であるデイベインスファイアよりもふたまわりは大きい魔力光弾。複数同時誘導により数で相手を攻めるアクセルシューターに対し、誘導性能と威力のみを追求し単独の魔力弾で複数の敵をしとめる、誘導制御型魔法。

放たれた魔力光弾は螺旋回転を描き、大男に一直線に向かった。

その弾丸に、拳のひと振りにより真っ向から激突する大男。ここで防御魔法を使わないのは、彼なりのこだわりなのか。電気付加された拳と魔力光弾。双方の力は拮抗し、純粋な威力と威力による押し合いが始まる。ヴィヴィオは次の魔法の準備をするため、ステインガーに対抗する大男から距離を取った。

それと同時にヴィヴィオに襲いかかったのは五発の雷弾。大男が自身の背後に待機させていた雷弾を、ステインガーとの激突の瞬間にヴィヴィオに向けて放ったのだ。雷弾は上下左右正面とそれぞれ別々の軌道を描きながら、ヴィヴィオに迫る。

ヴィヴィオはそれを視認し、表情を変えず、新たなコマンドをザイフリートに叩きこんだ。

「ターン！」

その掛け声を放った時点で、すでに雷弾とヴィヴィオとの距離はほんの数メートル。命中まで残り一秒弱。しかし、雷弾はヴィヴィオの数十センチ手前で、五発ともはじけ飛んだ。

「！？」

魔力光弾の相手をしながらヴィヴィオの様子を見ていた大男の表情が、驚愕にそまる。

迫りくる雷弾を破壊したのは、さきほど大男に向けて放たれ、外れてしまったディバインスフィア。

ヴィヴィオはそれを反転させ、雷弾にぶつけて自分へのダメージを防いだのだ。

自身の認識をはるかに超える速度で、5つの魔力弾を同時に操作し5つの対象に命中させる。

それがどれほどの難度を誇ることなのか、一番理解していないのはヴィヴィオ本人だった。

このような方法を、躊躇いもなく閃き、成功させてしまうのだから。

眼前の脅威も去り、ヴィヴィオは改めてザイフリートを構える。その構え方は魔法の杖に対するものでなく、大砲を使用するときの構え方。管理局最強の教導官、高町なのはが最も得意とするスタイル。

眼前を見据え、狙い定める。目標は、未だスティングーと拮抗を続ける大男。

ヴィヴィオは初めから、これを狙っていた。

スティングーには、ディバインスフィアよりも大きな魔力を込め

ることができる。だから、威力もあり耐久力も高い。防壁で防がれても改めて誘導し直せばいいだけのこと。ステインガーへの正しい対抗策は、防御ではなく破壊。ステインガーは対象に命中するか破壊されない限り、術者の誘導に従っていつまでも敵を追い続けるのだから。そのステインガーに、攪乱用のアクセルシューターを組み合わせて、初めて成り立つ狙い。

もちろん、アクセルシューターとステインガースナイプのような性質の違う魔力誘導弾を同時に高精度で誘導し続けるということは、かなりの高等技能だ。先ほどまでのヴィヴィオならば、そこまでの並列処理はできなかっただろう。

それを可能にしたのは、ザイフリートの能力。

魔力が自然に流れる。変換もスムーズに行える。並列処理・誘導操作への感覚も、今までになくクリアだ。魔力の触媒として最上級の存在。しかもザイフリートは、まるで十年来のパートナーであるかのようにヴィヴィオの手によく馴染んでいた。ヴィヴィオはまだ十年も生きていないから、遺伝子に同調する感覚とも言えいいのか。

これが、デバイスと魔導師の関係。

なのはママとレイジングハートとの、フェイトママとバルディッシュとの関係。

素敵だな。ヴィヴィオはそう思っていた。

お互いがお互いを補助し、助けあい、二人の最大限の力を発揮する。

お互いに命をかけて、想いを込めて、ひとつの目標に向かう。

パートナーを得た今だからこそ、ヴィヴィオは本当の意味で理解した。

私は、一人で戦っているんじゃない。

そう感じた。

だから。

だからこそ。

負ける気が、しない。

『Plasmatoller Type』

ザイフリートから放たれたのは、雷砲撃魔法のコマンド。ヴィヴィオの左腕を二つの環状魔法陣が取り巻く。その色は、鮮やかな虹色。環状魔法陣が魔力を増大・加速し、ヴィヴィオの左腕に魔力が収束される。収束された魔法は速やかに電撃に変換され、高電圧を帯びたヴィヴィオの左腕が金色に輝く。

ここまでは、フェイトの魔法と同じ。

環状魔法陣と同時にヴィヴィオの足もとに展開されたのは、フェイトのそれと違い、ベルカ式の魔法陣。ヴィヴィオの本来の魔力資質は、古代ベルカ式では極めて稀な純粋魔力の射出・放出系。魔力系統こそ違えど、なのはとまったく同じ資質を持っているヴィヴィ

才。だからこそ、教わった魔法を自分流にアレンジすることは、当然のことである。

つまり、ヴィヴィオの資質は、なのと同じ砲撃魔導師なのだ。すべての魔法系統を使用できるヴィヴィオでも、砲撃魔法に関しては古代ベルカ式にアレンジするか、ミッド式と組み合わせた方が段違いで効率がいい。

「プラズマ……！」

収束変換した魔力を圧縮し、射出のシークエンスに入る。あまりの高電圧に、ヴィヴィオの周囲の酸素がオゾンに変換され、鼻につく異臭を放つ。

「スマッシュャー！」

射出コマンドと共に、高威力の雷砲撃が放たれる。電気が周囲の空気を変質させる音を響かせながら、大男に迫る。

一方で大男も、プラズマスマッシュャー被弾直前でステインガーの魔力光弾を破壊していた。さすがに今回は正面から魔法の破壊にかかることはしないようで、回避行動を取る。その顔からは余裕が消え、今までにない必死の形相をしていた。それもそうだろう。いくら大男でも、漏れた電圧だけで周囲の酸素をオゾン生成させるほどの砲撃、喰らえばただではすまない。

大男のすぐそばを雷撃が通り抜ける。直撃はしていないが、服の一部が高電圧により焼け焦げている。間一髪のところではプラズマスマッシュャーの回避に成功した大男は、すぐに回避体制を戦闘態勢に切り替え、ヴィヴィオを探す。



だが、森の中には、すでにヴィヴィオの姿はなかった。

危機に対処するかごとの緊張感で周囲を見渡す大男。

エリアサーチも併用するが、ヴィヴィオの姿も気配も、認識できなかった。

明らかな異変に、大男は不信感を顕わにする。

これほどの攻撃を放つ敵がどこにいるのか分からないなど、これほどの恐怖はないだろう。

そんな中で。

不意に、

世界が、淡い虹色の光に包まれた。

咄嗟に、上空を見上げる大男。

その視線のはるか先、空高くに、ヴィヴィオが浮かんでいた。

そしてその腕には、四つの環状魔法陣が取り巻くザイフリート、足もとにはベル方式の魔法陣。環状魔法陣にて増幅・加速されるのは、周囲の大気を震わせるほどの膨大な魔力。

大男は回避行動を取ろうと、足に魔力を収束させるが、しかし。

その両足は、蒼い色をした魔力の鎖によって地面に固定されている。

た。動きを封じられ、大男の表情が歪む。その魔力光は、ヴィヴィオのそれとは違うもの。大男は慌てて周囲を、自身にバインドをかけた相手を探す。その視線の先にあったのは、蒼いベルカ式魔法陣を展開するアリカの姿。

『D i v i n e B u s t e r 』

森に響き渡る、ザイフリートの音声。

アリカの姿を見て、ヴィヴィオの様子を見て、初めて、大男の顔に恐怖が浮かんだ。

「受けてみて。なのはママから教わったディバインバスターの、私流アレンジバージョン！」

ヴィヴィオは魔力の込められたザイフリートを振り上げ、

「ディバイン……！」

渾身の魔力を込めて、振り下ろす。

「バスター……！」

虹色の純魔力砲撃が、ザイフリートから放たれた。

周囲の魔力すらも巻き込み、大気の壁を貫く虹色の光。その力は、莫大にして圧倒的。

ヴィヴィオが最後に見た大男の表情は、それまでのものと違い恐怖に歪んだものだった。

抗うすべもなくディバインバスターに飲み込まれる大男。周囲に轟く爆音と虹色の閃光。まるで魔力爆撃でも喰らったかのような状況。魔力ダメージオンリーの設定にしてあるのに、思わず生死を確認したくなるような有様。

それこそが、ヴィヴィオ流ディバインバスター。

これが、大切な人たちから教わった、大事な人を護るための力。

泣いてる子を、助けるための力。

魔力の放出を終え、ヴィヴィオは肩で息をしながら状況を確認した。視界の下には、ほぼ円形に黒く焼け焦げた地面と、その中央に倒れ伏す大男の姿。起き上がりそうな気配はない。大男が直撃の直前で防壁を張ったのは確認したが、バスターにはバリアブレイクの付加効果もある。大男のシールドを破壊したことも確認している。普通の人間ならば、すでに立ち上がることでできない一撃。念のため探知魔法を展開し、大男の生命反応を確認するが、完全に意識を失っている。これならしばらくの間、起こさない限り目が覚めることはないだろう。

ヴィヴィオは安堵の溜息をつき、ゆっくりと地面に降り立った。地上十数センチのところまでフライヤーフィンを解除し、地に足をつける。が、足に力が入らず、体制が崩れかかった。

「あ……」

踏ん張ろうとしたのだが、足が動かない。

ザイフリートに体調を誤魔化してもらうのも、すでに限界だった。全身の痛みが身体に戻り、思考が再び闇に包まれる。身体が前のめりに倒れるのを感じるが、もう姿勢を維持するだけの余力も残されていないかった。

薄れゆく意識の中で、身体が誰かに優しく抱きとめられる感じがした。

残った意識を振り絞って顔をあげると、自分のすぐそばにシャツハと、泣きそうな顔でこちらに駆け寄るアリカの姿が映った、ような気がした。

確認しようにも、すでにヴィヴィオの視界は完全に失われていた。

そして残された微かな意識も、溶けるように、ヴィヴィオの頭の中から消え去った。

夢を見ているとたまに、『あ、これは夢なんだな』と気付くことがある。

夢の中での自分の意識など霞のようなもので、ただでさえ曖昧な自我というものは夢の世界の中に溶け込んでしまい、自身の意識と夢の境界はかなりあやふやなものになる。自分の意識の中にあるはずの夢は、しかし実際に感じる感覚としては、まるで自分は自動再生の映画に登場人物として溶け込んでしまったようなものだ。自分でその物語を改編することもできないし、そもそも自己を自己だと認識することすらできない。

それでも自分がいる世界を夢だと認識できるのは、あまりにも曖昧すぎる感覚を自覚してしまうからなのか。いかなる状況でも自我を失わない強靱な心を持っているからなのか。あるいは、何かがそうさせているのか。

理由は分からないが、確かに夢を夢だと認識できることもある。

妙にふわふわした感覚。靄がかかったようにはっきりとしない思考。現実ではありえない出来事。

そして今のヴィヴィオも、自分がいるのは夢の世界だと認識していた。

ヴィヴィオは夢の中で、ふわふわと浮かんでいた。頭の中も、はつきりと確認することのできない身体のようにふわふわとしていた。考えがまとまらない。これは夢だと意識できても、覚醒できるほど

のはっきりとした自己を確立できない。ぼんやりとした感覚。

唯一しっかりと確認できるのは、浮かんでいる自分の下にいる人のこと。

一人の女の子が、そこで泣いていた。

どうして泣いてるの？

誰かがあなたのことを悲しませているの？

だったら、手を伸ばして。

お話を聞かせて。

あなたの想いを、私に伝えて。

そしたら私が、あなたのことを護るから。

そう、ヴィヴィオはぼんやりとした思考の中で思った。そう、声をかけようとした。だけど、声が出ない。近づいて、女の子の傍に行こうとしてるのに、手足をバタバタともがいても、身体は一向に進まない。それどころか、どんどん女の子から遠ざかっていく。

お願い、気づいて！

あなたが私に気づいたら、私はあなたを助ける。助けられるんだから！

必死に想いを込め、ようやく手を伸ばすことができたヴィヴィオ。

けれど、すでにその女の子からはかなり離れてしまっていた。意識が再び、漆黒の闇の中に飲み込まれる。

最後の瞬間。

ヴィヴィオは、その女の子の顔を見た。

それは、ヴィヴィオがよく知っている女の子だった。

「アリカちゃ……」

あなたのことは、さっき助けたハズなのに。

どうして泣いてるの、アリカちゃん？

「……………」

目が覚めると、そこは見慣れない部屋だった。

ヴィヴィオは自分が寝ていたベッドから上体だけ起こして、部屋の中を見渡した。部屋の中は広く、簡素ながらも良く見ると丁寧な装飾が施された、落ち着いた造りの部屋だった。自分の横には、もうひとつ大きめのベッドが置いてある。ベッドに使われている木材の光沢からして、少なくとも安くはなさそうだ。ヴィヴィオがこの部屋に抱いた最初の感想は、センスのいいお金持ちのお屋敷の客間、というものだった。

ヴィヴィオは首をかしげた。

どうして、私はこんなところにいるのだろうか？

更に部屋を見渡すと、自分の右手に大きな窓が、左側には扉が確認できた。窓から注ぎ込む太陽の光はすでにオレンジ色。壁に掛けられた時計によると、時刻は六時過ぎ。いつもなら、もう家に帰っているハズの時間だ。

未だまどろみの中にあつた意識が、ようやく調子を取り戻してきた。

思い出せ。ヴィヴィオは自分にそう言い聞かせた。

一体どうして、私はこんなところにいるの？



その答えを探すために、記憶を辿っていく。そこでヴィヴィオは、自分の腕に包帯が巻かれていることに気付いた。よくよく見れば、全身いたるところに包帯が巻かれ、大きいガーゼや絆創膏が貼り付けられていた。頭にも違和感を感じると思って触ってみると、包帯がぐるぐる巻きにされていた。

自分の身体にある包帯を見て、ヴィヴィオはようやく思い出した。

アリカちゃんを護るために謎の大男と戦ったこと。

戦いの最中に怪我をしたこと。

ザイフリートを発動させて、自分流のディバインバスターを放つて、なんとか大男に勝てたこと。

地面に降り立って、そのまま意識を失ってしまったこと。

それから。

それから……………？

「？」

思い出せない。

何か、大事なものを見た気がするのに。

どうもモヤモヤする。なにか、肝心なことを見落としている気がするのだ。

「……なんだったかな？」

ヴィヴィオが再び思考の世界に飛び込もうとしたとき、コンコン、というノックの音が聞こえた。続いて扉が開き、部屋の中にシャッハとカリムが入ってきた。

「シスターシャッハ、カリムさん」

ヴィヴィオは慌てて、ベッドから起き上がろうとした。しかし、身体を動かした途端、全身に激痛が走った。思わず身体に込めた力を抜き、バランスが崩れた。ベッドの上につつ伏せに倒れそうになる。それを支え、助けてくれたのはシャッハだった。

「あ、ありがとうございます、シスターシャッハ」

「ヴィヴィオさん、無理をしないでください。あなたは今、怪我をしているのですから」

「え、でも……」

「いろいろお話したいことがあります。でも、あなたの身体に障ったら元も子ありません。どうか、横になってお話を聞いてください」

シャッハは子供に優しく言い聞かせるような口調で、ヴィヴィオのことを再びベッドに横たえさせた。ヴィヴィオとしては目上の人と話すのに自分が寝た態勢のまま、というのには抵抗があったが、身体が痛くて動かないし、それにシャッハが自分のことを心配してくれていることが嬉しかった。なので、ここは素直に好意に甘えることにした。

「……ありがとうございます、シスターシャツハ」

「いえいえ」

シャツハはヴィヴィオに微笑んでから、ヴィヴィオにシーツをか  
けた。

「……ヴィヴィオさん。お身体は大丈夫ですか？」

カリムは、シャツハにお世話をされるヴィヴィオのことを、ひど  
く悲しそうな面持ちで見つめていた。

どうして、カリムはこんなに悲しそうな顔をしているのだろうか。

「あ、ええ、まだ痛いですけど、大丈夫です」

ヴィヴィオはシーツから顔だけ出した状態で、疑問を抱えたまま、  
カリムにそう答えた。

すると、カリムはいきなり頭を下げた。

「ごめんなさい、ヴィヴィオさん。あなたに、こんな酷い思いをさ  
せてしまうなんて……」

その声はとても悲痛なもので、本当に、今にも泣き出しそうなく  
らいの申し訳なさに満ちていた。カリムのこんな声も、態度も、こ  
れほど深刻に謝られることもヴィヴィオには経験がなかったため、  
ヴィヴィオはどうすればよいのか分からなかった。

カリムが謝っているのは、どう考えても先程の大男の襲撃のこと。それは理解できる。

でもそんなこと、カリムのせいではないことは明らかだ。ヴィヴィオはそう思った。

「え、いえ、あのその、頭をあげてくださいカリムさん。何がなんだかよく分かりませんが、ほら、私は無事ですし、それにあの、カリムさんが悪いわけじゃないですし！」

とりあえず、カリムに頭をあげてもらうために必死に言葉を紡ぐヴィヴィオ。自分でもなにを言っているのかよく分からない。

しかし、カリムは頑なに頭をあげようとはしなかった。

「いえ。今回の件は、明らかに我々の落ち度です。まさか、強硬派があれば早く動くとは思っていませんでした。私にもっと力があれば、今回の襲撃は防ぐことができたかもしれないのに……」

「私からも謝らせてください、ヴィヴィオさん」

言い、シャツハまでもが頭を下げた。

あのカリムが頭を下げるなんて、それはとんでもないことだ。自分が悪いと思っても、頭を簡単に下げることは許されない立場にカリムはいるのだ。なのに、本来ならばカリムが頭を下げることを止める立場であるハズのシャツハもヴィヴィオに頭を下げている。

それだけ、今回のことを申し訳なく思っているということか。

しかしヴィヴィオにとっては、カリムもシャツハも悪くない思っているわけで、頭を下げられても恐縮するばかりだった。

ヴィヴィオが困惑する中、五分近くもの間、カリムとシャツハは頭を下げ続けた。

「……はあ……」

二人に聞こえないように、ヴィヴィオはため息をついた。

目上の人にあれだけ頭を下げられるなんて、ヴィヴィオにとっては恐縮ものの以外のなものでもなかった。今は二人とも自分の横たわるベッドの横にあるイスに座っているが、頭を上げてもらうのに、ヴィヴィオはかなり神経をすり減らしてしまった。

頭を上げてもらおうにも、それだけ自分に悪いことをしてしまったと思っているということだから、強くは言えなかったのである。あまり強く言うと、それは彼女たちの誠意を否定することになってしまう。ヴィヴィオは心の底からカリムとシャツハに責任はないと思っているし、彼女たちを責める気は毛頭ないのだが。

あなたは悪くないと言って、納得するような人たちではないのだった。

「で、先ほどの大男の件ですが」

落ち着きを取り戻したシャツハが、唐突に口を開いた。

それは、先程の事件の本質。ヴィヴィオが知りたかったことのひとつ。

「ヴィヴィオさんとアリカさんを襲った男の名は、アシモフ・リベリエ。現在、聖王教会の騎士団によって事情聴取を行っていますが、彼は黙秘を続けています。……ですが、彼は聖王教会の騎士団に所属しており、また、彼自身も熱心な聖王教徒でもあります。状況証拠から、今回の件はやはり聖王教会の一部上層部の差し金というのは、ほぼ間違いがないでしょう……」

事実を報告するシャツハの声は、無念と悲しみに打ちひしがれていた。それも当然だろう。かつての仲間が、悪意を持って自分の友人を襲ったのだから。だからこそ、シャツハとカリムはヴィヴィオに謝り続けたのである。

それでも事実を伝ええないといけないことに、ヴィヴィオも悲しみを感じた。

ヴィヴィオは彼女たちを慰めようとして、しかし、口をつぐんだ。彼女たちにかける言葉を、ヴィヴィオは持っていなかったのである。

部屋中を、重苦しい空気が包み込む。

仕方がないこととはいえ、やはり居心地が悪い。

「……ところで、アリカちゃんは無事なんですか？」

その場の空気を変えるために、カリムとシャッハに、とりあえずヴィヴィオは一番気になっていたことを尋ねた。

元々、ヴィヴィオはアリカを助けるために戦ったのだ。事件の真相を聞いても、彼女の無事を確認しないことには安心しきれない。

「あ、はい。アリカさんは無傷でしたよ。ショックと恐怖から多少精神が不安定になっていますが、問題ありませんでした。詳しい話はまた後日、ということで、今日のところは家に帰ってもらっています」

「そうですか……」

アリカの安否を確認し、ヴィヴィオの身体からどつと力が抜けた。私でも、なんとか泣いている子を助けることができた。その事実  
に安心したのである。

「それも、ヴィヴィオさんのおかげです。流石です、ヴィヴィオさん」

「いえ、そんな……」

カリムの言葉にヴィヴィオは縮こまった。

自分は大したことはしていない。ただ、なのはママと同じことを  
しただけである。

その事実が、なんだか誇らしくて、嬉しかった。

そこまで思つて、ヴィヴィオは思い出した。

今回の成果は、自分だけの力で成されたものではないということ  
を。

『希望の光』ザイフリート。

彼がいたからこそ、あの犬男に打ち勝つことができたのである。

しかし今は、自分の手元にザイフリートは無かった。

「……あの、カリムさん」

「はい」

「ザイフリートは、今どこにいるんですか？」

「ああ。彼は今、メンテナンスを受けています」

「メンテナンス？」

「はい。彼の起動は実に五百年ぶりです。しかも、起動したばかりの  
のだというのにかなり莫大な、学院中の魔導師が検知できるほどの  
大きさの魔力を行使したのです。内部の機械やシステムが老朽化し  
ている可能性もありますし、今回の件で破損していないとは言いつ  
れません。メンテナンスついでに内部システムの換装も行っていま  
す。ヴィヴィオさん向けのチューンも行いますので、後日リンカー  
コアの解析もさせていただきますね」

「あ、ありがとうございます……」



古代ベルカ式の最上級デバイスを譲り受け、それを自分向けに現代の最高技術でチューンしてもらえる。それだけを捉えたら、なんと素晴らしいことなのだろう。

しかし、単純には喜んでいられない。

ザイフリートを受け取るということは、同時に様々な思惑を背負うということなのだ。

単純には喜べない。

「まだ具体的には分かっていませんが、一週間以内には基本構造の解析と換装も終了して、ヴィヴィオさん向けのチューンができるハズです」

「……一週間？」

デバイスに関しての知識はヴィヴィオにはそれほどないが、それでも、一週間はいくらなんでも長すぎるのではないか、と思う。

そのヴィヴィオの疑問に気付いたのか、カリムは説明を付け加えた。

「さきほど聖王教会騎士団の技術部から連絡があったのですが、ザイフリートの構造はパッと見ただけでもとてつもないもので、現代では使用されていない技術も組み込まれているそうです。その性能も、構造も、ほとんどロストロギア級だと」

「ロスト、ロギア……」

ザイフリートは、どうやらヴィヴィオが思っている以上にすごいものらしい。

カリムの言葉で、ヴィヴィオは思ってしまった。

先刻、大男を圧倒したあの力。

あれはもしかして、自分の力ではなく、ザイフリートの力なのではないのか？

未熟な自分がロストロギア級の力を持ったザイフリートを使用することで、それだけの力を行使できたのでないのか？

そう考えたら、急に自分が愚かな存在のように感じられた。

ザイフリートの力に頼りつきりで、その力を自分の力と勘違いして、喜んだ。

誰かに頼った力だけで、それを自分の力のように行使して、誰かを助けようとする。

それは、たまらなく滑稽で情けない行為ではないか。

（私は、まだまだ未熟だな）

ヴィヴィオは、自分の無力さを思い知った。

ザイフリートに頼った力で、誰かを助けたんじゃ意味がない。その力は、私の本当の力じゃない。強さじゃない。優しさじゃ、もっ

とない。

確かに、誰かを助けるだけなら、結果だけを見ればそれでもいいのかもしれない。でも、それは、ただ助けただけだ。守っただけで、本当の意味で助けてない。護っていない。そんな強さ、意味がない。そんな優しさ、偽物だ。

それに、ザイフリートとそんな関係であるのは間違っている。

なのはママやフェイトパパみたいに、お互いに信じあい、足りないところを補い合い助け合うことで二人分以上の力を発揮することが、デバイスとマスターの関係なのだから。

このまま、ザイフリートに頼ってばかりではいけない。

私も、強くならないと。

ザイフリートを使い、本当の意味で、ザイフリートの『マスター』にならないといけない。

ヴィヴィオは考える。

どうすれば、私は本当の意味で強くなれるのだろう。

どうすれば、泣いてる子を本当の意味で助けることができるのだろう。

どうすれば、なのはママみたいに、本当の意味で優しく強くなれるのだろう。

ヴィヴィオは考えて、そして、思いだした。

……なんだ、簡単なことじゃないか。

強くなる方法を、私はもう知っている。

後は私が、決断するだけだ。

ヴィヴィオは息をゆっくりと吸い込み、心を落ち着ける。これからカリムたちに告げることは、間違いなく自分の人生を大きく変えてしまう。まさかこんな形で決断することになるとは思っていなかったが、仕方無い。何が起こるか分からないから、人生なのだ。

決意を固め、ヴィヴィオは言葉を、運命を紡ぐ。

「カリムさん」

「はい、なんですか？」

再び息を吸い込み、はつきりとした声で、ヴィヴィオは告げた。

「……私に、古代ベルカ式魔法と、聖王の魔法を教えてください」

「……え！？ しかしヴィヴィオさん、それは……」

「足りないんです。今の私じゃ、なのはママみたいに、泣いてる子を助けてあげることではできないんです。今回の件で痛感しました。私は未熟だと。このままじゃ、なのはママみたいにはなれないと。だから私は、強くなりたいんです」

「……本当に、いいのですか？」

「はい」

カリムの目を見つめ、はっきりと、ヴィヴィオは告げた。

「……なのはさんと同じ瞳をしています。誰が何と言おうと、絶対に決心を曲げない瞳です。これでは、私が何を言っても無駄でしょうね」

カリムはため息をつき、それからしっかりと、ヴィヴィオを見据えた。

「ザイフリートのメンテナンスもありますし、それに今のヴィヴィオさんは怪我をしています。まずは傷を癒すことに専念してください。……そうですね、一週間。一週間後から、聖王の魔法を教えてください。夏休みを全て費やすことになりますが、よろしいですか？」

「はい」

躊躇わず、ヴィヴィオは返事をした。

迷いはない。後悔もない。

あの、なのはママみたいな、強くて優しい人になるためだ。

それぐらいじゃないと、むしろ困る。

「泊まり込みで、夏休み中ですよ？」

「今年の夏は、なのはママもフェイトママも忙しくて、多分お家に帰ってくることもほとんど無いと思います。だから、問題ありません」

「……分かりました。では、一週間後から、この屋敷に泊まり込みで、聖王の魔法を学んでもらいます。でも今日のところは、ヴィヴィオさんの家まで送りますので身体を休めてください。詳しい日程はまた後ほど」

「はい」

もう、後戻りはできない。

後戻りをする気もない。

魔法を学び始めた理由を思い出してしまったから。

自分の未熟さを痛感したから。

憧れの人みたいになりたいから。

護りたい人たちがいるから。

ヴィヴィオは、強くなると決めた。

どんなことがあっても、絶対に負けない。屈しない。諦めない！

強い想いと決意と、憧れと共に。

ヴィヴィオは今、新しい一歩を力強く踏み出した。

受け継いだのは勇気の心。

手にしたのは魔法の力。

こうして、ヴィヴィオの夏休みが、始まった

ヴィヴィオを家まで送った後。カリムが所有する高級車。

シャツハが運転するその車の後部座席に、カリムは座っていた。

「……しかし、カリム」

「なんですか、シャツハ」

「……私は、ヴィヴィオさんが聖王の魔法を学ぶこと、あまり賛同できません」

「……どうしてですか？」

「聞かなくても、私はカリムも同じ気持ちだと思っっていますが？」

「……まあ、正直に言えば、私も今回の件は、あまり乗り気ではないと言っか、肯定的にとらえることはできません」

「なら……！」

「ですが……今、ヴィヴィオさんは古代ベルカ式の魔法を、聖王の技術を習得することを望んでいます。ならば、私たちにできることは、せめてヴィヴィオさんが後にこの選択を後悔することがないよう、良い方向に導くことだと考えています」



「……気が重いです。長年の友を欺いているようで」

「いえ。私たちは、もうすでに友を欺いているのですよ、シャッハ」

「……アシモフのことですか？」

「ええ」

「……まさか、聖王教会に連行した途端、自身の電気魔法を暴走させて、自らの身体を焼き尽くすとは……」

「ヴィヴィオさんには教えなくてもいいことだと、あの時は判断しました。ですが……」

「カリム。その判断は間違っていないと、私は思います。私はヴィヴィオさんが聖王の魔法を学ぶことはどちらかと言えば反対ですが、それでも今は、余計なことを伝えない方がいいと思います」

「アリカさんのことも含めて、ですね……」

「知らない方がいいことは、この世の中には沢山あります。……そうですね、カリムの言うとおりです。友を欺くのは心が痛みますが、それでも、友を苦しめるよりは、よほどマシというもの」

「……せめて厄介事くらいは、私たち大人が背負いましょう。子供たちを導き、子供たちが自分の夢を追い求めることだけに集中できるようにするのが、大人の務めです」

「……ゆずりはの詩、ですか」

「ええ。『そしたら子供たちよ もう一度ゆずり葉の木の下に立って ゆずり葉を見るときが来るでしょう 』 世界は、そういう風に回っているのですから」

「はい」

カリムは車の窓から、外の風景を眺めた。

闇夜の中に街の明かりが瞬いている。その輝きはまるで昼間のようで、夜空の星たちを圧倒していた。

「……それにしても、ヴィヴィオさん、凄いですね」

それまでの重苦しい雰囲気と打って変わって、シャツハが幾分弾んだ声でカリムに話しかけた。

重い空気に食傷気味だったカリムは、シャツハの話に乗ることにした。

「なにがですか？」

「あの砲撃魔法ですよ。まさか、学院の敷地の端まで、魔力の気配が届くとは」

「ああ。あの魔法のことですか」

「しかも、ザイフリートを使って、ですよ」

「……まさか、五百年の年月が機能の半分近くを使用不能にさせ、更に二重の出力リミッターがかかっているとは……」

「しかも古代ベルカの特種デバイスですしね。あのようなデバイス、普通の魔導師では使用することもできないでしょう。私でも、デバイスとの相性もありますが、あれで聖王教会の騎士と戦って勝てる自信はありません」

「まあ、あれはほとんどヴィヴィオさん自身の莫大な魔力と、優れた魔力資質による特化技能だから、というものもあるのでしょうか……それでも、凄いことに変わりはありませんね」

「もしかしたら、ヴィヴィオさんはなのはさんを超える砲撃魔導師になるかもしれませんね」

「可能性は十分ですね。なにより、本人の心が強い」

「あれでまだ九歳ですからね。そこらの若者よりよほどしっかりしていますよ。一体、なのはさんとフェイトさんはどんな教育をしているのだから」

「……未来の希望に夢を馳せるのも、大人の楽しみのひとつ、ですね」

「ええ。私も、ヴィヴィオさんの将来がとても楽しみです」

二人の騎士を乗せて、車は進む。

この事件の本質が、二人が知る以上に深いことを。  
まだ誰も、知らなかった。

### 第三話 三人目の器

聖王教会の歴史は、後に聖王戦争と呼ばれる時代まで遡る。

戦乱と混乱の続くベルカの戦争を終わらせるために尽力した、かつての聖王の一族。人々は結果として戦争を終結に導いたその戦争を聖王統一戦争と呼び、聖王戦争後、戦争を終わらせた聖王とその一族を信仰する聖王教会が設立され、今に至る。

もつとも、『戦争を終わらせた』といえは聞こえがいいが、実際には、聖王一族が戦争に勝利したためにそう言い伝えられているだけである。歴史上において『自分が正義である』と主張することが戦争の勝利者に許される特権であり、皮肉でもある。

何にしても、聖王教会が聖王を信仰しているということに変わりはない。

今では聖王教会は、ベルカ自治区と呼ばれる国をミッドチルダの北部に設けている。

ベルカの歴史と伝統は、古代ベルカの土地が失われた今でも脈々と受け継がれている。

そんな聖王教会の、とある場所。

ベルカでは騎士と呼ばれる魔導師たちが訓練を行うための場所として設けられた、聖王教会本部の近くにある開けた場所。周囲を石材を積み重ねて作られた壁と固定式の魔力防壁で囲まれた、一見するとグラウンドのようなところである。

そこに、件の主人公、ヴィヴィオがいた。

ヴィヴィオの正面、ほんの三メートルほど離れた場所で相對するのは、聖王教会の修道騎士、シャツハ・ヌエラ。多くの騎士を抱える聖王教会でも腕利きの、魔導師ランクAAA級の騎士である。

「さて、ヴィヴィオさん。お身体の具合はいかがですか？」

「あ、ええと、もう大丈夫です。痛くないですし、まだ完治はしてませんが、訓練には問題ないです」

少し舌足らずな声で答えるヴィヴィオの額には、未だ簡素な絆創膏が貼り付けられていた。

聖王教会に属するとある騎士に襲われた友人を助けるためにヴィヴィオが怪我を負ったのは、ほんの一週間前のことだ。

ヴィヴィオは元々、普通の生まれをした人間ではない。

かつての聖王の遺伝子情報を元に生み出された、言うなればクロイン人間である。それでも、身体の構造そのものは人間と大差ないのだが、ヴィヴィオのオリジナル体が聖王であり、ヴィヴィオ自身も聖王の一族が所有していた固有スキルを所有し、聖王の一族が途絶えている現代では、聖王の血を受け継ぐヴィヴィオは聖王陛下、ということになる。

そのことが原因で友人が襲われたということに、ヴィヴィオは少なからずショックを受けた。

ヴィヴィオの登場、ひいては聖王陛下の復活を機に、失われた聖王の技術を取り戻そうという動きが、聖王教会の上層部を中心に生まれていた。ヴィヴィオの友人を襲ったのは、聖王教会の上層部でも、強硬派の幹部とそれに賛同する騎士たち、と言われている。

彼らは手段を選ばず、ヴィヴィオと同じ『聖王の証』を所持しているという理由だけで、無関係のヴィヴィオの友人を巻き込んだのだ。彼らの頭にあるのは、ただひたすらに、聖王を信仰し、その失われた遺産を取り戻すことのみ。

すべては、信仰に殉じるために。

ヴィヴィオは必死の戦いの末に友人を助けることに成功したが、同時に己の無力さを思い知った。

新しい相棒の助けがなければ友人一人助けられないことを、ヴィヴィオは情けなく思ったのだ。

こんなことでは、強くて優しい、憧れの人たちには追いつけない。

だからヴィヴィオは、失われた古代ベルカの技術、聖王の魔法を習得することを選んだ。

聖王の血を受け継ぐ自分になら、それができる。

友達をこれ以上危険な目に合わせないために。

強くて優しい、憧れの人たちのようになるために。

ヴィヴィオは今、ここにいます。

ヴィヴィオが聖王陛下の血を受け継ぐことを知っているのは、かつて機動六課にいた人たちと、聖王教会の上層部。それと、ほんのごく僅かの人物だけ。

ヴィヴィオの目の前にいるシャツハ・ヌエラは、ヴィヴィオが聖王陛下であることを知る数少ない人物であり、そして、これからヴィヴィオの指導者となる女性である。

「こちらがザイフリートです。確認してください」

ひどく穏やかで丁寧な言葉と共にシャツハが差し出したのは、ひし形十字をかたどったペンダント。

ヴィヴィオはシャツハに歩み寄り、それを受け取る。

「久しぶり、ザイフリート」

『お久しぶりです。お嬢様』

機会音声化された初老男性の声。まるで、主君に仕える老執事のような口調。

ザイフリート。

かつて聖王の一族で使用されていた、古代ベルカ式のアームドデバイス。ほとんどロストログア級の古代技術に、現代の最新魔法技術を組み込み、ヴィヴィオの魔力に合わせて調整された、ヴィヴィオの新しい相棒だ。

ザイフリートを受け取り、ヴィヴィオは元いた位置に戻り、身構



える。

いつの間にか空気が張り詰めている。ほんの数秒前とは、周囲の雰囲気から明らかに違う。

周囲の空間すら支配してしまうほどの闘気。

これが、エース級の実力か。

まだ身構えてもいない眼前の騎士と目を合わせるだけで、足がすくむ。肌がピリピリする。まだなにもしていないのに、息苦しくてたまらない。思わず目を逸らしたくなる衝動にかられる。

だけど、ヴィヴィオは目を逸らさない。正面からしっかりと、シヤツハの瞳を見つめる。

目を逸らしたら吞まれてしまうことを、ヴィヴィオは本能的に感じていた。

「それではヴィヴィオさん。準備は、よろしいですか？」

口調は相変わらず穏やかだが、すでに目が笑っていない。

「……はい」

シヤツハの瞳を見つめたまま、ヴィヴィオは頷いた。

それを肯定の合図と見なしたのか、シヤツハは自身の双剣型アームドデバイス、ヴィンデルシャフトを機動、変則的な形の二振りの大剣をトンファアの如く構え、

次の瞬間には、ヴィヴィオの懷に入り込んでいた。

「!？」

反応すらできなかった。

ここにきてようやく、ヴィヴィオは思い出す。

シャツハの得意な魔法のこと。

彼女はそのデバイスの形状から、近接戦闘特化型と誤解されることが多い。

実際には彼女は、移動系、特に空間跳躍系の魔法を得意とする騎士なのに。

彼女にとって、三メートル程度の間合いなど、無いも同然だったのだ。

「ザイフリート」

反射的にザイフリートを機動しようとするヴィヴィオだが、シャツハのスピードには、間に合わない。

シャツハがヴィンデルシャフトを振りかぶったと認識した一瞬後には、ヴィンデルシャフトが身体に食い込んでいた。不思議と、思っていたよりは痛くはない。ただ、大砲でもぶつかったんじゃないかと思うような衝撃の後、重力を無視して、身体が吹っ飛ばされるのを感じる。

それだけで意識が飛びそうになる勢いで宙を舞い、数秒後に、確か百メートル近く離れた場所にあったはずの壁に激突した。ヴィヴィオの身体がぶつかった壁は石で作られているのに、ヴィヴィオの身体がめり込む。

それだけの攻撃を受けたはずなのにしかし、ヴィヴィオはほとんど痛みを感じなかった。

痛みを感じないことを不信に思い、その不信感を一瞬で切り捨て、ヴィヴィオは攻撃に移る。今はそんなことを考えている場合ではない。身体を持っていかねながらも起動させたザイフリートの魔法回路を活用、一瞬でデイベインスフィアを形成。その数は十。間髪入れず、それぞれの魔力球体の軌道・速度をランダムに設定しながら、シャツハに向かって放つ。

百メートル近い距離も、魔力の弾丸には関係がない。バラバラの軌道を描きながらデイベインスフィアは高速でシャツハ迫る。

ヴィヴィオの魔力光によく似た虹色の魔力弾を、シャツハはヴィンデルシャフトで次々と叩き落す。十あった弾丸は九、八、六と数を次々と減らし、同時に百メートル近くあった間合いも瞬く間に詰められていく。

迫りくるシャツハに、ヴィヴィオは動じない。

次の手は、すでに用意されているのだから。

魔力弾は全て打ち落とされ、間合いは再びゼロに。

ヴィンデルシャフトを振りかぶるシャツハ。

次の瞬間、シャツハの足元に、ミッドチルダ式魔方阵が展開、虹色の光で編み込まれた鎖が伸び、シャツハの身体に巻きつく。ヴィオの放ったミッドチルダ式捕縛魔法、チェーンバインド。

そうして、魔力の鎖がシャツハの身体の動きを完全に封じ込んだ。

次は得意の砲撃魔法で、シャツハを撃ちぬく！

そうヴィオが考えるのと、背後から首筋に刃が当てられたのは、完全に同時だった。

ふたつの大剣の刃が、缺のこたくヴィオの細い首を挟み込む。刃と首の隙間はゼロ。ヴィオがほんの少しでも動けば、首が切れてしまうような密着具合。ザイフリートを構えた体勢のまま、身体を硬直させる。

繰り返して思い出す。

シャツハの得意な魔法は、移動系。

動きを完全に封じ込めるのに一秒は必要なチェーンバインドでは、彼女の動きを封じることができないのだ。

「」

「……………」

身じろぎすらないシャツハと、身じろぎすら許されないヴィオ。

ヴィヴィオからはシャツハの表情は見えないが、一体彼女は、今どんな表情をしているのだろうか。

「」

「……………ふう」

先に気を緩めたのはシャツハだった。

ゆるいため息をついた途端に、周囲の雰囲気すらも変化する。先ほどまでの息をすることすら許されないような重圧はどこへ行ったのか。ほんの一瞬前まで真剣勝負が行われていたとは信じられないほど、訓練場の空気は穏やかなものだった。

ずっと、首を挟んでいた違和感も消えてなくなる。が、ヴィヴィオはすぐに身体を動かすことはできなかった。さすがに、殺気と共に首筋に刃物を当てられて、平然としていることはヴィヴィオにはできなかった。

「もう大丈夫ですよ、ヴィヴィオさん」

「　　　つつぷはあ！」

シャツハの穏やかな声を聞いて、ようやく身体の自由を取り戻した。

ためていた息をいつきに吐き出し、その場に崩れるようにへたり込むヴィヴィオ。

よほど恐ろしかったのか、冷や汗まで流している。

天を仰ぎ、呼吸を整える。

そして、考える。

二人が戦ったのは、時間にして二十秒にも満たない短い時間。

二人とも、バリアジャケットすら展開していない。

たったそれだけの時間で、自分は手も足も出なかった。

「……………はああ」

大きなため息をつくヴィヴィオ。

シャツハがとても強いことは知っている。それこそ、なのはママやフェイトパパに引けをとらないくらいに。

しかし、だからと言って、二十秒ももたないのは、いくらなんでも短すぎるのではないか。

「大丈夫ですか、ヴィヴィオさん」

手を差し伸べてくれるシャツハは、いつもの優しいシスターに戻っていた。

「……………はい、なんとか」

シャツハの手を握り、ヴィヴィオは立ち上がる。

怪我の具合を確認するが、あれだけ激しい攻撃を喰らったのに、身体にはかすり傷ひとつ無い。衝撃で頭が少しフラフラするが、痛くないし、ほとんど健康体のままだった。

シールドなんて、展開するヒマもなかったのに。

「……………ああ」

少し考えて、ヴィヴィオはようやく自分の能力を思い出した。

聖王の血を受けついた、聖王の一族のみが使える固有スキル。聖王の鎧。

Sランク砲撃まで無傷で耐えることのできる、強固で堅牢な魔力の鎧である。

聖王の鎧は、自分の意思で発動することができず、命の危機に瀕したときに反射的に発動される生態防御反応のような魔法である。これがある限り、ヴィヴィオはそう簡単には死ぬことはないのだが。

その効果を実感して、改めて、自分が普通ではないことを思い知らされてしまう。

私は、普通の女の子として生きていきたいのに。

「……………」

「しかし、すごいですね。今の攻撃なら、直撃するだけで即死してもおかしくはないのですが。さすが、聖王の固有スキルです」

さらっと恐ろしいことを発言するシャツハ。

つまりあなた、本当に殺す気で攻撃してきたということですか。

「Sランク砲撃までなら完全に防御することができる、聖王の鎧。ですが、それは自分の意思で自由に発動できるものではありませんね？」

「……はい」

そうなのだ。

聖王の鎧は、ヴィヴィオの意志で発動できるわけではなく、あくまでも命の危機に陥ったときに勝手に発動するものだ。そのため、先日の事件のような、命には関わらない程度の脅威には発動せず、また、例えばSランク砲撃を喰らったからといって、これからも発動する保証は無い。

強力な固有スキルではあるが、発動が不安定で自力でコントロールできないという、大きな欠点も抱えていた。

「古代ベルカの文献によると、聖王の鎧の欠点はかつての王族たちも認識していたようです」

それは、ヴィヴィオにもなんとなく分かっていた。

固有スキル『聖王の鎧』は、完全ではない。

「そのため、かつての王族たちは、まず『聖王の鎧』という固有ス



キルを応用した技術を確立させました。それが、聖王の魔法、と呼ばれる失われた技術の、最初の段階なのだそうです」

「応用……」

「はい。ですのでヴィヴィオさんには、文献を頼りに、まず『聖王の鎧』の応用技術から習得していただきます。大丈夫ですか、ヴィヴィオさん」

聖王陛下としてではなく、生物兵器としてでもなく、普通の女の子として生活したい。

それは生物兵器として生み出され、聖王の資格を持つヴィヴィオの切実な願い。

だけ。

普通の女の子、では、友達を護ることができなかった。

普通の女の子、では、憧れの人たちに追いつくことはできない。

だから私は、失われた聖王の魔法を習得することを決意した。

すべては、憧れの人たちみたいに、大切な友達を護ることのできる、強くて優しい女の子になるために。

「はい」

自分でも意外なくらいにしっかりと、ヴィヴィオは答えた。

「素晴らしいです。さすがは聖王陛下ですね」

「ですから、陛下って呼ぶのやめてくださいよー」

「ふふふ。それだけ元気があれば、大丈夫でしょう」

「むー」

頬を膨らませるヴィヴィオ。

やっぱり、陛下と呼ばれるのは慣れない。と言つか、慣れたくない。

「では、ヴィヴィオさん。バリアジャケットを起動してください」

「え。あ、はい」

言われ、ヴィヴィオはバリアジャケットを展開する。

白を基調とし、しかし黒と黄色の意匠があしらわれたバリアジャケット。足元を包むのはロングスカート、そして左腕には銀色の籠手。髪の毛は頭の片側で結びあげられたサイドポニーに。

憧れの人たちのバリアジャケットをモデルとした、ヴィヴィオだけの魔法の衣。

シャツハもいつの間にか、いつもの修道女の落ち着いた服装からバリアジャケットに変化していた。

両手にはもちろん、先ほどヴィヴィオを吹っ飛ばしたヴィンデルシヤフトが握られている。

「まずヴィヴィオさんには、『聖王の盾』と呼ばれる技術を習得していただきます」

「盾、ですか？」

「はい。文献によれば『聖王の鎧』を意識的に部分的に発動させ、強固なシールドを作り出す技術のようです。これによって、『聖王の鎧』のような個人のみの自由度の低い防壁ではなく、応用の利きやすい指向的な防壁を発動させることができますようになります」

### 聖王の盾。

文字通り、魔力で作られた鎧を盾に変換して発動する技術。

成程。これなら、誰かを護ることができる。

「しかし、ヴィヴィオさんの意志で自由に発動できない『聖王の鎧』を、部分的にはいえ自由に発動させる方法は、文献には残されていません。また、他の魔法と違って、魔法の発動方法が確立されているわけでもありませんし、方法を具体的に教えることのできる人も、現在では残っていません」

言いながら、シャツハはヴィンデルシャフトを構えた。

「そこで、実戦形式の訓練を重ねることで、ヴィヴィオさん自身にその感覚を閃いていただきたいと思います。今は、それが最善の指導だと思われそうです」

「……………え？」

再びさらりと、恐ろしいことを言うシャツハ。

普段は温和で修道女の鏡のようなシャツハは、実は意外と苛烈だったりする。

ヴィヴィオの脳裏に浮かぶのは、シャツハのことを『暴力シスタ―』と形容する人物がいた、ということ。

「それではヴィヴィオさん。お祈りは、済ませましたか？」

ニツコリと、いつも通りの笑みを浮かべるシャツハ。

ヴィヴィオはそれに、苦笑いで答えるしかできなかった。

いつの間にか太陽がすっかりと落ちて、空は茜色に染まっていた。

気温も下がり、ようやく野外でも過ごしやすい気候となる。

夏休みだというのに、夕方の穏やかな雰囲気混じって、遠くの方から掛け声が聞こえてくる。おそらくは学院の方で部活動に励む生徒たちの声だろう。

聖王教会のとある訓練場の隅、大きな木の木陰には、ヴィンデルシャフトを傍らに置き、涼しい顔で空を見上げるシャツハと、身体を完全に木に預け、ぐったりと俯くヴィヴィオの姿があった。細い身体のところどころについた痣が生々しい。

すでに魔力も体力も残されていない。それどころか訓練の最後には、訓練場のど真ん中で倒れこみ、シャツハの助けがないと動くことすらできないという有様だった。今いる木陰にも、シャツハに運んでもらいようやくやって来たのだ。

シャツハの訓練は、一言でいうならば超スパルタだった。

訓練の最初にしたような、殺気がこもっていると言うよりも本当に殺す気があると思えないような攻撃を次々と加えてきた。

機動六課で見学した、なのはママの教導に匹敵するものがあるとヴィヴィオはそう思った。

確かあのときも、丸一日なのはママの訓練を受けた四人は、訓練後にしばらく動けなくなっていた。

これは、明日には酷い筋肉痛になっていそうだ。

簡単なヒーリング魔法なら使えるが、それで果たして効果があるのかどうか。

後で、借りた本を返すついでにユーノさんに治してもらおうかなあ……。

「おーい、シスターシャツハー、ヴィヴィオー」

言葉の始まりは遠くの方から聞こえてきたが、言葉尻に近づくにつれて声の位置が段々近づいてきた。その声には聞き覚えがある。

重い首を持ち上げて声の主を見る。彼女は半そでの修道服を着ていながら、普通の修道女とは違う、活発そうな笑顔をこちらに向けていた。右手でバスケットを抱え、左手を振りながらこちらに駆け足で近づいて来る。

「シスターセイン」

「……………セインさん……………」

彼女の名前はセイン。

シャツハの下でシスターと修道騎士の修行を積む、少し訳有りの駆け出し修道士である。

「ヴィヴィオ、大丈夫？」

近くにやってくるなり、セインはヴィヴィオのことを気遣う。

その気持ちは嬉しいのだが、それに応える余裕すらないヴィヴィオは、頷くのが精一杯だった。

「…………全然、大丈夫じゃなさそうだね……………」

そんなヴィヴィオの様子に、セインは苦笑い。

バスケットに手を入れ、取り出した容器をヴィヴィオに差し出した。

「ほら、ヴィヴィオ。これでも飲んで、元気出しながら」

セインが差し出したのは、教会印のスポーツ飲料。教会に所属する騎士に配布されている飲み物である。

「……ありがとうございます、シスターセイン……」

セインから容器を受け取り、中の飲み物をゆつくりと口に含む。喉は渴いているのだが、いつものように液体を飲み下すことができない。正直、容器を口元に運ぶために腕を動かすことすらも辛い。しかし、身体は激しく水分を欲している。その状態に合わせるために、少しづつ飲み物を口に含み、それからゆつくりと嚥下する。

「シスターシャツハ、まさかアレをヴィヴィオに？」

「ええ」

「あれか……」

シャツハの言葉に、セインも苦い顔をする。どうやらシャツハの教導のスパルタっぷりにはセインも心当たりがあるらしい。

「シスターシャツハ、教導となると途端に恐ろしくなるからな」

「中途半端な訓練をしては、相手の方に失礼です。それに、訓練というものはまず精神的にも肉体的にも追い込んでから初めて効果があるもので」

「あーはいはい分かってます分かってますー」

「あ、あはは……」

ゆっくりと飲み物を嚥下しながら、シャッハとセインのやり取りに耳を傾ける。

そのくらいの余裕が生まれるくらいには、身体が回復してきた。

もつとも、自力で歩けるようになるためには、もう少し休まないといけない。

「ヴィヴィオ、大変だったねー。シスターシャッハは、自分が気に入った相手には特に容赦がないから」

笑顔でそう言うセイン。

セインさんはいつも笑顔で明るいなあ、とヴィヴィオは思った。

セインは普通の人間ではない。

かつて時空管理局転覆を目論んだ大犯罪者、J・スカリエッツィに生み出された戦闘機人だ。

今ではすっかり更正して、シャッハの保護の元、修道騎士として目下修行中である。

自分と同じ、生物兵器。



なんとなく境遇が重なるが、それ抜きにしても、ヴィヴィオはセインのことが割と好きだった。

セイン自身も聖王教会での暮らしは意外と性に合っているようで、今ではすっかり聖王教会に馴染んでいる。

「ほりゃ」

「ひゃっ」

いきなり、額に氷のような冷たさを感じ、思わず声を上げる。

疲れた頭で、セインが自分の頭に凍ったタオルを乗せたのだと気付くのに、一秒近くかかってしまった。

「身体、熱いでしょ？ ヴィヴィオの身体が落ち着くまで私たちはここにいますから、ゆっくり、身体を休めなよ」

「……ありがとう、シスターセイン」

「はは、ヴィヴィオにシスターって呼ばれると、なんか照れくさいな」

「ううん。セインは、もう立派なシスターだよ」

「ありがとう、ヴィヴィオ」

それから、ヴィヴィオの身体がある程度回復するまで、三人でゆっくりとお話をしたのだった。

「それではヴィヴィオさん、ごきげんよう」

「ごきげんよう」

「ごきげんよう、シスターシャツハ、シスターセイン」

教会流のお別れの挨拶を交わし、三人は別れた。

シャツハとセインは教会に、ヴィヴィオは夏休みの間だけ住まわしてもらうことになっているカリムの屋敷に向かう。

空と大地の切れ目にはわずかに茜色が姿を見せるが、ほとんどは濃い藍色に染まっている。あと十分もしないうちに、空は太陽の明るさを失って夜の世界になるだろう。辺りは薄暗く、街灯の明かりが心強い時間になりつつある。

街灯無しで相手の顔を見極められるのも、あと数分のことだ。

自然とヴィヴィオは早足になる。

聖王教会や学院の敷地内は安全だ。最上級の警備で不審者は敷地内に入ることはできないし、何かあればすぐに助けがやってくる。

ただし、それは普段のこと。

その聖王教会の騎士に襲われる可能性がある今では、その安全性もあてにはならない。

それに、例えなにもなくても、一人で歩く夜道は怖いものだ。

「……………」

一人黙々と、重い身体を引きずりながらカリムの屋敷を目指すヴィヴィオ。

ここからカリムの屋敷までは、歩いて十分ほどで到着できる。確か、学院の敷地を横切るのが一番短い道だったはずだ。

早く、帰ろう。

教会や学院からヴィヴィオと同じように家路に着く人々に混じり、ヴィヴィオも歩く。

そうして、魔法学院の正門までやってきたときのことだった。

「おまちなさい！」

突然、誰かに呼び止められた。

その声は、ありえないくらい凜と澄んだ、毅然とした声だった。

おぼつかない足を止め、ヴィヴィオは振り向く。

ヴィヴィオの瞳に写るのは、一人の少女。おそらく年上だが、そうは変わらない年齢だろう。

すらりと長い手足。さらさらと、僅かな風にもなびくブロンドの長髪。まだ幼さがあるが、それでも将来美人になることを確信させる、整った容貌。ただ立っているだけなのに、気品が全身からにじみ出ている。

そしてなにより特徴的なのは、自信に満ちた瞳。

碧い瞳は強い輝きを放ち、彼女の言うことには無条件で従わざるを得ないような魔力すらも有しているような気がした。

ヴィヴィオには、この少女に見覚えがあった。

このような強烈な印象を持つ少女を目にして、忘れられるハズがない。

「あなたが、高町ヴィヴィオさんかしら？」

眼前の少女に、ヴィヴィオは問われた。

「……はい」

目を合わせるだけで、呑みこまれてしまうような気がする。

それほどまでに、その少女の存在感は強烈だった。

「私のことは、ご存知？」

ヴィヴィオは一瞬だけ考え、

「……確か、エリーゼ・ダイムラーさん。ザンクト・ヒルデ魔法学院の初等科五年生で、初等科の現生徒会長」

答える。

これが、ヴィヴィオが知っている彼女の情報。

「ご存知いただき、光栄ですわ」

「でも、生徒会長さんが、私に何の用なんですか？」

「……本日は、生徒会長としてあなたに用があるのではありません」

エリーゼはしっかりと、ヴィヴィオの瞳を見つめた。

あまりの眼力に、ヴィヴィオは思わず息を呑んだ。

「高町ヴィヴィオ……いえ、聖王陛下としてのあなたに、用があります」

「!？」

エリーゼの言葉に、ヴィヴィオは心底驚いた。

なぜなら、自分のことを聖王だと知っているのは、親しい人たちか、かつての機動六課関係者か、あるいは聖王教会関係者だけ。ザンクト・ヒルデ魔法学院が聖王教会の管理化にあるとはいえ、いち

生徒会長が自分のことを知っているとは思えない。

まさか、強硬派の刺客！？

無意識に体勢を整え、首から提げているザイフリートを握り締める。

「端的に申しましょう」

ザイフリートを握り締める手に、力がこもる。

エリーゼの行動次第では、こちららも魔法を使わざるを得ない。

今の疲れきった身体で、どれだけ持ち堪えることができるのか。シャツハに助けを求めるにしても、シャツハがここに到着するまでの時間を稼ぐことができるのか。エリーゼの実力はどのくらいなのか。相手は本当に、エリーゼだけなのか。

エリーゼの様子を伺いながら、ヴィヴィオは思考する。

やがて、ゆつくりと、エリーゼの口が開く。

薄い唇が紡ぐ言葉を聞き逃さないように、ヴィヴィオは耳を澄ませた。

「私は、あなたを聖王陛下だとは認めません！」

「……………はい？」

しかし、エリーゼから放たれた言葉は、ヴィヴィオが警戒してい

たこととはある意味で正反対のことだった。

「聖王陛下とは本来、古代ベルカの地において長く続いた戦乱の世を終結に導いた偉大なる人物であり、失われてしまったその技術や魔法は、偉大なる聖王陛下の魔法を使用するに値する優れた人物によつて習得されるべき尊く神聖なものです」

ヴィヴィオの戸惑いをよそに、エリーゼは続ける。

「それなのに聖王教会は、どういうわけかあなたのような普通の人間に聖王陛下の偉大な魔法を習得させようとし、それどころかあなたのことを聖王陛下と信仰する人までいるというではありませんか！ そんなこと、私は認めません！」

「……はあ」

どうやらエリーゼは、見た目に反して激情家のようなのだ。

それに、今の話の内容からして、ヴィヴィオが聖王の失われた技術を習得しようとしていることは知っていても、ヴィヴィオの素性までは知らないらしい。

一応は極秘事項になっている、ヴィヴィオが聖王の魔法を習得しようとしている事実をどういうわけか知っているのに、ヴィヴィオのことを普通の女の子だと思っているとは。なんとなく、皮肉な話である。

「少し古代ベルカ式魔法の資質があるからという理由だけで習得しているほど、聖王陛下の遺産は甘くもありませんし、安いものでもありません！」

そのことが納得いかない、とでも言わんばかりに、エリーゼは言葉続ける。

察するに、エリーゼは熱心な聖王教会の信者なのだろう。

だから、ポツと出（に見える）のヴィヴィオが聖王の魔法を習得することが許せないのか。

「ですので、私があなたのことを見極めさせていただきます」

「え？」

「高町ヴィヴィオさん。私は、聖王陛下と聖王教会の名において、自身の名誉と誇りと魔導にかけて、あなたに、尋常の決闘を申し込みます！」

エリーゼはヴィヴィオをビシリと指差し、力強い声で、はっきりとそう宣言した。

あまりに早く展開する状況に、ヴィヴィオは着いていくだけで精一杯だった。



「……と、いうわけなんです……」

「まあ。そのようなことがあったのですか」

「はい……」

「これは、困りましたね……」

カリムが、嘆息の声を上げる。

この出来事は、カリムにも予想外の出来事だったらしい。

ヴィヴィオが初対面のエリーゼに決闘を申し込まれた、約一時間後。

ヴィヴィオはカリムのお屋敷の食堂で、カリムたちと一緒に夕食を食べていた。

カリムのお屋敷は大きく、食堂だけでも五十人くらいは余裕で食事ができそうな広さがあった。天井には見たこともないような大きなシャンデリアがぶら下がっており、カリムの傍らには執事さんが控えている。いかにもお金持ちの家、といった感じた。それでも全然嫌味な感じがしないのは、カリムの人徳のおかげだろうか。

「エリーゼ・ダイムラーさんですか。私も、彼女のことは存じています」

「そうなんですか？」

「ええ。ダイムラー家は、古くから聖王教会の上層部を担う、由緒ある家柄です。かつての聖王陛下の遠縁の方が創始者で、聖王陛下の血が途絶えた現代では、最も聖王に近い存在、と呼べなくもありません。私の記憶が正しければ、エリーゼさんはそのダイムラー家の長女で、確かとても熱心な聖王教会の信者だったと思います」

「そう、ですか……」

今、その広い食堂で食事をしているのは四人。

家主であるカリムと、夏休みの間だけここに住むことになっているヴィヴィオ。それと、カリムが保護者になっている、オットーとデイドである。

オットーとデイド。

セインと同じくJ・スカリエッティに生み出された戦闘機人『ナンバーズ』の、もっとも遅く目覚めた末の妹の二人だ。今ではセインと同じく更正し、保護観察期間を終えて、保護者となったカリムの元で、修道女としての研鑽を積む毎日である。

「僕も、エリーゼさんのことは存じていますよ」

聖王教会での生活は、こちらもセインと同じように、意外と二人の肌合っているらしい。

「そうなの、オットー？」

「ええ。話をしたことはありませんが、教会の礼拝室にいるのをよく見かけます」

「そうですね。私も、ミサのたびに彼女のことを見かけます。いつも熱心にお祈りをして。あの年で、本当に敬虔な方だとは思っていましたが」

オットーの言葉に、デイドが続ける。

話の内容から思っではいたが、どうやら相当の聖王信者のようだ。

「私はエリーゼさんと少しお話をしましたが、少々思い込みが強いと言いますか、熱心すぎて、聖王陛下を神格化しすぎているような感じがありました」

「神格化、ですか……」

夕食のおかずを口に運びながら、ヴィヴィオは思う。

きっと彼女にとって、私は聖王の偉大さを貶した人物、に見えるのだろう。

私のことを普通の女の子だと思ってる彼女は、聖王教会の信者で、すらない私が、古代ベルカの資質があるだけで聖王の魔法を習得しようとするのが許せないのだ。聖王の魔法を習得することで聖王に近づきたい信者の人は沢山いるのに。古代ベルカ魔法の資質がある、というだけで。

エリーゼ・ダイムラーさん。

あの人は、私の存在を知って、いったいどういう気持ちだったのだろう。

「それにしても、皮肉なものですよね」

「何か？ オットー」

「陛下の話を聞く限り、エリーゼさんは陛下のことを普通の女の子だと思い、だからヴィヴィオさんのことを認めることができないようです。ヴィヴィオさんは、本当に聖王陛下なのに」

「もー、オットー。私のことを陛下と呼ぶのは禁止っていつも言ってるでしょー」

「これは失礼、陛下」

「もー！」

ヴィヴィオは、正真正銘聖王の資質を持ちながら、聖王扱いされることを嫌っている。

聖王ヴィヴィオではなく、あくまでも、高町ヴィヴィオという普通の女の子として生きていきたい。

それが、ヴィヴィオの願いでもあった。

「まあ確かにヴィヴィオさんは聖王陛下でもありますが、それ以前に一人の女の子であることに変わりはありません」

カリムの言葉に、ヴィヴィオ、オットー、ディードの三人が耳を傾ける。

「そのことが今回の件を招いたのは、オットーの言うとおり皮肉としか言いようがありませんが、とりあえず今は、申し込まれた決闘の対策を考えねばなりません」

カリムの言うとおりだ。

今考えるべきは、申し込まれてしまった決闘の対策だ。

「確か、聖王教会の騎士にとって、一対一の決闘はとても神聖なものなのですよね」

「その通りです、デイド。聖王陛下の名の下に、己の誇りと魔導をかけて戦うのです。故に、ベルカの騎士にとって決闘とは軽々しく口にしていいものではありません」

「つまり……それでも、決闘を申し込んできたエリーゼさんは……」

「本気、ということでしょうね」

聖王教徒の人たちにとって、聖王はとても偉大で、神聖な人物である。軽々しく聖王の名を語ることが聖王を冒瀆する行為であり、敬虔な信者にとっては、それだけで聖王を侮辱したとすら感じてしまう。

熱心な聖王教徒であるエリーゼが、聖王の名において決闘を申し込んだということは、彼女がそれだけ本気、ということ。

その事実には、ヴィヴィオはただ困惑するしかなかった。

「何にしても、決闘は受けなきゃいけないんですよね……」

「決闘の日時はどうなっているのですか？」

「三日後のお昼の十三時に、聖王教会の訓練場で、だそうです」

「さすがに手回しがいいですね」

「……はあ」

ヴィヴィオは今強くなるための修行中ではあるが、戦うこと自体が好きというわけでもない。

必要のない争いは、できれば避けたいところだった。

「……はあ」

できれば、普通の女の子として生きていきたいのに。

世の中ままならない。ヴィヴィオは疲れきった頭で、そう思った。

時空管理局、無限書庫。

次元世界で発行されたありとあらゆる書籍・情報が蓄積された、次元世界最大の超巨大データベース。

しかし時空管理局の設立期から集められ続けた情報はあまりにも莫大すぎて、そこから有益で必要な情報を入手するためには、数人の専門家グループで数ヶ月単位の調査が必要だとされていた。

しかし、十三年前に無限書庫の司書になり、現在では司書長を務めるユーノ・スクライアの働きにより、現在では無秩序に蓄積されていた情報はある程度は整理され、個人でも探査魔法さえあれば比較的効率よく情報を得ることができるようになってきている。

全ての書籍を整理するにはまだまだ時間がかかり、足を運べばすぐに必要な情報が得られるようになるのはまだ相当先の話ではあるのだが、それでも、無限書庫の状況を大幅に改善したという、ユーノ・スクライア現司書長の功績は大きい。

幼少期よりユーノと交流があったヴィヴィオは、自身が無類の本好きということもあって、その無限書庫の司書資格を有していた。魔法学院に通うようになってもしょっちゅう無限書庫に立ち寄っているのも、ヴィヴィオにとって、無限書庫は自分の庭のようなものだ。

今日、決闘の前日になって無限書庫に立ち寄ったのは、誰から調べものの依頼があったというわけではなく、純粹に本を読むためだった。本来ならこの時間は昨日までと同じようにシャッハとの訓練の時間だが、シャッハ曰く『決闘の前日は身体を休めてリラックスした方が良い』とのことなので、久しぶりに本を読みながらゆっくりしよう、と考えたのだ。

ヴィヴィオにとって、この申し出はとてもありがたかった。

シャッハのスパルタっぷりは相変わらずで、むしろ決闘が決まっ

てしまい、初日より厳しくなったような気すらした。毎日のように自前の治癒魔法はかけているのだが、それでも全身が痛く、動くだけでも苦痛だった。

明日までに治せるのかな、と少し心配でもある。

そもそも、決闘をしなければならないこと自体が、ヴィヴィオの悩みの種だった。

エリーゼの理屈は理解できる。

敬虔な信者の人たちから見れば、聖王教会の信者ですらない私が古代ベルカ魔法の資質があるというだけで聖王の魔法を習得しようとするのは、きっと納得がいかないことなんだろう。熱心な聖王教徒のエリーゼさんだからこそ、そんな私を試そうとすることも分かる。

分かつては、いるんだけど。

だからって、争いごとは、できれば避けたい。

こんなことをしても、辛いのは二人とも同じなんだから。

「はあ……」

明日のことを考えるだけでため息が漏れる。

軽々しく口にすることを許されない決闘だからこそ、一度口にしてしまえば、例えカリムでも覆すことはできない。それだけ神聖なことなのだから。



.....

考えても、仕方ないか。

私はどう思っても、明日の決闘そのものは避けられない。

ならばとりあえず、この痛みきつた身体と、動揺した心を休めよう。

そのために、ここに来たんだし。

頭を振って、ヴィヴィオは頭の中を切り替える。

折角のお休みなんだし、有効に使わないともったいない。

ふわふわと浮かびながら、ヴィヴィオはとりあえずそう結論づけた。

「本、読もうかな」

無限書庫の内部は無重力空間になっていて、空を飛ぶことができる。慣れない内は一切の束縛の無い浮遊感や、無重力化での移動に苦労するが、三年近くここに通い続け、司書資格まで持つヴィヴィオにとっては、ここでの移動はもうお手の物だ。

なにもない空間を蹴り、勢いと反動だけで移動する。

確かカリムが、面白い本があると言っていた。

B・C・ベルカの歴史書。著者はよく分らないが、史実を基にした読み物として十分に面白いらしい。カリムの紹介してくれる本は職務柄古代ベルカ時代の本が多いが、基本的にハズレが無いので、前々から読みたいと思っていたのだ。

本当に面白かったら、ルールーにも教えてあげよう。ルールーはこういう歴史書が大好きだし。きつと、喜んでくれる。

自分と同じく本好きのルーテシアのことを思い浮かべながら、ヴィオは無限書庫の検索ポイントまでやって来た。

無限書庫には書庫というだけのことはあつて本棚がそれこそ無限に置いてあるが、その本を一冊一冊調べていたら、おそらく一生をかけても足りない。だから、ここで本を探す場合には専用の検索魔法が必須だ。早い話が、インターネットの検索と同じである。検索魔法のキーワードを絞り込めばそれだけ正確な情報が手に入るし、曖昧なキーワードだったりするとそれこそ無限に関連書籍がピックアップされる。

効率よく目的の情報を探し当てることも、司書の腕の見せ所だ。

ヴィオは足元にミッドチルダ式魔方陣を展開し、検索魔法を発動する。

ザイフリートの補助がなくても、このくらいなら自分でできる。

『検索魔方陣七式、展開！ 指定ワード、古代ベルカ王族たちの日常。タイトル絞り込み検索！』

ヴィヴィオの詠唱と共に、ヴィヴィオの周囲に複数のミッドチルダ式魔方陣が展開される。

『フルドライブ・オープン！』

詠唱が完成し、展開された魔方陣が検索を始める。魔方陣を複数展開する場合、検索制度があがる分術者の負担が増し、魔法の動作そのものが重くなるのだが、ヴィヴィオは6つの魔方陣を展開し、なお平然とした顔で検索を実行する。

本人曰く『ちよつと本が好きなだけの普通の女の子』

「あ、できた」

探索の結果、該当したのは一冊の本。この本がカリムのお勧めの本で間違いないだろう。

本を手に取り、検索魔法を終了する。展開されていた魔方陣は一瞬で消滅し、再び何もない空間に戻る。

ヴィヴィオは手にした本を抱えて、重力の存在しない無限書庫から、普通に重力があり、本を落ち着いて座って読むことのできる閲覧室へ向かう。今日は調べ物ではなく純粹に本を読みきたのだから、本は普通に読めたかった。

何も無い空間を軽く蹴り、移動するヴィヴィオ。

自分以外に無限書庫にいる人にぶつからないように注意しながら出口に向かう。

今は司書長のユーノはいないようだが、それでも無限書庫はいつも通り多くの人がいる。ヴィヴィオは司書の人たちとはほとんど知り合いなので、無限書庫の司書でない人はすぐに分かる。ここにいる知らない人たちは、大抵は事件の調べものできた管理局の職員だ。

そして今日は、無限書庫には面白いお客さんが訪れているようだ。

その人物を、ヴィヴィオは一般開放区域で見かけた。一瞬見間違いかとも思ったが、彼女のような存在感のある人物を見間違えるはずも無い。なにより、あれだけ強烈な印象を与えられて、実間違えるというのが、どだい無理な話だ。

ちょうど彼女もヴィヴィオの存在に気付いたらしく、驚きの目でこちらを見つめる。

「あなたは……」

「エリーゼさん……！」

時刻は、昼下がりの穏やかな午後。

また何か、ひと悶着起こりそうな雰囲気だった。

## 第四話 聖王の資格

小説本文

「……」

「……」

無限書庫、一般開放区域。

無限書庫の司書だけでなく、許可を得た魔導師以外でも立ち入り、自由に本が閲覧できる、無限書庫において普通の図書館のような役割を果たすところ。実際のところ、一般開放区域と非開放区域の違いは、本が整理整頓され秩序を持って並べられているのかどうか、というだけのことだ。

一般の人が求める本は、ほとんどが一般開放区域に収められている。

一般の人々には繁雑に並べられた書籍では自分の求めるものを検索できないだろう、という無限書庫側の配慮であり、一般開放区域にない書籍でも、司書の人にお願ひすれば非開放区域からでも検索してもらえるので、一般開放区域の存在は開設された五年ほど前から割と好評だった。

その場所にエリーゼがいるということは、彼女も調べ物をしているのだろうか。しかし、彼女の表情から察するに、検索はうまくいっていないようだった。

「……………」

「……………」

言葉もなく、見つめあう二人。

昨日の今日で決闘を申し込んだ相手と、申し込まれた本人。

元々交流もない二人が、こういった不意の状況において交わす言葉などをあるはずもない。

沈黙が続く。

(うつ……)

気まずい。

二人の間を支配するこの空気、耐えられるものでもないし、耐えたいものでもっとない。

この状況を抜け出すために、ヴィヴィオは言葉を探す。

「……あの……」

「……なんですか、高町ヴィヴィオさん」

微妙に棘のある声。

それにめげずに、ヴィヴィオは言葉を口にした。

「……探し物、お手伝いしましょうか？」

「……………はい？」

聞き返された。思いつきり不審な顔で。

唐突な申し出に、エリーゼもその真意を測りかねているようだ。自分でも、この申し出はどうかと思うくらいだから、そういう顔で見られても仕方無いと思う。

けれど、それを頼りに、会話自体はなんとか続けられそうだ。

「あの、本、探してるんですね？ 私、ここの司書なので、お手伝いできると思うんですけど……」

「司書？ あなたが？」

信じられない、という顔をするエリーゼ。

それはそうだ。

無限書庫の司書というのは、それなり以上の難易度を持つ資格である。

ヴィヴィオのような子供が、と思うのも無理はない。

「ほ、本当ですよ？」

今までも信じてもらえないことがあった。

こういうことは、言葉だけで信じてもらうのは難しい。

疑いの眼差しで、ヴィヴィオはじっと見つめられる。

エリーゼの視線は何だか力があるので、そういう視線で見つめられると結構辛い。

「……………分かりました。信じましょう」

「……………信じて、くれるんですか？」

「この状況で、そのような嘘をつく理由が考えられません。信じがたい話ですが、あなたはきっと本当にここの司書なのでしょう」

「ありがとうございます……………」

エリーゼの言葉に、今度はヴィヴィオが驚かされた。

ろくに言葉を交わしたこともないのに、私のことを信じてくれるなんて。

もしかしたら、エリーゼさんは、すごくいい人なのかもしれない。

「……………で、どんな本をお探しなんですか？」

「そうですね。聖王陛下に関する文献。できれば、聖王一族の固有スキルや、聖王陛下の魔法に関する記述があるものが望ましいです」

「分かりました。それで検索してみます」

息をゆっくりと吸い込んで、吐き出す。



こうだった場合、まずは信用を得ることが大事だ。

だからヴィヴィオは、全力全開で魔法陣を起動する。

『検索魔方陣七式、展開！ 指定エリア、B・C・ベルカから、現在のベルカ自治区まで。本文含み、全文検索！』

ヴィヴィオの詠唱と共に、ヴィヴィオの周囲に複数のミッドチルダ式魔方陣が展開される。

虹色の魔力光『カイゼル・ファルベ』を持つヴィヴィオのその術式は、傍から見るとまるでヴィヴィオが虹色の光に包まれているように、それが味気のない検索魔法とは思えないくらい綺麗なものだった。

『フルドライブ・オープン！』

指定ワードを魔法陣に打ち込み、検索魔法を起動する。

無限に近い書籍の中から、次々と関連書籍がピックアップされる。それらをヴィヴィオは並列処理し、必要な情報を含むものだけを検索候補として手元に転送する。あっという間に、ヴィヴィオの周りを古い書籍が取り囲んだ。

エリーゼは、そうして目の前に漂ってきた本を適当に手に取り、パラパラとページをめくる。

次の瞬間、エリーゼの表情が驚愕に染められた。

「これだけの書籍を検索するだけでも相当重いハズなのに、更にこれほどの確な書籍を、これほどの短時間で探し当てるなんて……」

エリーゼはキツと、ヴィヴィオを強い眼差しで見つめた。

その視線で睨まれ、思わずヴィヴィオは怯んでしまう。

「……………あなた、一体何者なんですか？」

「えっと、人より少しだけ読書が好きな、普通の九歳の女の子です」

エリーゼの問に、ヴィヴィオは自分が思っていることを素直に述べた。

ヴィヴィオにとって、自分の能力は普通の女の子の範疇を出ない。心の底では、自身の能力の有り得なさを自覚しているのだが、普通の女の子でいたいという願望が、それを素直に認めることを認めない。

「しかも、今の検索魔法はミッドチルダ式……。あなたの適性は、古代ベルカ式ではないのですか!？」

ヴィヴィオに詰め寄るエリーゼ。

そのあまりの勢いに、ヴィヴィオは思わず面食らう。

「どついうことが、お話、聞かせていただけますか？」

有無を言わさぬエリーゼの言葉。

「は、はい……」

ヴィヴィオはただ、頷くことしかできなかった。

無限書庫は、時空管理局本局の内部に設けられている。

本局では多くの局員が昼夜問わずに働いているので、飲食店や雑貨品店など生活に必要なものを販売する場所や、疲れた身体や心を癒すための施設も多く、まるでひとつの都市のような設備を多数設けている。

その中で、無限書庫に一番近い食堂に、ヴィヴィオとエリーゼは向かった。

無限書庫は、規模がとてつもなく大きい図書館のようなものである。

図書館の中で長話はよくないから、というヴィヴィオの進言によるものだった。

時間を問わず賑やかな食堂で、ヴィヴィオとエリーゼは二人掛けの席に、向かい合って座った。食堂に来て何も頼まずに座るのもよ

くないので、ヴィヴィオは冷たいココアを、エリーゼはホットコーヒーを注文していた。

「……で、どうしてミッドチルダ式の魔法を使うあなたが、古代ベルカの魔法である聖王の魔法を習得しようとしているのですか？」

席に着くなり、エリーゼは話を切り出した。

エリーゼの視線だけでなく、声にも有無を言わせぬ迫力がある。それこそ、生まれつき人々を従わせる能力でもあるんじゃないかと思っくらい。

エリーゼの問いに、ヴィヴィオは答えるしかなかった。

「あの、私の両親が、ミッドチルダ式の魔導師なんです。だから私も、って思ってたミッドチルダ式を習得したんですけど、両親がカリムさんやシスターシャツハと交流があって、その縁でザンクト・ヒルデ魔法学院に通うようになって、私に古代ベルカ式の資質があることが分かったから、その縁で、今の状況になります……」

しかし、だからと言って自分の生い立ちを正直にすべて話すわけにはいかない。出生を始めヴィヴィオには周囲には秘密にしていることがいくつもあるが、自分が聖王陛下であるということは、ヴィヴィオが最も知られたくないことだった。

そもそも『私は聖王です』なんて、そんな突拍子もないこと、言ったところで信じてもらえるかどうか疑問だった。

みんなには、普通の女の子として、自分に接して欲しいから。

なるべく不審に思われないように、言葉を選んで説明する。

「そうですか……」

ヴィヴィオの言葉を聞き、その意味を租借するかのように瞳を閉じるエリーゼ。

エリーゼの次の反応を待つヴィヴィオもなんだかドキドキする。

今のただたどしい、真実をいくつか抜いた説明で、一体どれだけ信じて貰えるのか。

「……成程、あなたの事情は大体理解しました。私もあなたの両親のことは知っていますし、それなら、今までミッドチルダ式魔法を使用してきたということも納得できます」

高町という姓を出すだけで、両親のことを訪ねてきたことがこれまで幾度かあったを思い出した。

私のママとパパは、一体どれだけ有名人なんだろう。

「それに、あなたのご両親なら騎士カリムやシスターシャッハと交流があってもなんら不思議ではありませんし、その縁から、あなたの適性を見出すことも、ないとは言いきれません。まだいくつか疑問点は残りますが、一応の辻褄は通ってますし、あまり深入りしても、個人のプライバシーに関わりますしね。これで、あなたの事情を理解したということにしましょう」

「あ、ありがとうございます……」

どうやら、一応は誤魔化せたらしい。

これ以上深入りされないことに、ホッと胸を撫で下ろすヴィヴィオ。

普段は微妙な気持ちだが、こういふときはかりは、両親の知名度に感謝である。

しかし。

心が落ち着くにつれ、ヴィヴィオの中でとある疑問が生まれた。

それはきっと、この状況の本質に関わる疑問。

どうしてエリーゼさんは、こんなに私……………いや、

「あの、私からも質問、いいですか？」

「どうぞ」

「どうしてエリーゼさんは、そんなに聖王陛下にこだわるんですか？」

どうして、こんなに聖王陛下にこだわるのだろうか。

信仰だから、と言ってしまえばそれなのかもしれない。

けれど、これはヴィヴィオの勘、のような考えだが、エリーゼが聖王陛下にこだわる理由は、それ以外にもあるような、そんな気がした。

「……そうですね。あなたには、話しておくべきなのでしょう」

一呼吸おいてから、エリーゼは語りだした。

「私の家……ダイムラー家は、あなたもご存じでしょうが、聖王陛下の血を受け継いでいます。受け継いでいると言っても、聖王陛下がご存命の頃の私の祖先すら聖王の遠縁程度の繋がりでしたから、今の私たちと聖王の繋がりなんて、ほとんどないも当然でしょう」

ヴィヴィオも、それはカリムから聞いていた。

現代において、正当な聖王の血を受け継いでいる人はいないと。

「とはいえ、聖王陛下を受け継ぐ者がいない今、その薄い血縁を頼りに、私の一族が『聖王を継ぐ者』として聖王教会の上層部の一端を担っています。私たちのような血縁と呼んでいいのかどうかすら疑わしい繋がりでも、聖王陛下のいない現代では、聖王陛下を受け継ぐ者として扱われているのです」

だからこそ、ほんのわずかな血縁を持つ者でも、その意味は大きくなる。

「ですから、現代において聖王の血を受け継いでいる私たちには、責任があるのです」

「責任？」

「聖王陛下の正当な血統が途絶えた今、私たちの一族が、聖王の血を、意志を受け継がなくてはならないのです。少なくとも私はそう

思いますし、私の父も、祖父も、そういう思いで生きてきました。私たちの一族には、それだけの義務と重責があるのだと」

エリーゼの言葉に、段々と力が籠る。

「私たちが聖王陛下への信仰を示さなくて、一体誰が示すのですか？」

しっかりとヴィヴィオの瞳を見つめ、正面から真っ直ぐな言葉で、エリーゼはそう告げた。

その言葉には、聖王を信仰していないヴィヴィオにも伝わる、重みがあった。

それは、覚悟。

軽々しく言葉を放つことすらも許されない。

エリーゼの背負っているものの一端を垣間見た、そんな気がした。

「先日、あなたに決闘を申し込んだのは、別にあなたに恨みがあるから、とかそういうわけではありません。……正直、あなたには悪いことをした、とも思っています」

本当に申し訳なさそうに、エリーゼは言う。

「むしろ、私たちはあなたに謝らないといけません。あなたに聖王陛下の魔法を習得させなければならぬ、という事態がすでにおかしいのです。私たちの一族の誰も、次期当主である私ですら、古代ベルカ式の適性を持たないのですから」



エリーゼの言葉から滲み出てきたのは、無念。

他でもない聖王を継ぐ者が、聖王を本当の意味で継ぐことができない。それだけの自負を覚悟を持って、自分たち自身で聖王の魔法を受け継ぐことができないことができないのは、どれほどの無念だろうか。

「ですが、それでも、私は示さなねばならないのです。正しい信仰の在り方を。聖王の名を、力を、意志を、継ぐ。その、重さと責任を」

「……………」

言葉もでないヴィヴィオ。

エリーゼの言葉は予想以上に真摯で、彼女の抱える責任と覚悟が、ひしひしと伝わってきた。

ヴィヴィオは思う。

彼女はおそらく、物心つく頃からずっと、それだけのものを背負って生きてきたのだ。

重責と、覚悟と、責任。無念と、悔恨。

それは、一体どんな人生だったのだろう。

軽々しい言葉などかけられない。軽い気持ちで言葉を紡げば、それは彼女の歩んできた人生に対する最大級の侮辱となる。お話を聞

いて、ヴィヴィオはエリーゼに敬意すら抱いていた。同じ立場に生まれていたとして、果たして私は、彼女のように強く生きていくことができたのだろうか。

エリーゼの言うとおり、私に、聖王の魔法を受け継ぐ資格があるのだろうか。

「……確かに、私には、あなたのような覚悟はないのかもしれない。ただ古代ベルカ式の適性がある、というだけで聖王の魔法を受け継ぐというのは、エリーゼさんたちにとって、いえ、聖王を信仰する人たちにとって、すごく失礼なことをしているのかもしれない」

だけど。

ヴィヴィオにも、譲れないことがある。

「ですが、私も覚悟しています。エリーゼさんのように、それだけのものを背負ってでも、私には護らないといけないものがあるんです」

エリーゼの瞳を、しっかりと見据える。

視線を逸らさない。

逸らしたら、自分の想いが嘘になってしまう。そんな気がしたから。

「知っているのですか？ あなたの、今の状況の危うさを」

「知っています」

「これから危険な目にあったり、もしかすると命を落とすかもしれないのですよ？」

「覚悟の上です。そうでもしないと、私は護れないし、追いつけないんです」

「……御両親を受け継ぐためですか？」

「いえ。自分の意志で、決めたことです」

そうまでしてでも、聖王の魔法を習得したい理由。強くなりたいわけ。

最初は、単純な憧れだった。

実際に友達を護るために戦ってみて、己の無力さを思い知った。

このままでは、強くて優しいあの人たちみたいに、誰かを護ることはできない。

だから私は、どんなに辛いことがあっても強くなる。

護れなくて後悔、したくないから。

言葉もなく、見つめあう二人。

時間だけが過ぎていく。

ホットコーヒーの湯気は、いつの間にか消えていた。

不意に、エリーゼが溜息をついた。

「……あなたの人となり、理解できた気がします。……もしかすると、あなたには、聖王陛下の魔法を受け継ぐに足る人物、なのかもしれません」

「え……」

「ですが、だからと言って、簡単に認めるわけにはいきません。聖王陛下の魔法を習得するということは、聖王陛下の名を背負う、ということでもあります。それだけ聖王陛下の名は重いのだと、理解できますね？」

「はい」

「明日の決闘で、あなたが聖王陛下を継ぐに足る人物なのか、見極めさせていただきます。何様なのかと思うかもしれませんが、これはダイムラー家に課せられた職務だと、私は考えます」

「いえ、何様とか、そんな……」

「……………結構、話し込んでしまいましたね」

時計を確認しながら、エリーゼが呟く。

ヴィヴィオも時計を確認すると、エリーゼの言つとおり、結構な時間が過ぎていた。

「では、今日はこのあたりで。明日の決闘のこと、忘れないでくださいね」

席を立ち、ヴィヴィオに背を向けるエリーゼ。

「それでは、ごきげんよう」

「じ、ごきげんよう」

どうやら、エリーゼさんはマイペースな人らしい。

最後に、ヴィヴィオはそんなことを思った。

「あ、そうでした」

くるりと回り、エリーゼは再びヴィヴィオの方を向いた。

「本、ありがとうございます」

微笑みながらそう告げると、エリーゼは踵を返し、再び出口に向かって歩き出した。

エリーゼの後姿が見えなくなるまで、ヴィヴィオはその背中を見つめることしかできなかった。

手をつけることのできなかったアイスココアの氷は、いつの間にか溶けてなくなっていた。

「……………」

「大変なことになってるね」

「ひゃあ!？」

突然の声に驚いて振り向いてみると、ヴィヴィオの座っている席の真後ろで、無限書庫司書長ユーノ・スクライアが腕組みをして立っていた。

「やあ、ヴィヴィオ。久しぶり」

「ひ、久しぶりです……」

ユーノの言うとおり、ヴィヴィオがユーノと出会うのは久しぶりだった。

若くして無限書庫司書長の肩書を持つユーノは、司書長の仕事と考古学者としての仕事と兼業しており、最近は管理局から重要な仕事を依頼されているようで、あまりヴィヴィオと顔を合わせる機会がなかったのだ。

「いや、久しぶりによく見知った人がいるから声をかけようと思ったんだけど、どうにも声がかけられる雰囲気じゃなくてさ」

「あの、どの辺から聞いてましたか？」

「んー、『どうしてエリーゼさんは、そんなに聖王陛下にこだわるんですか?』の辺りから、かな。盗み聞きとか、そんな趣味の悪いことがしたかったわけじゃないけど、なんだか深刻そうな話だったからさ、つい、ね。ごめんね、ヴィヴィオ」

「いえ……」

流石は無限書庫の司書長。

一言一句間違いなく記憶しているとは。

「……あの、ユーノさん」

「ん？」

「ユーノさんは、どう思いますか？」

「……………それは、僕に何のことを聞いているのかな？」

「エリーゼさんの背負っているものについて、です」

「……………そうだね。僕にも、あの子の背負っているものの重さは想像もつかない。ヴィヴィオ、君と同じ

ようにね。基本的に特定の神様を信じない君や僕のような人にとって、信仰の重さも、家柄の重さも、本当に理解しようと思ってもできるものじゃない。」

若くして無限書庫の司書長を務めているだけのことはあって、ユーノはとても頼りになる。

なのはママの魔法の先生でもあるユーノに聞けば、なにかわかるかも知れない。ヴィヴィオはそう思った。

「だけどね、ヴィヴィオ。ひとつだけ、はっきりしていることがある」

「はっきりしてること？」

「あの子はきつと、聖王の名の下に、自分の誇りと魔導のすべてをかけて、ヴィヴィオに挑んでくるだろうね。だったら、こちらで全力で戦うべきだと僕は思う。それが、彼女の想いに対する誠意、だからさ」

ユーノに言われて、ヴィヴィオはハッと気付いた。

ユーノの言うとおりだ。

ヴィヴィオには、エリーゼの背負っているものの重さは分からない。熱心な聖王教徒である彼女が、聖王の名を軽々しく語ることを許さない彼女が、聖王の名のもとに決闘を申し込んできたこの意味も、きつと本当の意味では分かりえない。

聖王教徒でもない自分が、資質があるというだけで聖王の魔法を習得することの重大さも、聖王を受け継ぐ立場にありながら、本当の意味で聖王を受け継ぐことのできないことの無念さも、きつと理解することはできないだろう。

けれど、理由はどうあれ、エリーゼは本気でかかってくる。

それが彼女の心の在り方だから。

生半可な気持ちでかかれば、彼女の心の在り方そのことを否定することになってしまう。

ならば、こちらで本気でかかるのが、彼女に対する誠意というものではないか。



私の持つ全力全開の力で、戦わないと。

私のことを、認めてもらえない。

誰かに否定される力では、誰も護ることはできないのだから。

「……ありがとう、ユーノさん。私、やっと決意ができました」

こんなに簡単なことが、どうして分からなかったのか。

「いや、ヴィヴィオ。僕は、思ったことを言っただけだよ。そこから先は、君の力だ」

「それでも、ありがとうございます」

言い、ヴィヴィオはペコリと頭を下げた。

ようやく、心が決まった。

本当は戦いたくなんかない。お話だけで済むならそれが一番だ。

だけど、現実にはそういうわけにはいかない。

エリーゼさんの心も、立場も、それを赦してはくれない。

だから、私は全力で戦おう。

私のお話を聞いてもらうために。

高町ヴィヴィオ。

私、全力全開で、エリーゼ・ダイムラーさんと戦います。

聖王教会の敷地内には、いくつかの訓練場がある。

それらは聖王教会に所属する騎士たちが日々の鍛錬を行ったり、あるいは聖王教会系列のザンクト・ヒルデ魔法学院の生徒が部活動を行うことに使用されたりする。その広さや形態は様々で、ただの更地程度のものであれば、競技用に整備され、訓練場を取り囲むように階段状の観客席が設置されているものもある。

聖王教会において、決闘とは軽々しく口にすることが赦されるものではないが、それでも、一年に二、三度程度の頻度で発生している。

騎士たちの誇りと魔導をかけて行われる決闘では、階段状の観客席のある、一番広い訓練場が使用されるのが、聖王教会騎士団での伝統だった。

そして今日。

聖王教会第一訓練場の観客席は、朝の早い時間からすでに満員で、

立ち見の観客すら発生するような有様だった。

「……………え〜」

指定された時間どおりに訓練場にやってきたヴィヴィオは、そんな訓練場の有様を見て、それまでの緊張が一気に削がれてしまった。……というか、なんだかげんなりした。

「これ全部、まさか観客……？」

まだ競技場に近づいたばかりなのに、その喧騒が聞こえてくる。

決闘と言うと、もっと厳格で厳かなものを思い浮かべていた。エリーゼの言うとおりならば、そうとう神聖で、緊張感に包まれているものだと思っていた。

しかし実際には、まるで見世物でも始まるかのような雰囲気。

イメージと現実とのギャップに、場所を間違えたのかと不安になるヴィヴィオ。

「ヴィヴィオー！」

ザイフリートに現在地と目的地を照合してもらおうか、と思ったのと同時に、自分の名前を呼ぶ声。

見ると、競技場からこちらに駆け寄ってくる女の子の姿があった。

「あ……………アリカちゃん！」

その少女の名前は、アリカ・フィアット。

左右で異なる紅色と蒼色の瞳を持つ、ヴィヴィオにきっかけをくれた友人だ。

「ヴィヴィオ、大丈夫!？」

「大丈夫って？」

「だって、ヴィヴィオが決闘を申し込まれたって学院中の噂だし、しかも、決闘を申し込んだのがあのエリーゼさんなんだよ!? そりゃ、心配にもなるよ」

アリカはどうやら、本気で自分のことを心配してくれているようだ。

そのことはとても嬉しいのだが、今の状況には戸惑わずにいられない。

アリカは今、学院中の噂、と言った。

そんなに、話が大きくなっていたとは……。

「そんなに、すごいことになってるの？」

「うん。だって、管理局最強の砲撃魔導師、『エースオブエース』高町なのは三等空佐の娘、高町ヴィヴィオと、ダイムラー家の次期当主、『聖騎士』エリーゼ・ダイムラー初等部生徒会長の決闘なんだよ? 学院どころか、聖王教会の信者さんたちに、高町なのはファンクラブベルカ自治区支部の人たち、エリーゼ・ダイムラーを慕

う会の会員さんたちに、高町ヴィヴィオを見守る会の人たち、更に、見学に来るともっぱらの噂の騎士カリム目当てのカリム・グラシア様に祈る会の人たちまで駆けつける大騒ぎだよ」

「……………」

今のアリカの言葉に、一体どれだけの突っ込みどころがあったのか、数えることさえ億劫になってしまった。

しかしそれでも、尋ねずにはいらなかった。いや、尋ねないわけにはいかなかった。

「……………順番に訊くね」

「え？ うん」

「どうして、決闘のことがそんなに広まってるの？ まさか、エリ―ゼさんがそんなことをベラベラと喋るとは思えないし」

「それはきっと、ヴィヴィオが決闘を申し込まれたとき、周りにいた人たちがそのことを聞いてたんだよ。その人物が学院でも話題の人物たちだったから、三日でこんなに広まっちゃったんじゃないかな」

「『聖騎士』ってなに？」

「知らない？ 最強クラスの魔導師や騎士は、その能力を冠するふたつ名で呼ばれること。例えば『夜天の主』とか『管理局の白い悪魔』とかさ。エリ―ゼさんの場合、ダイムラー家に与えられている称号を呼ばれてるんだけどね」

「高町なのはファンクラブベルカ自治区支部って？」

「名前のまんまだよ。高町なのはさんのファンクラブ。ヴィヴィオ知らない？ 確か、フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官にも、似たようなファンクラブがあったと思うんだけど」

それはできれば、知りたくなかった。

改めて、両親の偉大さを知るヴィヴィオだった。

「……じゃあ、高町ヴィヴィオを見守る会、は？」

「あゝ、ヴィヴィオ本人が知らなかったか。ま、見守る会だしね。ほら、ヴィヴィオって両親は超有名人だし、本人も話題性が満点の美少女だし、この学院くらい生徒数が多ければ、ファンクラブみたいのができて不思議じゃないって」

どつりで学院にいる時、たまに妙な視線を感じることがあると思っただ。

気のせいじゃ、なかったんですね。

できれば、気のせいだと思い続けたかった。

「……わかった、ありがとう……」

本当はもっと聞きたいことがあったが、もうその氣力を失ってしまった。

聞かなければよかった、とも思った。

戦う前から、いつきにやる気を削がれてしまった気分だった。

「……ヴィヴィオ、大丈夫？」

「……できれば、知りたくなかったよ……」

げんなりとするヴィヴィオ。

しかしそれでも、今更決闘をすっぱかすわけにはいかない。

ヴィヴィオは自分の気持ちを切り替える。

観客なんて関係ない。周りの人も視線も、関係ない。

今日は、私と、エリーゼさんとの決闘。

己の誇りと魔導をかけた真剣勝負。

頭をあげる。前を見据える。

ゆっくりと息を吸い込んで、吐き出す。呼吸を整える。

「ヴィヴィオ？」

「……うん。私は、大丈夫」

心を落ち着かせる。

ゆつくりと、訓練場に向かうヴィヴィオ。

訓練場の入り口は、あれだけの観客がいるのに、空白地帯のように誰もいなかった。

まるで観客全員が、そこにいる人物に近づいてはいけなく、とても思っているかのように。

「カリムさん、シスターシャッハ」

そこにいたのは、騎士カリムと、シスターシャッハ。カリムのお付きであるオットーとディート、そしてセイン。

「ヴィヴィオさん。なんだが、凄いことになってますね」

「ですね」

観客席を一瞥して、カリムは苦笑いした。

そのことには、ヴィヴィオも苦笑で返すしかない。

「さて、ヴィヴィオさん。こんなことになるとは予想外ですが、私から言うことは一言だけです」

「はい」

「後悔がないよう、しっかりと」

「……はい」



「ヴィヴィオさん。私との特訓はまだ三日程度ですが、それでも、そのことは無駄ではありません。あなたが学んだことに、誇りを持つて」

「頑張れ、ヴィヴィオ！」

「応援しています、陛下」

「陛下、しつかり」

カリムに続いて、シャツハ、セイン、オットー、ディードと、それぞれにヴィヴィオに激励の言葉をかける。

「はい」

その言葉を受け止め、ヴィヴィオはしっかりと頷いた。

「ヴィヴィオ……」

「アリカちゃん」

「あの、その、うまく言えないんだけど……」

「うん」

「頑張ってね」

「うん。分かった」

そして友人の言葉を、しっかりと受け止めた。

訓練場に入る前に、彼女たちの言葉をヴィヴィオはしっかりと噛み締める。

私は、一人じゃない。

力強い相棒もいる。

「……よろしくね、ザイフリート」

「はい。お嬢様」

だから、大丈夫。

「……行つてきます」

そしてヴィヴィオは、競技場に足を踏み入れた。

ヴィヴィオが競技場に入った途端、観客席の喧騒はかき消え、数秒前までの賑やかさが嘘みたいに静まった。

喋ることも、息をすることすら許さないというような、そんな気配。

訓練場を支配するのは、緊張感と、圧迫感。

成程。これが、決闘。

一層気を引き締め、ヴィヴィオは更に歩を進める。

訓練場の中央には、すでにエリーゼがいた。腕を組み、静かにヴィヴィオを待っている。

ヴィヴィオは何も言わずに、エリーゼの正面に相対した。

「……………」

「……………」

何も言わず、ただ睨み合う二人。

先に口を開いたのは、エリーゼだった。

「……ちゃんと、時間どおりに来ましたわね」

「……………決闘ですから」

「決闘でのルールはご存じかしら」

「はい。大丈夫です」

決闘のルール。

戦闘範囲は訓練場内。空戦あり。魔法の使用は自由。ただし非殺傷設定。

相手がギブアップするか、動けなくなるまで戦う。

シンプルが故に、小細工がきかない。

まさに実力がものをいう、真剣勝負。

「以前も言ったとおり、私は聖王陛下への信仰のために、戦います。あなたは？」

「私は、私の信じるもののために、全力全開で、あなたと戦います」

「……決闘の流儀は？」

「知ってます」

「では、デバイスを起動しなさい」

言われ、ヴィヴィオは首から下げていたザイフリートを取り出す。

そしてヴィヴィオに相対するエリーゼも、ヴィヴィオのそれによく似た十字架のペンダントを取り出した。

「？希望の光？ザイフリート」

「？聖なる十字？ファーフニル」

『セットアップ！』

二人の声が重なった。

一秒にも満たない時間で、二人はバリアジャケットに身を包み、デバイスを起動させる。

白を基調とし、しかし黒と黄色の意匠があしらわれたバリアジャ

ケット。足元を包むのはロングスカート、そして左腕には銀色の籠手。髪の毛は頭の片側で結びあげられたサイドポニーに。

手にするのは、ひし形十字をかたどった杖。ひし形十字の中央には、虹色に輝く宝玉。

対するエリーゼは、騎士カリムの修道服に近いツーピースのバリアジャケット。ただし、腕、足、肩、腰回りなど、要所要所には鎧のような装甲が装着されている。堅実で、実用性の高い、正に騎士服。

そして手にするのは、十字型の刃を持つ クロスビター 十字槍型のデバイス。聖騎士の名に相応しいデバイスだ。ヴィヴィオはそう思った。

「……心の準備は？」

「問題ありません」

それぞれのデバイスを構え、お互いに距離を取る。

視線と視線が拮抗する。

最早、無駄口をたたくものは誰一人として存在しない。

近づくだけで切れてしまいそうな、凜と張り詰めた空気。

気を抜けば、あつという間に押しつぶされてしまいそうな重圧。

歴史と、伝統。

背負ってきたものの重さ。

これから背負うものの重さ。

それぞれの想いを胸に秘めて、戦う者達。

「『聖騎士』エリーゼ・ダイムラー！」

「高町ヴィヴィオ！」

「聖王陛下の名の元に！」

「己の誇りと、魔導をかけて！」

「いざ！」

「尋常に！」

『勝負！！』

そうして、二人の魔導が、激突する。

## 第五話 聖王と聖騎士

「いざ！」

「尋常に！」

『勝負！！』

開始の合図と同時に、エリーゼが前に踏み出した。脚部に魔力を込め、瞬間的に速度を上げる近代ベルカ式の基本魔法。逆に言えばこれに対応できなければ、近代ベルカ式を使用する魔導師とはまともに戦えないことになる。

一秒にも満たない時間で、数メートルあつたエリーゼとヴィヴィオとの間合いが詰められる、

ハズだった。

対して、ヴィヴィオも同様の技法を使用する。脚部に魔力を収束し、強化する。

ただし前に進むためではなく、後ろに下がるために。

二人の間にある距離は、変わらない。

「ザイフリート！」

『Accel Shooter』

ヴィヴィオは後ろに下がると同時にアクセルシューターを起動、十のディバンスフィアを一瞬にして生成、

「シュート！」

間髪入れず、自身の前方に放つ。コマンドを入力されたディバンスフィアは直線軌道を描き、虹色の光の筋が真っ直ぐにエリーゼに向かう。

「フン！」

高速で迫りくる十の光弾に対し、エリーゼは回避行動を取ろうとはしなかった。手にした十字槍型のデバイスを振るい、次々と光弾を破壊していく。十字槍はエリーゼの身長と同じくらいの長さをしているのに、その長さも、重さも、エリーゼは感じさせなかった。まるで自分の手足のごとき十字槍捌きで、同時にヴィヴィオとの間合いを再び詰めにかかる。

『Schwalbefliegen』

最後の光弾が破壊されたところで、更に、エリーゼのデバイスからの音声が聞こえる。その声色は力強く、壮年の男性を模したと思われる機械音声。その声と同時に、エリーゼの周りに四つの実体を持つ魔力コーティングされた金属弾が召喚される。その色は、鮮やかな橙色。

「行きなさい、弾丸！」

エリーゼの掛け声と共に、橙色の光弾がヴィヴィオに発射される。質量を持った魔力弾、ただの魔力防壁では防ぎきれない。



「デイベイン……」

そこでようやく、エリーゼは気付く。

ヴィヴィオが、ザイフリートを腰ために構えていることに。

その足もとに展開されているのは、ベルカ式魔法陣。ザイフリートを取り囲む環状魔法陣は、ミッドチルダ式のそれなのに。ヴィヴィオ特製、ミッド式とベルカ式の複合砲撃魔法。

「バスター！」

瞬間、ザイフリートから巨大な純魔力エネルギーが放出される。

虹色のエネルギーの塊は直撃寸前だった金属弾を一瞬で吹き飛ばし、威力を一切減衰させることなく、エリーゼに向かう。大気を震わせるほどの魔力が、エリーゼのブロンドの髪を揺らす。

「なッ！？」

エリーゼは迫りくる魔力砲撃に対し驚くも、咄嗟に回避行動を取る。一瞬の判断でヴィヴィオの砲撃は、到底防御しきれるものではないと踏んだのだ。脚部に魔力を収束し、地面を蹴る。ほぼ同時にエリーゼの真横を魔力砲撃が通過する。自慢の長いブロンドの何本かが、砲撃に持っていかれた。

だが、そんなことを気にしている場合ではない。

エリーゼが再び地に足を着けた時には、すでにヴィヴィオが眼前

に迫っていたのだから。

「ザイフリート、リミット？・リリース！ フォルムツヴァイ！」

『B a l m u n g f o r m 』

ヴィヴィオに、まるで長剣のように構えられた状態のザイフリートが、その形態を変化させる。ひし形十字を模った魔導師の杖その先端部から片刃の刀身が伸びる。杖の柄の部分は縮み、杖としてではなく、剣として両手で扱いやすい長さになる。鐔の部分は、魔導師の杖の状態と同じようにひし形十字の意匠があらわれている。

ザイフリート第二形態、バルムングフォルム。

古代ベルカ語で『英雄の剣』を意味するその名の通り、近接戦闘用の形体だ。

ヴィヴィオは片刃の長剣に変化したザイフリートを真上に振りかぶる。

「はああっ！」

そして、掛け声と共に、ザイフリートを力の限り振り下ろした。

「くっ！」

エリーゼは反射的に両手で十字槍を掲げるように前に突き出し、槍の柄の中央部分で刃を受ける。力に押され槍がしなるが、折れることなく刃を受け止めた。

「……………」

「……………」

ヴィヴィオは刃を叩きつけた姿勢のまま、エリーゼは刃を受け止めた態勢のまま、動かない。いや、動けない。下手に体勢を崩してしまうと、あつという間に追い詰められてしまう。二人とも、本能的にそれが分かっていた。

実力は互角か。

互いのデバイスを間に、睨みあう二人。

訓練場が、しんと静まりかえる。

「……………」

「……！」

「……!?」

きっかけは突然。

瞬間的に、エリーゼが身体を手にするデバイスごと沈ませた。いきなり支えがなくなり、前のめりに体勢を崩すヴィヴィオ。エリーゼはそれを確認すると、立ち上がると同時に最小限の動作で十字槍を上には振り抜いた。

「っ」

体勢を崩され反応できなかったヴィヴィオの、ザイフリートが弾かれる。本来なら相手の得物を弾くことができるような動きではないが、エリーゼは近代ベルカ式の使い手である。足りない分の威力は、魔力で補う。手こそ離さなかったものの、勢いに負け、刃が後ろに持っていられる。

その隙を、エリーゼは見逃さない。

一步後ろに下がり、十字槍を構えなおす。それから腰だめに構え、両腕の力と腰の捻りを連動させ、ヴィヴィオを突き抜く。

そしてヴィヴィオも、その隙を許さない。

頭の上まで弾かれたザイフリートを咄嗟に柄を握る右手を逆手に持ち直し、左手を刃の付いていない方に添え、逆手になった右手を軸に無理矢理回転させる。ザイフリートの切っ先部分を下方方向に向け、刃の腹の部分で、かろうじてエリーゼの十字槍の切っ先を受け止めた。キーン、と、澄んだ音が響き渡る。

再び、しいん、と静まりかえる訓練場。

誰かが喋る音も、何も聞こえない。甲高い金属音の反響音が響くだけ。

「……………」

「……………」

デバイスをぶつけ合ったまま、睨みあう二人。

このままでは埒が明かない。

ヴィヴィオはバックステップを踏み、一旦距離を取る。それとほぼ同時に、エリーゼも後ろに下がる。

「……やりますわね。高町ヴィヴィオさん」

「……あなたこそ。エリーゼ・ダイムラーさん」

一度目の激突、純粹な力と力の激突は、ほぼ互角。

しかし、ここにいる誰もが、ただの一度の激突、わずか一分程度の攻防で決着がつくとは考えていない。

二人は距離を取ったまま、再びデバイスを構えなおす。

ヴィヴィオは剣を持つ基本の姿勢、中段の構えに。

エリーゼも、槍の柄の真ん中を右手で、石突を左手で持つ槍術の基本の構え。

戦いは、まだ始まったばかりだ。

デバイスを構え、睨みあうヴィヴィオとエリーゼ。

一定の距離を保ち対峙する二人の間に言葉はない。

そこに在るのは、本気の気持ち。

決意と想いをかけた、真剣勝負の空気。

「……私は、あなたのことを見誤っていたのかもしれませんが」

張りつめた空気の中。先に口を開いたのはエリーゼの方だった。

「あなたは強い。私とて、聖王騎士の端くれ。一度剣を交えれば、そのくらいのは分かります。おそらく、普通に戦っても、勝つことは難しいでしょう。ですから……」

エリーゼが、踏みこむ。

「私も『聖王の魔法』を、使わせていただきます！」

エリーゼの正面に、五つのベルカ式魔法陣が展開される。橙色の輝きに導かれる魔力の流れが普通でないことに、ヴィヴィオは気付いた。

聖王の魔法。

それはヴィヴィオが持つ、『聖王の鎧』と同じ意味を持つ魔法。

かつて聖王の一族のみが使うことのできた固有スキル。

その能力は本人の実力に関わらず、Sランク相当の能力を発揮す

る。

未知の力に対し、ザイフリートを握る手に思わず力がこもる。

エリーゼの発動させた魔法陣から、せり上がるように人型をした何か召喚される。それらは黄金色の鎧を身にまとい、顔を兜で覆い、手には長槍と直径一メートルはありそうな大きい盾を構えている。その数は、魔法陣と同じ5体。

それらは完全に召喚されると、盾を構えて、エリーゼを守るかのような陣形を組む。それから、お互いに密集して盾の上から、地面にほぼ水平に槍を突き出す。攻防一体の密集陣形を取る、俗にファランクス、と呼ばれる戦法。

その槍の切っ先はすべて、ヴィヴィオに向けられている。

隊列を組む黄金色の鎧騎士達に、ヴィヴィオは覚えがあった。

### 『聖王の従者』

それはかつての聖王の一族のみが使用することのできた、聖王の魔法のひとつ。

ヴィヴィオの持つ『聖王の鎧』のように、聖王の血を受け継ぐ者しか使うことのできない技術。

それを、まさかエリーゼが使うことができるとは。一応、もしかしたら、とは思っていたが、聖王の血がほとんど残されていない現代において、本当に自分以外聖王の魔法を使える人がいるとはほとんど考えていなかった。

ヴィヴィオは改めて、召喚された鎧騎士達を観察する。

鎧の金色の光沢からして、鎧の材質はおそらく真鍮。銅と亜鉛との合金である真鍮は、強度は大したことはない。ただし、それは一般的な真鍮の話。エリーゼが召喚した鎧騎士の鎧が、Sランク相当の力を持つと言われている聖王の魔法によって召喚されたそれが、一切の魔力的加護を受けていないわけがない。

ここは、相当の強度を持つと考えるのが妥当。

見た目や生半可な知識で判断するのは危険すぎる。

鎧騎士の数もそうだ。

エリーゼは今五体の鎧騎士を召喚したが、はたしてそれが召喚できる最大数なのか。槍と盾を装備しているが、それ以外の装備も可能なのではないか。人以外の生物の形を取ることも可能なのではないか。

「っ……………」

不確定要素が多すぎて、迂闊に手を出すことができない。

ここは、受けに回ることしかできない。

その事態に、ヴィヴィオは戦慄する。

果たして今の自分に、エリーゼを加えて合計六つの槍の猛攻を捌き切ることができるのか。



「……来ないようですね」

エリーゼの声は相変わらず、揺るがない強さを持っていた。

「なら、こちらから行かせていただきます!」

エリーゼの声と共に、事実上の第二ラウンドが始まる。

「行きなさい、ヴァルキューレ!」

エリーゼの指示を受け、五体の鎧騎士達が一斉に動き出す。左手に持つ盾を前に構え、槍を盾の上から地面にほぼ水平に突き出すフアランクスの体勢を崩さぬまま、ヴィヴィオに向かって走り出す。一糸乱れぬその動きは、事前に組まれていた密集隊形を崩さない。

「ファーフニル、フォルムツヴァイ!」

『H r o t t i f o r m』

更に、力強い男性の機械音声と共に、エリーゼの持つ十字槍の刃と柄の部分のつなが目がスライドし、鈍い音と共にカートリッジがロードされる。柄の中央で二つに分かれ、十字の形をした穂先のうち、中央の刃が伸びる。分割された刃が付いていない側の方の柄にも、同様の刃が形成される。

まるで、鐔の部分が刃で構成された、二振りの片手剣。

ファーフニル第二形態、フロツティフォルム。

古代ベルカ語で『突き刺すもの』を意味する名の通り、槍の特性を持つ、二振りの片手剣だ。

「はっ！」

エリーゼはそれを両手に握り、先に走り出しているヴァルキューレ隊に続く。

前には槍を構えた五体の鎧騎士。更にその後ろには、二振りの片手剣を構えるエリーゼ。

二重の攻撃網に、ヴィヴィオは、

「飛んで、ザイフリート！」

『Flier Fin』

瞬時に魔力の羽を形成し、空中に退避する。その色は、鮮やかな虹色。上空に退避したので、自然とヴァルキューレ隊を見下ろす体制となる。

それまでヴィヴィオがいた場所を通り過ぎるしかないヴァルキューレ隊。

しかし、ヴァルキューレ隊をそのままいさせるほど、エリーゼは馬鹿ではない。

「飛びなさい、ヴァルキューレ」

エリーゼのその言葉が何かのコマンドであるかのように、ヴァル

キューレ隊に変化が起こる。五体のヴァルキューレの傍らにベルカ式魔法陣が展開され、新たに、鎧と同じ色をした、おそらく同じ材質でできているのだろう、真鍮製の馬が召喚される。それらの馬は、身体に不釣り合いなほどに大きな羽根を生やしていた。

ヴァルキューレは傍らの馬に乗り、金属の羽根の羽ばたきによってヴィヴィオと同じ高さまで飛び上がった。魔法の効果とはいえ、金属でできた馬が空を飛ぶことに少し驚くヴィヴィオ。馬とそれに乗るヴァルキューレを合わせても、軽く五〇〇キロは超えているはずである。それを宙に浮かべるだけでも大変なのに、五体も空戦に利用するとは。実用レベルでの、合計で二トン以上にもなる複数の鎧騎士の精密操作。エリーゼの実力の一端が伺えた。

そうやってゆっくり驚く時間すらも、エリーゼは与えてくれない。

空に浮かぶ上がるなり、ヴァルキューレ達はヴィヴィオに予先を向け、全速力で突っ込んできた。金属の馬の速度は意外に早く、金属製であるがゆえの重量も相まって、まるで大砲の弾のような鈍い風の唸りがヴィヴィオの耳に届いた。

### 『Flash Move』

ザイフリートの音声と共に、ヴィヴィオの姿が一瞬だけかき消えた。目標を失い、文字通り空を切るヴァルキューレ達。

### 『Accal Fin』

再びヴィヴィオの姿が現れる。

ヴィヴィオが出現したのは、ヴァルキューレの真横。側に付かれ

たヴァルキューレはすぐに身体を捻って槍を向けるが、それよりもヴィヴィオの刃の方が早かった。魔力で強化した斬撃を、ヴァルキューレ本体ではなく馬の羽根に向かって加える。

羽根が形成されている場合、魔力で浮かんでいるとはいえ、その羽根の意味は大きい。

単純に魔法のイメージの問題だ。何かを魔法で操る場合、ただ漠然と対象を浮かばせるよりも、羽根や翼などに飛行のイメージを付加する方が遥かに効率がいい。航空魔導師には、例えば高町親子のフライヤーフィンや、最後の夜天の主のスレイプニルのように、飛行魔法で羽根を形成する場合が多い。そうでないことも多々あるが、それは個人の適性や相性などの問題である。

そして、そういったイメージ付けを付加されている場合、その羽根を破壊されれば、魔法で浮かんでいるにも関わらず、飛行魔法は力を失う。

ヴィヴィオが切りつけたヴァルキューレも、予想通りその例に漏れなかった。

羽根を破壊されたヴァルキューレは空中で体勢を崩し重力による自然落下を始める。落下の直前に槍が振られたが、体勢を崩したため槍は正しい軌道を描かず、ヴィヴィオの僅か上を掠める。

対象の撃墜を確信し、ヴィヴィオは足を止めない。

あらかじめザイフリートに打ち込んでいたコマンドを活用し、ヴァルキューレ小隊のいる空を高速で駆け抜ける。ヴァルキューレが個々に知能を持つかどうかは分からないが、それでも、ヴィヴィオ

は高速起動でヴァルキューレ達を翻弄する。次々に羽根を切断され、ヴァルキューレ達は墜落を始める。観客達には、まるで虹色の光がヴァルキューレの間を駆け抜けたように見えただろう。

最初に撃墜されたヴァルキューレが音をたてて地面にぶつかるのと、最後のヴァルキューレが羽根を切断されたのはほぼ同時。

そしてなお、ヴィヴィオは足を止めない。

一瞬で方向転換、目標を変更する。

迫るのは、ヴィヴィオと同じく宙に浮かぶエリーゼ。ヴィヴィオの高速起動に驚いたのか、表情には若干の驚きがのぞく。

『ブリッツアクション』

ヴィヴィオはエリーゼとの距離を一瞬で詰めにかかった。ミッドチルダ式の瞬間高速移動魔法。短距離を高速で移動する魔法で、熟練者が使用すればまるで瞬間移動でもしたかのような移動が可能。ヴィヴィオはまだその領域には達していないが、その速度は十分に、ヴィヴィオの飛行軌道には残像が発生していた。

「はあっ！」

ほんの一瞬に近い時間で、ヴィヴィオはエリーゼに肉薄する。

掛け声と共に、ザイフリートの刃を振り下ろす。

魔力の籠った渾身の一撃。

しかし、その攻撃は、エリーゼには届かない。

「っ！？」

ヴィヴィオとエリーゼの間に割り込む影が一つ。その影に、金色の輝きを持つ真鍮製の鎧騎士に斬撃は阻まれる。エリーゼに攻撃する代わりに、構えられた盾の半分近くをヴィヴィオの剣が切り裂く。真鍮は脆いが、ヴァルキューレ隊が持つ盾ほどの厚さにすれば、十分な強度を持つ。脆さとそれを補うための厚さ、その結果、破壊されることを前提にヴィヴィオの攻撃を止める。

そしてその柔らかさが仇となった。

「！？ く、っう！？」

ヴァルキューレの構える盾の半分近くまでめり込んだザイフリート。エリーゼの反撃に備えるためにザイフリートを盾から引き抜こうとしたが、思っているより深く喰い込んでしまったらしく、力を入れてもすんなりとは抜けてくれなかった。

ヴィヴィオの表情に焦りが生じる。

この隙を、エリーゼが見逃してくれるハズがない。

なんとか、しないと。

そう、思った瞬間、

ヴァルキューレの身体が、まるで身体の内側に爆発物が仕込まれていたかのように、いきなりはじけ飛んだ。

「!？」

内側からの爆発によって、ヴァルキューレを構成していた金属片がまるで散弾のようにヴィヴィオに迫りくる。その破片を、ヴィヴィオはシールドを張ってやり過ごす。金属片の量は多く、視界が遮られる。

一瞬だけ、エリーゼの姿を見失う。

エリーゼはどこか。周囲を見渡す、が。エリーゼは逃げも隠れもしていなかった。

エリーゼは両手のファーフニルを、両腕を胸の前で交差するように構えて、大量の金属片と共にヴィヴィオに切りかかってきたのだから。

別の場所に意識を向けていた。この襲撃にヴィヴィオはかろうじて反応したが、

(障壁が、間に合わな　)

交差したエリーゼの両腕が振り抜かれる。その刃の形のごとく、十字の軌道を描く斬撃。

ヴィヴィオを襲うその斬撃は。

ヴィヴィオに命中する直前で、虹色の盾に阻まれた。

「うー!？」

突然出現した虹色の盾に戸惑うエリーゼ。盾を破壊しようと力を込めるが、ヴィヴィオを守るその光の盾はビクともしない。結界破壊の術式も効果を示さない。

「まさか……！」

「『聖王の……盾』……」

ようやく真鍮製の盾からザイフリートを引き抜き、苦笑いをするヴィヴィオ。

間に合って良かった。成功して良かった。心からそう思う。

一昨日までのシスターシャツハの特訓で、成功率は低いものな何とか発動させることができるまでになった『聖王の盾』。スラング砲撃までなら完全に防ぎ切り、根本的な術式から異なるため結界破壊の魔法も通用しない、絶対防壁。

ヴィヴィオが持つ、聖王の魔法の一つ。

予想外の魔法の行使に、今度はエリーゼが面食らう。

そのチャンスを、ヴィヴィオもまた見逃さない。

半歩後ろに下がり、発動していた聖王の盾を解除する。盾を破壊しようとし力を込めるエリーゼは咄嗟に反応するが、予想外の驚きもあり、瞬時に体勢を立て直すことができない。時間にしてコンマ数秒単位の間が生じる。



再び構えなおしたザイフリートに、魔力と術式を叩き込む。

「ザイフリート！」

『かしこまりました、お嬢様』

刃の付け根とひし形十字をかたどった鐐の部分がスライドし、カートリッジがロードされる。

ベルカ式最大の特性、カートリッジロード。一時的に、ヴィヴィオの魔力が増強される。増してや、今のザイフリートは古代ベルカの失われた技術と、近代ベルカの最新技術の結晶体。カートリッジ一発分のロードですさまじい効果を発揮する。故に、カートリッジシステムを搭載したフォルムツヴァイを起動するためには、施されているリミッターを解除しなければならないのだ。

それだけのシステムを操り切ることの難度を、ヴィヴィオはまだ知らない。

対して、エリーゼも負けていない。

「ファーフニル！」

『Jawohl』

瞬時にザイフリートの脅威に気付き、両手に握ったファールニルからそれぞれ一発ずつ、合計二発のカートリッジがロードされる。それでようやく、互角以上。不利な状況下にある今は、ほぼ互角。

準備は完了。

お互いに標的を定め、そして激突する。

『はあああああ！！』

交差は一瞬。その一瞬だけで、巨大な魔力が一点に集中する。

激突。衝撃。

お互いのありったけをぶつけ、二人はすれ違う。後に残されたのは、激しい激突音と、圧縮された魔力の衝突により発生する魔力の衝撃波。放出されたその力は間接的に周囲の空気に働きかけ、風を発生させる。

その一瞬の激突は、傍観者たちには虹色の光と橙色の光が交差したように見えていた。

交差した虹色の光と橙色の光はそのまま進み、距離を置いたところで停止する。

動きを止め、なお動かないヴィヴィオとエリーゼ。

ヴィヴィオの右の頬には一筋の赤い線が引かれ、そこから血が滴り、

エリーゼの右肩のバリアジャケットは、騎士甲冑の金属ごと切り裂かれていた。

衝突の結果は、痛み分け。

お互い、戦いの支障にもならないほどの軽傷、あるいは無傷。

ヴィヴィオは頬に滴る血を軽く拭い。

エリーゼは一瞬だけ右肩を一瞥し。

二人はほぼ同時にゆっくりと振り向き、再度自身の相棒を構える。一定の間合いを保ったまま、二人とも、デバイスにさきほど消費したカートリッジを補充する。

相手の脅威を理解する。

防ぎきることのできない二筋の斬撃。

魔力付与された甲冑ごと切り裂く剣技と魔力密度。

油断も過信も、許されない相手。

正に、聖王の名を名乗るに相応しい。

正に、聖騎士の名を名乗るに相応しい。

お互いの実力を確認し、それでも決闘は終わらない。

己の魔導と誇りをかけた真剣勝負。

どちらかが戦えなくなるまで。雌雄を決するまで。戦いは終わらない。

「……………ああああああー!!」

「……………はああああああ!!」

どちらともなく、戦いは再開される。

第三ラウンドは、航空機動戦。

空戦機動の実力勝負。

二人の少女たちは、まだ気付かない。

自分たちが、もう巻き込まれていることに。

空中に、虹色の光の筋と橙色の光の筋が引かれる。一定の軌跡を描かず、縦横に動き回るそれらが交差するたびに、甲高い金属音が周囲の空に響き渡る。瞬間的な魔力の激突により周辺の空気も影響を受けているのだが、その影響は地上までは届かない。

届くのは、光と音のみ。

地上で二筋の光を見つめる者達の大半は分からない。

ヴィヴィオとエリーゼ。二人の斬撃の交差の過程が。

時に曲線を描き。時に円を描き。時に螺旋を描き。時に直線を描き。時に高度を変え。時に速度を変え。時に軌道を変え。

二筋の光は交差を続ける。

「くっ！」

「むっ！」

お互いに一步も引かない。

虹色の光が斬撃を放てば二刀の刃で受け止めいなされ、橙色の光が斬撃を放てば受け止め避けられる。

呪文を詠唱する時間も、防壁を展開する間すらも与えない。与えてくれない。

状況は拮抗する。

激突は続く。

一瞬に感じる時間が、しかし実際には数分を過ぎた頃だろうか。

一際大きな金属音と共に、ヴィヴィオとエリーゼは距離を置いた。

様子見でも撤退でもない。

一撃で勝負の決する大規模魔法を放つために。

『灼熱の国の主よ、灼熱の檻と紅き焰によりて、すべてを呑み込め』

『氷結の国の主よ、氷雪の泉と白き風によりて、万物を包みこめ』

奇しくもそれは、ベルカ式の広域魔法。図ったわけでもないのに、対を成す魔法の行使。

この年においてベルカ式の近接魔法・遠距離魔法の両方を行使する両者の実力。

対をなす魔法だからこそ、実力の差がはっきりする。

『ムスperlヘイム!』

『ニヴルヘイム!』

方や、橙色の光の操る、空間系炎熱魔法。

方や、虹色の光の操る、空間系氷結魔法。

莫大な熱量と、絶対零度に近い冷気が激突する。

一瞬で空気が熱気によって膨張し、一瞬で空気が冷気によって縮小し、その急激な気圧差に、魔法と魔法の衝突点を中心に、会場全体に轟く爆発が起こる。

ぶつかり、相殺された魔力は周囲に風となって拡散し、発生した炎と氷は水蒸気となって辺りを白い霧で包み込む。

会場全体が、一時的に白い霧で覆い尽くされる。

それだけの量の氷を瞬時に発生させ、それだけの氷を溶かし尽くす、ヴィヴィオとエリーゼの能力。

会場の観客席にはあらかじめ結界が設置されているため、観客や訓練場の備品などには被害はない。だが、もし結界が張り巡らされていないければ、観客はおるか訓練場も原形を留めていなかったかもしれない。

それだけの魔力。

二人の魔法とは関係のない一陣の風が会場を吹き抜け、白い霧を

一層する。

現れたのは、魔法を発動させた時と変わらない場所にいるヴィヴィオとエリーゼの姿。お互いに身体を守るバリアジャケットが傷だらけでボロボロだが、身体には一切の傷がない。

二人の魔法は、完全に相殺されていた。

まだ、決着はつかない。

実力は完全に互角。故に、一切の隙も見せない。見逃せない。

霧が晴れるなり、二人は足に魔力を収束させ、同時に跳びかかった。

「ザイフリート、リミット？リリース！ フォルムドライ！」

「ファーフニル、フォルムドライ！」

空中で光の筋を描きながら、デバイスの第三形態を起動させる、

『！』

不意に、二人は足を止めた。反射的に飛行以外は一切の魔法のコマンドをキャンセルする。

デバイスは変化せず、ヴィヴィオもエリーゼも空中に留まる。

それから、周囲を伺う。



感じたのは、異常な魔力の流れ。エリーゼがいる位置とも、ヴィオがいる位置とも、まったく違う場所から感じる。そもそも、魔力の癖が自分達の相手のそれに合致しない。

それが意味することは。

『!?!』

すべては突然のこと。

いきなり、ヴィヴィオとエリーゼの視界が漆黒に染まった。視界を潰されたわけではない。

「空間……隔離魔法!?!」

「まさか!?!」

一秒足らずの時間で、自分達が決闘をしていた場所が空間的に隔離される。予想だにしない事態に反応が遅れ、隔離結界の中に取り残されてしまった。

異常な魔力の流れ。

それは、第三者の介入を意味する。

自分達を覆うのは、漆黒の闇。

それまで感じていた周囲の気配も、魔力の流れも、その一切を感じない。

唯一の感覚は、相手の気配のみ。

すべてが、闇に包まれた。

## 第六話 黒色の檻

漆黒の闇。

光のない世界。

何も見えない空間。

どのくらいの広さなのか、どのくらいの高さなのか。そもそも、その大きさははたして有限なのか。

私達に今、何が起きているのだろうか。

「ここは、一体……」

呟くエリーゼ。その声には、焦りと戸惑いが色濃く表れている。

「……確かなことが一つだけありますよ、エリーゼさん」

エリーゼの呟きに、冷静を装った声で、ヴィヴィオが答える。

「私達は誰かに閉じ込められた、ということですよ」

高町ヴィヴィオ。

エリーゼ・ダイムラー。

彼女たちは、黒い世界の中にいる。

「一体、何が起こったというのです!？」

聖王教会第一訓練場、観客席。

いつも落ち着いているシスターシャツハが、幾分ヒステリック気味に叫んだ。

その視線の先にあるのは、訓練場のグラウンドを覆い尽くす、半球状の黒い結界。

その黒はあまりにも黒く、あまりにも禍々しく、少なくとも目視、生半可な霊視、魔力視では中の様子をうかがうことはできなかった。

「シャッハ、落ち着きなさい」

混乱気味のシャッハを、毅然とした声でカリムが諫める。

「あ……申し訳ありません、騎士カリム。私、少々取り乱していたようです」

しかし、そのカリムですら、いつもの冷静を保てないでいた。

カリム達だけではない。

今や、訓練場の観客全員が総立ち、観客席は動揺に包まれていた。それこそ、一人の例外もなく。

「……シスターセイン。あの結界の中に、入れそうですか？」

ここでリーダー格であるカリムが動揺すれば、それは全体に感染する。

なるべく平静を装いつつ、カリムはセインに尋ねた。

「……並の建造物なら私の『デーパーダイバー』で通り抜けられるんだけど、あの結界は並じゃない。あんな術式の結界、少なくとも私のデータにはない。だから、多分無理。ごめん、騎士カリム」

いつもは元気なセインですら、戸惑いを隠せていない。真剣な瞳で、訓練場のグラウンドを包み込む黒いドーム状の結界を見つめていた。

戦闘機人セインのIS『ディープダイバー』。

いかなる壁、いかなる障害すらも通り抜けることができる、無敵の空間移動能力。魔力加護のある遮蔽物は流石に通過できないが、このインヒューレントスキルがある限り、セインの足を止めることは並大抵のことではない。その能力を活かすために、セインは複数の結界の魔導式、そしてそれを破壊するための魔導式を持っている、もしセインの足を完全に止めることができるのであれば、それはミッドチルダ式でもベルカ式でもない、例えば『聖王の盾』のような、セインの持つデータに該当しない術式の結界術のみ。

セインの能力ですら通じないということは、あの黒い結界は、少なくとも現段階では術式不明の、未知の結界術で作成されたということ。

「……オットー、ディート。あなた達的能力で、あの結界を破壊することは可能ですか？」

こんな非常事態だからこそ、リーダーとしての資質が問われる。

カリムはまず、あの結界が破壊可能か、現状での情報を集めていた。

「僕のレイストームだと、あの結界を破壊するには火力不足みたいです、騎士カリム」

「私のツインブレイズも、あれだけの巨大建造物を破壊することを想定されていません」

しかし現状では、あの結界にアプローチすることは不可能、とい

う結論が出そうだった。

「シャツハ、あなたの能力だと、どうですか？」

そのデバイスのイメージから誤解されがちだが、シスターシャツハの得意な魔法も、セインと似た移動系の魔法である。こと、一定距離での移動速度なら、シスターシャツハに軍配があがるほどに。

「……無理ですね。あのような結界術、見たことも聞いたこともありません。それにどうやら、あれはただの結界ではないようです」

「……と、いいいますと？」

「あれは、空間隔離結界です。つまり、あの黒い空間の中と、私達が今いる空間では、別の次元として隔離されています」

空間隔離結界。

その名の通り、通常の結界のように結界の内と外を『物理的、魔力的に』遮断するのではなく、『空間という概念において』隔離する、高位の結界術。

つまり、カリム達がいる空間と結界の中の空間は、まったく別の空間ということである。

「この結界を破壊するには、結界を構成している術式を解析して、術式の発動部分に介入するか、内側から破壊するしかないかと……」

「……………」

ここにいる誰もが、あの結界を破壊することができない。

そしてカリム自身にも、あの未知の結界術を打破する能力はない。

すべての情報を咀嚼し、カリムはこの状況を打破する、ヴィヴィオとエリーゼを救出する最善策を導き出す。

「シャツハ、すぐに聖王騎士団に連絡。捜査班と聖王騎士、結界騎士を訓練場に召還。訓練場の封鎖、及び結界の破壊。高町ヴィヴィオ、エリーゼ・ダイムラーの救助を最優先に。セイン、オットー、デイドは観客達の避難、退避誘導」

「はい」

「オツケー」

「承りました」

「すぐに」

「只今の時刻を持ち、聖王騎士団『騎士団長』カリム・グラシアの名において、現状を第一級懸案と断定。聖王教会第一訓練場を、封鎖します」



「……どうです、エリーゼさん？」

「……駄目ね。私の探査魔法では、この空間とあちらの空間を遮る壁のようなものすら検知できません」

「私のサーチャーも、この空間の端を認識できません。上も、下も、横も。この空間は少なくとも、半径一キロメートル以上の広さがあるかと」

「明らかに、グラウンドの広さを超えています。これは、空間隔離結界だと判断するのが妥当でしょう」

「ですね……」

お互いに溜息をつき、展開していた虹色と橙色の魔法陣を解除する。

黒い結界に閉じ込められてから、約十分。

ヴィヴィオとエリーゼは、この空間からの脱出法を掴めないでいた。

二人でそれぞれに探索魔法をかけても、地面すら見つけることができない。このような未知の空間で不用意に動き回るのは危険なので、二人とも飛行魔法を起動し、空間に浮かんでいる。

この空間の中では自分達の使用する魔法以外に、何らかの魔力の痕跡も、空気の流れも感じない。

ただただ何もない、無限に広がる空間。

とりあえず空気はあるようなので、窒息するような事態には陥らないが。油断は禁物である。

「それにしても、一体誰が何の目的で……」

「多分、目的は私です」

ヴィヴィオには、この状況を作り出した犯人……厳密に言えば、この状況を作り出した原因について心当たりがあった。

聖王の魔法を、技術を復活させることを願う、狂信者たち。

現在、聖王に最も近いヴィヴィオや、僅かでも聖王に繋がるものを持つ者達 例えば『聖王の証』『カイゼル・ファルベ』『聖王の魔法』といった を集め、聖王の権威を盲目的に復活させようと目論む者達。

それが、ヴィヴィオの素性を知る聖王教会上層部の一部に喰い込

んでいて、聖王を崇拜する聖王騎士すらも巻き込んで、ヴィヴィオ達を狙っている。

きっかけは、ヴィヴィオの存在。

今回の件の狙いも、おそらく……

「ごめんなさい、エリーゼさん。私のせいで、こんなことに巻き込んでしまつて………！」

心の底から、ヴィヴィオはエリーゼに謝った。

自分のせいで、無関係なエリーゼさんを巻き込んでしまった。

自分のせいで、誰かに迷惑をかけてしまった。

友達を護るための力が、誰かに迷惑をかけている。

そのことがとても申し訳なくて、情けなかった。

せめて、私にもっと力があれば。

こんなことくらい、軽く跳ね除けるだけの能力があれば。

そう。それこそ、なのはママみたいな力があれば……。

「……あなたは何を言っているのですか？」

エリーゼに罵られても仕方ないと思っていた。

しかし、実際に帰ってきたのは、純粹な疑問の言葉だった。

「あなたは何も悪くありません」

ヴィヴィオの正面に立ち、瞳を見つめ、はつきりと、エリーゼはそう告げた。

「あなたの事情は、私も存じています。普通の女の子だったのに、古代ベルカ式の適性を持ち、聖王陛下の魔法を習得しようとしたことがきっかけで狙われていることも、カリム様に聞きました」

あなたの事情を存じている。その一言に、ヴィヴィオはドキリとさせられた。まさか、自分の素性まで、自分が聖王のクローン体であるということを知っているのではないかと。

しかし、エリーゼの言葉を聞く限り、そこまでは知られていないようだ。

「ですが、だからといって、あなたが襲われることは、あなたの責任ではありません。もっと、自分に胸を張って生きなさい。仮にも聖王陛下を背負おうとするのならば、そのくらいの気概が無くては困ります」

「エリーゼさん……」

エリーゼの言葉は、純粹な励まし。

あなたは何も悪くない。たったのその一言で、ヴィヴィオは救われた気がした。

「わ、分かりましたか？」

言い、エリーゼはそっぽを向く。

その頬は、少し紅く染まっていた。

「ありがとうございます、エリーゼさん」

ヴィヴィオは、エリーゼに頭を下げた。

そして思う。

たったの一言で、誰かの心を救うことができる。エリーゼさんこそ、聖王の名に相応しいのではないかと。

「……ところで、エリーゼさん」

「……なんですか？」

「カリム様って……」

普通の人は、カリムのことを呼ぶときは『騎士カリム』と呼ぶ。カリムだけではなく、聖王騎士の名を呼ぶときは、騎士　と呼ぶのが通例となっている。

いくら聖王教会の上層部の一角を担うとはいえ、カリムのことをカリム様、と呼ぶ人物を、ヴィヴィオは屋敷に勤めるハウスキーパーさん達以外に知らなかった。だから、エリーゼがカリムのことをカリム様と呼んだ時、ヴィヴィオはなんとなく違和感を覚えていた。エリーゼは聖王教会の関係者なのだから、尚更に。

心当たりがあるとすれば……。

「なっ……」

そのことを指摘した途端、エリーゼの顔が一瞬で真っ赤になった。頬だけでなく、耳まで赤く染まっている。それどころか、ヴィヴィオに不意を突かれた時以上に動揺している模様。

まさか……

「まさかエリーゼさん、『カリム・グラシア様を慕う会』の会員さん、だったりしますか……？」

「べ、別に私は、『カリム・グラシア様を慕う会』の上級会員だったりなんかしませんわよ！」

「……………」

言葉で否定しても、その態度がすべてを物語っていた。

いや、本人は否定しているつもりなのだろうが、むしろ余計なことを口走っている。

どうも、エリーゼは年の割には落ち着いているようで、弱いところを突かれるとかなり動揺してしまう性質の様だ。

決闘の前に聞いた、各種ファンクラブの存在。

まさか自分の決闘の相手がその会員だったとは。世の中、意外と

狭いものである。

「別に、そんなに恥ずかしがることじゃないと思いますけど……」

「だ、だから、違うと申しているではありませんか、高町ヴィヴィオさん！」

真っ赤になって否定するエリーゼ。

完全無敵に見えていたエリーゼの意外な一面を、年上のお姉さまに憧れたりする普通の女の子らしいところを見て、ヴィヴィオはエリーゼに親しみのようなものを感じていた。

その様子がなんだか可愛らしくて、ついクスリと笑みが零れる。

「だから、違うですよ！」

ほんの数十分前まで決闘をしていたのに、いつの間にか不思議なやり取りをするヴィヴィオとエリーゼ。二人の間にあるのは、張りつめた空気ではなく、仲の良い友達と談笑しているときのような、穏やかな空気。

人生とは、何が起こるか分からないなあ。そう、ヴィヴィオは思った。

その時。

『！！』

一瞬で、空気が凍りつく。

お互いのデバイスを構えるヴィヴィオとエリーゼ。

ただし、今回は視線を相手に向けるのではなく、外側に向けている。

結界の、外側に向かって。

「……分かりますか、ヴィヴィオさん」

「はい。エリーゼさん」

ヴィヴィオは、第二形態、片刃の長剣となったザイフリートを。

エリーゼは、十字型の刃を持つ二振りの片手剣を、それぞれに構える。

二人が感じたのは、それまでは無かった魔力の流れ。

何の気配も予兆もなく、それは不意に発生した。

それも、ひとつではなく。

「この魔力の在り方からして……」

「多分……二人か……それ以上」

幼くしてすでに第一線級の實力を持つ二人は、瞬時に気付いた。

自分達が、少なくとも二人以上の魔導師に、狙われていることに。



「……協力しましょう。エリーゼさん」

「……ですわね。現状では、それが得策ですわ」

下らない意地を張ったりせず、素直に協力を申し出、それを受理する。元々、二人の間には個人的な禍根はない。高い実力を持つ二人だからこそ、何もかもが分からない現状での、最善策を取る。その判断を下すことの難しさを、二人は知らなかった。

お互いに背中を合わせ、周囲を警戒する。

これで、警戒すべき範囲が約半分になる。

複数の相手に対応する時に、一番有効な手段。

背中が、暖かい戦い方。

「……………」

「……………来る！」

誰も窺い知ることのできない、閉鎖空間の中で。

二人の、第四ラウンドが始まった。

黒色の結界が訓練場に現われて、約一時間が経過していた。

結界の正体は依然不明。術式も対処法も、内部の様子を伺うことも現状では不可能。

観客達の退避はすでに終了し、訓練場周辺は聖王教会騎士団によって封鎖されていた。

ただ一人を除いて。

「……あなたは避難しないのですか、アリカさん」

ただ一人、観客席に残る人物に、カリムは声をかけた。

彼女の名は、アリカ・フィアット。

ヴィヴィオと同じ『聖王の証』を持つオッド・アイの少女で、ヴ

イヴィオの友人。そして、ヴィヴィオに聖王の魔法を習得するきっかけを与えた人物である。

彼女はずっと、両手を握り、一点を見つめていた。

ヴィヴィオとエリーゼが閉じ込められている、黒色の結界を。

「……騎士カリム……」

「他の人達は、すでに避難しました。残るはアリカさん、あなた一人だけです」

「……………」

「ここにいても、何が起るか分かりません。もしかしたら、危険かもしれないですよ？」

「……私は、ヴィヴィオの友達です」

優しく、諭すように話すカリムに、アリカは告げた。

「ヴィヴィオは、私のことを助けてくれた、大切な友達です。その友達が危険かもしれないのに、私だけ安全な所に逃げるなんて、そんなことできません」

握る両手に、力がこもる。

「私には、騎士カリムやヴィヴィオのような力はありません。でも、そんな私でも何か、友達の力になることができるかもしれません。ですから、お願いです。騎士カリム。私を、ここにいさせて下さい」

真摯な瞳で、アリカはカリムを見つめる。

カリムは、アリカから目を離さない。

じつと、二人は見つめあう。

「……………」

「……………」

先に折れたのは、カリムの方だった。

「……分かりました。そこまで言うのですから、覚悟はできている  
のでしょう。もう一度確認しますが、ここで何が起るか分かりま  
せん。あなたの身に、危険があるかもしれないですよ?」

「でも、それでも、私はここにいたいんです」

「しょうがないですね。まったく……………」

「じゃあ……………」

「アリカ・フィアッセさん。あなたがここにいることを、騎士カリ  
ムが認めます。ただし、あなたの身を守り切ることができる保証は  
ありませんから、そのつもりで」

「はい」

カリムの言葉に、アリカは頷く。

「……それにしても、その強情っぷり。一度こうと決めたら、梃子でも動かない頑固さ。まったく、あなたはお母さんそっくりですね」

やれやれ、といった具合で、カリムは言う。

「流石は『聖魔導師』ミラージュ・フィアットさんの、一人娘です」

結界発生から、一時間以上が経過していた。

「……ヴィヴィオさん。どう、思いますか？」

「どう、とは？」

「この敵の、ことについて」

「……………底が知れません。数も、勢力も」

「……………ですわね」

背中合わせで、周囲を警戒するヴィヴィオとエリーゼ。

その身にまとうバリアジャケットはボロボロで、二人とも肩で息をしていた。

その原因は…………。

「エリーゼさん、来ます！ 上三、右二、下から三！」

「分かりましたわ！」

掛け声と共に、二人は方向転換する。

ヴィヴィオは下に、エリーゼは上の方に。

そして、迫りくる障害を、構えたデバイスで粉碎する。

「はあっ！」

「とう！」

ヴィヴィオの刃が、エリーゼの刃が、漆黒の空間に煌めく。

襲いかかる障害を、二人はすべて破壊した。

二人の斬撃の後に残るのは、人形の破片。

先ほど、不信な魔力の流れを感じた直後から、二人のことを等身大ほどの人形が襲っていた。

人形一体一体の能力は大したことはない。せいぜいが、手に持った稚拙な刃物で無防備に切りかかってくる程度。作戦も組み合わせもあつたものではない。その程度の人形ならば、二人にとっては問題にもならない。

問題は、その数と、この空間そのものにあつた。

先ほどから、ヴィヴィオとエリーゼはすでに百体以上の人形達を屠っていた。しかし、どれだけの人形を倒そうとも、バラバラのタイミングで、一切の統一性のない方角から、数体の編隊で襲いかかってくるのだ。

どれだけの数の人形が、いつどこから迫るのか、予測がつかない。

上下左右高さ奥行き概念の存在しないこの空間では、背中合わせとはいえ、警戒すべき範囲が広すぎる。

そんな状態が、もう数十分続いている。

それだけの間、集中力を維持し続けるのは、かなり難しい。

一応、ヴィヴィオが周囲にサーチャーをばら撒き、エリーゼが配

置した『聖王の従者』のヴァルキューレ六体を偏在させることで相手の接近を予測し、できる限りを自分達の元に辿り着く前に撃墜しているのだが、いかんせん網羅すべき範囲と数が多すぎる。

更に、驚異的なのが。

「来ますわ、ヴィヴィオさん！」

「はい！」

返事をし、ベルカ式のシールドを展開するヴィヴィオ。

数秒後、ヴィヴィオのシールドに、薄紫色の魔力砲撃がぶつかる。

「く、う……」

歯を食いしばり、砲撃のエネルギーに耐えるヴィヴィオ。

高出力の魔力砲撃をシールドで受け止めるのは辛く、難しい。そのことを、ヴィヴィオはよく知っている。だから、自身の魔力をシールドに集中させ、全力で砲撃を防御する。

一方で、エリーゼはシールドの穴、ヴィヴィオの背中を警戒する。

「っ、はあ、はあ……」

やがて、砲撃が止む。エネルギーの停止を確認し、シールドを解除するヴィヴィオ。その額には汗が浮かび、他に構う余裕がないほどに疲弊していた。



まったくの無作為に襲ってくる人形達も、この瞬間だけは見逃して欲しくない。

ヴィヴィオの背中めがけて、八体の人形が接近する。ヴィヴィオがサーチャーに気を回す余裕がないため、どうしても発見が遅れてしまい、深くまで踏み込まれてしまう。

だが、それ以上への侵入をエリーゼは許さない。

「はあああ!!」

気合い一閃、両手のファーフニルで、迫りかかる人形達を撃墜する。だが、発見が遅く、数が多いため、エリーゼといえども全力を出さなければ八体もの人形達を撃破することができない。

「……………ありがとうございます、エリーゼさん……………」

「いいですから。あなたは、自身の回復に努めなさい」

「はい……………」

時折、ある程度の間隔で定期的に襲いかかる魔力砲撃。

魔力砲撃はエネルギー量が大きいため、サーチャーで早めに発見することができる。だから、本来なら早めに回避行動に移れるハズなのだが。

この砲撃は、ホーミング能力を持っていた。

回避しても、どこまでもエリーゼかヴィヴィオのことを追尾して

きた。

その間、同時に八体の人形が攻めてくる。

数回これを受けきった結果、今のように、ヴィヴィオが砲撃の防御、エリーゼが人形の撃墜を担当することが一番効率がいいという結論に至ったのだ。

この役割は別に逆でも問題はないのだが、ヴィヴィオのシールドの方が堅牢であり、エリーゼの方が近接戦闘に慣れているという理由から、ヴィヴィオが防御担当、エリーゼが迎撃担当に落ち着いた。

エリーゼのヴァルキューレに砲撃を受け止めさせるという手段も考えたが、エリーゼ曰く、ヴァルキューレの性能と数は反比例する。あの砲撃を受けきるほどのヴァルキューレを召喚することも可能だが、それだとヴァルキューレの数を維持し続けることができず、結果として効率が悪くなってしまうそうだ。

故に、現在の状況がある。

それだけの威力を持ち、更にホーミング性能を持つ砲撃魔法を放つには相当の実力と、長い詠唱時間が要求されるのだが、この結果内では、どういうわけか、相手の詳しい位置を探ることができなかった。

敵がこのどれだけの広さがあるのか分からない空間の端の方にいるのか、それともステルス魔法をかけているのかどうかは分からない。

だが、敵の位置、人形の操者と、砲撃手の位置が分からない。だ

から、詠唱時間の長い高威力の魔法を使用されても、それを防御するしか手段がない。それは紛れもない事実だった。

今のところは持ち堪えているが、このまま受け止め続けられれば、間違いなく魔力が尽き、いずれ持ち堪えられなくなってしまう。

そうなれば、すべてが終わってしまう。

「絶体絶命の大ピンチ、ですね……」

「……ですわね」

背中を合わせ、疲れた声で、ヴィヴィオが呟く。

エリーゼも、なるべく軽い調子で言葉を返す。

しかし、二人共、すでに疲れを隠す余裕も残されていない。

彼女達は、強い。だからこそ、分かっていた。

おそらく、この状況を維持し続けるのはあと三〇分程度が限界。砲撃はあと三、四回受け止めるので精一杯。

聖王の鎧。

聖王の盾。

聖王の従者。

どれだけ強力な能力でも、それが行使できないほどに疲弊してし

まえば意味がない。

「……………」

「……………」

だが。

ヴィヴィオとエリーゼ。

彼女達は、諦めない。

その瞳の輝きは、まだ失われていない。

彼女達は待っていた。

無策でただ攻撃を受け続けるほど、彼女達は吞気ではない。

問題は、時間。

時期が来るのが先か。

それとも、自分達が力尽きるのが先か。

「……………結局は、自分の実力がモノを言うのですわね」

「……………そうですね。エリーゼさん」

彼女達には、まだ希望が残されている。

今は、その期を待つだけ。待つだけが、難しい。

高町ヴィヴィオ。

エリーゼ・ダイムラー。

反撃の機会を、待つ。

彼女達はまだ、諦めてなどいない。

正体不明の隔離結界発生から、二時間近く経過していた。

依然、内部の状態は不明。

ヴィヴィオとエリーゼの安否も、敵の様子も、未だ誰も知ることができない。

聖王教会の結界騎士団を以ってしても、結界の正体すら不明。

その能力は正に、絶対結界。

いかなる存在のいかなる干渉も受け付けない、絶対の空間。

先ほどから数名の結界騎士達が結界の解析・干渉を試みているが、その成果は芳しくない。

今のところ外部への影響は見られないが、正体不明の魔法に油断はできない。

訓練場の内部には聖王騎士団の一個小隊、そして騎士カリム、シスターシャツハ、シスターセイン、オットー、シスターデイドが、警戒態勢で控えていた。訓練場の外部も、他の聖王騎士達によって封鎖されている。

そんな訓練場の中で、例外が一人だけ。

かれこれ一時間近く、祈るように両手を組み、結界を見つめる少女、アリカ・フィアッセ。

彼女の表情は青白く、悲痛なものだった。

「無理もないですね。友人達を心配して、ずっと精神を張り詰めさせているのですから」

アリカの様子を遠くから覗い、シャツハが呟いた。

「……………」

その言葉に、カリムは答えない。

「ですが、あの状況、そう長く続くとは思えません」

「分かっています、シャツハ。セイン、オットー、デイドも、彼女を気にかけていて下さい。彼女に限界が訪れたら、すぐに医務室に連れていくように」

「あいさー」

「はい」

「分かりました」

「了解です」

アリカに聞こえないように、カリムは四人に指示を出す。

本来、現場に部外者をいさせるのはあまりよろしいことではない。

それを許しているのは、カリムの独断だった。

「……………」

ヴィヴィオを心配する気持ちは、カリムも同じだった。

だからこそ、一刻も早く結界の対抗策を考えるために、頭をフル回転させる。現状で最適と思われる判断を下し、騎士達に指示を飛ばす。

内部で、何が起きているのか皆目見当もつかない。

もしかしたら、すでに二人が力尽きている可能性もある。

最悪……………。

「  
」

カリムは頭を振り、今の考えを放棄した。

最悪ばかり想定しても仕方がない。

私達は、私達にできる最善をするしかないのだ。

子供達を助けること、それが自分達大人の役割なのだから。

「それまで、持ち堪えて下さいね。ヴィヴィオさん、エリーゼさん」



そして、その時がやってきた。

「……………エリーゼさん！」

「分かってるわ、ヴィヴィオ！」

突然、二人が顔をあげた。

『W・A・S・探知完了。検索魔方陣七式改、全魔導式分析完了』

漆黒の空間に響く、初老男性の声。

『Analyse vervollständigte. Magisch charakterhaftigkeitsdimensionale Vollendung der Kalkulation (解析完了。魔力固有振動数、算出)』

続いて、力強い男性の声。そのどちらも、デバイス特有の機械音声。

『魔力の同調式、構築完了』

『Jederzeit können Sie einschicken. Sie haben die Fähigkeit, es am besten zu machen. Meistens Elise (いつでも撃てます。あなた達には、それができる。我が主、エリーゼ』

声の直後、八体の人形達が四方から一斉に襲い掛かる。

だが、その攻撃は、ヴィヴィオ達には届かない。

その攻撃からヴィヴィオ達を護るのは、ヴァルキューレ小隊。

ただし、今の数は三体。そして、その身体を形作るのは、白銀色

の金属。耐腐性が高く、確かな硬度と強度を特性とするステンレス鋼。

ヴァルキューレを構成する素材を真鍮からステンレス鋼に強化すると、召喚できる数に限りが出てくる。だが、今はそれで充分。

重要なのは数ではなく、これから少しの間、敵の攻撃を確実に止めるだけの実力。

「随分、時間がかかったわね」

「でもそれも、これで終わりです」

まるで数年来の友であるかのように、やり取りを交わすヴィヴィオとエリーゼ。

出会ったのは、ほんの数日前だというのに。

先ほどまでヴィヴィオ達を苦しめた、砲撃が迫る。

しかし、二人を狙う砲撃の射線上に、盾を構えた一体のヴァルキューレが割り込む。砲撃の威力に負け、ヴァルキューレがバラバラに吹き飛ぶ。その後ろに控えるのは、もう一体のヴァルキューレ。ヴァルキューレを一体破壊した砲撃にはもう勢いはなく、二体目の防御で完全に食い止められる。

その瞬間を狙う八体の人形達を、残りのヴァルキューレが瞬殺する。

一時間以上の防御で、二人が発見したこと。

砲撃から次の砲撃まで、術者の身体を休ませるためか、最低でも五分以上は間が開く。連射が可能だとしたら、どうしてヴィヴィオの疲弊した隙を狙わないのか。それは、最強の砲撃魔導師、高町なのはですら悩まされる人体の限界。おそらく、無理して連射しても、その威力はたかが知れている。

そして、人形達の最大操作数は八体。これ以上はまず召喚できない。無限に召喚できるのかもしれないが、最大操作数に限りがあるのだ。

今のヴァルキューレならば、そのどちらも、完全に食い止めることができる。それだけの能力がある。

たった今破壊されたヴァルキューレを召喚し直してから、エリーゼが告げる。

「準備はいいかしら、ヴィヴィオ？」

「はい。いつでもいいですよ。エリーゼさん」

頷くヴィヴィオ。

準備は完了した。

後は、二人の実力次第。

力の限りを込めて、叫ぶ。

「『希望の光』ザイフリート、リミット？、リリース！ フォルム

ドライ！」

「『聖なる十字』ファーフニル、フォルムドライ！」

光に、デバイスが包み込まれる。

ヴィヴィオとエリーゼの瞳に満ちるのは、不屈の闘志。何があっても、諦めない心。

彼女達呼び込んだ、勝利への道しるべ。

反撃が、始まるうとしていた。

## 第七話 決闘の行方

漆黒の闇。

「『希望の光』ザイフリート、リミット？、リリース！ フォルムドライ！」

「『聖なる十字』ファーフニル、フォルムドライ！」

黒色の結界の内部で、ヴィヴィオが、エリーゼが吼える。主の意志を受け、デバイス達はその姿を変える。

『Vanahheimr form』

ザイフリートの刃は縮み、一旦ひし形十字の騎士杖、第一形態に戻る。ひし形十字と杖の柄の付け根の部分に新たな装甲が出現し、強化された部分の隙間に、カートリッジが収められたマガジンがセツトされる。それから、先端のひし形十字が縦に二つに分かれ、新たに二本の長いフレームが伸びる。そのフレームの役割は、砲身。

ザイフリート第三形態、ヴァナ Heim フォルム。

その言葉の意味するところは、神々の世界。

通常よりも大口径のカートリッジを使用し、大火力の砲撃によって敵を薙ぎ払うことを前提とした、砲撃特化の形態。その力正に、神の如き聖王の力。

『Volva form』

一方、ファーフニルも再び十字槍、第一形態に戻る。それから、槍の石突の部分にも、十字の刃が生成される。柄の部分は短くなり、全体的に取り回しやすいサイズになる。そして十字型の刃と柄の付け根部分に、エリーゼの魔力光と同じ橙色の、細長い飾り布が結び付けられる。

ファーフニル第三形態、ヴォルヴァフォーム。

その言葉の意味するところは、神々の巫女。

詠唱魔法の行使に特化しつつも、武器としても取り回すことも可能。常に聖王の前に立ち、聖王の身をを護りぬくための形態。その力正に、聖騎士の名に相応しい。

新たな形態となった己のデバイスを二人は重ね合わせる。そして魔導式を展開する。虹色と橙色のベルカ式魔法陣が二人の足もとに展開され、二つの魔法陣は重なり合い、一際大きな魔法陣となる。それと共に二人の魔力が統合され、莫大な魔力が二人の前方に収束される。

それまで魔力や大気の流れが存在しなかった黒色の結界の内部で、ヴィヴィオとエリーゼを中心に魔力の流れが発生する。漏れ出た魔力だけで、それだけの大きさ。魔法式はすでに完成している。魔力の同調も問題ない。後は、二人で魔法陣に最後のコマンドを入力し、魔法を発動させるだけ。

ヴィヴィオは右側。エリーゼは左側。

お互いのデバイスを十字に組み合わせ、最後の詠唱を、開始する。

『フィールド形成、発動準備完了！』

『V&E 中距離空間殲滅コンビネーション！』

『空間攻撃・クレイサーキャノン！！』

ヴィヴィオとエリーゼ、二人が編み出した複合型中距離空間殲滅砲撃。

まず、術者を護るためのフィールドを形成し、そのフィールドを取り囲むように別のフィールドを形成する。外側のフィールドは防御のためではなく、プリズムのように内側からの魔力を全方位に反射し、フィールドの外側全てを攻撃するための特殊な術式で構成されている。ヴィヴィオが最大出力で砲撃を放ち、エリーゼがフィールドを形成することでそれを増幅・拡散させる。

全方位をカバーできるが、特性上どうしても有効効果範囲は中距離程度に限られてしまう。しかし、範囲内の空間をすべて攻撃対象に収めることができるので、効果範囲内なら回避不可能。今回の術式にはそれに加えて、二人で時間をかけて解析したこの結界の術式を破壊するための効果が付加されている。

これがヴィヴィオとエリーゼが編み出した、中距離殲滅魔法コンビネーションのひとつの形。

かつてヴィヴィオの両親が編み出した中距離空間殲滅コンビネーションは、フェイトが中距離全体を包み込むフィールドを形成し、そのフィールドの内部でなのは魔力砲撃を爆散させる、というものだった。



同じ種類の魔法であるのに、理屈は正反対。

だが、その威力は確実。絶大。

この魔法を可能にしたのは、ヴィヴィオの魔力に合わせて、拡散フィールドの細かな調整をすることのできるエリーゼの技量と、効果範囲内の空間すべてをカバーしても、一定以上の威力を確保できる砲撃を放つことのできるヴィヴィオの力量。純粹な破壊力こそヴィヴィオの両親のそれに劣るが、こと空間干渉能力という点においては、それ以上のものを保有している。

自分達を拘束する空間そのものを、一撃で、完膚なきまでに破壊するための魔法。

それが、クレイサーキャノン。

「……いきますわよ、ヴィヴィオ」

「はい。いつでも」

コンタクトを取り、タイミングを確認する。

二人はもう、背中を預けて戦った戦友同士。合図など、それだけで十分。

『全力全開!』

『烈風一陣!』

『クレイサー・シュート!!』

二人の掛け声と共に、二人を中心に虹色の光が発生し。

数瞬後、漆黒の空間は、巨大なガラスが砕けたような音を立てながら、砕け散った。

異変は、空間隔離結界の外側にいた人達にも伝わっていた。

突如、鈍い音を上げて振動し始めた訓練場を覆う黒色のドーム。今まで何をしててもビクともしなかった空間隔離結界の変貌に、外で待機・調査をしていた聖王騎士達の間にも緊張が走る。

「何事ですか!？」

それまで修道服に身を包んでいたシャツハが空間隔離結界の変貌にいち早く気づき、一瞬で騎士甲冑を展開、もしもの事態に備え、カリムを守るために双剣型デバイス『ヴィンデルシャフト』を起動させた。

「何が起こるか分かりません。みなさん、結界から距離を置いてください!」

頼もしい仲間達に守られ、他の騎士達に空間隔離結界から一時的に離れるように指示すると、そのまま、カリムは無言でドームを見つめる。

カリムだけでなく、その場にいる誰もが、結界のことを見つめていた。

数秒後、すべての騎士が結界の傍から退避を完了しても、ドーム状の結界は鈍い音と共に振動を続けていた。

ふと、カリムは、唯一この場にいる、部外者とも言えるべき存在に目を向けた。

ここに残り続けることを選択したヴィヴィオの親友、アリカ・フイアット。

彼女は祈るように両手を組んだまま、悲痛な表情で、結界を見つめていた。無理もない。彼女はヴィヴィオ達の身を案じて、かれこれ二時間以上、結界をじっと見つめ続けたまま、緊張状態を維持し続けていたのだから。

そんな彼女を守るように、彼女の前に立つ姿が三つ。セイン、オットー、デイドもまた、未知の結界に対し、もしもの事態からアリカを守るために、それぞれの得意の体勢で身構えていた。

「……………」

訓練場内を、今まで以上の緊張感が包む。

結界は振動を続けたまま……………不意に、結界全体に巨大な亀裂が走り、次の瞬間、耳を劈く轟音をあげながら、ドームが砕け散った。結界の崩壊から数秒遅れ、中で抑え込まれていた魔力の流れが解放される。その影響で訓練場全体に、まともに立っているだけでは耐えきれないほどの暴風が吹き荒れた。

「……………っ！」

風に巻き上げられ、砂埃が宙を舞う。まともに立っているどころか、目を開けていることすらままならない。誰もが、あまりの暴風と、巻き上げられた砂塵に耐えることに気を取られ、風が止むまでの数秒間だけ、結界があつた場所から意識を離れた。

「何が……………」

一番最初にまともな視界を取り戻したのは、シャツハに守られる騎士カリムだった。

それから次々と、訓練場にいる騎士達が視界を取り戻す。

視界を取り戻した騎士達は皆例外なく訓練場の中央を見つめ、そして、言葉を失う。

なぜなら、そこにいたのは、全身ボロボロ、満身創痍で、お互いのデバイスを十字に組み合わせるヴィヴィオとエリーゼの姿。

そしてその対面、およそ訓練場の端の方にいる、騎士甲冑を装着した二人の姿。

その二人の姿に、その場にいる騎士達全員が、心覚えがあつたの

だから。

「……そんな……騎士リオンに、騎士ジョージ……」

彼らは、聖王協会内でも名の知れた聖王騎士の二人。騎士リオン・フレイメルと、ジョージ・ウイタエ。リオンの砲撃魔法と、ジョージの無限に生み出される人形達のコンビネーションを知らぬ騎士は、聖王騎士には存在しないほどに。聖王教会騎士で、彼らの直属の部下に当たる者達が、揃って自らの上司を誇り、自慢にするほどに。

彼らは強く、気高く、誇り高く。

騎士の中の騎士とすら評され、そして、とても熱心な、聖王教徒であつた。

「……やはり、そうですね……」

体勢を変えず、正体を顕わにした彼らを見つめながら、エリーゼが苦々しげに呟いた。

聖王騎士達の知識に明るい彼女は、先ほどまで自分達を襲っていた敵について、なんとなくその正体を悟っていた。自分の気のせい

だと、彼女は思ったかったのだ。エリーゼは聡い。故に、二、三度の攻撃を受けた時点で、彼らのコンビの正体に気付いていた。

そして、自分のその予想を信じたくはなかった。

なぜなら、リオンとジョージは聖王騎士団の分隊長で、聖王教会の幹部を務めるダймラー家という縁の繋がりから、エリーゼとも面識があった。……面識がある、という一言では片づけられないほど縁が、エリーゼにはあった。

やりきれない想いが、エリーゼにのしかかる。

誇り高き聖王教会の騎士が、特殊な事情があるとはいえ、一介の一般人であるヴィヴィオを襲うことに。

信仰に溺れ、騎士としての誇りを忘れたことに。

そしてなにより、自分と旧知の仲である者が、自分が『友』と認めるに値すると判断した人間に危害を加えていることに。

やり場のない怒りを、憤りを、覚える。

それと同時に、自分の目の前の光景を信じたくない、という思いに駆られる。今の状況を認めず、耳を塞ぎ、目を閉じ、全てを放棄してここから逃げ出すことができるのならば、目の前のこの状況を無かったことにできるのならば、どれだけいいか。

だが、そうすることをエリーゼは良しとはしない。無意識の内に、デバイスを握る手に力がこもる。

彼女の中にある誇りが、責任が、それを赦さない。目の前の事態から逃げ出すなど、なによりも彼女自身が、赦さない。

故にエリーゼは、複合魔法の体勢を解いて、ファーフニルを構えなおし、かつて、共に聖王への信仰を誓い、己の誇りを称えあつた騎士達に対峙する。

未練を、躊躇いを頭の中に入れ替える。

彼らは、聖王の威厳を損ね、友を襲う、害悪。

赦してはならない。情けをかけてはならない。

聖王陛下を受け継ぐ、聖騎士として。

彼らを倒す責務が、私にはあるのだから。

自分達のことを襲っていた敵の姿を確認し、ヴィヴィオは体勢を整え、第三形態を取るザイフリートを構え直す。砲撃特化した相棒を、まるで大砲を扱うかのように腰ために構え、狙いをつける。

その対象は、目前にいる聖王騎士二人。正体がバレたというのに、

彼らは表情ひとつ変えない。まるで、そのような感情など持ち合わせていないとも言わんばかりに。

その姿が明らかになったからと言って、危機が去ったわけではない。

不意に、やはりそうですか、と、エリーゼの呟きが聞こえた。その声は苦々しく、様々な感情が入り混じっていることが感じ取れた。ヴィヴィオも、今回の敵も聖王教会の関係者だろうとは予想していた。しかし、覚悟していたとはいえ、聖王教会の騎士に、本来人々を救う立場にある人達に襲われたことに、やるせない気持ちになる。

それほどまでに人を狂わせる、信仰とはなんなのか。

カリムやシャツハと知り合い、エリーゼの想いに触れ、信仰というものが悪いものではない、むしろ、人を高みに導くもの、あるいは救いうるものだと、特定の宗教を信じないヴィヴィオでも理解していた。

それと同時に、信仰は人を狂わせることもあるも、ヴィヴィオは理解していた。

……いや。

狂信者達から見れば、信仰に殉じようとしないう私達が異常なのか。

何が正しくて、何が間違いなのか、今のヴィヴィオには分からない。



信仰というものがあまりにも大きすぎて、判断が付かない。

だけど。

エリーゼの想いを知り、一晩考え、ヴィヴィオはひとつの答えを見つけていた。

「……関係ないよ」

「……ヴィヴィオ？」

「関係ないよ。聖王教徒でも、そうでなくても、なんであろうとも関係ない。」

相手が何を信じようと、何を信じまいとも、関係ない。

なぜなら、大事なことは。

「言葉にしないと、想いは伝わらない」

尊敬するママに教えてもらった、大切なこと。

「だから、お話を聞かせてもらうために、あなた達のことを、倒させてもらいます」

しっかりとした声で、ヴィヴィオは眼前の二人に宣言した。

聖王教徒であろうとなかろうと、関係ない。

お話を聞いてもらうために、大切な友達を護るために、ヴィヴィオは戦う。

その大前提に、変わりはないのだから。

「……そうですね。ヴィヴィオさん、あなたの言う通りです」

何かを悟ったかのような、先ほどとは違う穏やかな声で、エリーゼがそう言った。

「お話を聞かせていただくために。ヴィヴィオ、私も、協力します」

そして、眼前の二人の騎士にも聞こえるように、エリーゼはそう告げた。

エリーゼの言葉にヴィヴィオは頷いて了承を伝える。

これほど心強い仲間の、友達の願いを断る理由など、存在しないのだから。

そして二人同時に、示し合わせたわけでもないのに、同時に、正面を見据えた。

二人の眼前にいるのは、二人の騎士。気高く、強く、清き信仰を持つ、誰もが尊敬してやまなかった、騎士の中の騎士と言うべき存在、だった、二人。

二組の視線がぶつかり合う。

それが合図であつたかのように、まるで何かに弾かれたかのように、二人の騎士は動きを見せた。ジョージの周囲に魔法陣の展開も無しに召喚される、八体の木偶人形。その大きさは成人と同じ程度。漆黒の結界の中と同じように、ナイフのような鋭利な刃物を持っている。

それと同時に、ジョージの一步後ろに控えるリオンが、砲撃魔法のチャージを開始する。途端、リオンの前に薄紫色の魔力球が形成される。魔力球には、その光の色と同じ色である薄紫色の光の筋が集まり、その大きさを、内包された魔力を段々と巨大化させていく。

見間違えるハズもない。

それは、高威力を誇る砲撃魔法でも最高の境地、収束魔法。

絶大にして絶対の威力を誇る、最強クラスの攻撃魔法。

「エリーゼさん！」

「分かっていますわ、ヴィヴィオ！」

収束魔法のチャージを、手をこまねいて見ている場合ではない。

ただでさえ防御が困難な収束魔法を、今の自分達が耐えきれとは思えない。

ヴィヴィオも砲撃魔法のチャージを開始、リオンのチャージを妨害するためにエリーゼが前に飛び出す。残り少ない魔力を躊躇わず脚部に収束、一瞬で解放し、爆発的な速度を発揮させる。間合いがほとんど一瞬で詰められ、リオンに肉薄する。

それを、ジョージは許さない。

ヴィヴィオとエリーゼ、リオンとジョージ、二組の中間地点、エリーゼの進行方向上に、召喚した八体の木偶人形を配置する。

「邪魔ですわ!」

掛け声と共に、エリーゼもヴァルキューレを召喚する。翼の生えた馬に乗る鎧騎士ではなく、軽装の鎧を装備し背中に直接羽根を生やした、空戦高速軌道形体のヴァルキューレを三体。得物は刃渡り二メートルを超える斬馬刀。その身体を構成する素材は、白銀色の光沢を放ち、軽量の特徴とするマグネシウム。ただし斬馬刀を構成する素材だけは、マグネシウムの数倍の硬度を持ちながら重量はマグネシウムの倍程度という高性能を誇るチタン合金。

木偶人形をヴァルキューレに任せ、エリーゼ自身はリオンに接近しようと、木偶人形の隊列をすり抜けたところで。その正面に立ちはだかる影がひとつ。リオンの数メートル前に、戦斧を振りかぶるジョージの姿。

予測していた事態に、エリーゼは表情を変えない。

ジョージの直前でブレーキをかけ、発生させた勢いを相殺。それと同時に両腕に、全身に強化魔法を展開。迫りくる凶刃に、第三形態のファーフニルを構え、備える。エリーゼの目の前で戦斧が勢いよく振り降ろされ、数瞬後、身体のコを震わせるような衝撃が全身を襲う。

それをエリーゼは、ファーフニルを前に突き出し、その柄の中央

で受け止めた。

「っ……」

歯を食いしばり、攻撃に耐えるエリーゼ。人形の召喚だけではない。彼自身もまた一流の騎士であったことを、エリーゼは痛感する。

全身を襲う衝撃のせいで、エリーゼは一瞬だけ動きを、思考を停止させる。普段ならば意識を保つことができるのだが、今のエリーゼにはたったそれだけの余裕も、体力も、魔力も、ほとんど残されていない。

その隙を、ジョージは逃さない。

再び戦斧を振りかぶるジョージ。

次の瞬間、エリーゼの背後から、エリーゼの身体をかすめ、四発の魔力弾が超高速で飛び出した。その魔力光は、虹色。表情を僅かに歪ませ、振りかぶっていた戦斧の軌道をずらし、最低限の動きで魔力弾を撃墜する。

その間に、エリーゼはジョージから間合いを取っていた。後ろではなく、高度を落とす、今までの位置から更に下に下がる。エリーゼは一人で戦っているのではないのだ。隙が生じてしまうのならば、その隙を補ってもらう。お互いが求めるタイミング求める場面での援護をする。二人の間には合図も何も要らない。それが、戦友というものだ。

「デイベイン……」

虹色の光が、ザイフリートの砲身となる部分に収束する。

「バスター！」

ヴィヴィオの声と共に、放たれる魔力の奔流。エリーゼだけではなく、ヴィヴィオも疲弊しているためその出力はいつもの半分程度だが、それでも、直撃すれば無傷では済まされない。虹色に輝く純魔力エネルギー。その光の砲撃は、ジョージではなく、魔力の収束を続けるリオンに向けられていた。

「！」

表情に焦りを滲ませ、リオンの傍らに移動するジョージ。戦斧を突き出しベルカ式の魔法陣を展開、リオンを守るための防御の体制に入る。それとほぼ同時に、ヴィヴィオの砲撃がジョージの展開した防御魔法陣を直撃する。いくら術者が疲弊していても、元々が純魔力による破壊に特化した砲撃魔法。音を立て、大気を震わせ、容赦なく防御シールドを削り取る。

しかしそれでも、今のヴィヴィオの魔力では障壁を破壊するには足らず、やがて、ヴィヴィオの砲撃魔法が終了する。

残された僅かな魔力を使ったヴィヴィオの砲撃魔法、切り札とも言える最後の一撃を防ぎきったことに、ジョージは顔を歪める。勝利を確信し、相手を見下した、下卑た笑い。

「私のこと、忘れていらっやいませんか？」

その声で、ジョージの歪んだ笑顔が、一瞬で払拭される。

ジョージから少し離れた場所で、第三形態のファーフニルを突き出すエリーゼ。その構え方は十字槍のそれではなく、魔法の杖のもの。足元に展開する魔法陣はベル方式。魔力光は橙色。ファーフニルの第三形態は他の形態とは違い、近接戦闘ではなく詠唱魔法の使用に特化した形態。

そして、すでに詠唱は完了していた。

『ムスperlヘイム!』

爆発。シールドどころか周囲の空間を巻き込んで、鉄すらも熔解する超高温の火炎の奔流が荒れ狂う。その効果範囲は先ほどヴィヴィオに行使した時の半分どころか三分の一度。だが、効果範囲を絞った分、威力は落とさないように調整した。エリーゼの魔力光と同じ橙色の爆炎が二人の騎士を包み込む。効果範囲外にいるエリーゼの頬を、火の粉の混じる熱い風が弄る。

その爆炎は数秒間続き、魔法の効果は終了する。やがて、炎が収まり、更に数秒後に、未だ治まらない風に流されて、効果範囲内を覆い尽くしていた煙がはれる。

「……さすが」

思わず、感嘆の声をあげるエリーゼ。

エリーゼとヴィヴィオの攻撃を喰らってなお、ジョージは防壁を維持していた。自分達がひどく疲弊しているとは言え、その威力は本物のハズだ。それを防ぎきるとは、さすがは聖王騎士といったところか。

ジョージが攻撃を防いだことで、状況が反転する。

なぜなら、リオンの魔力の収束は、すでに完了していたのだから。

「エリーゼさん！」

ヴィヴィオが叫ぶ。

その声に頷き、エリーゼはヴィヴィオの元に戻った。

そして二人並び、全力の魔力を込めて防壁を展開する。残った魔力のありったけを込めた、二人のベルカ式複合防壁。

あれだけの魔力、至近で喰らえば確実に墜とされる。

リオンの前には、リオンの身長と同じ程の直径を持つ薄紫色の魔力球。収束された魔力が、リオンは腕のひと振りですぐに解放される。

ヴィヴィオとエリーゼに迫る、莫大な純魔力。大気を震わせ、周囲に漂う魔力すらも巻き込み、轟音を立てながら、ヴィヴィオ達の防壁に激突する。

そこでヴィヴィオとエリーゼは、気付く。

防壁を削る魔力が、リオンが収束した魔力よりもかなり少ないことに。

不審に思い、二人はリオンの収束した魔力球に視線を向ける。

瞬間　収束された魔力の塊である魔力球が、薄紫の強烈な光を



放ち、炸裂した。

「!?!」

あまりに突然の、網膜を焼かんばかりの閃光に、ヴィヴィオとエリーゼは視界を失う。

そして同時に、リオンの狙いを看破する。

収束された魔力は攻撃のために使用されず、ほとんどが光に変換された。それこそ、目に入れば視界が数秒は完全に失われてしまうほどの閃光。あまりの強烈な光に痛みすら感じてしまう。外界の情報七割を視界から得る人間に対して、最上級の攪乱。

つまりリオンの目的は、攻撃ではなく、目くらまし。

そう、この場から、逃走するための。

「待って!」

ほとんど何も見えないほどに掠れた視界で、それでも必死にリオンとジョージの姿を探す。辛うじて、ほんのわずかだけ見えたものは、二人の騎士のおぼろげな姿。思った通り、ヴィヴィオ達に背を向け、その場から立ち去ろうとしていた。

このままでは、逃げられる。

無意識に、二人に向けて手を伸ばすヴィヴィオ。

しかし、その手は虚しく空を切り、二人の騎士はヴィヴィオから

遠ざかっていく。

『プリズナーボルグ』

その時、ヴィヴィオの耳に、少年とも少女とも判断が付かない、中世的で、あまり感情の抑揚が分からない落ち着いた声が届いた。

その声の主のことを、ヴィヴィオはよく知っていた。

瞬間、特殊なカタチをした魔力が自分達の周囲を、おそらく訓練場全体を取り囲むのを感じた。目が見えなくても、この感覚、この能力のことを、ヴィヴィオは知っている。

戦闘機人、オットーのIS・レイストーム。

ミッドチルダ式魔法に酷似した、広域攻撃及び結界能力といったものに応用の効く魔力エネルギーの運用能力。その能力の内のひとつ、プリズナーボルグ。『結界』と同等の性能を持ち、対象の檻外への移動・逃走を物理・魔力両面で阻害して閉じ込める。先程までヴィヴィオ達を閉じ込めていた黒色の檻とは違う、しかし効果の似た、絶対結界の在り方のひとつ。これを自力で突破することの困難さは、すでに証明されている。

時間が過ぎ、麻痺していたヴィヴィオの視界が、段々と開けていく。

やがて、ヴィヴィオの瞳に写されたのは、想像通りに訓練場全体を取り囲む、半透明の緑色の隔壁。

その隔壁と同じ色の足場で、いつでも攻撃用のレイストームを放

てるように構えるオットー。

ヴィヴィオ達の反対側、二人の騎士を挟んで対面に、己のI・S・ツインブレイズを構えるデイド。

オットーが生成した足場に、騎士甲冑を装着し、ヴィンデルシャフトを構え、二人の騎士を鋭く睨みつけるシャツハ。

プリズナーボルグの範囲外、訓練場を取り囲むように展開する、正規の聖王騎士達。

そして、プリズナーボルグのすぐ外側、観客席の全体を見据えることのできる場所に、その瞳を捕らえただけで竦んでしまうような視線を向ける、騎士カリム。

包囲が、完了していた。

「騎士リオン。騎士ジョージ。両名に告げます」

プリズナーボルグの外側で、小さな、しかしはつきりと聞こえる声で、カリムが告げる。

「あなた方は、完全に包囲されています。もはや抵抗は無駄なことは、あなた達も知っているハズです」

カリムの声が、訓練場全体に響き渡る。

「聖王教会騎士団長、カリム・グラシアが命じます。あなた達に騎士としての誇りが残っているのならば、武装を解除し、大人しく投降しなさい。もし、抵抗するのであれば」

カリムの言葉に応じ、待機していた聖王騎士達が、得物を構えた。

「聖王騎士の名にかけて、あなた方を、捕縛します」

聖王教会の誇る堂々たる布陣に、ヴィヴィオは思わず息を呑んだ。

同時に、理解した。

付け入る隙というものを、まったく感じ取ることができない。個々の騎士達がかなりの力量を持っている。その彼らが、仕事という義務感でなく己の誇りを持って、彼らにデバイスを向けている。

これが、聖王教会騎士団の本気。

「すごい……」

口から洩れるのは、ただただ純粋な嘆息の声。

これなら、いくらなんでも逃げだすことはできないだろう。二人の騎士を、この事態の解決の鍵となるかもしれない二人を、逃がさずに捕まえることができる。

そのことをヴィヴィオは確信し、そして安堵した。

二人の騎士、リオンとジョージは聖王教会騎士団でも上の地位にいる者だし、もしかしたら、これを契機にこの件はいつきに解決するかもしれない。もう、アリカやエリーゼのように、私のせいで友達が巻き込まれることもなくなるかもしれない。もう誰も、傷付かないようになるかもしれない。

そんな期待を持って、ヴィヴィオは実質的に動きを封じられた二人を見た。

途端、背筋がゾクリと、冷たくなった。

頭に浮かんだ期待と、安堵感が、一瞬で吹き飛んだ。

二人の瞳からは、まるで生氣というものを感じ取ることができなかった。

そう、まるで、生きることを放棄したような、そんな瞳。

次の瞬間、リオンとジョージはお互いに向き合い、自身の得物を構えた。その切っ先の対象は、明らかに、お互いの首筋

「やめ  
」

反射的に、ヴィヴィオの身体は飛び出していた。

が。

「あ  
……」

訓練場の端と端。距離にして百数十メートル。時間にして一秒と僅か。それだけの間合いを。それだけの時間で詰めることは、さすがのヴィヴィオでも不可能だった。

ヴィヴィオの視界に映ったのは、凄惨な光景。

騎士リオンの頸と胴体はすでに繋がっておらず。

騎士ジョージの上半身はすでにこの世に存在していなかった。

そして、残された身体から吹き出す、紅の鮮血。噴水の水の如く噴き出す、ひたすらに紅い血液は、まるで、咲き誇る紅い彼岸花のようにすら見えた。

「あ……ああ……」

自身の魔力による加護を失い、重力に従って落下するふたつの身体を……肉塊を、呆然とした気持ちで見つめるヴィヴィオ。落下線上、その周辺に、紅い血が撒き散らされる。次第に、訓練場の地面が紅く染められていく。やがて、ふたつの肉塊は、グシャリと、鈍い音を立て、衝撃で肉片と残った血液をぶちまけ、地面に激突した。

「あ………」

次第に、ヴィヴィオの視界が、紅く染まっていく。

眼下に広がるのは、撒き散らされた人間の血液と、かつて人間だったモノの欠片。

その内の、かつて人間の頭だったモノと　すでに何も見ていない　視線が重なった。

虚ろな、ナニモノも見えていないそれは、ヴィヴィオの瞳を、顔を、しっかりと映していた。

「……………ああああああ！？」

ヴィヴィオは叫んだ。意識せず、無意識の内に、心から。

そして、ヴィヴィオの意識は、そこで途絶えた。

聖王教会、医務室。

医務室と言っても、それは任務後の聖王騎士団員も利用するほどのもので、簡単な手術、例えば単純骨折や浅い裂傷程度などなら問題なくこなすことのできる程度の設備を持つ、言っなれば小さな病院のようなもの。

ベッドの数は少ないが、そもそも入院することを想定していないので、最低限で充分なのだ。

その聖王教会医務室の一角。

数少ないベッドの内のひとつに、ヴィヴィオは寝かされていた。

「……落ち着きましたか、ヴィヴィオさん」

「……………はい。多分……………」

「……その調子だと、大丈夫そうではありませんね」

溜息混じりのシャッハのその声色には、言葉面ほど責める様子はなく、むしろヴィヴィオのことを心配していることが感じ取れた。

「無理することないわよ、ヴィヴィオ」

「エリーゼさん……………」

ヴィヴィオのすぐ隣のベッドで、ヴィヴィオと同じように寝かされているエリーゼが顔だけヴィヴィオに向けて、そう言った。

「あのようなものを見て平気だなんて、そっちの方がどうかしていますわ……………」

エリーゼの言う、あのようなものとは、先ほどヴィヴィオが見た、見てしまった、惨劇のこと。

いくら強く、第一線級の力を持つヴィヴィオとエリーゼも、まだ年頃の女の子。あのようなものを見て、まともでいられるほど、人間の死に慣れていない……………慣れては、いけない。



医務室に寝かされるヴィヴィオとエリーゼ。二人は隣同士のベッドに寝かされ、その周囲を取り囲むように、カリム、シャツハ、セイン、オットー、デイドがいた。シーツに隠れて見えないが、ヴィヴィオもエリーゼも、全身いたるところに包帯を巻かれている。全身包帯ぐるぐる巻きになるのはヴィヴィオにとって二度目の経験だが、今回は以前よりも包帯やガーゼの量が多い。それが少し窮屈だった。

最も、身体を動かそうと思っても、今のヴィヴィオではどういうわけか思ったように身体を動かせないのだが。

「ヴィヴィオさんもエリーゼさんも、全身傷だらけですが、どれも命に別条はありません。一週間もすれば包帯も取れる、このことです」

医者から説明を受けたのか、シャツハがヴィヴィオとエリーゼの顔を交互に見ながら、二人の容態を説明する。

「ただ、問題は、二人の魔力です」

「……魔力？」

「はい。明日にでもヴィヴィオさんとエリーゼさんそれぞれに詳しくお話を聞かせていただきたいと思います。お二人共、あの黒色の結界の中で、相当な激戦を続けていたでしょう？」

シャツハに言われ、ヴィヴィオは思い返す。

あの、漆黒の空間の中での、数時間に及ぶ攻防。

かろうじて耐えきることができたが、あれがあと三十分も続けば、おそらく自分達はやられていただろう。

「それに加えて、あの正体不明、聖王教会騎士達でもお手上げなほどの堅牢な結界を破壊するほどの攻撃、そして結界破壊後の戦闘。これらによつて、ヴィヴィオさんもエリーゼさんも、魔力の限界を超えてしまっているんです」

魔力の限界を超えている。

シャツハがこれから言わんとすることを、ヴィヴィオはなんとなく理解していた。

「……つまり、私達は限界以上に魔力を行使してしまったから、思つたように身体が動かせない、と。そういうことなのですか？」

「そういうことです、エリーゼさん」

魔導師とそうでない人の差とは、つまるところ自分の意志で行使できるほど魔力を持っているか、ということに過ぎない。生きていれば、多かれ少なかれその身体には魔力が宿る。つまりそれは、魔力というものが生き物の命に密接に関係しているということだ。

そのため、普通の人間であれば魔法を行使することができない。魔力を消費することがないため、魔力の減少が体調に影響することは特殊な状況を除いて存在しないのだが、魔法を行使することのできる魔導師はそうはいかない。

魔力を消費すれば当然疲労し、やがて体力がなくなつたときと同じような状況に陥る。そして肉体の限界を突破すれば肉体にダメージ

ジが残るように、行使できる魔力の限界を突破すれば、その影響が精神や肉体に出てくる。

今のヴィヴィオとエリーゼは、魔力の限界を超えたために、その影響が肉体に現れ、身体を動かすことができなくなっているのだ。

この症状は、魔力が回復するにつれて身体も元に戻るのだが、この症状が出た時点ですでに限界以上の魔力を行使し体内の魔力生成機関に負担をかけてしまっているため、普段よりも魔力回復速度がかなり遅くなってしまう、連鎖的に肉体の回復も遅くなってしまうのが通例だ。

それでも、時間をかければ魔力は回復し、魔力生成機関の回復力も元に戻るのだが、限界を飛び越え、あまりに負担をかけすぎてしまつと、最大魔力量の一時的な減少、肉体への後遺症など、深刻な問題が発生してしまう。そしてついには、一生魔力を生成することのできない身体になってしまうことも。

誰かを助けるためなら躊躇うことなく限界を突破し、自分の身体に負担をかけることを厭わない、管理局最強の砲撃魔導師。彼女が後遺症に苦しんでいる姿を一番間近で見ていたヴィヴィオには、魔力の限界を超えろということに、複雑な思いがあつた。

「あなた達はまだ若いので魔力の回復は早いですが、少なくとも、今日一日は身体を動かすことができない、とのことですよ」

「そうですか……」

身体が動かせないのは不便だが、どうしようもないことなので、ヴィヴィオはおとなしくせざるを得なかった。しかし、今のヴィヴ

イオにとって、身体を動かせない、気を紛らわせられないというのは、辛いことだった。

じっとしていれば、嫌でも、あの光景を思い出してしまいそう。

「あの……騎士カリム」

「何ですか？ エリーゼさん」

「その……騎士リオンと、騎士ジョージは……」

「……………」

まるで何かにすぐるかのようにカリムに問いかけるエリーゼと、苦虫を噛み潰したかのような、哀しい顔をするカリム。それだけでエリーゼの問いに対する答えになっていた。

「そう……ですか……」

「申し訳ありません、エリーゼさん」

「……謝らないで下さい。騎士カリム。あなたは、何も悪くありません。仕方のないことなのですから」

仕方のないこと。

たった一言で言い表すには、あまりにも辛い出来事。

明らかに肩を落とし、悲しい顔をするエリーゼに、ヴィヴィオはかける言葉が無かった。

エリーゼだけではなく、ここにいる全員が、重く沈んだ気持ちだった。

仲間だと信じていた、古くからの友に裏切られ、友を襲われ、そして彼らは自害した。事情を聴くことすらも許されず、彼らの後ろで糸を引いている存在についても全く情報を引き出せなかった。罪を贖わせる時間すら、与えられなかった。

つまりそれは、この事件が一切の進展を見せなかったということ。

また、同じことが起こるということ。

信じている友が裏切り、友を襲う。悲しませる。

その事実が、この場にいる全員の心を苛んでいた。

どうしようもない。どうすることもできない。

このままでは、また、被害者が、犠牲者が増えるばかり。

そのことが、たまらなく悔しくて、悲しかった。

「……これ以上考えても、仕方ありません。皆さん、一旦、頭の中を入れ替えましょう」

そう言い、カリムが手を叩いた。

確かに、カリムの言うとおりだ。

今ここで考え込んでも、何も始まらない。

そんなことよりも、これからのことを考えることの方が大切だ。

「そう言えば、ヴィヴィオさん」

「はい？」

シャツハに声をかけられ、ヴィヴィオは反応した。

シャツハの話は、今日、ヴィヴィオが結界に閉じ込められている間中ずっと、アリカがヴィヴィオ達のことを心配し、危険を承知で訓練場の観客席に残り、祈り続けていたということだった。

「アリカちゃんが……？」

「はい。もう日も遅いですし、今は家に帰らせましたが、アリカさんはずっとヴィヴィオさん達の身を案じていました。後日、ちゃんとお礼を言っておくように」

「……………はい」

シャツハの言葉に、ヴィヴィオは頷いた。

「では、ヴィヴィオさんを騎士カリムのお宅に運びましょう。エリゼさんも、今夜はカリムの家に泊まっていくように」

「……………へ！？」

シャツハの提案に、どういいうわけか、ヴィヴィオが知るエリゼ

からは想像もできないような頓狂な声が聞こえた。

「今日はもう遅いですし、身体が動かせない今の状況で、エリーゼさんの自宅に帰るのも大変でしょう。それに、いろいろお聞きしたいこともありますし」

カリム自らがそう説明し、言葉の最後に、エリーゼに向って微笑んだ。

「もちろん、無理に……とは言いませんが。どうでしょうか？」

「も……もちろん、問題なんてあろうはずがありません、騎士カリム！」

エリーゼの変わりように、ヴィヴィオは苦笑した。

そういえば、エリーゼは『カリム・グラシア様に祈る会』の名誉会員だったことを思い出した。そして、騎士カリムのことになることと少々どころか、普段の冷静さ、落ち着きを結構失うということも。

ニコニコ微笑んでいるカリムと対照的に、ワクワクドキドキ、といった様子で微笑むエリーゼ。

おそらくカリムは、言葉で伝えた理由以外にも、深い考えを持ってエリーゼを家に泊めるようにしたのだろう。例えば、弱った二人を狙った襲撃に備えるため、とか。ヴィヴィオにもそのことは簡単に思いつくことができたが、はたして今のエリーゼにそこまで考えるだけの余裕があるのかどうか。

（でも、こういう人間味が、エリーゼさんの魅力なんだよねえ……）

気付けばいつの間にか、その場の雰囲気が穏やかなものになっていた。これは、カリムの力なのか、それともエリーゼのおかげなのか。

出会ってから、僅か数日。

たったそれだけの時間で、ヴィヴィオは、エリーゼのことを、なんとなく理解し。

友達だと、思えるようになっていた。

ヴィヴィオはまだ気付いていないが、漆黒の結界から脱出するあたりから、エリーゼがヴィヴィオを呼ぶときに、ヴィヴィオさん、ではなく、ヴィヴィオと呼ぶようになっていた。

エリーゼもまた、ヴィヴィオと同じように、ヴィヴィオのことを友達だと、思えるようになっていた。

無意識の内に二人はお互いを戦友として認め、戦いの後には、その感情は友達に向けることになっていた。



そのことにお互いが気付くのは、もう少し先のお話

「ふう……」

明かりを消した、グラシア邸の一室。

ベッドに寝そべったまま、ヴィヴィオは考え事をしていた。

まだ、身体は思ったように動かせない。お話をすることはできるのだが、食事も、誰かの助けを借りなければ満足にできないような有様だった。ただ単純に身体が動かないのならば、魔力で身体を動かすこともできるのだが、今は魔力がまったく残っていないから身体が動かせないのだ。不便なことこの上ない。

ヴィヴィオの頭には、先ほどまでの、みんなとの談笑の内容が残っていた。

初めは今回の件の事情聴取のようなものをエリーゼと一緒に受けていたハズなのに、それが一段落する頃に、お茶とお茶菓子を持ったセイン、オットー、デードが乱入してきてそのままパジャマパーティーに突入、残りの聴取もお流れになってしまったのだ。

セインを筆頭としたナンバーズの明るさ、無垢さは、今のヴィヴィオには正直ありがたかった。

おかげで、ほんの数時間前の凄惨な光景を、一時だけでも忘れることができるのだから。

「……………」

ヴィヴィオの脳裏には、未だあの光景が焼き付いていた。

ヴィヴィオの眼前で、頸を刎ねる騎士ジョージ。上半身を吹き飛ばす騎士リオン。噴き出す鮮血。飛び散る肉片。虚ろな瞳は生気を感ぜせず、左右で色の違うヴィヴィオの瞳を射抜く。それは、死という漠然とした恐怖をヴィヴィオに意識させた。

自分が死と隣り合わせにあることを、分かっていたハズなのに、改めて理解させられた。

言いようのない不安感が、じくじくと、ヴィヴィオの心を痛めている。

考えても仕方のないことなのは分かっているのに、考えずにはいられない。

なぜならヴィヴィオは、まだ九歳の女の子。人の生死について考えるには、まだ幼すぎるのだから。

「……ねえ、ザイフリート」

『はい。お呼びですか、お嬢様』

「ザイフリートは………死ぬこと、について、どう思う？」

死ぬこと。

生きること。

殺すこと。

誰かを助けること。

誰かを助けるためには、誰かを殺さないといけないかもしれない。今生きていても、いついかなるときに死ぬのか分からない。

生と死は表裏一体。それはまるでコインの裏表のようで。

あまりにも遠くて、あまりにも身近すぎる、あまりにも純粋な恐怖のカタチだった。

『そうですね……。私には、死と言う概念が分かりません』

「そうなの？」

『はい。死ぬ、ということは事象として、言葉の意味としては理解しているのですが、私は死ぬことはありません。ですので、死ぬ、ということ、本当の意味では理解できないのです』

「……………」

ザイフリートは言葉を続ける。

自分はデバイスであつて、ヴィヴィオのような命を持つものではない。だから、自分にとっての死とは、おそらく機能停止した時なのだろうが、それは生命体の持つ死の概念とは異なるため、漠然とした恐怖や不安を抱くことはない、と。そもそも、デバイスは生き物ではなく、命を持っているわけではないので、機能停止を死と呼べるのかどうかも微妙だ、と。

『ですが……確か、とある次元世界の哲学者が、こういう言葉を残したそうです』

「?」

『cogito, ergo sum. 我思う。故に我あり』

「我思う、故に、我あり……？」

『そうです。生きているということは即ち、自分というものの存在を自覚し、自分であることを思うから生きているのだと。自分と言う意思を持っている。故に、生きているのだと』

「……………」

『ですので、確かな意志を持っている私は、生きている、と言つことなのかも知れません』

「……難しい言葉だね」

『ええ。単純な言葉ですので、人によっては言葉の意味の捉え方も変わってくるでしょう。私の述べたこの言葉の意味も、ただの受け売り……ひとつの解釈に過ぎません』

「そっか……………」

『ですがお嬢様。その言葉の意味は、私にとってはどうでもいいのです』

「え？」

それまでの前置きをぶち壊したザイフリートに、ヴィヴィオは驚く。

『大事なことは、お嬢様が今こうして考え、思い、自分の意志を持つて、生きているということです。お嬢様がどのように思い、どの

ように考え、どのような答えを出したとしても、私はただあなたに  
仕え、従うだけです』

「ザイフリート……?」

『自信を持つて下さい。お嬢様。先程の言葉を借りるのならば、お嬢様が強い意志を持つということこそが生きているということであり、意志を持たなければ、それは死んでいることと変わりありません。お嬢様が生きてさえいてくだされば、微力ながら、私はお嬢様を全力でサポートさせていただきます』

本来は無機質なハズの機械音声。

しかしザイフリートの言葉からは、確かにザイフリートの意志が感じ取られ、そして、ヴィヴィオの痛む心に沁みこんできた。

私は今こうして生きている。確かな意志を持っている。

死ぬということは確かに怖い。だが、そのことに囚われ、自分の意志を失ってしまつては、それこそ死んでいることと変わらない。

私は意志を持っている。だからこそ生きている。

そう考えると、先ほどまで心を痛めていたものが、すうつとひいていった。勿論、目の前で起こった惨劇そのものはまだ忘れることはできない。しかし、死ぬことに対して漠然と感じていた意味のない恐怖は、完全に払拭されていた。

「……ありがとう。ザイフリート。だいぶ楽になった」

『ありがたいお言葉』

ザイフリートは基本的に無口で、必要なこと以外は喋らない。

最後の言葉を言い終えた後は、ザイフリートは再び自分から語りだすことはなかった。

けれど、ヴィヴィオにはそれで充分だった。

必要さえあれば、ザイフリートは全力で、最善にして最高のサポートをしてくれる。

なんとも、頼もしいパートナーではないか。

私はまだまだ、未熟な魔導師だ。なのはママとレイジングハートみたいな関係じゃなくて、ザイフリートに相応しいパートナーには、まだ届かないと思う。だけど、ザイフリートは私の声に、言葉に、想いに、応えてくれる。そんなザイフリートのためにも、そして何より、私自身のためにも、私は自分の意志を貫こう。

受け継いだのは勇気の心。

手にしたのは魔法の力。

この力は、誰かを助けるための力。泣いてる誰かを、助ける力。

何が起こっても、私が私である限り、それは変わらない。

目指すのは、ママみたいな、強くて優しい魔導師。

絶対に諦めない。

それが私の意思。

誰かを助けることのできる魔法使いに、私はなるのだから。



## 第八話 争いの中の聖王の祝福

聖王教会、騎士団長室。

名前の通り、聖王教会の所有する独自戦力『聖王騎士団』の団長に与えられた個室であり、騎士団長はこの部屋で執務や雑務をこなすことになっている。

その部屋の中央より少し奥、執務用の机に、この部屋の主であり、現聖王教会騎士団長のカリム・グラシアが腰掛けていた。職務中なのか、机に山積みになされた書類を、一枚一枚チェックしている。

あの事件……聖王教会第一訓練場閉鎖事件から、三日が過ぎていた。

「……………ふう……………」

書類に目を通しながら……不意に、カリムはため息を吐き、書類から視線を外した。

「未だに手がかりなし、ですか……………」

誰に言うでもなく、一人ごちる。

カリムが目を通してしている書類は、例の事件に関する報告書である。

例の事件。一部の関係者の間では『聖王信仰紛争』と呼ばれている事件。現代に復活した幼い聖王陛下を狙う、狂信者達が巻き起こす事件。その事件の中心人物は聖王教会上層部に関わる人物とされ、

すでに数名の聖王教会騎士団所属の騎士が、この事件に関わっていることが確認されている。

一番初めの事件発生から、約半月。

聖王教会の不祥事の塊とも言えるこの事件が一般に発覚することを、聖王教会上層部は好ましく思っていないが、事件の規模や重要性から、すでに隠蔽することは不可能となってしまうている。そのため、聖王教会上層部はこの事件の解決に躍起になっているが、現状では手がかりは一切ない。

なぜなら、事件に関係していた聖王教会の騎士は、一人の例外なく、事件の内容を供述する前に自害しているのだから。

この件もまた、聖王教会の不祥事である。

だが、カリムにとって、この事件によって聖王教会の名誉が傷つけられることなど、半ばどうでもよかった。

カリムが憂うのは、友がこの事件に巻き込まれていることだった。

一部ですでに『聖王信仰紛争』と呼ばれているこの事件を語るのに、絶対に外せない人物がいる。

高町ヴィヴィオ。

聖王教会の管理するミッションスクール、ザンクト・ヒルデ魔法学院の初等部三年生。『聖王の印』であるオッドアイの瞳に加え、聖王と同じ虹色の魔力光、カイゼル・ファルベを持ち、時空管理局無限書庫の司書の資格すら有する、本人曰く『ちよつと読書が好き

なだけの普通の女の子』

彼女の正体は、すでに途絶えた血筋である本物の聖王陛下のクローン体であり、そして、カリムの個人的な友でもある。ヴィヴィオが存在したからこそこの事件が起こったわけだが、彼女がいなければ個々の事件は解決しなかっただろう。それほどまでに、この事件と高町ヴィヴィオは密接に関係していた。

そんな彼女がこの事件に巻き込まれていることに、カリムは心を痛めていた。

いくら現代に蘇った聖王陛下とは言え、ヴィヴィオはまだ九歳の女の子なのだ。本人も普通の女の子として生きていくことを望んでいたのに、自分達の身内、聖王教会の関係者、それも狂信者とも呼べる人達がこの事件を起こし、ヴィヴィオやその周りの人を巻き込んでいる。ヴィヴィオにとっては、とんだとばっちりだ。そもそも、ヴィヴィオの正体を知る者はヴィヴィオと親しい人間か元機動六課のメンバー、そして聖王教会の上層部の一部に限られるのだ。どう考えても、この事件は聖王教会上層部が発端となった事件である。

私達のせいで、彼女の人生を狂わせてしまったのではないのか。

カリムは今でも、そう思うことがある。

この事件さえなければ、ヴィヴィオは今頃普通の女の子と同じように夏休みを満喫していただろう。なのに、実際にはどうだ。毎日を全力の修練に費やし、すでに数度、命に関わるほどの戦闘を経験している。つい三日前だって、肉体の限界を突破するまで魔力を使い、その影響でしばらくの間身体を動かすことすらできなくなってしまったのだ。ますます危険になっていくこの事件に関わり続け

ていては、いつか本気で取り返しのつかないことになってしまいうかもしれない。

そのことを、カリムは心配し、嘆いていた。

このようなことは、大人の私達が解決すべきなのに。

子供達には何の心配も憂いもなく、毎日を過ごして欲しいのに。

それすらできないで、なにが聖王教会騎士団長だ。

子供達を苦しめるために、聖王教会騎士団は存在するわけではないのに

「失礼します、騎士カリム」

カリムの思考は、ドアのノックの音によって遮られた。

「ああ、オットーね。入っていいわよ」

「失礼します」

丁寧で落ち着いた声と共に、お盆を持った執事姿のオットーが扉を開け、部屋に入ってきた。

時計を見てみると、すでにお茶の時間になっていた。どうやら考え込みすぎて、思っていたよりも時間が過ぎてしまっていたようだ。

「今日のお茶は少し趣向を変えてみました」

「……と言つと？」

「産地が違ふんです。なんでも、ミルクのような香りがするのだとか」

「へえ。楽しみね」

カリムの言葉にオットーが微笑み、オットーが持ってきたお盆が机の上に置かれる。お盆の上にはティーセットの他にも、こんがり美味しく焼けたクッキーがあつた。

「あら、美味しいそうなくッキーね」

「はい。先日のクッキーパーティーで僕が作ったものです。お口にあればいいのですが……」

聖王教会では時々、地域や信者の人達を対象にしたイベントが行われることがある。クッキーパーティーもそのイベントのひとつで、主に女性やお年寄りの参加率が高い。何でも、美味しいクッキーを焼くことを生きがいに行っている老人信者もいるそう。

「オットーが作ったんですもの。美味しいに決まっているわ」

「ありがとうございます、騎士カリム」

微笑むオットーを見て、カリムは思う。

こういふ行事こそ。人々を導き、日々の安寧を与えることこそ、聖王教会の存在意義ではないのか。

信仰というのは、あくまでもそのための一手段に過ぎない。

人々のよりよい毎日のために、聖王教会は在る。

人々を悲しみから救うために、聖王教会騎士団は在る。

一度は闇に落ちてしまった人を、再び光の世界に戻すために、聖王教会は在る。

人々の生活を守るために、聖王教会騎士団は在る。

断じて、子供達を苦しめるために私達は存在しているのではない。  
人々を救い、導くために、聖王教会というものは存在しているのだ。

「……私達大人が、頑張らないといけませんね」

「……何か仰いましたか、騎士カリム？」

「いいえ、なにも」

「はあ……」

一刻も早く、この事件を解決しなければならない。

一刻も早く、友を苦しめる原因を取り除かなければならない。

それが、聖王教会騎士団長である、私の役割がすべきことであるのだから。

エリーゼ・ダイムラー。十二歳。ザンクト・ヒルデ魔法学院初等科五年生。

聖王教会の上層部の一角を担うダイムラー家の現当主ロールス・ダイムラーの第一子で、ダイムラー家の次期党首筆頭候補。能力的に優れ、また、ダイムラー家当主の条件である固有スキル『聖王の従者』を現当主以外では唯一使用することができるため、次の当主になることはほぼ確定している。

聖王一族の正統な血縁が途絶えた現在で、聖王の血を受け継ぐ数少ない人物の一人。故に現在の信仰の対象とされており、本人もそれに応えることを、自身が聖王を受け継いでいることを誇りに思っ

ている。

ダイムラー家は、元々が聖王一族の遠縁の出で、聖王の従者を代々務める家柄だった。

聖王の従者という立場、『聖王の従者』という聖王の魔法、そしてなにより代々受け継がれる誇り高さ、高潔さを評され、『聖騎士』の屋号を聖王直々に与えられ、現在でも『聖騎士』と呼ばれている。

固有スキル『聖王の従者』とは、遠縁とは言え聖王一族に繋がるダイムラー家が受け継いだ唯一の聖王の魔法。ヴァルキューレ、と呼ばれる金属で出来た傀儡兵を召喚し、使役する能力。召喚するヴァルキューレの数及び強さは術者の任意で調整できるが、数が増したり、個体の錬度が上がれば当然消費する魔力量や術者にかかる負担も大きくなる。現時点でのエリーゼの最大召喚数は七体、最高の材質はミスリル銀。召喚数と錬度を両立する場合は五体が限界。

使用デバイスは十字槍型のアームデバイス『ファーフニル』

ザンクト・ヒルデ魔法学院では初等部生徒会長を務め、本人は秘密にしているつもりだが、カリム・グラシア様に祈る会の名誉会員でもある。

推定魔導師ランク・空戦AAA。



アリカ・フィアット。九歳。ザンクト・ヒルデ魔法学院初等科三年生。

かつて聖王教会上層部の一角を担っていたフィアット家の末裔。フィアット家はダイムラー家と同じ聖王の遠縁の一族で、かつては聖王の従者の家系であった。アリカの血筋は厳密には分家筋にあたるが、正当なフィアット家の血筋は完全に断絶し、フィアットの血を受け継ぐものはアリカしか残っていない。故に現在でのフィアット家の正統な後継者はアリカであるのだが、本人にフィアット家を再興させようという意思はない。廃業してからすでに数十年が過ぎているため、聖王教会の上層部関係者でもフィアット家の存在を知らない者は少なくない。

両親共に聖王教会の騎士であり、特に母親であったミラージュ・フィアットは『聖魔導師』と呼ばれるほどの高位の魔導師だった。『聖魔導師』とは本来はフィアット家に与えられた屋号だが、正当なフィアット家を継ぐ者がおらず、フィアット家の名声・権威が完全に失われ、忘れ去られた今では、ミラージュ・フィアットの『聖魔導師』は最強クラスの魔導師に与えられるふたつ名に過ぎない。

聖王一族の正統な血縁が途絶えた現在で、聖王の血を受け継ぐ数少ない人物の一人。しかし、フィアット家がすでに完全に断絶してしまっているので、正式には信仰の対象にはならない。

左右で色の違う瞳『聖王の印』を所有。そのため、聖王関係者かと疑われることもあるが、面倒事を避けるためか、それとも本人も知らないのか定かではないが、アリカ本人は聖王関係者であることを否定している。

両親とはすでに死別。父親はアリカが物心つく前に、そして母親も二年前に聖王騎士団の任務中に事故で亡くなった。母親っ子だったアリカにとって、ミラージュを失ってしまったことはかなりのショックだったらしく、聖王教徒でありながら神を否定するほどに落ち込んでいたが、高町ヴィヴィオと出会い、言葉を交わすことで立ち直り、現在は人並みの生活を送っている。

現在は父方の親戚であるハルトマン家の祖父母の下で暮らしている。なお、フィアットは母方の姓であり、アリカの生まれてすぐの頃は父方の姓であるハルトマンを名乗っていたが、父親が死んだ時に姓が母方のものになった。

推定魔導師ランク・陸戦E（魔法適正無し？）

次元管理局、無限書庫。

次元世界に散らばる無限の本を全て蒐集し、蒐集し過ぎて本の所在がまったく分からなくなってしまった本の海。

そして、無限書庫の司書資格を持つ高町ヴィヴィオにとって、そこは無限に広がる庭のようなものでもある。

「うーん……」

ヴィヴィオはその無限書庫の無重力に揺られながら、数枚の書類を手には唸っていた。その書類に書かれているのは、エリーゼ・ダイムラーとアリカ・フィアットの個人情報。そしてそれに加えて、ヴィヴィオのまだ知らない人達の個人情報。聖王の正統な血族が失われた現代において、聖王の血を受け継ぐ数少ない人物たち。この事件で、これから襲われる可能性のある人達。の個人情報が書き込まれた書類だ。

一部の関係者が『聖王信仰紛争』と呼ぶこの事件の中心人物であるヴィヴィオが、カリムに頼んで調べて貰ったものだ。

今までは犯人達の動きがあつてそれに対抗する形でしか動くことができず、対応も後手後手に回っていた。

しかし、この事件を解決するためには、これからは先手を打たないといけない。だからこそ、ヴィヴィオは現在に残る聖王関係者のことを調べていた。襲われる人を予測することができれば、対策を取り、相手側の襲撃に備えることができる。これ以上、巻き込まれる人を少なくすることができるのだから。

「頑張らないと……」

呟き、一回深呼吸。頭に新鮮な空気を送り込んで、停滞しかかっていた思考を再び活性化させる。そして、手に持つ書類に目を通してながら、ヴィヴィオの周囲を漂う分厚い本の内の一冊を取り、書類と読み比べる。

ただ漠然と聖王関係者のパーソナルデータを調べたところで、次のターゲットの予測にはならない。という理由で襲われているの

か、ということを考え、そしてその理由に合致する人物を割り出さなければならぬ。

今回の犯人は、おそらく聖王の狂信者だ。最大の目標は、当然ヴィヴィオ。聖王陛下本人である。それならば、現代において聖王に近い人間が、第二のターゲットになるのではないか。ヴィヴィオ達はそう考えた。

そこで、ヴィヴィオは過去の資料と照らし合わせながら、現代において聖王を受け継ぐ人達がどれだけ聖王に近いのかを調べることにした。幸いなことに、現代において聖王を受け継ぐ人達というのはほとんど例外なく聖王教会の上層を担うか、そうでなくても聖王時代から続く名家であるため、資料探しは思ったほど難航しなかった。そういう名家の初代とは、大抵古代ベルカの歴史に関わっているのである。その辺の調べ物は、ヴィヴィオにとってはお手の物だ。古代ベルカの歴史に関わることなので、セインやオットー、デイドといったナンバーズ組、場合によってはルーテシアやアギトに協力を要請することもできる。後は、聖王との関連性をピックアップし、比較すればよい。

「ヴィヴィオ」

資料を読み進めるヴィヴィオの後ろから、声をかける人物。

ヴィヴィオは資料から手を離さず、首だけ後ろに向けてその人物を確認した。

「エリーゼさん」

「これが、エリーゼ家とフィアット家に関する資料ですわ。……最

も、私はこういった探査魔法が苦手ですので、あなたほど有用な資料を探せたとは思えないのですけど」

少し不安げにそう言いながら、エリーゼはヴィヴィオに古い文献を三冊渡した。

ヴィヴィオは改めてエリーゼに向き直ると、手にしていた資料を一旦置き、エリーゼが手渡した資料のうちの一冊をパラパラと捲った。

「……………いえ。十分ですよ、エリーゼさん。多分これ、私がエリーゼ家について検索したときにも、お世話になる本だと思いますよ」

「……………そうですか」

ヴィヴィオの言葉に、ホッと胸を撫で下ろすエリーゼ。おそらく、本当にこういった魔法が苦手なのだろう。

落ち着いているようで、意外と感情が表にでてくるのがエリーゼなのだ。

「ヴィヴィオ」

ヴィヴィオのことを呼ぶ声が、もうひとつ聞こえた。

その声の聞こえてきた方向に、ヴィヴィオとエリーゼが同時に視線を向ける。

「アリカちゃん」

「言われた資料、ちゃんと元の場所に帰してきたよー」

「うん。ありがとう、アリカちゃん」

「うっん。私には、このくらいのことしかできないから」

首を横にふるアリカ。

「そんなことないよ。私はまだ身体が上手く動かせないから、十分助かるよ」

三日前の訓練場封鎖事件。

その事件の解決と引き換えにヴィヴィオは魔力の限界を突破、その反動で魔力を一時的に失い、身体もほとんど動かせなくなってしまった。三日が過ぎた今では魔力もある程度は回復したが、それでも通常時の半分程度しかなく、身体の節々も動かすたびに軋む。早い話が、重度の筋肉痛のようなものだ。

そんな身体では、通いなれた無限書庫とはいえ、満足な調べ物ができない。

そこでヴィヴィオは、友人であるアリカとエリーゼに協力を要請した。検索能力そのものに関しては無限書庫の正式な司書であるヴィヴィオに比べるべくもないが、それでも一人で調べるよりはよっぽど効率が良い。

作業分担として、ヴィヴィオは総合的に過去の資料検索とパーソナルデータの照らし合わせをし、エリーゼは一般開放区域に限定した資料検索、そしてアリカは資料の片づけやその他雑用、といっ

た具合である。

この無限に広がる無限書庫においては、資料を元の場所に戻すだけでも一苦勞だ。魔法もろくに使えない今のヴィヴィオでは、それをやってくれるだけでもかなりの助けになる。

「ヴィヴィオも、ですか」

「あはは、エリーゼさんもまだ調子が戻らないんですか？」

「ええ。不本意ながら」

どうやら、エリーゼの身体も完全には回復していないらしい。

もし、今ヴィヴィオ達が襲われてしまったらほとんど抵抗できずに捕まってしまうが、時空管理局から聖王教会のカリムの家までは転送ポートひとつで移動できるため、危険はほとんどない。

次元の海と陸の守護の要である時空管理局本局。聖王教会騎士団長であるカリム・グラシアの邸宅。この二か所で騒ぎを起こそうとする人物がいるとしたら、それはよほどの馬鹿か、無知か。あるいは歴史に名を残す大物だろう。

「……それにしても、驚きましたわ」

「？ 何がですか？」

「？」

「フィアットさんの家柄のことです」

「ああ、なるほど」

カリムに頼んで調べて貰った、現代において聖王を受け継ぐ者の資料の中に含まれていたアリカの資料。

それは、フィアット家が聖王の血を受け継ぎ、かつては聖王教会の上層部の一角を担っていたというもの、そして現在ではフィアット家は断絶し、アリカしか残っていないというものだった。

「私も、ダイムラー家の次期当主として、現在で聖王の血を受け継ぐ一族のことを大体は知っているつもりでしたが、フィアット家のことは知りませんでしたわ」

心底驚いた、といった様子のエリーゼ。

彼女にとっては、自分の知らない聖王を受け継ぐ一族の存在が予想外のものだったのだろう。

なぜなら現代において、聖王の血を僅かでも受け継ぐということは、そのまま信仰の対象になるということなのだから。エリーゼも信仰の対象であり、そのことを誇りにしている。故に、聖王を受け継ぐ、名誉と由緒のある者でありながら表舞台に出てきていないことが、彼女にとっては意外なのだろう。

「仕方ありませんよ。フィアット家なんて、もう何十年も前に廃業したような家系ですし。それに、今では私しか残っていませんから」

しかし、エリーゼに答えるアリカの声は、どこか寂しげだった。



三人の間にある空気が、少し変わった。

「……ごめんなさい、フィアットさん」

「……どうして謝るんですか？」

「いえ、その……辛いこと、思いださせてしまったようですから」

おそらく、言ってしまったから、しまった、と思ったのだろう。

エリーゼは聡い。だからこそ、アリカのほんのわずかな変化に気付いたのだ。

だから、とても申し訳なさそうに、エリーゼはアリカに謝った。

今では私しか残っていませんから。

その言葉が意味するところは、つまり。

「……気にしないで下さい。私の両親が亡くなったのは、もう昔のことです。今は祖父母が良くしてくれますから、私も、今ではそんなに気にしていませんし」

嘘だ。

ヴィヴィオはそう思った。

気にしていないのなら、本当に立ち直っているのなら、そんなに悲しい声が出るわけじゃないか。そんなに悲しい笑顔なんて、するわけじゃないか。

アリカの悲しみの深さを知るヴィヴィオは、それでも平気をアピールするアリカを、複雑な気持ちで見つめた。

オッドアイ。

聖王の印。

二人が知り合うようになったきっかけはそれだが、二人が仲良くなった理由は、アリカの両親のことに関係する。

二人が出会ったのは、ヴィヴィオがザンクト・ヒルデ魔法学院に入学してから、少し過ぎてからのこと。

アリカが母親を亡くしてすぐ、精神的にスタボロで、どん底にいた頃のことだった。

幸いにも、ヴィヴィオと友達になってからは、時間が癒してくれたというのもあるのだろう。二人でいるときにはアリカは少しずつ笑うようになり、次第に本来の明るさを取り戻していったのだが。

『神様なんて、この世に存在しないんだね』

そう、吐き捨てるように言ったアリカのことを、ヴィヴィオは今でも覚えている。

今年の頭くらいまで、朝のお祈りや、月に一回くらいにある礼拝すら拒否していたくらいだ。

アリカと同じく本当の両親がないヴィヴィオであるが、ものご

ころついたときから、優しい両親や、素敵な仲間達に囲まれて育ってきたのだから。

アリカがどれだけの絶望を味わったのか、ヴィヴィオには想像もつかない。

「……本当に大丈夫、アリカちゃん？」

「大丈夫だよ。もう、ヴィヴィオは心配症なんだから」

言い、少し困ったように微笑むアリカ。

その笑顔が、あまりにも儚げで。

ヴィヴィオは思わず、アリカのことを抱きしめていた。

「……………ヴィヴィオ？」

「無理しちゃ、駄目だよ」

ヴィヴィオは、アリカが本当のどん底にいた時のことを知っている。

知っているからこそ、今のアリカがどれだけ不安定なのか、分かっ  
てしまっ

「そんなんじゃない、また、アリカちゃんが壊れちゃう。……私は何も  
できないけど、お話を聞くことくらいはできるから。一緒に考えて、  
一緒に泣くくらいならできるから。だから、アリカちゃん。そんな  
に、なんでも一人で抱え込まないで」

ぎゅ、と、アリカを抱きしめる腕に力がこもる。

「……………ありがとう、ヴィヴィオ。でも、私は本当に大丈夫だから」

「……………本当に？」

「本当だよ」

優しく、アリカがヴィヴィオを抱きしめ返した。

「まだ、昔のことを笑って済ませることはできないけど。でも、きつとすぐに、私は普通に過ごせるようになる。悲しみに囚われずにお母さんの話になっても、きつと、笑っていただけるから」

「アリカちゃん……………」

抱きしめられた状態で、今のヴィヴィオには、アリカの表情が見えない。

ただ、ヴィヴィオは、アリカが優しく微笑んでいるような、そんな気がした。

「ごめんなさい、フィアットさん」

「エリーゼさん。……………私は、気にしていませんよ」

「でも……………」

エリーゼは、とても真面目で誠実な人だ。

だから、アリカに悲しいことを思い出させてしまったことを、本当に後悔しているのだろう。

「でしたら……私のことも、アリカ、って呼んでください」

「え？」

「悪いことをした、と思うのなら、私のことも名前で呼んで下さい。……ヴィヴィオが、教えてくれたんです。悲しいことがあっても、友達がいれば、乗り越えられるって。名前を呼べば、友達になれるって。」

どこまでも穏やかなアリカの声。

エリーゼはその声に、数秒だけ戸惑ってから……、それから、笑顔で頷いた。

「分かりましたわ。……アリカ」

「はい。ありがとうございます。エリーゼさん」

微笑みあう、アリカとエリーゼ。

二人の優しい雰囲気にあてられて、ヴィヴィオもいつの間にか、笑っていた。

「結局、これといった手掛かりにはなりませんでしたわね」

無限書庫からの帰り際、エリーゼが呟いた。

「そうですね……」

その言葉に、ヴィヴィオは頷く。

あれから数時間、ヴィヴィオ達は過去の文献と書類の情報を照らし合わせ、比較し続けた。

その結果として分かったのが『現代に残る聖王の継承者達に、差異はほとんどない』ということだった。一応、聖王の魔法の一部を使用することができるエリーゼと、聖王の印を持つアリカが聖王に近しいと言えないこともないが、精々そのくらいだ。

結論として、大した手掛かりにはならなかった、というのが正直な意見だった。

「折角、司書長さんをお願いして、禁書区画の本も探してもらったのに。残念でしたね」

エリーゼの言葉に、アリカが相槌をうった。

アリカの言うとおり、一般開放区画や非公開区画では埒が明かない、と思ったヴィヴィオ達は、無限書庫の若き司書長であるユーノをお願いして、禁書区域の検索も依頼したのだ。

無限書庫は、おおまかに言えば三つの区画分けが成されている。

一つ目は、普通の人でも許可無しで資料の検索ができるように情報が整頓された、一般開放区画。いわゆる、普通の図書館のような場所である。

二つ目は、一般人も許可を得れば使用することはできるが、資料がまったく整頓されておらず、司書並の検索能力が必要とされる非公開区画。この区画に、無限書庫に収められている本の八割以上があると言われている。

そして三つ目が、非公開区域の一部である、禁書区画。例えば秘匿級ロストログアの在り処やその操作方法など、一般人、場合によっては管理局局員にすら開示することのできないことの記されている本が収容・封印されている区画である。この区画の本を検索するには、管理局上層部の許可を得るか、司書長に直接本の検索を依頼しなければならぬ。なぜなら、この区画にある本一冊あるいは封印されている情報が世に流出しただけで、次元世界を巻き込む大事件に発展しかねないのだから。

だが、ユーノをお願いして、禁書区画の情報も調べたが、いいが、結果は芳しくなかった。

「……………」

顎に手をあて、考え込みながら歩くヴィヴィオ。

「ヴィヴィオ、どうかしましたか？」

その様子を不審に思ったのか、エリーゼが話しかけてきた。

「いえ……。もしかしたら、ひょっとして、私達は何か思い違いをしているんじゃないかな、って」

「思い違い？」

ヴィヴィオの言葉に、アリカとエリーゼが首を傾げる。

「禁書区画を探してすら、有用な情報は得られなかった。ですから……私達は、何かとんでもない勘違いをしているんじゃないかな、って思っただけです」

「……よく分かりませんわね。資料が無かったことが、どうしてそういう結論になるんです？」

分からない、といった具合に首を傾げるエリーゼ。

アリカも同じように、表情を曇らせて俯いていた。

「私も、なんとなくそう思っただけで、確証はないんですけどね」

自分の考えに確証が持てないのか、弱弱しく笑うヴィヴィオ。

無限書庫にも情報がない。普通の人ならば、それでも納得するだろう。



だが、ヴィヴィオは無限書庫の司書として、ここで調べ物を長い間してきた経験がある。

その経験が、少しだけ、違和感を告げていた。

その違和感は何なのか、ヴィヴィオには分からないのだけれども。

「……変なことと言って、二人を困らせちゃいましたね」

「いえ。そんなことはありませんよ」

「そうだよ、ヴィヴィオ。私達の中ではこういうことにはヴィヴィオが一番優秀なんだから。ヴィヴィオが思ったことが、何かの手がかりになるかもしれないだし」

笑顔で、励ましの言葉を紡ぐエリーゼとアリカ。

二人の思いやりが、ヴィヴィオには嬉しかった。

「ありがとう。エリーゼさん、アリカちゃん」

「どういたしまして」

「全然構わないよ、ヴィヴィオ」

笑い合う三人の少女達。

確かな情報こそ得られなかったが、ここで得たモノは大きい。

だから、今日のこの時間は、決して無駄ではない。

エリーゼとアリカが友達になったこと、アリカが本当の意味で立ち直る可能性があること。それが分かっただけで、今日の収穫は十分だ。ヴィヴィオはそう思うことにした。

「さあ、早く帰りましょう。ヴィヴィオ」

「そうだよ、ヴィヴィオ。情報が無かったものは仕方ないんだしさ」

ヴィヴィオに向けて、最高の笑顔を向けてくれる二人の友達。

ヴィヴィオはそんな友達に、最高の笑顔を返すのだった。

## 第九話 信じたくない真実

金属と金属 刃と刃がぶつかり合う音が、訓練場に響き渡る。

周囲に満ちるのは、撒き散らされた濃厚な魔力エネルギーと、闘気。それらの、戦いの場の空気に慣れていない者がその場に踏み込めば、その重圧に中てられてしまうほどの密度。そして、それと同時に理解するだろう。これは殺し合いではない。己の魔導と誇りをかけた試合なのだ。あるいは命よりも大事なものをかけた、本気の真剣勝負なのだ。

その戦いの渦中にいるのは、一人の女性と、それに相對する二人の少女。

女性は凜とした佇まいの赤毛のショートヘアで、戦闘用の軽装に身を包んでいる。その両腕に振るわれる得物は、双剣型のデバイス『ヴィンデルシャフト』

そして少女の一人は、ブロンドの長髪を風になびかせる、碧い瞳の少女。手足がすらりと長く、戦いの中にあっても全身から高貴な雰囲気がいじみ出ている。構えるのは、十字槍型のデバイス『ファーフニル』

そしてもう一人の少女は、紅と翠の瞳を有する少女。この中で一番小柄だが、この中で最も何かを感じさせる。相棒は、ひし形十字を模した魔導師の杖。デバイス『ザイフリート』

「ヴィヴィオ！」

「はい、エリーゼさん」

唐突に、十字槍を構えた少女が叫び、相対する赤毛の女性に向かって飛び出す。身長よりも長い十字槍をまるで自分の手足の延長であるかのように自在に振るい、その長さを利用した遠心力の乗った重い一撃を放つ。それと同時に、彼女の傍に八発の魔力弾が並走する。その魔力光は虹色。一撃を放つ彼女の十字槍の切っ先の動きに連動して四発が動き、残りの四発は赤毛の女性の動きを封じるように、左右から先行して女性に迫る。遠心力の乗った一撃に加え、魔力弾の威力が付加された、必殺の攻撃。

避けることの叶わないそれらの連撃を　その女性、シスターシヤツハは　薙ぎ払った。一瞬の動き、たった一度の閃き。それだけで牽制の四発の魔力弾をたたき落とし、その反動と勢いを遠心力に加算して更に力を上乗せ、頭上から迫りくる十字槍＋魔力弾の一撃を、双剣を交差させ、受け止めた。

鈍い金属音が響く。

必殺の一撃が通らなかった。だからと言って、怯んだり動揺したりするほど、この少女達は温くない。相対する女性は明らか格上。自分達の攻撃がすんなりと入ることなど、端から期待していない。だから、その一撃を入れるために。先の先を読み、一人ではなく、二人の最上級のコンビネーションで、攻め立てる。

攻撃は最大の防御。そのことを、彼女達は肌で感じ取っていた。

受け止められ、勢いが完全に殺されたファールニルを、エリーゼは、何の躊躇いもなく　手放した。

「っ」

流石に予想していなかった手段に、シャツハは一瞬だけ表情を曇らせる。その僅か一瞬以下の隙をエリーゼは見逃さない。魔力で固めた空を蹴り、上からの攻撃を防ぐために胴体がから空きになっているシャツハの懷に潜り込む。その移動の運動エネルギーを殺さず、地面を力強く踏み込む。震脚。踏み込んだ動きを、全身の動きに連動させ、右の拳をシャツハの身体に打ち込む。

拳が身体にめり込むその刹那、シャツハは自身の胸の位置を中心に回転し、エリーゼの拳を回避する。この一撃は当たるところではない。天地が反転した状態で、エリーゼの頭上に来るシャツハ。エリーゼが体勢を整えて振り向くよりも、シャツハが回転を終えて地面に着地する方が早い。

シャツハの視線が回転運動によりエリーゼの背後に向いたところで、シャツハが目を見開く。

すでに、チャージが完了していた。

光輝く、ベルカ式の魔法陣。ひし形十字のフレームを取り囲むのは、ミッドチルダ式の環状魔法陣。その洩れ出でる魔力の揺らめきだけで、その威力がありありと想像される。その魔力光は、虹色。ベルカの地にて希望の色を示す、聖なる光の輝き。

ヴィヴィオが、シャツハに狙いをつけていた。

『Divine Buster』

「デイベインバスター！」

魔力の奔流。全てを屠る必殺の一撃。非殺傷設定になっているはずなのに、本能が危険を告げる。命の危機を感じてしまう。その砲撃は、エリーゼには当たらない。エリーゼの頭上にいる、無茶な体勢をし、すぐには回避行動に移れないシャツハに向けられている。その砲撃は僅かな時間で射程圏を撃ち抜き、エリーゼの頭上を、吹き飛ばした。

「やった!？」

今の一撃は、シャツハに直撃したと思った……が。

異変に最初に気付いたのは、シャツハの傍にいたエリーゼだった。

「ヴィヴィオ、後ろ！」

「え!？」

振り向く。振りかぶられたヴィンデルシャフト。

ヴィヴィオは反射的に防御結界を展開する。魔法ではない。絶対防御を誇る無敵の盾、ヴィヴィオのみが使用することのできる固有スキル、聖王の盾。ヴィヴィオの意志に反応して、虹色の防壁がヴィンデルシャフトの一撃をほとんど反動もなく食い止める。

だが、ヴィンデルシャフトは二振りの双剣。

反対側から迫る二撃目を、ヴィヴィオは、通常の魔力防壁で受け止める。反射で発動できるような通常の魔力防壁では、シャツハの

一撃に耐えるのは辛い。聖王の盾と違い、相殺しきれなかった威力がヴィヴィオを襲う。

「う……わ!？」

そのまま、下から掬いあげられるように弾かれるヴィヴィオ。足が地面を離れ、浮遊感が全身を襲う。咄嗟に体勢が整えられない。視界に映るのはシャツハが更に振りかぶり、三撃目をヴィヴィオに叩き込むための予備動作。両腕を同じ側に振り、二つの刃を一点に同じ方向からぶつけることで、最高の破壊力を加える一撃。分かっているのに、シャツハの方が動きが早く、対応できない。

不意に、視界に映る姿が一変する。エリーゼが弾かれたヴィヴィオとシャツハの間に割り込んだ。三撃目をシャツハは止めず、そのままエリーゼに叩き込む。十字槍の穂先を地面に突き刺し、両腕で支える。ファーフニルの柄のほぼ真ん中に直撃する三撃目。柄がしなり、穂先を突き刺した地面が抉られるが、エリーゼは弾かれない。反撃に遷るために穂先を地面から引き抜き、即構えの体勢に入る。身体を限界まで捻り、柄の中心を左手で持ち、石突に右手を添える。身体の内りと両腕の力を最大限に発揮できる、突きの構え。そこまで構えて。

エリーゼの首筋に、正面から、ヴィンデルシャフトの切っ先が突きつけられていた。

十字槍の柄に加えた一撃で止めずそのまま振り抜き、それまでのように遠心力を加えた重い一撃でなく、左腕に持つ刃だけを真っ直ぐと突き出した、迅さ重視の一撃。首筋に突きつけられた刃を下手に払おうものなら、その勢いを利用され、遠心力の乗った右腕の重い反撃が来るだけだ。この不安定な姿勢で、その反撃に対応するこ

とはできない。

「ザイフリート！」

『フォーム？・バルムングフォーム』

その間にヴィヴィオは体勢を整え、ザイフリートのフォーム？を発動させる。形成されるのは銀色に輝く刃。ひし形十字の意匠は鰐の部分に反映される。柄と鰐の付け根部分がスライドし、内蔵されたカートリッジがロードされる。排出された薬莢が地面に落ちる頃には、ヴィヴィオはシャツハの背後に着いていた。

エリーゼを助けるために、振りかぶったザイフリートを八双の構えから切りつける。

しかしその刃がシャツハに届く寸前に、ヴィンデルシャフトの刃が、ヴィヴィオの首筋に辿り着いていた。動きを止めざるをえないヴィヴィオ。一瞬にも満たないほんの僅かな時間。ヴィヴィオは首筋につきつけられた刃を見つめながら、気付く。シャツハの足元に、自分のものではない薬莢が転がっていることに。条件は同じ、一発のカートリッジロード。生じた差は刹那よりも短い。たったそれだけの時間差で、勝負が決していた。

何かに集中していると、時間はあっという間に過ぎてしまう。誰



しも、何かに熱中して気がついた頃には時間が過ぎていたことがあるだろう。

それは、ここにいる二人の少女にも当てはまる。

朝、まだ太陽が昇り切らない頃から訓練を始めたのに、いつの間にか太陽が真上に来ているのだから。夏の日差しは容赦がない。朝はまだしも、直接太陽の光が降り注ぐ昼時に野外で本気の勝負を繰り広げるなど、そんなことを繰り返していたら身体が持たない。ただでさえ辛く厳しい訓練なのだ。昼時は誰しもが避けたかった。

故に、エリーゼとヴィヴィオは、お昼の鐘が教会から聞こえた時に訓練を終了し、訓練場の隅にある大きな木の木陰に腰掛け、ゆっくりと汗を拭っていた。

「うはあ……」

バリアジャケットはまだ解除していない。何故ならば、ヴィヴィオとエリーゼは数時間の炎天下での激闘で、下着まで汗でべっとりと濡れているのだ。戦いの終わった今では、正直下着が肌に張り付いて、ベタベタして気持ちが悪い。そのため、今下手にジャケットを解除しようものなら、私服までべたつきそうで。それは流石に嫌だった。訓練のたびにこうなので、ジャケットを解除するのはシャワーを浴びる直前、ということにしている。

「この不快感は……馴れませんかね」

身体に張り付いた生地をはがしながら、エリーゼも呟く。エリーゼは誇り高い騎士だが、それ以前に年頃の女の子なのだ。戦闘中とはかくとして、それ以外では、こういったことを当然気にする。

「……シャワーが浴びたいなあ……」

大きな木に身体を預けたまま、ヴィヴィオが呟いた。訓練が終了すると同時に倒れ、その後しばらくは起き上がれないほどに疲弊していた訓練開始初期に比べれば、そんなことを気にする余裕がある分だけ、かなりの進歩である。最も、今でも体力も魔力も限界まで削られ、しばらく動きたくないまでは追い込まれているのだが。

「でしたら、今日の講評をしましょうか」

対して、ヴィヴィオとエリーゼの前に立ち、二人を見下ろしているシャツハは、汗こそかいているものの、極めて涼しい顔をしていた。これが本物の騎士なのか、それとただシャツハが無頓なだけなのか。二人にはまだ判断がついていない。

「切り込みも悪くありませんし、コンビネーションもできています。ですが、まだ相手の『先』までしか読めていません。それ以上の戦闘では『先（さき）の先（さき）』を読むことが求められます。ヴィヴィオさんもエリーゼさんも、ディバインバスターを当てるところまでは良いのですが、それから先が続いていません。その僅かな隙が、これからの戦いでは死活問題になってきます」

淡々と、今日の訓練の講評をするシャツハ。的を得た的確な評価に、ヴィヴィオとエリーゼも余計なことを考えず、シャツハの言葉に集中する。

「……しかし、最初のエリーゼさんの遠心力を乗せた一撃の動きに、ヴィヴィオさんの魔力弾の動きを連動付与させて破壊力を高めた攻

撃。あれは二人の息が完全に合っていないとできるものではありません。聖王教会に所属する騎士でも、あの一撃を防ぐことのできる者はそういないでしょう」

駄目な部分ははつきりと駄目だと告げる。良い部分は良いと褒める。指導の基本のようで、それができる人は中々いない。どうしても悪い部分に目が行きがちで、優れた部分への評価が二の次になってしまう教官が多い中、シャツハは基本に忠実で、堅実な訓練をしていた。

「個人の資質で言うならば、ヴィヴィオさんは接近戦に弱いです。具体的に言うならば、懷に飛び込まれた時の対応が遅れます。砲撃主体の戦闘スタイルを中心とするならば、懷に入られた時に瞬時に対応できるようにするか、懷に飛び込まれないよう、効果的な機動をするべきです」

「はい……」

「エリーゼさんは逆に、距離を置かれた時の対応があまり良くありません。ファーフニルの射程は他の得物に比べて長めです。だからこそ、その射程に無意識にこだわってしまい、敵と離れた時の対応が疎かになりがちです。せっかく詠唱魔法も使えるのです。それも駆使できるようにしないと」

「はい」

素直に頷くヴィヴィオとエリーゼ。

傍から見たらとんでもなく要求のレベルが高いのだが、この二人は他の騎士達とまともな訓練をしたことがないので、自分達の実力

の高さをあまり理解していない。故に、シャツハの言うことが普通だと思っているので、何の反発も抱かずに素直に受け入れているのである。ちなみに、二人の同年代くらいの騎士だと、まだ『敵から目を逸らすな』『自分の間合いを見極める』のレベルである。

「それでも……当初に比べたら破格の成長ぶりなのですけどね。特に、ヴィヴィオさんが」

「私ですか？」

「ええ。途中から訓練に加わったエリーゼさんですが、特にヴィヴィオさんの成長速度は目を見張るものがあります。もう、AAAクラスくらいの实力があるのではないですか？」

「AAAクラスですか……」

AAAクラスと言えば、確かほぼ独学で魔法戦闘を学んでいたのはが、今のヴィヴィオと同じ年代で習得していた魔導師クラスである。ここまで訓練して、ようやく当時のなのはに追いつくことができた。そのことが、ヴィヴィオには少し嬉しかった。

少しは、憧れの人に近づいていることに。

「では、今日はこのくらいにしておきましょう。先日伝えた通り明日は私の都合がつかないので訓練はなしですが、明後日は今日と同じ時間にあります。遅刻したりしないように」

『はい』

ヴィヴィオとエリーゼが同時に返事をする。

「それでは、今日はここまで」

『ありがとうございます』

「ありがとうございます」

立ちあがって、シャツハに頭を下げる二人。しかしすぐに、木に体重を預けた。

「あらあら。今日も駄目ですか」

「はい……」

「まだ……回復しませんよー」

シャツハの訓練は、訓練初期よりも更にスパルタになっていた。なにせ、本気で命を取りに来ているとしか思えない攻撃を繰り返してくるのだから。毎回毎回毎回毎回、寿命が縮まる思いである。体力も魔力も、毎回限界まで削り取られる。動くことはできるが、動きたくないというのが本当に正直な気持ちだった。

訓練後の、いつもの光景である。

「ヴィヴィオ、エリーゼさんー」

そして、このタイミングでこの声が聞こえるのも、最近のいつもの光景である。

「アリカちゃん」

「アリカ」

聖王教会のある側から走ってこちらに向かつて来るアリカの姿が見える。大きめの淵のついた帽子をかぶり、服装はライトグリーンのかみきりソールと、ヒラヒラしたミニスカートで、その手には、大きめのバスケットが握られていた。

「今日も訓練お疲れ様です」

二人の前にやってきて、アリカが労いの言葉をかける。その優しい物言いと言葉、そして鈴蘭のような爽やかな笑顔に、ヴィヴィオとエリーゼは毎回癒しを感じていた。

聖王教会第一訓練場閉鎖事件から二週間。夏休みも、半分が過ぎていた。

あの事件の後、エリーゼはヴィヴィオとカリムに、自分も訓練に混ぜてくれるようお願いをした。下心も何パーセントが含まれていたのかもしれないが、それ以外の九割以上はエリーゼは本気だった。あの事件で、エリーゼも何か思うところがあったのだろう。それから毎日、エリーゼはヴィヴィオと一緒に訓練を受けている。

訓練は朝四時から始まる。夏なので日が昇るのが早く、この頃には空が明るくなり始めている。訓練場に集合し、まずは準備体操から始め、基礎的な魔力運用法と身体の運び方、教会騎士風の体術の訓練、応用的な魔法戦闘の訓練といった具合に訓練は続く。そして最後、太陽が空の真上に昇り切る頃に、真剣勝負の模擬戦が始まる。最初の頃は訓練だけで疲弊し、模擬戦では二人掛かりで五分ともたなかったが、最近では十分くらいはもちこたえられるようになって

いる。しかし、まだシャツハに一撃を加えることはできていない。エリーゼとシャツハの魔導師ランクにはそれほどの差がないのに、である。いかに魔導師ランクというものが目安程度のものであるか、魔導師ランクをすでに所有しているエリーゼは思い知らされた。ヴィヴィオは魔導師ランクを持っていないので、良く分かっていないのだが。

訓練の後は大抵お昼時なので、そのまま昼食を取る。これも事件後、アリカが『何か協力をしたい』と申し出たので、二人の昼食はアリカが用意してくれる。何気にアリカは料理が上手いので、二人はアリカの作る昼食を毎回楽しみにしていた。

「今日は何、アリカちゃん？」

「今日はねー、じゃーん。クラブハウスサンドを作ってみましたー」

アリカがバスケットを開けると、そこには宣言通りのクラブハウスサンドが詰め込まれていた。種類が豊富であり、色どりも豊かなので見ていて飽きない。肉も野菜も、選びたいものが選べる。パンだけ見ても、厚切りの全粒粉で作った少し茶色くて香ばしい食パンと、こんがりと焼けたベーグルの二種類がある。パン屋に置いてあるみたいだ、とも思うけど、それと違うのは、中の具材から本当にアリカの手作りで、パン屋のそれよりもおいしいということだ。

「飲み物も、アイスコーヒーとオレンジジュースがあるよ。どっちでも好きな方を選んでくださいね」

アイスコーヒーはエリーゼのリクエストだったりする。

「いつもありがとう、アリカ」

「いえいえ。私には、これくらいしかできませんから」

飲み物の入ったコップを渡しながら、アリカがそう言った。

「アリカちゃんは、本当にお料理が上手だね」

「一人で暮らしてた時期もあつたからね。このくらいはできるよ」

話をしながらも、テキパキと食事の準備を進めていくアリカ。

その姿が可愛らしくて、ヴィヴィオもエリーゼも自然と頬が緩む。

これが最近流行りの萌えなのかなー、とヴィヴィオは考えた。

「はい、準備できたよ」

いつの間にか、食事の準備ができていた。

「それでは、いただきます」

『いただきます』

いただきますは、食材と料理を作ってくれた人に感謝をする言葉。ヴィヴィオとエリーゼは、本当にアリカに感謝をしながら、クラブハウスサンドにかぶりついた。

「……うわー、美味しいよアリカちゃん！」

「本当、私も驚きですわ」



それから、美味しくて笑顔になるヴィヴィオとエリーゼ。訓練で疲弊した精神も、一発で覚醒するほどの美味しさだ。今回はクラブハウスサンドだが、アリカの作る昼食は毎回バリエーションが異なる。昨日はざるうどんだった。小麦粉から自分で打ったらしい。麺に満足のいく腰があり、暑かったので冷たいざるうどんはスルスルと二人のお腹の中に収まった。昨日と今日だけでも、これだけ傾向が違うのだ。二人にとって最近の昼食は、辛く厳しい訓練後の、さやかな至福の時間だった。

「ありがとう、ヴィヴィオ、エリーゼさん。おかわりも沢山ありますから、沢山食べてくださいね」

そんな二人を微笑みながら、ゆっくりと見つめるアリカ。

そうして、穏やかな昼下がりが、過ぎていった。

訓練が終わって。三人で仲良く食事をして。

その後は、基本的に自由時間だ。

アリカがいれてくれたコーヒーを飲みながら、エリーゼは二人に

今日の予定を尋ねる。

「さて、今日はこれからどうしますか？ 明日はお休みですから、大抵のことはできると思いますけど」

訓練が始まった頃は、この自由時間を活かすことができなかった。極度の疲労のため、自分の部屋で寝ていることしかできなかったのだ。しかし訓練にも慣れた今では、こうしてこの後にするのを相談することができ。訓練後にはまちまちで、そのまま家に帰ることもあれば、三人でどこかに出かけることもあった。今は夏休みであり、そして三人は年頃の女の子なのだ。友達同士で仲良くどこかに出かけることがあったって、そのくらい許されるべきなのだから。

「んー、そうですねー。明日訓練がないのなら、これから買い物に出かける必要ありませんし……私は、特にしたいことはないですね」

「ヴィヴィオはどうですか？」

「私は、今日はちょっと調べたいことがあるので、この後は無限書庫に行こうと思います」

特にしたいことがないアリカと、何かしたいことがあるヴィヴィオ。

「あら、何か分かったんですか？」

「いえ。ちょっと、気になることができたので」

「ヴィヴィオ、お手伝いしようか？」

「ええ。私も特にすることもありませんし、力になれるようでしたら、私もお手伝いしますよ」

アリカとエリーゼの申し出。

二人共親切で言うてくれているので、とても嬉しいし、ありがたいのだが　ヴィヴィオは、それを断った。

「いえ。今日は、一人で調べたいことなので」

「そうですか。力になれないのが残念ですわ」

「ごめんなさい、エリーゼさん」

「謝らないで下さい。ヴィヴィオには、ヴィヴィオの都合があるのですから」

すんなりとひいてくれたエリーゼに、ヴィヴィオは心の中で感謝する。エリーゼは、察してくれた。これから調べることを、知られたくないことに。

「じゃあ、今日はここで解散だね」

もちろん、アリカも同様だ。何かあることを察してくれたのか、いつものようにそれ以上は何も言わなかった。そのことが、友達の提案を断ることが、ヴィヴィオには辛かった。

そして何よりも。

「そうですね。明日もお休みですが、何かあったら連絡を取り合いましょう。いつ、何が起こるか分からないのですから」

空になったコップをアリカに返し、エリーゼが立ちあがる。それに合わせて、ヴィヴィオとアリカも自分の荷物を持って立ちあがった。

「じゃあ、シャワーを浴びに行きましょうか」

「はい」

今日はここで解散だが、それよりもシャワーを浴びることが先だ。遊ぶにしても、家に帰るにしても、買い物に行くとしても、身体が汗でべとべとしている状態では嫌だ。

だから、三人で一緒にシャワーを浴びに行く。

これも、いつもの光景なのだ。

ここに来るのは、もう何度目になるのだろう。

数えたこともないし、数える意味もない。

無限書庫の無重力に揺られ、ある人を待ちながら、ヴィヴィオはそう思った。

「待たせたね、ヴィヴィオ」

思っていたよりも、その人は早くやって来た。

「ユーノさん」

ヴィヴィオが無限書庫で待ち合わせをする人物なんて、この司書長であるユーノか、なのはぐらしいしかない。

「いえ、私も今来たところですから。それよりも、お願いに応えてくれて、ありがとうございます」

そう言い、ヴィヴィオは深々と頭を下げた。

「……本当は、僕もあまり乗り気はしないんだけどね」

ヴィヴィオに対し、それまでの頬笑みを崩し、ユーノは苦い表情

をする。

今日ここにユーノを呼んだのは、他でもないヴィヴィオ自身なのだ。それは、ユーノに頼んでも、知りたいことがあったから。ユーノに頼まないと、知ることができないのだから。

「……やっぱり、駄目ですか？」

無理なお願いをしていることは、ヴィヴィオも承知している。

でも、それでも、我を貫き通してでも、知らないといけないうことなのだ。

「……いや。君も無限書庫の司書なんだ。正統な理由がある以上、君の依頼は無限書庫司書長として聞き入れなければならない。……だから、これは僕のエゴ……みたいなものさ」

「エゴ……ですか？」

「君を、親友の娘を、僕自身にとっても親友である君を、これ以上危険なことに巻き込ませたくない。これは無限書庫司書長としての意見ではなく、ユーノ・スクライア個人としての気持ちなんだ」

「そう……ですか」

自分の身を案じてくれているユーノに、ヴィヴィオは感謝する。ユーノの言う通り、これを知ってしまったえば、もう後に戻ることはいかないかもしれない。今以上の危険に巻き込まれてしまうかもしれない。知ってはいけないものを、知らない方が良かったことを、知ってしまうかもしれない。

「……ごめんなさい、ユーノさん。でも」

「分かってるよ。君は、あの高町なのはの娘なんだ。絶対に自分を曲げないことくらい、僕は良く知っている」

諦めたように、溜息をついて、ユーノは苦笑した。

「じゃあ、調べようか。『ブルースフィア事件』……ミラージ・フィアットが死亡した事件の、二年前の真実について」

なんとなく、予想はしていた。この事件の顛末。あの日あの時から、何かがおかしいと思っていた。事件が進むほど、その違和感は深まっていき、予感確信に変わっていった。ユーノに協力してもらって調べたことについてもそうだ。知らない方が良かったのかもしれない。だけど、知らないわけにはいかない。この事件の中心にいる人物として。

無限書庫の調べ物が終わった後、ヴィヴィオは時空管理局本局のあるカフェテリアに向かった。ここでも、ある人と待ち合わせをしているのだ。

約束の時間より少し余裕を持ってその場所に着いたのに、そこにはすでに約束の人がいた。

「ごめんなさい、待たせましたか？」

「ああ、ヴィヴィオ。いや、僕としては、仕事をするよりも君とお話していることの方が楽しいからさ。仕事をさばらせてもらったよ」

「……相変わらずですね。ヴェロツサさん」

少しばかり呆れたようにヴィヴィオが見つめるのは、ヴェロツサ・アコース。本局の凄腕査察官にして、古代ベルカ式の数少ない継承者。カリムの義弟。極めて優秀なのだが、女好きなのと、仕事をさぼりがちなのが玉に傷だ。

「仕方ないよ。性分だからね」

ヴェロツサは悪びれる様子もなく、おどけたように言った。

「カリムさんとシスターシャツハが怒ってましたよ」

「まったく、カリムもシャツハもいつまでも僕を子供扱いして」

拗ねたようにそう言うが、原因は自分自身にあることを自覚しているあたり、確信犯ではいのか。ヴィヴィオはそう思っている。

「……で、ヴィヴィオ。君が僕にお願い、とは、どうしたんだい？何か調べて欲しいことでもあるのかい？」

一瞬で、雰囲気が変わった。口調も態度もそれまでのふざけた会



話と変わらないのだが、視線が、醸し出す気配が、まるで別人だ。本人に悪気はないのだろうが、まるで探りを入れるかのように、心の中を見透かそうとしているかのように、自分のことを見ている。査察している。

こういったところで、ヴェロッサの能力の高さを、ヴィヴィオは感じていた。

その視線に押されそうになりながら、ヴィヴィオは一旦気持ちを整えてから、口を開く。

「はい。調べて欲しいことがあるんです。それも、ヴェロッサさんにしか分からないこと、なんです」

「ほう」

ヴェロッサが査察官として極めて優秀なのは、その能力の高さもあるが、ヴェロッサの持つ古代ベルカのレアスキルにも一因する。

「分かった。他ならぬヴィヴィオの頼みだ。そのお願いを受け入れよう。……で、何を調べればいいんだい？」

「ありがとうございます。それで、ヴェロッサさんに調べて欲しいのはですね」

「うん」

ヴィヴィオは自分の胸に手を当てて、答える。

「私自身のことを、調べて欲しいんです」

ピースは揃った。

コマも、すでに揃っている。

後は、賽を投げるだけだ。

ヴィヴィオは、どちらかと言えば頭が良い方だ。

元の能力の高さ、生まれ持って植えつけられていた知識、聖王のゆりかごで学習した技能、無限書庫で学んだありとあらゆること。

九歳にしては、ヴィヴィオは聡明だった。総明すぎた。

だから、不信に思ってしまった。

違和感を感じてしまった。

だから、気付いてしまった。

この事件の、真実に。真実の裏側にある、本当の出来事に。

「……………」

知りたくなかった。

嘘であって欲しいと思った。

思い違いであって欲しいと、心の底から願った。

しかし、その願いは、無残にも打ち砕かれてしまった。

調べれば調べるほど、自分の予感確信は確信に変わっていった。

そして今日。

それまで調べられなかった領域に足を踏み込んで、確信を得てしまった。

今の生活は、ヴィヴィオにとってとても魅力的だった。朝早く起きて、クタクタになるまで訓練をして。仲の良い友達と一緒にご飯を食べて、それから一緒に遊んで。夏休みだから、学校のことを考えなくてもいい。毎日が充実していて、楽しくて。

だからヴィヴィオは、怖れた。今の生活を、幸せを、壊してしまうことを。

最後の望みに、ヴィヴィオは願いを託す。

これがどうか、自分の思い違いでありますように。

どうか、ただの思い込み、勘違いでありますように。

私は、ただ、友達と、平穏な日々を過ごしたいんです。

だから、どうか神様。

エリーゼさんが信仰し、アリカちゃんが否定する神様。

どうか、あの子のことを救ってください。

あの子に、平穏な日々を、与えてください。

もし、それすらも叶わないのならば。

私は、あなたのことを、自分自身を、赦せません。

一縷の望みに託し、ヴィヴィオは携帯端末のコンソールを開く。

明日、全てを終わらせる。そのために。

ピースは揃ってしまった。

コマは、揃ってしまう。

だから後は、賽を投げてしまっただけだ。

「……もしもし、カリムさんですか？ 私、ヴィヴィオです。これから少し、お時間いいですか？」

現実はいくとも残酷なのか。

救いは、有り得ないのか。

そうならば。私は神様なんて。

大嫌いだ。

## 第十話 だいきらいなかみさまへ 前編

### 聖王教会。

かつて古代ベルカ時代の戦乱末期に活躍し、形はどうあれ戦争を終結させ、世界を一応は平定した聖王陛下を信仰する、この世界でもかなりの規模を誇る聖王教の、総本山。ミッドチルダの北部にベルカ自治区と呼ばれる独自の国家のようなものを保持し、その場所で聖王の教えを説いている。周囲が山々に囲まれているので緑が多く、聖王教の総本山としてだけでなく、自然の多い観光地としても人気の場所だ。聖王教徒にとっての聖地でもあり、教会があるだけに、結婚式も連日行われている。捉え方によっては、幸せの場所と言えなくもない。

その聖王教会を中心に、最近この辺りを騒がせている事件がある。

一部で、聖王信仰紛争と呼ばれる事件。

現代において、聖王と繋がりがある人 例えば、虹色の魔力光カイゼル・ファルベ。例えば、左右で色の違う瞳、聖王の印。例えば、聖王一族だけが使用することのできる特殊技能、聖王の魔法。

を所持する人物が、何者かに襲われ、拉致されそうになる事件。

近年になって盛んになった、失われた聖王の技術を復活させようという活動が、その事件の発端になっていると言われている。信仰に殉じ、聖王のために全てを捧げ、聖王のために何を犠牲にしても構わない。そういう思考を持った狂信者達の犯行だと、関係者は予測している。

この事件のたちの悪いところは、聖王と繋がりがあるとみなされただけで襲われた主な被害者が聖王教徒ですらない、まだ年端もいない少女であるということ。今までに判明しているこの事件の被疑者が、全員聖王教会関係者であるということ。そして、捕縛された被疑者達は一人の例外もなく、事件の真相を尋問される以前に自害し、その裏側には聖王教会の上層部が絡んでいると予測されること、である。

事件の特性上、おおっぱらに捜査をするわけにもいかず、また、事件の手がかりもほとんど掴めずにいた。そんなこの事件の解決の立役者となっているのは、この事件の主な被害者であり、中心人物。この事件が始まるきっかけともなった、一人の少女。

彼女は、待っていた。

待ち合わせの場所は、事件が初めて起こったあの場所の近くの広場。周囲を緑に囲まれ、目をやればすぐそばに森が広がっている。広場と言っても、整地されているだけで特別なものがあるわけではなく、少しのベンチャ机があったり、時計が設置されているだけの簡素なものだ。子供達がここで遊んだりするには十分な広さがある。自然が豊富なので、ここにきてぼんやりとするのも悪くないかもしれない。

その場所、設置された時計の前で、高町ヴィヴィオは待っていた。

待ち合わせの時刻は午前十時。ヴィヴィオは早めに待ち合わせの場所に訪れたので、現在の時刻は午前九時五〇分。そろそろ夏の日差しが強くなり、気温が上昇してくる時間帯だ。

後もう数分もすれば、待ち人がやってくる。

その事実、ヴィヴィオは無意識に握っている手に力を込めた。

できれば、思い違いであって欲しい。自分の勘違いで、気のせいであって欲しい。

昨日の夜から、ずっとそんなことを考えていた。

うまくいけば、この事件は解決する。これ以上の被害者を、犠牲者を増やす前に、この世界に平和が戻ってくる。もちろん、ヴィヴィオはこの事件が解決し、平和な日常が戻ってくることを心から望んでいる。しかし、それと同時に、今日これから起こる出来事で、この事件が解決しないことも望んでいた。

何故ならば、今日これからヴィヴィオがしようとしていることは

「ヴィヴィオ」

不意に聞こえた声に、全身がビクリと反応してしまう。

やたらとうるさい心臓の音を意識しながら、ヴィヴィオは声のする方に振り向いた。

「早かったね。まだ時間に余裕があるよ」

「待ち合わせの時間に早めに集合するのは、当たり前だと思うよ。ヴィヴィオもそうするでしょ？」

「まあ、ね。……ごめんね、こんな時間に呼び出しちゃって」



「うん。いいよ。今日は私もすること無かったし。一日暇に過ごすのも悪くないけど、やっぱり友達と、ヴィヴィオと一緒にいることの方が楽しいよ」

「ありがとう」

「いって。それに、エリーゼさんも来るんでしょ？ まだ来てないみたいけど」

「エリーゼさんは……用事があって、少し遅れるって。だから、先に行っててください、だって」

「そっか。じゃ、先に行って待つてようか。今日は何処に行くつもりなの、ヴィヴィオ？」

「騎士カリムが、教会騎士さん達の仕事を見学させてくれるんだ。だから、まずは聖王教会に向かうよ」

「成程。じゃあ、朝から参加できなくて、エリーゼさんは残念だろうね」

「きつとね。エリーゼさん、騎士カリムのこと、本当に好きだから」

「……いつまでも、ここにいても仕方ないね。じゃあ、行こっか。ヴィヴィオ」

「うん。そうだね」

言い、彼女はヴィヴィオに背を向けた。

その瞬間をヴィヴィオは見逃さず、予備動作なしに一瞬でザイフリート第二形態、バルムングフォルムを起動。その刃を、背後から、彼女の首筋に押しあてた。

首筋に刃を押しあてられ、彼女は歩を止めた。

「……………ヴィヴィオ、どうしたの？ 冗談にしては、たちが悪いと思うんだけど」

「ごめんね。だけど私は、ここではつきりさせないといけないんだ」  
「だけど、心のどこかで、ヴィヴィオは確信していた。」

予想は覆らない。私が気付いてしまったことは、正しい。

だから、一縷の望みをかけて。泣きそうになる自分を抑え込みながら、問う。

「あなたが……………この事件の犯人なの？ アリカ・フィアットちゃん」

静寂。

二人の周りには、不自然なくらい誰もいない。

人通りが少ない場所を、ヴィヴィオが選んだのだ。

くしくもこの場所は、最初の事件が起こった場所の近く。

その森は、ヴィヴィオの視界に収まっている。

「……どういことなのかな、ヴィヴィオ？」

首筋に刃を当てられながら、アリカが尋ねる。ヴィヴィオの気分次第で首が刎ねられる状況だというのに、いつも明るいアリカからは想像もできないくらい、不自然なほど、静かな声だった。

「……一番最初に、アレ？　って思ったのは、最初の事件、私とアリカちゃんが、あの森の中で襲われたあの事件の直後だった。とは言っても、私はその違和感が何なのか、その時には分からなかったけど」

有り得ないくらい、涼しい表情を崩さないアリカ。

その表情に、嫌な予感を感じつつ、ヴィヴィオは、話を続けた。

「次におかしいと思ったのは、エリーゼさんとの決闘の時に起こった事件。私が、あの黒色の結界に閉じ込められた事件。事件の後に、

アリカちゃんが、避難勧告の出た訓練場に残って、私達の無事を祈ってずっと祈ってくれていたって聞いてから」

「どうして、それがおかしいことなの？ 友達が危険だったら、その無事を祈ってお祈りすることは、普通のことだと思っただけだな」

「だって、アリカちゃんがお祈りをするなんて、有り得ないんだから」

ヴィヴィオは、覚えている。

以前、アリカが吐き捨てるように言った言葉。大好きだった母親を失って、心身共にズタボロだったアリカが言った言葉。

『神様なんて、この世にはいないんだね』

アリカは、神様を否定している。

だからこそ、アリカが神頼みなんてことを絶対にしないことは、アリカが一番酷い状況だった時からアリカと友達である、ヴィヴィオが一番良く知っていた。

「私は知っている。アリカちゃんが、月一の礼拝の時間のお祈りすら、否定していたことを。だから、アリカちゃんが、私達のためにお祈りをするなんて有り得ない。アリカちゃんにとって、友達の危機にお祈りするということは、友達を地獄につき落とすことを願っているのと同じ。そのくらい、アリカちゃんは神様が大嫌いなんだから」

アリカがお祈りすることなど有り得ないと、ヴィヴィオは確信

している。

だから、あの場所ですていたことはお祈りじゃなくて、なにか他の目的があつたのだと考えた方が自然だった。

「でも、それだけで私を犯人だと決めつけるのは早いんじゃない？ 私だって、お祈りするかもしれないだし。何も、大嫌いな神様にお祈りしてたとは限らないよ？」

「……私もそう思った。だから、無限書庫で調べ物をした。アリカちゃんと、エリーゼさんと一緒に。あの時、私達はこの事件の手がかりをまったく見つけることが出来なかった。このことも、おかしいなと思つた要因」

「私が、資料をわざと隠していた、渡さなかった、って言うこと？」

「違う。あの時アリカちゃんは資料の片づけとかをしてもらつてたし、そういうことはできない。私がおかしいと思つたのは、もっと別のこと」

「？」

「私はずっと、無限書庫の司書として、いろんな資料を検索してきた。無限書庫には本当に無限大の本がある。ミッドの歴史もベルカの歴史も、探せばきつと全部ある。だから、無限書庫であれだけの調べ物をして、一切の資料が見つからないなんて、それこそ有り得ないことだよ」

それは、無限書庫を自分の庭であるかのように通い詰め、無限の本の中を自在に飛び回って、そこに埋もれていた歴史を見続けてき

たヴィヴィオだから感じた違和感。ヴィヴィオが無限書庫で調べ物をしてきて、ただの一度も、その調べ物の内容が分からなかったことはない。無限書庫には、本当に無限大の本があるから。

「無限書庫に手がかりが全然ない。そんなことは有り得ない。だから、思ったんだ。私達は思い違いを

している。信仰も、聖王の魔法に関する運動も、この事件には関係ないんじゃないか、って。この事件の根底は、もっと別のこと」

追い詰めているのはヴィヴィオの方なのに。まるでヴィヴィオが追い詰められている。そんな錯覚すら覚えさせるほど、ヴィヴィオは辛い表情をしていた。

「……それに、これが一番の原因、なんだけど」

護ろうと思った友達を、糾弾している。そのことが、何よりも辛かった。

「調べたんだ。『ブルースファイア事件』」

それまでまったく変わらなかったアリカの表情が、少しだけ揺れた。

「アリカちゃんのお母さん、ミラージュ・フィアットさんが死亡した事件。私が調べたのは、本局や聖王教会の事件記録じゃなくって、無限書庫の、事件記録」

無限書庫に収められるのは、何も書籍に限らない。次元世界で起こった事件だって、立派な歴史のひとつである。そのため、時空管理局、あるいは聖王教会の管轄となった事件のレポートは、それぞれの担当部署だけでなく無限書庫にも収められる。そして、その事

件の内容によっては、実質的な禁書扱いになっているものもある。

「聖王教会では、この事件をミラージュ・フィアットさんが担当していた。だから、事件記録にはミラージュさんのデータと、その関係者の簡易データくらいなら記載されている。名前と、年齢、血液型みたいな、簡単な情報。その簡単な情報の中には、当然魔力資質も含まれる」

何故なら、魔法が生活の中心となっているこの世界において、個人の魔力資質情報というものは、血液型並に重視される個人情報なのだから。

「聖王教会に残されていた資料には、アリカちゃんの魔力資質については書いていなかった。でも、無限書庫に残されていた情報は、違った。……聖王教会に残っていた資料と違って、改ざんされて、いなかったんだ」

無限書庫の情報には手が出せなかったんだね。ヴィヴィオは、そう呟いた。

「それは、無限書庫に残っていた情報が間違いなんじゃないの？」

アリカの声に、ヴィヴィオは苛立ちを感じる。

どうして、そんなに落ち着いているの？

どうして、否定してくれないの？

私に、最悪を信じさせないで欲しいのに。

「無限書庫に残されていたブルースファイア事件の資料は、実質的に禁書扱いだったんだ。当然だよ。秘匿級ロストログア、ブルースファイアに関する事件なんだから」

禁書扱いの資料であつても、正当な理由と許可さえ下りれば閲覧することはできる。そうでなければ、資料としての価値はない。そう言う意味では、ヴィヴィオのどんな資料でも見ることできる現在の立場は、都合が良かった。

「でも、それだけじゃ」

「うん。それだけじゃ、絶対とは言い切れない。だから、もうひとつ、調べてもらったんだ。騎士カリムの義弟であり、本局の査察官でもある、ヴェロツサさんに」

「……………」

「アリカちゃんは知らないと思うけど、ヴェロツサさんは、思考捜査っていう能力を持つてるんだ。相手の心や記憶を読み取る、査察官としては最高の能力。聖王の魔法じゃない、ヴェロツサさん特有のレアスキル。その能力で調べてもらったのは、……………私自身」

「どうして、それが一番の証拠になるの？」

「……………調べてもらったのは、私の記憶。一番最初の事件で感じた違和感の原因を確認するため。アリカちゃん……………あの時、自分は魔法が使えないから反抗することも逃げることもできなくて、習ったばかりの思念通話を適当に飛ばして、誰かに助けを呼んだんだって、言ったよね？」



「……言ったよ。だって、私は魔法が使えないんだし。記録でも、そうなってたでしょ？」

無限書庫で調べ物をした時に、ヴィヴィオ達は同時に現代の聖王に繋がる人達のパーソナルデータを調べた。それによれば、アリカの魔力資質はランケE。思念通話といった簡単な魔法はともかく、本格的な魔法はほとんど使えないと同義の記録が、戸籍には記載されていた。

「うん。それは私も見たよ。……でもね、アリカちゃん。私は、ちゃんと覚えていたんだよ」

記憶は嘘をつかない。記憶違いがあるとすれば、それは、頭の中にしまいこまれた記憶の引き出し方を間違えたため。正しい引き出し方をすれば、正しい情報を得ることができる。

「最後の瞬間……私が、ディバインバスターを放つ時。アリカちゃんは、何をしていた？」

ヴィヴィオは自分の記憶を覗いて、改めて認識した。

ディバインバスターの直撃を喰らう大男。彼はヴィヴィオの砲撃を回避しなかった。いや、できなかった。何故ならば。

「アリカちゃんが発動させた、バインドによって身動きを封じられていたから……」

あの時は、それどころじゃなくて気が付かなかった。上空で砲撃のチャージをするヴィヴィオには見えにくいようにバインドをかけていたから、その時に気付くことはただでさえ困難だったのだ。

「それに、さっき言った無限書庫での事件記録。そこにも、アリカちゃんの魔力資質について、はっきりと書いてあったんだよ」

少しづつ、追い詰めていく。

それと同時に、ヴィヴィオ自身も、追い詰められていた。

「どうして……魔法が使えないってことになっているの？ どうして、魔法が使えるのに、使えないって、そんなことを言うの？」

ザイフリートを持つ手が、小刻みに震える。

「……お母さんが死んでショックだったから、って理由じゃ、駄目なのかな？」

「……有り得ないよ。だってアリカちゃんが言ったんだよ。『私は、強くて優しい魔法を使うお母さんが好きだった』ううん、『お母さんが、今でも大好きだ』、って。だから、アリカちゃんが魔法を捨てることも、有り得ない。魔法はアリカちゃんにとって、お母さんに繋がるものだから」

「………そっか。ヴィヴィオは、私のこと、ちゃんと見ていてくれたんだね」

「アリカ、ちゃん？」

まるで、何でもないことを話すかのよう……観念したかのよう  
に、軽い調子でアリカは話す。

その声色に、ヴィヴィオは不安を感じずにはいらなかった。

「……残念だな。ヴィヴィオには、嫌われなくなかったんだけどな。やっぱり、ヴィヴィオは頭がいいよ。たったそれだけの情報から、見つけ出すんだもの。私が、犯人だって」

その言葉を聞いた瞬間、ヴィヴィオの視界が真っ黒になった。視覚も聴覚も触覚も知覚も記憶も全てなにもかもが麻痺してしまったような、そんな気すらした。

聞きたくなかった。信じたくなかった。

覚悟していたハズなのに、心が大きく揺らぐ。

どうしようもない不安が、ヴィヴィオのことを襲っていた。

日常が音を立てて崩れた。その音が、聞こえてしまったのだ。

「ここは、私は逃げるべきなのかな？ 犯人として」

「……無駄だよ。ここからは見えないけど、この広場の周りは、シスターシャッハや教会騎士の人達が包囲してるから。それに、エリーゼさんも」

「エリーゼさんもいるの？ じゃあ、逃げられないね」

「お願い、アリカちゃん。抵抗しないで。そうすれば、弁護の機会がある……また、一緒に遊べるかもしれないよ」

最後の望み。せめて、少しでも刑を軽くするために、投降を懇願

する。

全身の震えを必死に抑え込み、声が震えないようにすることで精一杯で。

「そうだね。でも」

咄嗟の状況に、反応できなかった。

「こうすれば、話は変わるかな？」

アリカの足元に、瞬時に魔法陣が展開した。その色は、アリカの片方の瞳と同じ、蒼色。

その状況の変異に呼応して、隠れていた教会騎士達、シャツハ、エリーゼが飛び出す。

しかし、もう遅い。

「『聖王の檻』発動」

その一言で。

アリカとヴィヴィオを、黒色の檻が覆い隠した。

この感触には、覚えがある。

外界と遮断されている。魔力的にも物理的にも、空間的にも。空気はある。だけど、その流れを一切感じ取ることはできない。魔力の流動も感じない。こちらから働きかけない限り、すべてのものはそのままであり続ける。そんな、閉ざされた空間。エリーゼさんとの決闘の時に訓練場を取り囲んだ、あの結界と同じ。

唯一あの時とは違う点を挙げるとすれば、周囲の空間が闇夜のような黒色ではないということ。まるで、空に浮かんでいるみたいに、結界の内部は澄んだ空色をしていた。

「……どうして」

心は激しく動揺しているのに、頭は現状を冷静に把握している。自分のことなのに、そこだけ自分じゃないみたい。私の揺らぐ部分と、まったく揺らがない部分。そのバランスがとれなくて、なんだか気持ち悪い。

揺れ動くヴィヴィオの心が辛うじて絞り出した声は、掠れたものだった。

「……それは、何の理由を聞いているのかな？」

聞きたいことは沢山できた。

聞かなければいけないことも、沢山ある。

だけど、心が、動かない。声を張り上げようと思っても、全然声が出ない。そのくせ、頭は妙に冷えている。きっと、これから起こることを頭は予測して、備えているから。こんなところで特訓の成果が出るなんて、皮肉なものだと思う。

「……………どうして、こんなことをするの？」

たったの一言を紡ぎだすのに、とてつもない勇気と体力がいる。

「決まってるよ。……………ヴィヴィオなら、分かってくれると思うんだけどな？」

対して、アリカは落ち着いていた。いや、いつも笑顔で明るかったアリカが、まるで別人のように冷静で、静かで、冷たかった。あまり感情のこもっていない声。揺れ動かない表情。何より、醸し出す雰囲気、ヴィヴィオを突き放したもので。

「……………お母さんのため、なの？」

ヴィヴィオの言葉に、それまで表情をほとんど変えなかったアリカが、少しだけ微笑んだ。

「うん。やっぱりヴィヴィオは、ちゃんと私のことを見ていてくれたんだね」

どこか寂しげな、悲しい笑顔。

「でも、アリカちゃんのお母さんは、もう……」

「分かってるよ。でもね、あるんだ。お母さんを、生き返らせる方法」

アリカの言葉が、ヴィヴィオには信じられなかった。

一度失われたものは、もう二度と取り戻すことはできない。死んだ人は、何をしてもし生き返らない。まかりなりにも、数年を生き、それ以上の知識と経験を得ることのできたヴィヴィオでも、それは知っていることだった。

「そんな方法、あるわけ」

あるわけがない。そう言おうとしたヴィヴィオは、アリカに遮られた。

「プロジェクトF」

「!？」

アリカの放った一言に、ヴィヴィオは驚く。そんなわけがない。有り得ない。だって、プロジェクトFの情報とその技術は、秘匿情報のハズだ。それは、プロジェクトFで生まれた人をよく知り、そして自身もその技術の応用で生まれたヴィヴィオが、一番良く知っている。

「……だよ。プロジェクトFで生まれた命。聖王、高町ヴィヴィ

才」

「……なんで、そのことを」

有り得ない。有り得ない。そんな言葉だけが、ヴィヴィオの思考を埋めつくす。冷静さを保っていた頭も、完全に動揺する。聖王教会上層部関係者、エリーゼさんでも知らない情報を、誰にも言っていないヴィヴィオの秘密を、アリカが知っている。そんなことあるはずがない。あるわけがない。

「知ってるよ。でもね、知ってるだけじゃだめなんだ。それ以上のことは、私には知ることができない。だから、私にはヴィヴィオが必要なんだよ」

「ひつ、よう?」

「お母さんを生き返らせる。その方法を知るためには、ヴィヴィオの身体を形作る生命操作技術の情報が必要なんだ。だから私は、ヴィヴィオのことを求めた。聖王教会の騎士をけしかけて、身柄を拘束しようよね」

「そん、な、こと」

あまりにも、ヴィヴィオにはショックなことが多すぎた。大切だと思っていた親友が、そんな理由で、私に近づいてきたのか。そう思うと、本当に辛い。結局、私のことをクローンだから、聖王だから。そんな目で見て、そんなことだけで、私に接していたのか。今までの日常が、アリカと過ごしてきた大切な時間が嘘偽りだったのか。そんな気がして、もう、泣くこともできなかった。



「うん。そんなこと。でもそれは、私には絶対に必要なことだったんだ」

夢だったら良かったのに。本気でそう思う。今この場所から逃げられれば。心は、逃げ道を模索している。空間を出る方法じゃなくて、このあつて欲しくない運命の流れを、元に戻す方法を。そんな方法なんて有り得ないと、知っているハズなのに。

「……なら」

「？」

「どうして、私のことを直接襲わなかったの？」

ヴィヴィオの身体が欲しいのならば、それこそ問答無用でこの結界に閉じ込めて、疲弊させて、それからゆっくりと捕まえればいい。何も聖王教会の騎士をけしかけなくても、その方が確実に早い。現に、聖王教会の騎士は、ヴィヴィオを捕らえることを成功していないのだから。

「……ヴィヴィオにね、嫌われたくなかったんだ」

「……え？」

しかし、ここにきて、アリカの言葉は、ヴィヴィオの予想外のものであった。

「ヴィヴィオは、お母さんが死んでどん底にいた私のことを救ってくれた。それだけじゃない。その時からずっと、私のことをちゃんと見ていてくれる。友達でいてくれている。だから、私はヴィ

ヴィオのことが大好き。お母さんがいない今では、誰よりも大切な親友……うつん、それ以上の気持ちで、私はヴィヴィオのことを見ていた」

### アリカの独白。

「ヴィヴィオに出会うまで、私の世界は真っ暗だった。どんな色も光もない、白と黒、たったそれだけの世界。どんなこともつまらなくて、世界の全てがバカバカしくて、お母さんを殺した人が憎くて、私からお母さんを奪った神様が嫌い。ただどね。ヴィヴィオに出会ってから、私の世界に色が生まれたんだ。毎日が楽しくて、充実していて、幸せで。白黒だった私の世界は、ヴィヴィオの魔法の光みたいに虹色になった。……でも、なんとなく実感がなかった。私は、ヴィヴィオのことが大好き。でも、同じくらい私はお母さんのことが好きだった」

### ヴィヴィオも知らなかった、アリカの想い。

「だからヴィヴィオはせめて、何も知らないまま、全てが終わって欲しかった。何も分らないうちに全てが終わって、お母さんが生き返って。そうしたら、またヴィヴィオと一緒に生きていきたいかった。今度は、エリーゼさんと、お母さんと一緒に」

### 夢物語。

今までの言葉は、建前に過ぎないのかもしれない。アリカの願いは、想いは、すべてこの一言に集約されている。ヴィヴィオはそう思った。

たったひとつの、アリカの願い。

それは、大切な人達と、穏やかで平和な日々を過ごすこと。

だからこそ                      ヴィヴィオは、目が覚めた。

「今からでも遅くないよ。アリカちゃん」

アリカと過ごしてきた時間。

アリカと共有してきた思い出。

ヴィヴィオが知った、アリカの想い。

それらすべてが、無駄ではなかった。

ヴィヴィオに見えたのは、いつかの夢の中での出来事。

夢の中でふわふわと浮かんでいる自分。これは夢だと意識できても、覚醒できるほどののはつきりとした自己を確立できない。ぼんやりとした感覚。

唯一しっかりと確認できたのは、一人の女の子が、そこで泣いていること。

大切な友達が泣いている姿。あの時助けたハズの友達は、心の中では泣いていた。あのときは良く分からなかった。でも、今ならわかる。アリカちゃんは今、泣いている。

「死んだ人は、生き返らない」

「そんなこと……」

「分かってるよ。アリカちゃん」

アリカはただ、落ち着いたまま表情を崩さない。

しかし、ヴィヴィオには、アリカが泣いているように見えた。

「助けるよ」

あの時は、助けることができなかった。アリカちゃんが泣いているのに、手を伸ばしても届かなかった。だけど、今は違う。手を伸ばせば、アリカちゃんに触れることができる。言葉を、想いを、伝えることができる。

手の震えも、心の揺れも、いつの間にか治まっていた。ごちゃごちゃになっていた頭の中も、不思議と澄んでいる。胸にあるのは、たったひとつの想いだけ。もう迷わない。するべきことが見えた。

だから。

「私が助けるよ。アリカちゃん」

手にしていたザイフリートを振るう。一瞬でヴィヴィオの身体をバリアジャケットが包み込む。白を基調としたデザイン。憧れの、強くて優しい人をモデルにしたジャケットとロングスカート。左腕には銀色の甲冑。所々に見受けられる意匠は、管理局最速の執務官のものと同じだ。長くて癖のない髪の毛は、サイドでひとつにまとめられる。

「助ける？ 誰を？」

「悲しみに囚われている、アリカちゃんを」

断言する。

アリカは今、囚われている。様々なものに囚われて、周りが見えなくなっている。冷静な考えができなくなっている。

この事件の本当の真実、その裏側を、他でもないアリカが、分からなくなっている。

だからヴィヴィオは助ける。大切な友達を。

だからヴィヴィオは護る。きつかけをくれた友達を。

だからヴィヴィオは救う。大好きな人が、きっとそうするから。

「私が勝ったら、ゆっくりお話しよう。アリカちゃん」

微笑むヴィヴィオ。

その瞳が、大好きな人と同じだということは、誰も気付かなかった。

一方、結界の外側。

そこでは、エリーゼとシスターシャツハが背中を合わせ、周囲を警戒していた。そのすぐ傍には、同じように周囲を警戒する聖王騎士達。ただし、聖王騎士の数は、最初にいた時の三分の一程度となっていた。

そして彼女らの周囲をぐるりと取り囲んでいるのは、二〇人近い聖王騎士達。彼らは明らかな害意を向けて、エリーゼ達のことを睨んでいた。すでにこちら側にいた騎士達の三分の一が突然襲撃してきた彼らに襲われ、地面に倒れ伏している。そして残りの三分の一が、敵側に寝返った。やられてしまった騎士達が生きているかどうか分からないが、どちらにしても、早く治療をしないといけない。

しかし、敵に回ってしまった騎士達が、ここから動くことを許さない。さすがのシスターシャツハとエリーゼでも、二〇人以上の聖王騎士達の包囲網を突破して、ヴィヴィオの救出に向かうことは難しかった。

「……最悪の状況、ですね」

「ええ。ヴィヴィオさんが予測していたこととはいえ、かなり辛い状況です」

「……応援は？」

「駄目です。結界でこの広場が遮断されています。おそらく、結界を維持している術者を倒すまで、応援は望めません」

エリーゼ達がいる広場は、アリカの発動させた結界とはまた別の結界で封鎖されていて、外部との交信がとれないでいた。待ち伏せを前提としていたためこちらの人数は少なく、残っているのも三分の一度だ。この状況をヴィヴィオが予測していたとはいえ、対抗策を取ることもできず、結果としてかなり苦しい状況だった。

「ヴィヴィオ……」

エリーゼが気遣うのは、結界内に閉じ込められている友のこと。

「アリカ……」

友と呼ぶアリカに何があったのか、エリーゼは知らない。それがエリーゼの預かり知ることでない以上、エリーゼにはこの案件にこれ以上踏み込むことはできなかった。だから後は、全てがヴィヴィオにかかっていた。

「……待っていてくださいね、ヴィヴィオ」

しかし、だからと言って、全てをヴィヴィオに丸投げにするわけではない。アリカの心を救いだすことはできなくても、ヴィヴィオのことを助け、護ることくらいなら、エリーゼにもできる。

「私も、すぐに向かいますから！」

踏み込む。瞬間的に魔力を脚部に付加して爆発させる。十字槍のデバイス・ファーフニルを振りかぶり、敵となった聖王騎士達に切りかかる。それと同時にシスターシャツハも攻撃に移る。

ヴィヴィオを助けるため、結界の外側でも、激戦が始まった。



ミラージュ・フィアット。享年三十二歳。

聖王教会に所属する魔導師騎士。魔導師ランクは空戦S。十歳の時には騎士の登録をし、その時点でAAAクラスの实力があつた。ベル力式の騎士にしては珍しく、近接戦闘よりも中遠距離での詠唱魔法に長けていた。その美しくすらある魔法と気高く尊い信仰心、何より誰からも好かれる温厚で心優しい人柄に、仲間の騎士達からは『聖魔導師』のふたつ名で親しまれていた。

聖王の遠縁の一族の出身。しかしそのことを知っている人物は現代にはほとんど残っておらず、正式には信仰の対象にはなっていない。本人にも、かつての威光を取り戻そうとする意思は全くなかった。また、聖王の魔法を使用できる資質も存在していないため、実質的に普通の魔導師と変わりはない。

両親とは幼い頃に死別。何らかの事件に巻き込まれたと思われるが、詳細は不明。実家であるフィアット家と両親は絶縁状態だったため、頼れる身寄りがおらずその頃から聖王教会系列の施設で育てられていた。十歳にして騎士を目指したのは、自分のような子供を減らすため。

子供好きで、暇があれば自分の育った施設に立ち寄り、子供達の世話をしていた。

二十六歳の時に一人娘、アリカ・フィアットを授かる。元来の子供好きだったミラージュはアリカに最大限の愛情を注ぎ、アリカは順調に成長していた。また、アリカは六歳の時点でA A以上の魔力資質があり、ミラージュはアリカの将来にとっても期待していた。

聖王教会騎士団管轄内で発見されたブルースフィアを巡る事件の中で殉職。死因は出血死。死の直接の原因となったのが、仲間の騎士による裏切り行為。敵に対峙している時に、背後から突き刺された傷が元となった。直後に駆け付けた応援部隊の騎士によって助けられるが、治療の甲斐なく死亡。ミラージュを殺した騎士は、応援部隊の騎士によって捕縛される直前、自身の魔力を暴走させて自爆。その隙に、ミラージュが敵対していた何者かに逃走を許してしまう。ミラージュを刺した騎士はその逃走者の何かがきっかけで寝返ったものだと思われるが、詳細は不明。

また、その時のブルースフィアは逃走者に奪取されており、次元世界全域に指名手配がかけられたが、三年たった今でも捕まっていない。

## 第十一話　だいきらいなかみさまへ　後編

私の周りは、高度が高いわけでもないのに空色をしている。遮るものなんて何も無い。見渡すばかりの空。ただただ、空の蒼が続くばかり。それなのに、風の流れもなく、温度も安定している。魔法で形作られた不自然な空間。その空間に、私は浮かんでいる。ただそれだけなのに、私はまるで無限に続く空を飛んでいて　そのまゝ、空に迷ってしまったような錯覚を覚える。空と言うよりは虚空。どこまでも際限なく続く虚空は、私の目の前にいる女の子の悲しみを表しているような、そんな気がする。

アリカ・フィアット。

私の大切な友達で、聖王信仰紛争と呼ばれていたこの事件のきっかけ。だけど、本当はそうじゃない。アリカちゃんは悲しみに囚われていて気付いていないけれど、この事件には裏がある。真実の裏側の本当の真実。神様を否定するアリカちゃんが、今ではその神様に囚われている。

だから、私は宣言しよう。

だいきらいなかみさまへ。

アリカちゃんを、返してもらいます。

魔法少女リリカルなのはBefore Vivid

第十話 だいきらいなかみさまへ 後編

「……お話？ 私と、ヴィヴィオが？」

いつもは優しくかったアリカの声が、少し冷たい。冷酷とまでは言わないが、いつもの親しみも、柔らかさも、その声には残されていなかった。

そのアリカに、ヴィヴィオは優しく微笑んだ。

「うん。そうだよ」

「何を話すって言うの？」

「いままでと、これから」

ヴィヴィオにも本当は分かっている。

この問答に、意味はない。

「……ヴィヴィオが、素直に協力してくれれば話は簡単なんだけどな？」

「ダメだよ。そんなことできないし、しちゃいけないんだ」

アリカの言うことも、ある意味では正しくある。アリカが求めているのは、ヴィヴィオの身体を構成している生命操作技術。要は、ヴィヴィオの身体を調べるだけだ。人を蘇らせる。この場合、禁忌に触れることよりも家族の方が大切なことは、ヴィヴィオにも分か

っている。もしアリカと同じ立場であれば、ヴィヴィオも同じことをするかもしれない。だから、身体を調べるくらいなら構わないとも思っている。

本当に、それだけであれば。

「どうしても、協力してくれない？」

「うん。どうしても、協力できないよ」

悲しみに囚われているアリカだからこそ、その決定的な矛盾に気が付けない。

だから、ヴィヴィオは決心したのだ。

ヴィヴィオが魔法の力を求めた理由。

憧れの人に近づくため。

泣いている誰かを助けるため。

そして、泣いている友達を、護るため。

「どうしても、ダメかな？」

「うん。何度言われても、絶対に協力できない」

憧れの人に、言われたことがある。

本気の想いを伝えるためには、時には戦わないといけないことも

ある。確かに戦わずにお話だけで済ませられるなら、それが一番良い。けれど、時にはそうでもなきないこともある。自分の想いを貫くために戦う人とは、お話ができないこともある。

だから。

「なら……」

そんな人達に、想いを伝える方法。

「うん。そうだね」

戦うよ。

想いを伝えるために、お話を聞いてもらうために。

「全力全開、本気の勝負！」

「シグルズ！」

アリカが、洋服の中から首に提げられていた宝石を取り出す。それは透明な水晶のようで、綺麗な八面体をしていた。

「『英雄の杖』シグルズ、セットアップ！」

アリカは、取りだした結晶体　人格型アームデバイス・シグルズを起動させる。一瞬だけアリカが蒼い魔力光に包まれ、やがて、光の幕が爆ぜる。そこから現れたのは、バリアジャケットに身を包んだアリカと、その手に握られた、魔導師の杖。アリカのジャケットはエリーゼが装着する聖王騎士デザインのジャケットによく似ていた。違う点を挙げるとすれば、アリカのジャケットは布地が多くて、騎士甲冑というよりは身体全体を包み込む法衣のような様相だということか。デバイスも、銀色の杖のフレームの先端に、八面体の水晶が取り付けられているという、シンプルなもの。それ故に、その姿を見ただけで、ヴィヴィオは理解する。

成程、これが、聖魔導師。

『聖魔導師』ミラージュ・フィアットの忘れ形見、『二代目聖魔導師』アリカ・フィアットが、そこにいた。

お互いに準備は完了した。

それを視線で、ヴィヴィオに伝えるアリカ。

ヴィヴィオはそれを見て、ザイフリートを構えた。軽く腰を落として、切っ先を相手の喉元に向ける。視線は正面に、神経は全体に



向ける。

「高町ヴィヴィオ！」

「『聖魔導師』アリカ・フィアット！」

どちらともなく、名乗り上げる。

騎士と騎士が己の誇りと魔導をかけて戦う際の礼儀。

「いざ！」

「尋常に！」

『勝負！』

叫ぶ。

同時に、ヴィヴィオは踏み込む。ベルカ式近接戦闘の基本技能。

足に魔力を込め、瞬間的に開放することで爆発的な速度を生み出す。小細工も何もない。ほぼ一瞬でヴィヴィオはアリカに肉薄する。立ち止まらず、ヴィヴィオはそのまま振りかぶっていたザイフリートを振り下ろす。その斬撃は、アリカの展開した障壁によって阻まれる。拮抗する刃と障壁。防がれることはヴィヴィオにも分かっていて。だからヴィヴィオは次の一撃を加えるために、障壁と打ち合わせたザイフリートを右腕だけで持ち、左腕を振りかぶる。収束する魔力を変換し、効果を付与する。追加する効果は結界破壊。可能な限り身体を捻り、全身の力を込めた一撃を、左腕で障壁に叩きこむ。

『シュヴァルツェ・ヴィルクング！』

一撃。たったそれだけで、アリカの障壁が音をたててバラバラに

砕ける。その衝撃で後ろに弾かれるアリカ。ヴィヴィオは追撃をかける。左腕を前に突き出した体勢から、上半身を捻り、右足で更に踏み込む。その勢いにのせて右腕に持つザイフリートの切っ先を前に突き出す。勢いと体重の乗った、突きの一撃。

その一撃をアリカは、手に持つシグルズで受け流す。杖の柄の部分をザイフリートの刃が滑るように突き抜ける。アリカを弾くために、ヴィヴィオは横に振り抜こうと力を込める。

『speerfliegen』

ヴィヴィオでもアリカでもない、機械音声が届く。

反射的にヴィヴィオはアリカから距離を取り、障壁を展開する。直後、何かがヴィヴィオの障壁に激突する。魔力弾ではなく、質量を持った鋭い何かの一撃。視線を障壁にぶつかった何かに向ける。そこにあるのは、鈍色の光沢を持つ小型の槍。それが複数個。数を数える前に、それらの槍はヴィヴィオから離れる。

『speerfliegen』

同じ音声が聞こえる。感じるのは僅かな魔力の流れ。自分から僅かに離れたところで、小型の槍が数を増す。その数は十六。それらが同時に、ヴィヴィオ目がけて飛来する。

防御……駄目だ。隙が大きすぎる。

回避……無理だ。数が多すぎる。

だったら！

『Sacred Cluster』

飛来する小型の槍に向けて、ヴィヴィオは右腕を突き出す。その先でひとつの大きめの魔力弾を生成する。その色は虹色。そして、槍と魔力弾が接触する瞬間、魔力弾を爆散させる。

『セイクリッドクラスター！』

爆散した魔力弾と、十六あった小型の槍が相殺する。ヴィヴィオの保有魔法、セイクリッドクラスター。元はなのはの保有魔法だったものを、ゆりかご戦でヴィヴィオが学習した。ひとつの塊にして撃ち出した魔力弾を対象付近で爆散、小型弾殻をばらまいて範囲攻撃を行う圧縮魔力弾。ショットガンのような面制圧を行うための攻撃魔法。対人戦闘で使うには少し凶悪な魔法だが、迫りくる複数の魔力弾を一度に潰すのには都合がいい。

セイクリッドクラスターの余波が収まる前に、ヴィヴィオは周囲の様子を伺う。爆散の影響で正面が煙で遮られてしまい、アリカの姿を見失ってしまったのだ。いつもならば魔力探知をするのだが、この空間では魔力探知が通用しない。そのため、頼ることができるのは自身の五感のみ。

いつでも障壁を、聖王の盾を展開できるように、周囲を警戒する。

『ムスperlヘイム』

どこからか、アリカの声が聞こえた。同時に、ヴィヴィオの周囲の空間が轟炎に包まれる。周囲の可燃物が燃えているというよりは、小規模の爆発が大量に続いて激しく燃える炎を構成している。通常の火炎よりも熱の密度が高く、破壊性が高い。範囲ではなく空間を

基準に発生しているので効果範囲によってのムラがない上に、効果範囲内にいる限り、回避はほとんど不可能となる。

『Panzerhinder nis』

ザイフリートの補助を借りて辛うじて、ヴィヴィオは障壁を展開する。ヴィヴィオの周囲を多面体で構成された虹色の障壁が覆う。一方向からの攻撃しか防げない聖王の盾とは違い、移動や回避を捨て、全方位からの攻撃に耐える完全防御型の防壁。全ての方位から絶え間なく続く小爆発を全て受ける必要があるヴィヴィオの負担は必然的に大きくなる。場所方位威力を問わない小爆発の嵐が停止するまで、ヴィヴィオはひたすらに耐える。

「くう……」

ただ、幸いなことに、これほどの規模と威力を持つ空間攻撃魔法は発動する術者への負担や消費する魔力も大きく、長時間維持し続けるのは難しい。大体、長くて一分ほど。普通で三十秒程度。ヴィヴィオを巻き込む爆裂の嵐も例に漏れず、数十秒後に、爆発は停止した。

安全を確認し、ヴィヴィオはすぐにパンツァーヒンダネスを解除し、視線を周囲に向ける。すぐに数十メートルほど離れた位置にいるアリカの姿を確認し、標的をロックオンする。

『ニヴルヘイム』

「えっ!?!」

しかし、その瞬間、ヴィヴィオを襲ったのは極低温の冷氣。水ど

ころか、大気中の酸素ですら瞬間的に液化するほどの低温。物質に固有の様々な物理法則ですら崩壊する、地上では絶対にありえない温度。到底人間が耐えられるものではない。その冷気の発生に、障壁を解いたばかりのヴィヴィオは反応できなかった。ヴィヴィオの身体に、液化した窒素や酸素が付着する。身体を構成しているものが真つ当なものである限り……いや、例えば金属や断熱材で保護されていたとしても、その冷たさに耐えることはできない。身体は一瞬で凍傷、それすらも通り越して腐り落ち、金属や断熱材でも深刻なダメージを受け、その内側にある生身の身体が耐えられない。バリアとフィールドの組み合わせであるバリアジャケットでも、通常の設定ではこれほどの耐低温性能はなく、対策を取っていたとしても直接受ければ身体への被害は免れない。

ほぼ絶対零度。絶対のない物理現象での、絶対の温度。

その空間に、ヴィヴィオは飲み込まれた。

超高温の次は極低温。大気の流れのないこの空間内でも、あまりの温度変化、気圧の変化に周囲の空気が影響を受け、まるで台風のような強風が空間内に吹き荒れる。急激な温度変化に伴い大気中の水蒸気が大量に液化し、低温で冷やされたそれらは細かい氷の結晶となり、ヴィヴィオのいる空間を分厚い雲で覆い尽くす。その様子は、さながら台風の雲の中。

『Gewitterwolke』

更に、アリカは追い打ちをかける。

ヴィヴィオのいる場所全てを、数万ボルトの超高電圧の雷の嵐が襲う。本来、雷とは雲を構成する氷の分子の起こす静電気によって

発生するものだ。ヴィヴィオの周囲は、現在数メートル先の内部を見ることもできないほど分厚い雲で覆われている。そんな状態で、高電圧の雷の嵐を打ち込めばどうなるのか。

答えは単純にして明快。

雲は即座に雷雲となり、威力は倍増。

管理局最速の執務官、フェイト・T・ハラOWNですら生み出すことのできないほどの電気の渦が、嵐が、空間すらも焼き尽くさんばかりの威力で発生する。嵐ですら生ぬるい。それはほとんど、雷の爆発。

その状況が数十秒続き　やがて、電気の爆発が収まる。

雲には発生していた電気の残滓がバチバチと音を立てている。

生身の人間であれば、極低温の連撃もあり、まともな形すら維持できないほどの攻撃。自然現象すらも味方につけた、空間系の詠唱魔法。

分厚い雲の中を窺い知ることにはできないが、原形を留めているかすら、判別できない。

それが、並の魔導師であつたならば、の話だが。

『Divine Buster』

雲の中に響くのは、初老男性を模したと思われる機械音声。

それが合図であつたかのように、雲の隙間から、虹色の光が見える。

「デイベイン、バスター！！」

雲を貫き、アリカに一条の光の筋が迫る。空のごとく無限に蒼い空間に、先ほどまで猛威を奮っていた雷雲。雷が止み、虹色の光が発生する。遠くから見ていると、それは雲から延びる虹に見えたかもしれない。

ただし、その威力は本物。純粋な魔力砲撃。魔力量がモノを言う砲撃魔法に十分すぎるほどの破壊力を持たせるだけの技術と魔力を、ヴィヴィオはすでに習得している。

雲を吹き飛ばさんばかりの勢いでアリカを襲う虹色の砲撃。アリカはそれを、シグルズを前に突き出し、障壁を展開することで耐える。

やがて、砲撃が止み、雲が晴れる。

雲の中から現れたのは、第一形態のザイフリートをアリカに向けるヴィヴィオの姿があつた。バリアジャケットこそボロボロだが、ヴィヴィオは間違いなく顕在。物質である限り耐えられない極低温、雷の爆発、ヴィヴィオはそれらを耐えきっていた。

並程度の魔導師であれば、これだけの猛攻には耐えられない。

防御を可能にした要素が、ヴィヴィオにはあつた。

「聖王の、鎧……」

## 聖王の鎧。

ヴィヴィオが初めから習得していた、Sランク砲撃ですらも耐えることのできる絶対防御壁。自分の意志では発動をコントロールできず、基本的にヴィヴィオの命の危機にほとんど反射反応する不安定な聖王の魔法。アリカの魔法が、ヴィヴィオを本気で命の危機に晒していて、威力がありすぎて、発動した聖王の鎧。

「……さすがだね、ヴィヴィオ。今の魔法を耐えるなんて」

皮肉にも取れるアリカの言葉を受け止めながら、ヴィヴィオは考える。

基本的に、有効範囲の大きな魔法や大威力の魔法と高速・並列処理は衝突する。それだけの効果をもたらすための大魔力を操作・制御するだけの魔法式を組むためにはそれなりの時間が必要だからである。

それなのに、アリカは、ほとんど時間差なしであれだけの大魔法を連続で詠唱し、発動した。

どんなに上級の魔導師でも、これは不可能なレベルの話だ。技術の問題ではない。処理するべき情報量が、人間に可能な範疇を遥かに超えているのだ。例えば砲撃魔法を連射できないのと同様に、それは人体の強度の限界。

「詠唱魔法の連続行使を可能にするのが……聖王の檻の本当の能力？」



ヴィヴィオの問いかけに、アリカは答えない。その沈黙が、答を語っていた。

ヴィヴィオ達のいるこの空間      正式名称を『聖王の檻』という。

失われた、聖王の魔法。

その効果は、外部との空間的な遮断による、強固にして堅牢な隔離空間の作成。そしておそらく、空間内での現象の操作。この空間内では、術者の魔法を発動しやすいように、周囲の状況をコントロールできるのでないか。本来ならば術者が発動し、管理すべき魔導式の役割を、この空間そのものが担うことができるのではないか。

「違うかな、アリカちゃん？」

ヴィヴィオの問いかけに、アリサは数秒の間を置いてから、答えた。

「……さすがだね。その通りだよ。『聖王の檻』は、ただの空間隔離結界じゃない。術者が空間内での魔法行使を自在に操ることができる最強のフィールド魔法。絶対者の創りだす空間。『聖王の檻』と呼ばれるだけのことはあるよ。こんな反則的な魔法が使えたから聖王が昔の戦争を終わらせることができて……その魔法の一部しか使えないフィアット家でも、高い地位を持っていたんだね」

フィアット家のことを語るアリカの声は、どこか皮肉気だった。

「この魔法はね、ヴィヴィオ。お母さんは使えなかったんだ」

「……うん。知ってるよ」

ブルースフィア事件のことを調べ、アリカとその母親であるミラージユのことを調べたヴィヴィオは、ミラージユがファイアット家に伝わる聖王の魔法を使用できなかったことを知っている。現代において聖王を継ぐと言われている一族でも、聖王の魔法を行使できる者は稀なのだ。由緒あるダイムラー家ですら、伝えられている聖王の魔法を使用できるのは現当主と、時期当主筆頭候補のエリーゼだけだ。本家でも分家でも関係ない。一族内でも、誰が使用できるのか判別がつかない。親が使えなかったからと言って、子が使えないとは限らない。

「私に魔法の才能があるって分かったとき、お母さんは喜んでくれた。新しい魔法を覚えたら、『えらいね。いい子だね』って、笑顔で私の頭を優しく撫でてくれたんだ。お母さんに褒められるのが私にはすごく嬉しくって、だから、まだ小さかった私は、私なりに魔法の勉強をした。お母さんが魔導師だったから、家にある教本にも教えてくれる人にも困らなかった。教えてくれるお母さんの腕も良かったし、私は自分で言うのもアレだけど、かなりの勢いで魔法を習得していった。新しい魔法を覚えるたびに、お母さんは喜んでくれて、私のことを褒めてくれた。何より、頑張ったことを褒めてくれた。だけど、聖王の檻を覚えた……閃いた時だけは、あんまり褒めてくれなかった。後で分かることだけど、お母さんはファイアット家の本家とイロイロあって、それなりに辛い思いをしていたから。お母さんは、この魔法が好きじゃなかったみたい」

一息にそこまで話して、アリカは、自嘲気味に笑った。

「おかしい話だね。お母さんが唯一好きじゃなかった魔法で、私はお母さんのことを救おうとしているんだから」

独白するアリカ。

その悲しげな声を聞きながら、ヴィヴィオは思った。

アリカはもしかして、本当は話を聞いてもらいたいのではないか。楽しかったお母さんとの思い出。今の自分の想い。それらを誰かに聞いて欲しくて、分かってもらいたいのではないか。

アリカの話を聞いて、ヴィヴィオはザイフリートを握る手に、無意識に力を込めていた。

もし、誰かがアリカの話を聞いていたら。気持ちを理解できていたら。こんなことには、ならなかったのかもしれない。それができたのは、私だけだったのに。結局、私はアリカちゃんのことを救うことはできなかった。

それだけ　アリカの悲しみが深いものだったことに、ヴィヴィオは気付けなかった。

そんな自分が不甲斐なくて、情けなかった。

結局私は、友達の一人も救うことができていない。

こんなことじゃ、ダメなのに。

自分で自分を責める気持ちが、ヴィヴィオの中で大きくなっていく。

でも。

だからと言って、まだ諦めるには早すぎる。

アリカちゃんは、今泣いているんだ。

まだ遅くない。まだ間に合う。

私が、アリカちゃんを助けるんだ。

「お母さんを生き返らせるためには、このくらいしないと足りない  
と思った……でも、あんまり威力がありすぎると、ヴィヴィオには  
かえって効果がないんだね」

改めてアリカのことを見つめるヴィヴィオと、アリカ。

「だから、威力が強すぎないようにするね」

アリカは、手にしていたシグルズを前に突き出した。

「シグルズ、フォルムツヴァイ」

『G u n g n i r   f o r m』

マスターの命を受け、シグルズがその姿を変える。杖の先端にあ  
った八面体の水晶は姿を消し、代わりに刃が形成される。すんなり  
とした形で豪快と言うより優美な印象を与えられる。全体としては  
槍の姿をしているが、槍と言うには刃の部分が長く、そして柄の部  
分が短めだった。

おそらくあれは、エリーゼの持つファーフニルのように遠心力を  
乗せた一撃を放つことを主眼とした槍ではなく、近接戦でも使用で

きるような取り回しと、迅さを活かすための形体なのだろう。ヴィオはそう結論付けた。

その槍を、アリカは、構える。

「ザイフリート」

『B a l m u n g f o r m』

対するヴィヴィオも、ザイフリートの形体を再び杖から剣に変える。これから近接戦闘を挑んでくるアリカに、備えるために。

「じゃあ、いくよ、ヴィヴィオ！」

シグルズを構え、アリカがいつきに間合いを詰めてくる。先ほどとは立場が逆になる。

ヴィヴィオはその迅い一撃を受け止め、アリカと拮抗する。同じ槍を使う騎士として、エリーゼほどの威力をアリカは持っていない。しかし、その迅さはエリーゼを超えている。長引かせると、不味いかもしれない。

ヴィヴィオは拮抗した刃を受け流し、魔力で作った足場を蹴り、アリカと一旦距離を取るうとする。アリカはそれに合わせるようにヴィヴィオとの間合いを詰め、次々と刃を振るう。槍だとは思えないくらいに連続攻撃が襲いくる。自然と防戦態勢になってしまい、反撃の糸口が掴めない。

予想以上に、アリカの近接戦闘能力は高い。

理由はおそらく、この空間にある。

聖王の檻。詠唱魔法だけでなく、近接戦闘での魔力運用ですら、補正してしまう。」

「どうしたの、ヴィヴィオ？」

苦戦するヴィヴィオに、アリカは手を緩めない。しかし、アリカとヴィヴィオの間には決定的な差がひとつだけある。ヴィヴィオは確信していた。必ず、隙が生じると。だから、根気強く、アリカの攻撃を受け続ける。こういう拮抗状態、焦れて先に動いた方が負けた。

ヴィヴィオはそのことを知っている。

アリカの攻撃が続く　やがて、アリカが先ほどまでより少しだけ、大きく振りかぶった。

「そこ！」

その隙を、ヴィヴィオが捕らえた。

それまでステップを踏むように後ろに下がっていた移動のベクトルを、足に力を込めて前に進む力に反転。一気にアリカの懐に入り込み、振り下ろされた槍ではなく槍を振り下ろす腕自体を、籠手を装備した左腕で受け止める。腕は運動の起点であるため、ここを止められると弱い。手子の原理で、少ない力で攻撃を受け止めることができる。

「なっ!？」

攻撃を止められ、驚くアリカ。その驚きが、一瞬だけの、決定的な隙を生み出す。

ヴィヴィオにあつて、アリカにないもの。それは、経験。ヴィヴィオはこれでも一か月近い時間をシャツハとの訓練で過ごし、すでに修羅場も潜り抜けた。いくら聖王の魔法による強力な補正が働こうとも、その差だけは、絶対に埋めることができない。

「あああああああ！！」

力強く踏み込む。可能な限り身体の動きを連動させる。この一か月で教わって経験した。ただ力を込めて腕を振ればいいというものではない。重要なのは、全身の動きを連動させること。足の踏み込みが、腰の捻りが、肩の動きが、呼吸が、すべて腕の動きに連動する。

そしてヴィヴィオが放つのは、右の拳での渾身の一撃。それに魔法を付加して、アリカの身体に叩きこむ。

それをアリカは、自動展開の防壁で防ぐ……が、ヴィヴィオの渾身の力の籠った一撃を全て受けきることはできず、十数メートル弾き飛ばされる。

「ザイフリート！」

連続して、ザイフリートに魔法のコマンドを入力する。足元に展開するのは、ベルカ式の三角形の魔法陣。そして右腕に展開するのは、ふたつのミッド式環状魔法陣。その魔法陣の周りを、ヴィヴィオの魔力から収束された電子が高速で回転する。高速回転する電子

が空気中の気体分子とぶつかり、光を放つ。まるで、ヴィヴィオの腕の周りを光が取り囲んでいるような状態に。

そして、弾き飛ばされたアリカもすぐに体勢を整え、詠唱を開始する。アリカの周囲に生成されるのは。十数センチの長さの針。いや、針と言うには太すぎる。それは針の形こそしているが、実際には杭と呼べるほどの大きさを持っていた。それが、複数生成される。

聖王の檻による補正のおかげか、詠唱は格段に短縮される。それこそ、先に詠唱を開始したヴィヴィオと同時に魔法が発動できるほどに。

やがて、双方の充電・詠唱が完了する。

魔法を発動させたのは、ほぼ、同時。

『荷電粒子の槍・ブリューナグ!』

『魔弾・タスラム!』

ヴィヴィオの腕から放たれたのは、魔力によって音速の数倍の速度まで加速された電子。原理としては超電磁砲に近い。質量を持ち、加速された電子は莫大なエネルギーを持つ。

アリカが発動させたのは、反応炸裂型の質量弾。何かに触れることで、中規模の爆発を起こす。それが数十個。

アリカとヴィヴィオ、二人の中間点で、槍と魔弾が衝突する。荷電粒子が魔弾を焼き尽くし、魔弾が荷電粒子を相殺する。エネルギーの大きさに、周囲の大気が悲鳴をあげる。ただでさえ、荷電粒子



のおかげで周囲の気体分子が崩壊しかかっているのだ。そこに、連続で魔弾の爆発が加えられれば、向かう答えは一つ。

二人の魔法は拮抗し やがて、爆発する。分子が崩壊する時のエネルギーは凄まじい。質量の一部、ほんの数グラムが崩壊するだけで、半径数百メートル内が数万度の爆炎に包まれる。ヴィヴィオも、アリカも、分子の崩壊による莫大な熱エネルギーの嵐に巻き込まれる。もしこれが聖王の檻の内部でなければ、半径数百メートル規模のクレーターが出来上がっているだろう。それだけの規模の崩壊。

あまりにも大きなエネルギーを誇る爆発は、やがて、収まる。

炎が収まり、煙が晴れ、元の場所にいたのは……アリカのみ。

ヴィヴィオの姿は、周囲から消え去っていた。

「  
」

その事実には、アリカは表情を歪め、周囲を見渡す。

あの程度のことではヴィヴィオが消えてなくなるとは思えない。それに、この状況は、あのときに似通っていた。それは、側で見えていたアリカが良く知っている。このままの状況が、ヴィヴィオを見失った今の状態が続くのは、マズイ。

あのと時の状況とは、ヴィヴィオが一番最初に戦った時。

相手の視界外に移動し、それから

「ザイフリート、リミットリリース！」

不意に、

『Vanahelmr form』

聞こえたのは、ヴィヴィオの声と、ザイフリートの声。

やがて辺りを包み込むのは、全てを照らす虹色の光。

ベルカの地において希望の色とされる光。

カイゼル・ファルベと呼ばれる、聖王の魔力光の色であり、そして、ヴィヴィオの魔力の色。

アリカは光の方向……自分の真上を見上げる。

そこにあつたのは、ヴァナヘイムフォルムのザイフリートを構えるヴィヴィオの姿。それと、虹色の光を放つ魔力の塊。周囲に霧散している魔力を収束する様子は、まるで光の粒が、星の光が集まっているように見えて、戦いの最中だというのに、綺麗だと、アリカは思った。

だが、見とれているわけにもいかない。アリカにとって幸いなことに、あの手の収束魔法は魔力の収束にそれなりの時間がかかる。チャージタイムを与える前に、接近してヴィヴィオを倒す。

そう考え、ヴィヴィオのいる場所まで移動しようとした時、アリカの身体は、光のリングに拘束された。手足が空間に縫い付けられたように動かせない。手足を縛る光の色は、虹色。身動きを封じら

れたことに驚き、慌てて身体を動かして拘束から逃れようとするが、拘束が固く動かない。

段々と強くなる虹色の光に焦るが、あまりにもバインドが固すぎる。

アリカの脳裏に浮かぶのは、先ほどの戦闘。ヴィヴィオに拳による一撃を喰らったとき。右腕に付加されていたものが魔力ではなく魔法だったことに、今気付いた。あの時から、これを狙っていたということか。

これでは、逃げられない。

『st ar l i g h t b r e a k e r』

滑らかに流れる、ザイフリートの声。

ザイフリートのフォルムドライ、ヴァナヘイムフォルム。

ひし形十字と杖の柄の付け根の部分にカートリッジが収められたマガジンがセットされ、新たな装甲がその周囲を強化するように装着されている。先端のひし形十字が縦に二つに分かれ、新たに砲身の役割を果たす二本の長いフレイムが伸びる。通常よりも大口径のカートリッジを使用し、圧倒的な火力の砲撃によって敵を薙ぎ払うことを前提とした、砲撃特化の形態。

そして、ヴィヴィオの持つ複数の魔法資質の中で最も強力なのは、古代ベルカ式の、直射・収束魔法。何よりも、ヴィヴィオが憧れの人から教わってきたことは、管理局最強の砲撃魔導師である彼女直伝の、砲撃魔法。

その威力を想像し、アリカの表情が変わる。

「受けてみて、アリカちゃん。これが私の、全力全開ー!!」

ザイフリートに搭載された大口径のカートリッジが、六発全て消費される。付け根部分の強化装甲がスライドし、空になったカートリッジが排夾される。

「スターライト・ブレイカーー!!!」

トリガーを引くのは、僅かな魔力と、ヴィヴィオの思い。

ありったけの思いを込めて、ザイフリートを振り下ろす。

そうして放たれたのは、虹色の光。

「!!!?」

ヴィヴィオの思いを体現したかのようなその一撃が、アリカを呑み込んだ。

「……………っ、はあ、はあ……………」

収束した魔力全てを解き放つことは、さすがのヴィヴィオでもかなりの体力を削られていた。

それだけでなく、収束砲は身体に負担がかかるのだ。ヴィヴィオの幼い身体で多用すれば本当に壊れてしまう。ザイフリーストの第三形態に搭載された大口径カートリッジも、通常のものよりはかなり負担が大きい。そのため、スターライトブレイカーの使用はシャッハからも、なのはからも控えるように固く言われていた。

だが、ヴィヴィオにはそんなことはどうでもよかった。

友達を救うための、全力全開の一撃。自分のことなんかどうでもいい。

「アリカちゃん……」

ヴィヴィオが呟くのは、護りたかった友達の名前。

スターライトブレイカーの砲撃が止んだところで、アリカの姿を探すヴィヴィオ。

ヴィヴィオの全力の想いを受けたその友達は、ヴィヴィオの予想通り、気を失っているのか、飛行魔法も発動させずに、重力に添って落下していた。

「アリカちゃん！」

急いでヴィヴィオは降下し、落下するアリカの身体を抱きとめた。気を失ったままのアリカの身体を確認する。バリアジャケットこそスタスタになっているが、きちんと非殺傷設定にしていたので、身体自体はほぼ無傷。気絶しているというよりは、ただ眠っているようにも見えた。

「良かった……」

アリカが無事なことに、安堵の溜息をつくヴィヴィオ。

この戦いは、アリカのことを救うための戦いなのだ。アリカが傷ついてしまったら、意味がない。

「……ん」

うめき声をあげ、ヴィヴィオの腕の中にいるアリカが、ゆっくりと目を開けた。

「アリカちゃん、気がついた？」

「……ヴィヴィ、オ？」

「うん」

ぼんやりと目を開けたアリカに、ヴィヴィオが微笑む。

「私……」

「全部終わったんだよ。アリカちゃん」

優しく、ヴィヴィオがアリカに語りかける。

アリカはじつとヴィヴィオの瞳を見つめ、やがて、観念したように、呟いた。

「……私、負けちゃったんだね」

「うん」

「お母さん、助けられなくなっちゃったなあ……」

「死んだ人は、絶対に生き返らないよ。例えプロジェクトFでも、完全に元の人を創り出すことは、不可能なんだ」

それは、紛れもない事実。

例え同じ身体をしていても。同じ記憶を持っても。完全に同じ人になるということは、絶対にありえない。

「だって、アリカちゃんの大好きな人は、そこにしかいなかったんだから」

悲しい現実。けれど、伝えないといけない。

誰かの代わりなんてありえない。その人はその人であり、誰だつて代わりになんかなりっこない。カタチが同じでも、心は、魂は、その在り方は、その人だけが持つ、その人だけのものだから。

「だからね、アリカちゃん。残された人は、大好きな人の分まで、全力で生きて、全力で幸せにならないといけないんだよ」

それが、残してしまった人の願いだから。

「アリカちゃん。私じゃ、足りないのかな？」

「え？」

「確かに私は、アリカちゃんのお母さんの代わりにはなれないよ。だけど、アリカちゃんと一緒にいることはできる。アリカちゃんのお話を聞いて、悲しみを分け合うことだってできる。アリカちゃんと一緒に、泣くこともできる。だから、辛いことがあったら、一人で抱え込まないで。悲しいことがあったら、私に助けを求めて」

アリカちゃんに伝えたかった、私の想い。

それを今、伝えよう。

「だって私は、アリカちゃんの友達なんだから」

「ヴィヴィオ……」

アリカの瞳から、一筋の涙が零れ落ちた。

「泣きたいときは、泣いてもいいんだよ」

言い、ヴィヴィオは、アリカのことを優しく抱きしめた。

抱きしめられたアリカは、ヴィヴィオの胸の中で、暖かい腕に包まれて、まるで泣きじゃくる小さな子供みたいに、声を上げて泣き始めた。

ヴィヴィオはそんなアリカのことをアリカが泣きやむまで、優しくぎゅっと抱きしめ続けた。

「……ごめんね、ヴィヴィオ」



やがて、どのくらいたったのだろうか。

ヴィヴィオの胸に顔を埋めたまま、アリカが呟いた。

「うっん、気にしないで」

「……私、とんでもないことしちゃったんだ」

「大丈夫。カリムさんもシスターシャツハも、エリーゼさんだって、話せば分かってくれる人だよ。だから、大丈夫」

実際、これからアリカが管理局か聖王教会に保護されるのは間違いない事実で、どれくらいの罪になるのかヴィヴィオには見当もつかない。もしかしたら情緒酌量の余地ありということで刑が軽減されるかもしれないし、幾人もの使者を出した重大事件の犯人として軌道拘置所に幽閉されるかもしれない。だけど、例えどんな罪であっても、ヴィヴィオはアリカの友達を止めるつもりはなかった。

「例えどんな刑でも、私も、きっとエリーゼさんも、アリカちゃんの友達だよ」

「ヴィヴィオ……ありがとう……！」

アリカがヴィヴィオを抱きしめる手に力を込めた。

それに応えるように、ヴィヴィオもアリカを抱きしめる手に力を込める。

こうして、ひとつの事件が幕を下ろす。





かに、  
思われた。





「美しいわねえ、友情って」

どこからか、パチパチと手を叩く音と、奇妙な声が聞こえた。

その声は質こそ男性のそれであるのに妙に甘ったるく、背筋に悪寒が走るような、まるで人を苦しめることが心底楽しいとも言いたげな、嫌な声だった。

その声の主の正体に、ヴィヴィオは心当たりがあった。

だいきらいなかみさまへ



「……あなたが、この事件の真犯人……アリカちゃんにプロジェクトFのことを教えて、聖王教会の騎士さん達を誑かして、この事件を起こした、張本人ですか？」

アリカを抱きしめたまま、聖王の檻の内部に入り込んだ男のことを睨みつけるヴィヴィオ。

その視線を受け、その男は、心底愉快そうに、顔を歪めて、嗤った。

私は、あなたを赦すこと、できそうにありません。

## 第十二話    D e u x   e x   m a g i c a

アリカのことを抱きかかえるヴィヴィオと、それに対峙する男。

それほど大柄な方ではない。中肉中背の体格に、細面の顔。細い瞼から覗くのは黒色の瞳。そして、その男の顔で特徴的なのは、右目から右頬にかけて走る一筋の傷痕と、ヴィヴィオの前に姿を現した最初の頃から変わることはない、人のことを小馬鹿にするように歪んだ口元。おそらく、ヴィヴィオのことを嘲笑っているのではなく、普段からそうなのだろう。人が苦しむ様を見るのが心底楽しい、本気でそう考えていそうな男に、ヴィヴィオは不快感を覚える。

普段からヴィヴィオは礼儀正しい方で、少なくとも初対面の相手にそんな失礼な感情を抱くことはあまりない。それなのに、この男に限っては、一目見たときから……いや、その声を聞いた瞬間から嫌悪しか感じなかった。それは、もちろんアリカを誑かしてこの事件を起こさせた人物だから、というものも含まれている。しかし、例えそのことがなくても、ヴィヴィオはこの男に不快感を感じるだろう。そのくらい、この男の存在そのものが、歪んでいた。

「……あなたが、この事件の真犯人……アリカちゃんにプロジェクトFのことを教えて、聖王教会の騎士さん達を誑かして、この事件を起こした、張本人ですか？」

アリカを抱きしめたまま、その男を睨みつけながら問いかけるヴィヴィオ。

そのヴィヴィオに対し、男の返答は      顔全体を歪めた、嗤いだ

った。

「……そうねえ。あなたのその質問に答えるとすれば、イエスになるわね」

次にその男は顔を歪めたまま、男であるのに女言葉でヴィヴィオの問いに答えた。その言葉に、声に、話し方に、ヴィヴィオはますます嫌悪感を募らせる。それは、いわゆるオカマ口調で話すからというだけでなく、その男が話したということそのものが、妙に気持ち悪かった。

「あなたは……誰なんですか？ 何が目的で、アリカちゃんにこんなことをしたんですか！？」

ヴィヴィオは嫌悪感に耐え、問いを続ける。

「ふふふ。やあねえ、そんなに怖い顔しないでよ。カリカリしないでも、ちゃーんと答えてあげるから」

声を聞くだけで、神経が逆撫でされる。どういう生き方をすれば、話すだけで相手に嫌悪感を与えることができるのか。どういう価値観を持てば、存在そのものが歪んで見えるのか。ヴィヴィオには不思議でならなかった。

「まずは……自己紹介から。私の名前は、メアリ・フローラ・リーゲン。年は秘密。職業は……そうねえ、あなた達風に言っと……次元犯罪者、になるのかしら」

妙に甘ったるい声で自己紹介をする、メアリと名乗るその男。本名でないことは、ヴィヴィオにもすぐに分かった。信用ならない。

その言動も、存在も。

どうして、アリカちゃんはこんな人間の言うことを信じたのだろうか。

そう、未だ腕の中にいるアリカに意識を向けて、異変に気付く。

「アリカ、ちゃん？」

アリカの瞳の輝きが、消えていることを確認し。

次の瞬間に、脇腹に鋭い痛みを感じた。

「……え？」

頭で考える以前に、ヴィヴィオはアリカの身体を突き飛ばした。それは、例えるならば飛んできたボールを避けるような、身体を守るための反射行動。感情も意志も関係がない。身体を守るために必要だったから、ヴィヴィオはアリカのことを突き飛ばした。

そしてすぐに、自分の行動に気付き、脇腹の痛みに戸惑う。視線を痛みのある部分に向けると、右の脇腹のバリアジャケットが切り裂け、そこから血が流れていた。

「っ……」

痛みだけならば、人は案外耐えることができる。ただ、それが出血を伴うものだと話は変わってくる。出血というものは、程度によつては命の危険に直結する。それを人は本能で感じ取り、血液というものに無意識下で過敏に反応する。傷自体は大したことなくても、

溢れる血液を見るだけで、人は容易に興奮状態に陥り、最悪意識を失う。人の身体の中を流れる原初の赤。

内臓こそ傷ついていないものの、ヴィヴィオの傷はかなり深い。容赦なく傷口から血が溢れ出る。

その、自分の身体から今までになく溢れ出る原初の紅色を見て、意識が遠のきそうになりながら、ヴィヴィオはグッと堪え、自分が突き飛ばしたアリカに意識を向ける。

輝きのない虚ろな瞳を向けるアリカの手には血に塗れたシグルズが握られ、なにより……アリカは、メアリの傍らにいた。そのアリカを見て、確信する。今のアリカは正気ではない。操られている。

「あなた……アリカちゃんに、何をしたの!？」

気を抜けば吹き飛んでしまいそうな意識を必死で縫い付け、ヴィヴィオはメアリに問う。

人を操る魔法は実際にいくつかある。肉体操作や精神操作。アリカはおそらく、精神操作がかけられているのだろ。ただ、違和感を感じるのは、アリカが自分のことを攻撃したとき、魔力の流れを一切感じなかったこと。精神操作のような高度な魔法であれば、魔法の流れを誰かに感じさせずに発動させるなど、ほぼ不可能なことのハズなのに。

血を流すヴィヴィオの姿を見て、メアリは、また、嗤う。

「なにつて……私はただ、この子の後押しをしただけよ」

「後……押し？」

「そう。お母さんが死んで、悲しんでいたこの子を私は見つけた。小さい子供にとって、家族っていうものは自分の世界のすべてのようなものよ。あなたにも経験があるでしょう？」

メアリの言葉にヴィヴィオは心の中で同意する。確かに自分も、保護されたばかりの小さい頃は、家族が……なのはママが、世界のすべてだった。

「そんな子供が唯一の家族であるお母さんを、世界のすべてを失ってしまった時、その子は何を思うと思う？ 大抵は、お母さんを生き返らせたいと思うわよね。生と死の概念も理解できていないような小さな子供なら、きつとお母さんを生き返らせる方法があるって考えちゃうものだしね。だけどそんな方法、小さな子供は知らないわ。だから、ほとんどの子供は時間が過ぎて成長して、時間が傷を癒していく間に、そんなことを考えなくなる」

嫌な、予感がした。

「でもね。じゃあ、お母さんを失ってすぐの頃に、お母さんを生き返らせる方法があるって知ったら、どうかしら？ その方法が夢物語じゃなくて現実のものだって知ってしまったら、どうなるかしら？ 囚われちゃうわよね。その考えに。現実を知り成長することもなく、夢物語に近い子供独特の妄想から抜け出すこともできず、時間に傷を癒されることもなく、ずっと、ずっと、お母さんを蘇らせることに囚われ続ける。」

嗤いながら、メアリは続ける。

「歪んじやうわよ、子供の心。いい歳こいても、いつまでも子供みたいな妄想に囚われて。いつまでもお母さんお母さんって。そんな姿を見て、身も心もボロボロの傷だらけで、そのことに自分でも気付かなくて、人として朽ち果てていく様子を見るのが　堪らなく、嬉しいわ」

口元を醜く歪めて、メアリは嗤う。

「楽しくて楽しくて楽しくて嬉しくて、ああ、堪らない。ねえ、あなたも可笑しいと思わない？　たったの一言、お母さんを生き返らせる方法がある。たったの少しの時間、詳しい説明、プロジェクトFの説明。たったのそれだけで、人の人生がこおんなにも歪んじやうんだから。滑稽だと、お・も・わ・な・い？」

何なの、この人は。

そんな…… たった、それだけのために。この人の快樂のためだけに、他にもたくさんの人々の人生が狂わされたの？　たったそれだけのためにアリカちゃんの人生は狂わされたって、そんなことを言うの？

「……でもね、この子。アリカちゃんは優しくて総明な子供だったわ。私がプロジェクトFの説明をしても、他の多くの子供達みたいに乗ってこなかったわ。『私のわがままのために、他の人の人生を狂わせたくない』ですって。たまに、他にもこういう子がいるのよ。本当に優しいわ。反吐が出るくらい」

それなら、なぜ。なぜ、アリカちゃんの人生が狂わされてしまったの？



「そう言う子には、私の能力を使えばいいだけ。知ってる？ 強

制催眠能力（ヒュプノ）って」

「それが、あなたのレアスキル？」

「チツチツチ。違うわ。魔法じゃなくて、超能力。私の能力は、人の心を覗いて、思いのままに操ること」

一応、聞いたことはある。

魔法を使わない精神の力のみで、不思議な現象を引き起こす人のこと。

だけど、まさかこの人がそうなんて。

「強制催眠能力（ヒュプノ）っていうものはね、完璧な能力に聞こえるけど、実際には本人が嫌がることはできないのよ。だから、例えばあなたに自殺しろって命令しても、まったく効果がないわ。でもね、その人の心の隙間に浸けこめばそうでもない。例えば、お母さんが死んじゃった、とか。そういうことがあつたら、どうしても心に隙が生まれちゃうのよ。小さな子供なら、どんなに賢くても尚更。そう言う人の心の隙間に浸けこんで、お母さんを生き返らせる方法があるって囁けば、簡単よ」

本当に心の底から楽しそうに語るメアリ。

「そうやって、聖王教会の騎士達も操ったんですか？」

「そうよん。信仰心が強いからこそ、信仰という心の隙間ができるのよ。一回でひっかからなくても、時間をかけて心を揺らせば簡単

よ。信仰心が中途半端に強ければ強いほど、ね」

メアリに対し、ヴィヴィオの中でひとつの感情が生まれ始めていた。

「そうやってじわじわと心を責めていけば、完全に心を操ることもできるようになるわ。こういう風にね」

そう言い、メアリが示したのは、メアリの傍でシグルズを構えるアリカの姿。

「あなたのせいで！」

「違うわよ、ヴィヴィオちゃん。言ったでしょ。私は、ただ後押しをしたただだって。プロジェクトFのことを教えて、それを実現するために邪魔な良心と優しさと躊躇いを、少し麻痺させただけ。それだけで、アリカちゃんはこの三年間、とっても素敵に動いてくれたわ」

生まれて初めて。

「ああ、そうそう。ちなみにね。これが一番傑作な話なんだけどね」  
ヴィヴィオは。

「アリカちゃんのお母さん、任務中に死んじゃったじゃない？ あなた達がロストログア……ブルースフィアって呼ぶものを探す次元犯罪者に対峙してるときに、仲間に裏切られて殺されたんですって」

心底可笑しそうに嗤うメアリに、殺意のようなものを抱いた。

「あれね、私がやったの。私が一番心が弱かったあの人の仲間を操って、あの人を殺させたの。だってあの人、私の美しい顔に傷をつけたんだもん。ほら、見て。痛々しいでしょ？」

言い、メアリは自分の右目から右頬にかかる傷を指し示した。

ヴィヴィオはしかし、そんなこと、どうでもよかった。

「アリカちゃんも滑稽よね。お母さんを生き返らせる方法を教えてくれた人が、お母さんを殺したんだから。そのことが心の隙間になって私に操られるなんて、可笑しくて可笑しくてたまらないわ。とっても甘美だったわよ。最高よ。この三年間。親子で私のことを愉しませてくれるなんて、なんて親切で優しいのかしら。」

ヴィヴィオの中で、何かが弾け飛んだ。

予備動作なしに全身に魔力を循環させ、身体能力を向上させる。踏み込み、間合いを詰める。ヴァナヘイムフォルム、第三形態のままのザイフリートを振りかぶり、ザイフリート自体に魔力を付与させ、全力でメアリに叩きつける。インパクトの瞬間に付与した魔力を解放し、瞬間的な威力を上昇させるための攻撃魔法、フラッシュインパクト。

その攻撃はしかし、メアリの傍らに控えていたアリカによって遮られる。シグルズとザイフリートがぶつかり合い、拡散した魔力が火花となって飛び散る。

「……あら、どうしちゃったのかしら、ヴィヴィオちゃん？」

「あなたの、あなたのせいで！」

ヴィヴィオの感情を支配するのは、怒り。

未だかつて感じたことのないほどの怒りが、ヴィヴィオの全身の血液を沸騰させる。切り裂かれた脇腹の痛みも、出血による眩暈も感じなくなる。心を埋めつくさんばかりの怒りの感情が、ヴィヴィオの身体を突き動かす。

「……………いいわ。いいわよ、ヴィヴィオちゃん。怒りと恨みと憎しみが緋い交ぜになったその表情。ゾクゾクするわ」

「ッ！」

ザイフリートに力を込め、アリカから距離を取るヴィヴィオ。

数十メートル離れたところで、大口径カートリッジを二発ロード。砲身をメアリの頭に向け、照準を合わせる。ザイフリートを腰だめに構え、右手で本体を持ち、左腕はマガジンを掴み、グリップの代用とする。イメージするのは狙撃砲。大火力の砲撃で、対象物だけをピンポイントで確実に破壊する。

『Divine Buster Extension』

「デイベインバスター！！」

通常よりも細い砲撃。実際には、対象物のみを確実に破壊するために、高い魔力密度を持つ。魔力光は虹色。この距離ならば、ヴィオなら確実にアリカを避けてメアリの頭だけを打ち抜くことができる。メアリに迫る、虹色の狙撃砲は、

しかし、アリカによって遮られる。遠距離からの攻撃は、きっと全部アリカによって受け止められてしまう。そう考えたヴィヴィオはザイフリートを第二形態バルムングフォルムに戻し、再びメアリに迫るために、

『Schallumzug』

高速機動魔法で数十メートルの距離を一秒足らずで数メートルまで詰める。そのまま間を置かずに、メアリに切りかかるのと同時に、二十を超える魔力弾を生成する。

「はあああ！」

メアリに切りかかるヴィヴィオ。その攻撃はアリカに阻まれるだろう。だからこその二十を超える魔力弾。ヴィヴィオの攻撃の後に魔力弾を起動させれば、ヴィヴィオを食い止めるためにアリカを使用した後に隙ができ、全方位から襲いくる魔力弾を防ぐことは不可能。

そう、ヴィヴィオは考えた。

しかし、アリカは、ヴィヴィオの斬撃を止めようとはしなかった。

代わりに、メアリを守るように、メアリに照準を合わせた魔力弾を身体で防ぐような位置に、魔力防壁も張らずに立っていた。このままでは、メアリにも数発の魔力弾が直撃するだろうが、それと同時に十数発の魔力弾がアリカに直撃する。

「！？」

咄嗟に、魔力弾の軌道を逸らすヴィヴィオ。魔力弾は明後日の方向に飛んで行き、コントロールを失ってそのまま何処かに飛んで行く。

その空白を、動揺を見せた隙に、アリカがヴィヴィオの眼前に迫る。迅速重視のグングニルフォルムからの迅い突きがヴィヴィオを襲う。ザイフリートで防ごうにも、迅くて正確な一撃を急所に当たるのを逸らすのが精一杯で。鋭い一撃が、ヴィヴィオの左肩を貫いた。

「  
！」

痛みで叫びたくなるのを、ヴィヴィオは歯を食い縛って耐える。肉を切り裂かれ、骨を砕かれる苦痛が容赦なくヴィヴィオを襲う。途端に、怒りに支配されることで忘れていた脇腹の傷の痛みを思い出す。叫び声をあげ、意識を手放してしまいそうな痛みにはヴィヴィオは耐え　メアリを、睨みつける。

「ふふふ。ヴィヴィオちゃん、いい顔になったわ。誰のためでもなく、ただ自分の憎しみと怒りのために戦う。それでこそ、生体兵器としての、聖王ヴィヴィオよ」

「違う！　私は、生体兵器なんかじゃない！」

叫ぶ。軋む身体の痛みを無視して、心の限りに、感情を吐露させる。

「私は、高町ヴィヴィオ！　なのはママの娘で、アリカちゃんの親友。私が戦うのは生体兵器だからじゃない。なのはママみたいな強

くて優しい魔導師になるために、そしてアリカちゃんを助けるために、私は戦うんだ！」

「嘘ね」

「!？」

「アリカちゃんを助けるため？ ふふ、笑っちゃうわ。ねえ、聖王ヴィヴィオちゃん」

言い、メアリは嘲るようにヴィヴィオを嗤う。

「……どういう、意味ですか？」

「言葉のままよ。ヴィヴィオちゃん。あなたは、高町なのはみたいな魔導師になりたいのよね。強くて、優しい。そんな魔導師に」

「そうです。私は、なのはママみたいに」

「だったら、今こうやって戦っているのは、憧れのなのはママみたいになるため？」

「えっ」

メアリの言葉に、ヴィヴィオは動揺する。

「わ、私は、アリカちゃんを助けるために……」

「助ける？ アリカちゃんを？ そんな、怖い顔して？」

「ッ!？」

息を呑む。

何のために戦うのか。

初めは、憧れの人みたいになるためだった。次は、泣いている人達を助けるためだった。今までは、友達を、アリカちゃんを助けるために戦ってきた。なら、今は？ 今、私は、何のために戦っている？

そんなの、決まってる。

アリカちゃんを、救うために

「本当に？」

メアリの嫌な言葉が、心に棘を刺す。

「あなたは本当に、友達を助けるために戦ってきたの？」

「どういう、こと？」

「あなたは……高町なのはみたいになるために、友達を利用してきたんじゃないのかってこと。友達を助けるため、そんな高潔なことを言いながら、実際には憧れの人みたいになりたいって、そんな利己的なことのために、苦しんでいる友達を口実にして戦ってきたんじゃないの？」

「そんな、こと」



声が震える。足が竦む。そんなこと、違うつて言いたいの、どうして、声が出ないの？

「もつと言えば、高町なのはみたいになりたい。そのためにあなたは、高町なのはの真似をして、高町なのはみたいな戦い方をしてきた。あなたは、高町なのはになりたいの？ 高町なのはみたいな魔導師になりたいの？ 古代聖王のコピーさんは、現代の魔導師の劣化コピーさんになりたいのかしら？ それとも……それも全部口実で、ただ戦うために戦いたいの？ 生体兵器、聖王ヴィヴィオちゃん？」

自分を支えていた足場が、すべて壊れてしまったような気がした。

自分が信じられない。それが違うのなら、メアリの言葉なんて一蹴してしまえばいいのに。どうして、声が出てこないの？ どうして、否定できないの？

私はどうして、魔法を覚えたの？

私は一体、ナンノタメニタタカタテキタノ？

「ふふ……」

メアリが口角を持ちあげて嗤ったことに、ヴィヴィオは気付かない。

「これだから、成長過程の子供は楽なのよ。敵の言葉なんて、端から聞かなければいいのに、なまじ強いから、頭が良いから、考えてしまうから、ちょっと催眠能力を上乘せした私の言葉に簡単に引つ

「かかつちゃう」

残酷な呟きに、ヴィヴィオは気付けない。

呆然とするヴィヴィオに向かって、魔力ではない術式が迫る。超能力、強制催眠能力。魔法技術の存在しない世界では比較的メジャーな能力である超能力。魔力ではなく、通常の人間では使用していない脳の一部分に封印された力であり、精神を媒介として発動する。

その力が、心を大きく揺さぶられたヴィヴィオに迫り、ヴィヴィオが気付かない内に、心を掌握されてしまう。

魔法ではない。超能力の魔の手が、ヴィヴィオに迫る。

《あなたは、何のために戦うの？》

頭の中に、自分のものではない声が響く。

（私は、私は……）

その先の言葉が、出てこない。

《戦うために戦う。そうでしょ？ 生体兵器・聖王ヴィヴィオちゃん？》

（違う、私は……）

《何が違うの？ どう、違うの？ あなたは絶対に、純粋にアリちゃんを助けるためだけに、戦ってきたって言うの？》

(私、は……)

《あなたがただ戦うために、憧れのなのはママみたいになるために、アリカちゃんを助ける、ということをお口に戦ってきた。アリカちゃんを、あなたはそのため利用した。違う?》

(ちが……)

《違うわいよ。ヴィヴィオちゃん。ほら、思いだしてごらんないな。あなたは、一体何者なのかしら?》

(……………)

頭の中に、ガンガンと、声が響く。

その声に、意識までもが侵食される。抵抗しようとしても、振り払おうとしても、それはかなわない。ヴィヴィオの心の柔らかいところを、弱いところを重点的に攻めてくる。段々と、段々と、意識が薄れていく。この感覚は……まるで、心乗っ取られる感じ。

頭の中に響いていた声が、やがて自分の意思であるかのように感じる。自分がそう思っ、それが当然であるかのように思えてくる。今まで心の中にあつたものが、新しいものに押し出され、変わっていくのを感じながら、ヴィヴィオは、それに抵抗できなかった。抵抗できるだけの意志の力を、自分を、すでに失っていた。

「ヴィヴィオ!」

不意に聞こえた強い声に、ヴィヴィオの意識が引き戻される。心をほとんど支配していた声が追い出され、自分の意志を取り戻す。

そのことに安堵し、自分の心がもう少しでなくなっていたということに、全身が戦慄した。

声の主が、ヴィヴィオに近づく。

ヴィヴィオは彼女のことを、エリーゼだと認識した。しかし、その身に纏う騎士甲冑は所々が裂け、ボロボロで、全身いたる所から血を流していた。

「エリーゼ、さん？」

「ヴィヴィオ、その怪我はどうしたのですか!？」

エリーゼの姿を見て、安心したのかどうかヴィヴィオ自身にも分からないが、全身から力が抜け　エリーゼは、ヴィヴィオの身体を優しく抱きとめた。

「あ……」

「ヴィヴィオ、しっかりしなさい!」

「エリーゼさん、その怪我……」

「私のはかすり傷です。放っておいても死んだりはしません。そんなことよりも、あなたの怪我の方が深刻です。ああ、もう、こんなになって……!」

エリーゼは、抱きとめたままでヴィヴィオの傷を確認する。エリーゼの言つとおり、ヴィヴィオの傷からの出血は、そろそろ放っておくと命に関わるレベルまで進行していた。

『verheilen Sie』

ヴィヴィオに対し、エリーゼは簡単な治癒魔法を施す。応急処置程度にしかならないが、これ以上の出血を抑えられるだけ、かなり良い。

「エリーゼさん、どうやってここに……」

「何を言っていますの？ この結界を破壊したのは、私とあなたですわよ。一度魔導式を解析してしまえば、私一人でも結界破壊の術式を編むことはできますわ。……もっとも、聖王陛下の魔法ですから、さすがに時間がかかりましたけど」

それは、ヴィヴィオとエリーゼが決闘をしたときのこと。この結界に閉じ込められたのは、エリーゼとヴィヴィオだった。

「他の、騎士さん達は……」

「シスターシャツハも、他の騎士達も、怪我はしていますがみんな生きています。私だけの力では完全に結界を破壊することができなくて、私だけしか入れませんでした。シスターシャツハ達に術式を教えてきたので、すぐにでも応援がかけつけますわ」

ヴィヴィオに治癒魔法をかけながら、エリーゼは話す。

「ところで……」

治癒魔法を継続させながら、頭だけを動かし、

「あなたが…… ヴィヴィオとアリカを苦しめる、張本人ですわね？」

強い力を持った瞳で、エリーゼはメアリを睨みつける。

そのエリーゼを見て…… メアリはまた、嗤った。

「……何が可笑しいのです？」

「可笑しいわよ。フィアットお人好し親子。生体兵器・聖王ヴィヴィオ。それに加えて、エリーゼ・ダイムラーまで乱入してくるんですもの。もう、今日は最高の日だわ」

「……どういことですか」

自然と、エリーゼの声に怒気が含まれる。

「ああ、そうよね。あなたは、知らないわよね。フィアット親子のことも、ヴィヴィオちゃんのこと、私のことも。いいわ。説明してあげるから」

そうして、メアリは、エリーゼに説明を始めた。フィアット親子のこと。三年前のブルースフィア事件、そして聖王信仰事件の真実。話している間中、メアリは心底愉快そうに嗤っていて、エリーゼはそれを静かに聞いていた。

「……とまあ、これが真実なのよ。信仰も何も関係なんてないのよ。ただ、おバカさん達が、私の掌の上で滑稽な踊りを続けていただけ。本当、可笑しくて嗤っちゃうでしょ？」

「……そうですか」

エリーゼは、静かにそう呟き、抱きかかえていたヴィヴィオを下ろした。

「ヴィヴィオ、とりあえず、大丈夫ですか？」

「はい。……大丈夫、です」

「……………」

エリーゼはヴィヴィオの瞳をじっと見つめ……おもむろに手を伸ばし、そして、ヴィヴィオにデコピンをした。

「いたっ」

思わず額を抑え、涙目でエリーゼを見つめる。

「どこか大丈夫なのですが。何を言われたのか知りませんが、動揺しまくりですわよ。怪我也酷いのですし、そんなので、アリ力を助けることができるんです？」

「う……………」

エリーゼの言葉に、ヴィヴィオは言葉を詰まらせる。

「ここは、お姉様に任せておきなさい」

言い、エリーゼはメアリに対峙する。力強くファーフニルを振り下ろす。ベルカ式魔法陣が一瞬でエリーゼの足もとに展開する。その色は橙色。

「私は、あなたを許すことができません」

メアリを睨みつけるエリーゼと、ニタニタと気持ち悪い笑みをエリーゼに浮かべるメアリ。

「へえ。どう、許すことができないの？」

「こういう、風にです！」

一瞬で、エリーゼはメアリとの間合いを詰める。全身の動きを連動させ、遠心力の乗った重い一撃をメアリに振り下ろす……が、その一撃は、未だ虚ろな瞳のアリカによって阻まれる。

「アリカ！ あなたも、目を覚まさない！」

十字槍と槍による鏖迫り合いを続けたまま、アリカに向かって叫ぶエリーゼ。

しかし、その声はアリカには届かない。

「エリーゼ・ダイムラー。古代聖王家を信仰し、継承する、ダイムラー家の末裔」

「それが、どうしたのです？」

「アリカちゃんも、ヴィヴィオちゃんも可笑しいけど、あなたも十分可笑しいのよ？」

「友を愚弄することは、私が許しません！」



腕に魔力を上乗せして、アリカを弾き飛ばし、一旦間合いを取る。  
カートリッジを一発ロードし、次の攻撃を実行するために、構え、  
「だって、本物の聖王陛下がすぐ傍にいるのに、全然気付かないんですもの」

メアリの言葉に、動きを止めた。

「……何が言いたいのです」

「私は、ただ真実を知らないかわいそうなあなたに、真実を教えてあげたいだけなのよ。そうでしょ？ 生体兵器・聖王・高町ヴィヴィオちゃん？」

エリーゼが、その動きを完全に止める。いつも冷静なその表情からは、明らかな動揺が見てとれた。

「やっぱり知らなかったのね。なら、教えてあげるわ。三年前に起こったJS事件の時に、大犯罪者J・スカリエッティに生み出され、生体兵器として改修された古代ベルカ王朝の聖王陛下のクローン体。それが、高町ヴィヴィオちゃんなのよ」

「な……」

動揺し、反射的にヴィヴィオを見るエリーゼ。

メアリの言葉を、今は否定できないヴィヴィオ。

無言で見つめ返すしかできないヴィヴィオが、全てを物語っていた。

「そんな……」

否定がないことを肯定と受け取るしかない。エリーゼは目に見えて狼狽し、手に持つファールニルが小刻みに震えていた。なぜなら、聖王家を信仰し、聖王に仕えてきたことを誇りとし、聖王を受け継ぐことを生きる意味としてきた一族である。メアリの伝えたことは、エリーゼの価値観を、信じてきたものを破壊するには十分すぎた。

「ね。あなたも滑稽でしょ。すぐ傍に憧れの聖王陛下がいるのに、そのことに気付かないなんて。ねえ、聖騎士、エリーゼちゃん？」

メアリの嘲るような嗤いに、震えるエリーゼは、

「……………」

しかし、

「……………だから、どうしたのですか？」

少しだけ震えた、しかし凜とした声で、言った。

「私はヴィヴィオを信じています。友を信じています、それで充分！」

想いをこめて、叫ぶ。

そこにいたのは、エリーゼ・ダイムラーと言ったただの少女ではな

く、友を信じ、己を信じる、ただ一人の強い騎士だった。

「例え兵器であろうと、聖王陛下であろうと、あなたは私の友！高町ヴィヴィオであることに変わりはありません！」

ヴィヴィオに向けて、エリーゼは叱責する。

「私はあなたを友だと思っています。あなたも、アリカも、私の生涯の友に値する人物だと思っています。……あなたはどのようなのですか、高町ヴィヴィオ！」

「あ……」

エリーゼの想いが、ヴィヴィオの心に沁みこんでくる。停滞し、薄れていた意識が覚醒する。

そうだ。そうだよ。

エリーゼさんの言うとおりだよ。

私が、生体兵器。聖王陛下。憧れの人になるために戦っている。

だから、どうした。

心にわだかまりが残っていないと言えは嘘になる。

だけど、今はそんなことはどうでもいい。

友と認めてくれた人のために。友だと思う子のために。

私は戦う。エリーゼさんと一緒に、アリカちゃんを助ける、絶対に！

それだけで、今は十分なんだ。

ヴィヴィオの心に、再び火がついた。その命の炎は、確かに生体兵器として生み出されたのかもしれない。だが、今のヴィヴィオの命は、間違いなくヴィヴィオのものだ。心に灯った炎は、意志は、想いは、間違いなく、ヴィヴィオ自身のものだ。それを今、ようやく思い出した。

「……………ありがとうございます。エリーゼさん。私、目が覚めました」

「……………まったく。世話が焼けるのですから」

軽口を叩き合う。戦闘中だからこそ、自分達を保ち、余裕を維持するために軽口を叩くのである。それだけの考える余裕をまだ持っているということなのだから。

再びザイフリートを構え、自分の身体のコンディションを確認する。

傷は痛む。出血を抑えていられるのも、おそらくあと数分が限界。正直、手足の先が痺れる。視界は黒く狭まってきたし、頭がフラフラする。だからきつと、今の私にできることは、あの人にしたったの一撃を加えることだけ。

「……………最後の一撃に、協力してもらえませんか、エリーゼさん？」

「何を今更。ここまで来たのです。最後まで付き合いますわ。その代わり、全てが終わったら、あなたが秘密にしていたこと、残らず説明していただきますわよ?」

友と呼んでくれる人に、微笑むことで礼を、同意を伝える。

それだけで、十分。

「ザイフリートも、手伝ってくれる?」

『無論でございます。私は、御身を助け、護るために在るのです。……なんなりと、御命令を。お嬢様』

「……ありがとう、ザイフリート」

最高のパートナーだ。心からそう思う。

「いきますわよ、ファーフニル。準備はいいですわね?」

『J a w o h l』

答える相棒に、エリーゼは微笑む。

それから、二人揃って、それぞれの相棒を構える。

「……フン。つまらないわ。最高の一日だと思ってたのに、最後に最低の一日になっちゃったじゃないの」

メアリが、心底憎たらしそうにそう言う。

「絶望のどん底から立ち直るなんて、そんな希望に充ち溢れた様子なんて、最低の情景よ」

醜悪に歪むメアリの顔に、ヴィヴィオとエリーゼは嫌悪し、

それを合図に、エリーゼが前に飛び出した。狙うは諸悪の根源、メアリただ一人のみ。

メアリとエリーゼの間に操られたアリカが飛び出し、エリーゼが進むことを妨害するが、そのことはすでに予測済みだ。

両腕で持った十字槍を振りかぶり、エリーゼから見て左斜め上から袈裟切りに切りつける。ただし、あえて遠心力を上乗せせず、刃の部分ではなく、通常よりも石突に近い部分を持って、柄の部分を当てるように振るう。それをアリカは、自分の真横にシグルズを立てることで防ぐ。武器と武器がぶつかり合い、双方の動きが止まる。刃と刃ではなく、柄と柄で押し合う形になる。

「これで……」

その状態で、エリーゼはファーフニルを素早く引く。十字槍の横の刃がシグルズの柄に引っ掛かり、アリカの持つシグルズに引く力が伝わる。

「どうですか!」

その手ごたえを確認し、エリーゼは一気にファーフニルを引き抜く。予想外の方向に加えられたことで、アリカが体勢を崩す。独特の十字型の刃を利用した、十字槍ならではの使い方。

エリーゼの目的はただひとつ。メアリに攻撃することではなく、

メアリのことを身を呈して守られているアリカの動きを封じること。体勢を崩してしまったアリカは、どんな命令が雇用とも咄嗟に防御行動に移ることができない。

「ヴィヴィオ！」

『Schallumzug』

フェイトの得意な空戦高速機動魔法、ソニックムーブのヴィヴィオ改定版。通常の間には目視できないほどの速度でメアリとの距離を削る。突然目の前に現れたヴィヴィオに、メアリは反応しきれない。

「くっ！」

「あああああ！！！！」

ヴィヴィオに許された最後の一撃。残された魔力、体力、精神力のありつたけを込めて、ヴィヴィオはザイフリートを横一線に薙ぎ払った。

「っ……ぎゃああああああ！？」

その一撃をメアリはかろうじて避けようとしたが、完全には叶わなかった。ヴィヴィオから距離を取ることを代償に、目の下に、横一文字の太刀傷を与えられる。傷を押さえ、痛みに苦悶するメアリ。

「……………あっ」

残されたありつたけを込めた身体から、力が抜けた。体勢が崩れ、

飛行魔法も一時的に解除される。空中に浮かぶ術を失い、重力による落下運動を始めようとするヴィヴィオ。

「ヴィヴィオ！」

その身体を、エリーゼに抱きとめられる。

「エリーゼ、さん……」

「大丈夫ですか、ヴィヴィオ？」

「えへへ……ちょっと、疲れました……」

「まったく……」

こんなときでも、軽口を叩いてみる。私は大丈夫だ、そんな意味を込めて。

その時、突然、空間が揺れ始めた。

「これは……」

「ようやく、援軍の到着ですわね」

この感覚は、ヴィヴィオも知っている。なぜなら、この結界を最初に破壊したのは、他にもない、ヴィヴィオとエリーゼだったのだから。

まるで果てしなく続く空みたいな空間に光のようなヒビが入ったかと思うと、数秒後、周囲を包み込んでいた空色の結界が、まるで



ガラスのような音を立てて砕け散った。

一瞬だけ空間がぐにやりと歪む感覚に襲われ、気がつけば、ヴィオもエリーゼも元いた広場に、しっかりと足を着いていた。

「ヴィヴィオさん、エリーゼさん！」

シャツハの呼ぶ声。その声によって、二人は結界が破壊されたことを確信する。

「あ……」

「シスターシャツハ」

ヴィヴィオとエリーゼの前に現れたのは、シスターシャツハ。彼女も全身傷だらけだが、かなり元気そうだ。シスターシャツハ以外にも、ヴィヴィオのいる広場は数十人規模の騎士隊によって包囲されていた。事件の深刻さをあらかじめ察知していたヴィヴィオの進言により前日から準備されていた、教会騎士の応援部隊である。

「ヴィヴィオさん、エリーゼさん……無事……でも、ありませんね」

ヴィヴィオの姿を見て、シャツハは自分の発言を一部訂正する。

「医療担当の騎士は待機を」

ヴィヴィオの安否を気遣いつつも、しかし、シャツハはヴィヴィオやエリーゼとは比べ物にならないほどの経験を積んだ本物の騎士である。危険がまだ去っていないため、全ての可能性を考慮し、重傷を負ったヴィヴィオを治療するための医療系騎士を待機させるに

留める。それを確認すると、一步前に踏み出し、この事件の真犯人、メアリを鋭く睨みつけた。

「あなたが、この事件の真犯人であり、私の友を、傷つけた人間です  
ね？」

その声には、いつも温和でちょっと苛烈なシャツハからは想像し  
難い、凄みの利いた声だった。

三下程度なら声を聞くだけで竦みあがってしまいそんな言葉に、  
メアリはしかし、横一文字に走った傷を押さえていた手をどけて、  
シャツハに顔を向け　　嗤った。

「ふふふ、そうやって睨まれるのは今日三回目よ。初めまして……  
で、いいのかしら？　修道騎士、シスターシャツハ？」

傷を負っているというのに小馬鹿にしたような態度を崩さずメア  
リはそう言い、辺りを見渡した。

広場にいるのは、負傷し、満身創痍でありながら戦意を喪失させ  
ていないヴィヴィオと、そのヴィヴィオを抱きかかえたまま片方の  
手でザイフリートを握り、メア리를睨みつけるエリーゼ。無防備な  
ようでありながら、全身から凄まじい闘気を発するシャツハ。そし  
て、それぞれの得物を構え、広場を包囲する教会騎士達。

彼らを一瞥し、メアリは嗤う。

「さすがにこれだけの人数を相手にするのは、私でも無理ね」

「でしょうね。これだけの騎士を相手にするなど、不可能です」

教会騎士達の本当の強さを知っているからこそ、シャツハは断言する。

「大人しく投降すれば、あなたには弁護の機会が与えられます」

「……………」

投降を呼びかけられ、メアリは数秒間だけ動きを止め、

「ふふふふ……………あーはっはっはっは！」

突然、嗤い出した。

「な、何が可笑しいのですか?!」

「可笑しいわよ。可笑しくて可笑しくて堪らないわ。もう、今日は本当に素敵な一日ね。ヴィヴィオちゃんとエリーゼちゃんを連れていくことは叶わなかったけど、それ以上に素敵なものが見れたから、良しとしましょう」

メアリは一際盛大に嗤い……………そして、また嗤う。しかし、その笑みは今までのような人を嘲るような笑みではなく、怨みと怒りに歪んだ、最低に歪んだ笑みだった。

「ねえ、ヴィヴィオちゃん、エリーゼちゃん。知ってる？ 人間が持つ様々な感情の中で、この世で最も強く、この世で最も甘美なもの」

「……………?」

メアリの問いに、ヴィヴィオもエリーゼも答えられない。

「それはね、怨みよ。誰かに怨みを持つて、最高の演出で、その人に復讐する。その瞬間の、その人が壊れていく様を見る快感は、何者にもかえがたいわ。例えば、私の顔を傷つけたアリカちゃんのお母さんを最高のシチュエーションで殺した時とか、その娘のアリカちゃんを、こういう風にしたときとか、ね。子供達をどん底に叩き落とすのもいいけれど、こういうのも、堪らない」

残念なのは、私が誰かに怨みを持つ機会があまりないことね、とメアリは続けた。

「ヴィヴィオちゃんに、エリーゼちゃん。あなたたちは、アリカちゃんのお母さんに続いて、私の美しい顔を傷つけた。この私の美しい顔を、ね。覚悟しておきなさい……………あなたたちの心、私が絶対に壊してあげるから」

メアリの顔が、醜悪に歪む。人が持てるすべての負の感情を凝縮したような笑顔に、ヴィヴィオ達だけでなく、この場にいる騎士達全員が背筋に冷たいものを感じた。どうすれば、ここまで人の顔は醜く歪むことができるのか。一体どれだけの外道を歩めば、これだけの笑顔ができるのか、皆目見当もつかなかった。

「……………ふふふ。大丈夫よ。壊れちゃった後でも、私がうんと可愛がつてあげるから」

舌なめずりをする蛇のような声に……………一番初めに我を取り戻したのは、シャッハだった。

「そんなことは、この私が許しません！」

ヴィンデルシャフトを振りかぶり、メアリに迫ろうとする。しかし、メアリはその直前に、

「……じゃあ、アリカちゃん。よろしくね」

メアリがそう告げると同時に、辺りを眩い閃光が襲った。

「!？」

視覚だけでなく、魔力も麻痺させる効果が付加された閃光魔法だ。それでなくても、人は外界の情報の七割近くを視覚から得るのだ。瞼を焼くほどの強烈な魔力光で視界を封じられてしまえば、脳が麻痺して動けなくなってしまう。シスターシャツハほどの手練であれば、気配が近づけば対処できるのだが、今回の相手の目的は逃走である。視界が潰された状態で逃げる相手の気配のみを追尾して捕縛することは、不可能だった。

やがて、光が収まり、騎士達の視界も回復していく。

その場に残されたのは、もしもの追撃に備え周囲を警戒する教会騎士達と、シスターシャツハ。それに、呆然とするエリーゼと、エリーゼの腕の中にいるヴィヴィオ。

メアリと操られたままのアリカの姿は、どこにもない。

「逃げられてしまいましたの……？ ヴィヴィオ、あなたは どう思います」

エリーゼは腕の中にいるヴィヴィオに意見を求めようとして……  
気付く。

ヴィヴィオが、自分の腕の中でぐったりしていることに。よく見れば、自分の手も、ジャケットも、血で赤く濡れている。自分の出したものではない。それは、明らかにヴィヴィオの血で。

「い、医療班、早く来て下さい！ 治癒系の魔法が得意な騎士でも構いません！」

声のままに、エリーゼは叫んでいた。

「早く！」

エリーゼの叫び声だけが、広場に響き渡った。

### 第十三話 高町ヴィヴィオ

初めて出会った時は、想いも覚悟もないのに、ただ才能があるというだけで聖王陛下の魔法を習得しようとしている、不屈きな子だと思っていた。

次に出会った時は、あの子の有能さと、あの子なりの想いを、覚悟を知った。

それから、決闘をし、一緒に戦い、訓練を重ねる内に、あの子の強さと弱さを知った。

あの子が、誰かのためなら平気で無茶をすると理解できたのは、ほんの少し前。

あの子……高町ヴィヴィオは、アリ力を救いだすために戦い、酷い怪我を負った。傷自体は今の医療技術なら傷跡が残らないくらいまでには回復できる、その程度のもの。彼女の身体に決定的な負担をかけたのは、その出血量と、無茶を通して戦い続け、体力が極端に衰弱してしまったこと。後から聞いた話では、もう失血死寸前までできていたらしい。彼女の小さな身体であれだけの血を流せば、命が繋ぎとめられなくなってしまう。事実、治療が終わってから、ヴィヴィオは三日間ほど意識を失ったままだった。

ただ、まあ、出血だけならば死んでさえいなければ輸血で補完できるし、ヴィヴィオもまだ成長過程の子供だ。きちんと休養と栄養のある食事を取れば、傷が癒え次第すぐに回復することができる。聖王教会系列の病院はとても優秀なスタッフが揃っているから、案外早く退院できるだろう。

しかし、さすがにあの時は、ヴィヴィオの母親である高町なのは三等空佐が青い顔をしてヴィヴィオが入院している聖王教会系列の病院に駆け込んできていた。人伝に聞いた話だと、意識を取り戻したヴィヴィオは高町なのは三等空佐に泣かれ叱られ怒られ、散々絞られた揚句親子揃って大泣きをしたそうだ。その場に私はいなかったから、それが本当の話なのかはわからないのだけど。

入院しておきながら周りを騒がせるのは、ある意味ヴィヴィオの才能なのかもしれない。誰からも好かれ、愛されているからこそ、彼女の周りにはいつも騒ぎが絶えない。私もかつては、その騒ぎを起こした人物の一人であって、そして今では、私も彼女のファンなのだから。

ヴィヴィオは、あれでいろいろなものを背負っている。それはもしかしたら、ダイムラー家次期当主としての私の背負っているものに匹敵する、いや、私のように、物心付いた頃から自覚していたのではなく、いきなりそれだけのものを背負わされたのだから、もしかしたらそれよりも大きくて重いものなのかもしれない。それだけのものを背負わされ、しかしヴィヴィオは逃げようともせず、立ち向かっている。いついかなるときでも、自分の想いを通し抜こうと、必死に足掻いている。

そんなヴィヴィオのことを、私は凄くと思います……尊敬すらしている。

それと同時に、なんだか放っておけないとも思っている。あの子是谁かのためなら平気で無茶を押し通すし、こうと決めたら絶対に意見を変えない強情さも持っている。だからこそ、芯がしっかりしているようで、どこか危ういところがある。それは、この一か月の



付き合いで良く分かった。だから、誰かを護るために自分を顧みないあの子のことを、誰かが守ってあげないといけない。私に懷いてくれたあの子のことを、いつの間にか私は護ってあげたいと思うようになった。

今日は、私はヴィヴィオに会いに病院にやって来た。ようやく面会謝絶が解除されて、高町なのは三等空佐のような身内以外でも病室に入ることができるようになったからだ。シスターシャツハやカリム様が言うには、経過も順調で、もう数日中には退院できるそうだけれど、私はちゃんとお見舞いの品を持って来ている。入院している人を見舞うときには見舞いの品を持参するのが礼儀だし、それに、私は今日、ただヴィヴィオに会いに来ただけじゃない。

あの時、私はヴィヴィオと約束をした。

すべてが終わったら、ヴィヴィオが秘密にしていたこと全部、話してくれると。

一応、ヴィヴィオの素性や秘密は、カリム様達から詳しい説明を受けていて、もうすでに知っている。ヴィヴィオの生まれた理由と、その意味を。

だけど私は、ヴィヴィオと話がしたい。ヴィヴィオが秘密にしていたことを、他でもないヴィヴィオ

の口から、直接聞きたい。それが友達ということ、だと思うから。

それにしても、だ。

「私ともあろうものが、お友達、ですか……」

なんとなしに、一人こちる。

ヴィヴィオと出会う前から、それは家柄上の付き合いから知り合った人だったり、あるいは学院の同級生だったり、私にも友達と呼べる人達は何人もいた。ただ、それはどちらかというと、友達というよりはご学友、と言った方がいいような付き合いだった。正直に言って、普通のお友達、というのは少し躊躇われた。体裁を気にした、上辺だけのお付き合いと言うか。早い話が、私には本音と本音でぶつかり合えるような友達がいなかったのだ。

原因は、私の家柄のせいが半分で、もう半分は……悲しいことに、私自身が原因なのだ。これはヴィヴィオと付き合い方ようになってから気付いたのだけど、私はどうも、他人を寄せ付けないというか、他人から見て話しかけ辛い雰囲気があったようだ。多分、私自身が正しい信仰を体現しなければならぬと無駄に気負っていたせいもあるし、私にそういう友達はいらないと強がっていたから、なのだろう。

それも、今回の事件に関わって、ヴィヴィオやアリカと友達になって……考え方が、いつの間にか変わっていた。無意識下で緊張を強いられていた私は、今では友達を大切にしたいと思えるくらいに、心の余裕を持てるようになってる。

私が今日お見舞いに来たのは、話を聞くためということ以外にも、純粹にヴィヴィオのことが心配だから、と言つのもあると思う。

だけど私は今日、ヴィヴィオの話を聞いて、ひとつの決断をしないでならない。……いや、違う。ひとつの決断を、しようと思う。

ダイムラー家次期当主として、聖騎士として、聖王の従者として、そして何より、エリーゼ・ダイムラーとしての立場を決めないといけない。ヴィヴィオの　聖王陛下の存在は、私とヴィヴィオがそ

これまでの関係でいることを許してはくれない。そのくらい、私の背負っているダイムラー家の意味は大きい。

でも、ヴィヴィオと出会うことで私は変わってしまった。だから正直なところ……きつと、そんなことは建前に過ぎなくなってしまう。最近の同年代風に言うとしたら『ぶっちゃけた話、聖王陛下なんてどうでもいい』

「……こんなこと言ったら、お父様に怒られてしまいますわね」

お父様どころか、親戚一同ご先祖様まで敵に回してしまいそうだ。

でも、仕方無い。今まで、私の人生はダイムラー家次期当主としての責任、正しい信仰を中心に回っていたハズなのに、ヴィヴィオと……友達と付き合う内に、私の中でのいつの間にか、聖王陛下のありがたみが薄れてしまっていたのだから。これには、私自身が驚かされた。

それだけ、私が余裕のない人生を送っていたということなのか。

もちろん、聖王陛下の偉大さは変わらないし、私がこれからも聖王陛下を信仰し続けることに変わりはない。だけど、きつと私には、それ以上に大切なことができた。

だから私は、ダイムラー家次期当主としてではなく、聖騎士としてではなく、聖王の従者としてもなく。エリーゼ・ダイムラーとしての、覚悟を決めよう。他の誰でもない。聖王陛下なんて関係ない。私も聖王の従者である前に一人の騎士であり、そして私は、ヴィヴィオの友達であると同時に、お姉さんでありたいから。私が私だから、覚悟を決めようと思う。

ヴィヴィオはとても真つ直ぐで、真面目な子だ。だからきつと、傷が癒え次第、例え一人でもアリカのことを助けようとするだろう。それだけの覚悟をすでに決めているだろう。まだ短い付き合いだけど、間違いないと思う。ヴィヴィオはそういう子で、私はヴィヴィオのそういうところに魅かれたのだから。

私はヴィヴィオのことを、自分のことを顧みないで誰かを助けようとして傷付くヴィヴィオのことを護りたい。いつしかそう思うようになっていた。誰かを助けるためにヴィヴィオが傷付くのなら、私が盾となってヴィヴィオのことを護り通そう。泣いている誰かを救うためにヴィヴィオが泣かないといけないのなら、私が剣となってヴィヴィオを泣かせる相手を薙ぎ払おう。だけど、ヴィヴィオと同じステージに立って共に闘うには、私も覚悟を決めないといけない。無論、ヴィヴィオと同じようにアリカも私の大切な友達だ。私だって、ヴィヴィオと同じようにアリカのことを助けたい。だけど、ヴィヴィオと共に戦うには、それだけでは足りない。

ヴィヴィオが覚悟を決めている。

それなのに、私が覚悟を決めないでどうするのか。そんなことでヴィヴィオと同じステージで戦うことができるとは思えない。そんなので、アリカ救出に関わる資格があるとは思えない。

ヴィヴィオと共に戦い、ヴィヴィオの全てを『聖騎士』エリーゼ・ダイムラーとしてではなく“エリーゼ・ダイムラー”として護ることを、私は私の意志で決めないといけないと、私は思うのだ。

だから私は、ヴィヴィオのいる病室の扉の前まで来て、深呼吸をしてから、ノックする。

「……はい、どうぞ」

すぐに、中からヴィヴィオの可愛らしい声が聞こえる。  
「失礼しますわ」

私はほんの少しだけ待ってから、扉を開いた。

病室にお見舞いに来てくれたエリーゼさんに、私はすべてのことを話した。

私が生まれた経緯のこと。

私を生み出した人物のこと。

生まれてから、なのはママと機動六課に出会い、JS事件に大きく関わったこと。

それから、なのはママの養子になって、ザンクト・ヒルデ魔法学院に入学して、普通の女の子として生きていきたかったこと。

私の素性を告げることに、私はどうしても恐怖のようなものを感じてしまう。

私の生まれはあまりにも特殊すぎて……聖王をベースにした生体兵器、として生み出されたわけだから、お話を聞いた人に嫌悪感を抱かせて……拒絶されてしまいそうで。そのことが、それまで友達だと思っていた人に拒絶されることが、私は怖い。

エリーゼさんとお話をしている間も、その恐怖がずっと頭から離れなかった。

だけど、エリーゼさんは、私のお話を聞いて顔色を変えるわけもなく、時々相槌を打ちながら最後まで静かに聞いてくれた。

やがて、お話が終わって、数秒間お話の内容を咀嚼するように目を閉じていたエリーゼさんが、口を開いた。

「……ヴィヴィオ」

名前を呼ばれ、ビクリと身体が反応してしまう。思わず、私が寝ているベッドのシーツを握りしめてしまう。心臓がドクドクと激しく脈打って、怖い。友達だと思っていた人に、私の素性を知られて拒絶されてしまうことが、私自身が否定されてしまうことが、なによりも怖い。

「……………」

エリーゼさんは一度開いた口を閉じ、少しだけ考えるような素振りを見せた後、おもむろに手を伸ばして、

「もしかして、私がその話を聞いたからと言って、あなたのことを避けるとも思っているのですか？」

私の頭を、優しく撫でてくれた。

「……………え？」

私は一瞬、エリーゼさんの言葉の意味が理解できなかった。

「見くびらないで下さい。私は、一度友であると認めた人間を、そのようなことで拒絶するような人間ではありません」

私の頭を優しく撫でるエリーゼさんの手が、とても暖かくて。

「生まれがどうだとか、身体の仕組みが普通の人と違うだとか、そんなことはどうでもいいのです。大事なのは心、その人の在り方、魂の在り方です。私は、あなたの心の在り方を認めて、あなたを友達と認めているのですから」

私に語りかけるエリーゼさんの声が、とても柔らかくて。

「でも、私は生体兵器で」

「泣いて、怒って、笑って、友達のために我が身を省みずに戦うようなあなたが生体兵器ですか？ 無茶を通して血を流し過ぎて、死にかけるようなあなたが生体兵器ですか？ 笑わせないでください。あなたは、生体兵器としては、生体兵器と呼ぶことすら躊躇われる欠陥品です。ですが、あなたは人間としては間違いのない存在です。優しい心を持ち、熱い血潮の流れる、すこし無茶のすぎる女の子です。だから、あなたは間違いなく人間であり、私の友達の、高町ヴィヴィオなのですよ」

微笑むエリーゼさんの顔が、とても優しくて。

自然と、私の瞳は涙をこぼしていた。

「だって、私、わたしは……」

あなたは人間であり、友達だ。

エリーゼさんにそう言ってもらえたことが嬉しくて、拒絶されなかったことに安心して、心が緩んで、涙が止まらない。震えていた手も、強張っていた身体も、拒絶されることに恐怖していた心も、エリーゼさんが、優しく溶かしてくれた。



「私、わた……」

言葉が言葉にならない。心が震える。嬉しくて、涙が止まらない。

こんな私の素性を知っても、友達でいてくれる。

そのことが、私にとって、とても、とても嬉しかった。

「まったく。ヴィヴィオは、泣き虫なのですね」

頭を撫でながら、少しだけ呆れたように、エリーゼさんが笑う。

その笑顔につられて、私もいつの間にか 笑っていた。

涙が収まるまでの数分間、エリーゼさんは私の頭をずっと優しく撫で続けてくれていた。

私はその間、ずっとエリーゼさんの優しさに甘え続けていた。

やがて、私が泣き止むと、エリーゼさんは私を撫でていた手を止め、どこか緊張した面持ちで、私に尋ねた。

「私からも、あなたに聞きたいことがあります。あなたはあなたの心で……これから、何を成したいのですか？」

何を成したいのか。

エリーゼさんの言葉を聞いて、私は真っ先にアリカちゃんのことを思い浮かべた。

アリカ・フィアット。

エリーゼさんと同じく私の親友で、お母さんを失ってしまった悲しみにつけこまれて、心を奪われてしまった。私はアリカちゃんの悲しみの深さに気付くことができず、結果として、アリカちゃんを助けることができなかった。

「……助けたいです」

何を話そう、なんて考えていないのに。

自然と、心の中に在ることが言葉になっていく。

「私は、悲しみに囚われて、心を奪われてしまったアリカちゃんを助けたいです」

「……それは、あなたがお母様に憧れているから？」

エリーゼさんの言葉が、私の心に突き刺さる。

私は、確かになのはママに憧れて魔法を習い始めた。なのはママみたいな強くて優しい魔導師になるために、魔導師になった。困っている人や泣いている人を助けるために戦うなのはママみたいになりたくて、アリカちゃんを助けようとした……のかもしれない。

だけど、今は違う。

私のお見舞いにやって来たなのはママに叱られて、二人で喧嘩して、怒鳴りあつて、泣きあつて、私はようやく答えを見つけ出した。

始まりは、確かにそこにあるのかもしれない。

それが、昔の私の理由だったのかもしれない。

だけど、今の私は、アリカちゃんを助けたいから助けたい。他の理由なんてない。なのはママへの憧れも、聖王としての矜持も、生体兵器としての生まれも、何もかもが関係ない。私はただ、友達が泣いているから、その友達を笑顔にしたいだけだ。

私が、生体兵器・聖王ヴィヴィオで在るからではなく、本物の“高町ヴィヴィオ”として在るから、私はアリカちゃんを救いたい。

「いいえ。私が、高町ヴィヴィオだから、私はアリカちゃんを救い<sup>たすけ</sup>

たいんです」

だから私は、エリーゼさんにはつきりと告げる。告げることができる。もう、揺れたりなんかしない。

それが、今の高町ヴィヴィオの心からの想い。

私は、アリカちゃんのことを必ず救いだしてみせる。

「……成程。それがあなたの……聖王陛下の、出した答えですか？」

「違いますよ。聖王としてじゃなく、高町ヴィヴィオとしての、答えです」

その答えを告げた時、エリーゼさんの周りの空気が、変わったような気がした。

「……分かりました。あなたが覚悟を決めたのならば、覚悟を決めているのなら……私も、覚悟を決めなければなりません」

そう言うと、エリーゼさんは突然、その場に跪いた。それは、片膝を立てて、頭を垂れるという、いわゆる臣下の礼、と呼ばれるもの。跪き、頭を垂れている相手に、絶対の忠誠を誓う証のようなもので

「誓います」

エリーゼさんが、先ほどまでとはまるで別人みたいに、言葉を紡ぐ。

「『聖騎士』エリーゼ・ダイムラー。只今この時より、あなた様に忠誠を誓い、この身に命ある限り御身を守護し、我が誇りと魔導の総てをあなた様に捧げることを、誓います」

それは、騎士が主に忠誠を誓うことを述べる口上。

その言葉に、態度に、私は混乱する。

「え、ちょ、え、エリーゼさん、それは、一体……」

「我が主、高町ヴィヴィオ。私のことは、これからは騎士エリーゼとお呼び下さい。主が、臣下にさん付けは、少し不味いですから」

僅かな隙も見えない、凜とした、騎士としてのエリーゼさんの声。

エリーゼさんの言葉に、私はただただ戸惑い……そして、嫌な予感がする。

エリーゼさんは、昔からずっと聖王に忠誠を誓い、仕え続けてきた、聖騎士と呼ばれるほどの家系の出身だ。その聖王への信仰心は、想いはただならぬことじゃない。だから、そのエリーゼさんが忠誠を告げるということは、私が聖王陛下だから……私のことを、高町ヴィヴィオとしてではなく、聖王ヴィヴィオとして見ているのではないか、と思ってしまう。

「……………言っておきますけど、私は何もあなたが聖王陛下だから、忠誠を誓っているわけではありませんよ」

しかし、その私の不安は、いつもの口調に戻ったエリーゼさん自身によって解消される。

「私は、あなたのことを忠義に値する人物だと思ったから、主になって欲しいと願い出ているだけのことです。あなたが聖王陛下だから、あなたの中の聖王陛下に忠誠を誓うではありません。私は、高町ヴィヴィオに、私の騎士としての誇りと魔導の総てを預ける、と言っているのですよ？」

エリーゼさんの言いたいことを纏めると、エリーゼさんは私の中の聖王に忠誠を誓うのではなく、高町ヴィヴィオに、誇りと魔導を総て『預けて』くれる……ということ、なのかな？

「もっとも、先ほども言いましたが、これはただ一人の騎士が、主となって欲しい人物に自分をあなたの騎士にしてください、と願い出ているだけです。ですから、主の資格のあるヴィヴィオは、この願いを受け入れなくても構わないのですよ」

そう、言われても……

ますます、意味が分からなくなってくる。

聖王陛下ではなく、私に、高町ヴィヴィオに誇りと魔導を預ける意味が、私には分からない。

「……あの、どうして、私なんですか？」

「言いましたわよ。私は、あなたのことを主に値する人物だと認めた。あなたが、高町ヴィヴィオだから友達のことを救い《たすけ》たいという、あなたの在り方に総てを預ける価値があると思ったから、こうするのです」

頭の中がグルグルする。

考えが、まとまってこない。

いきなりそんなことを言われても。

「大体、あなたは一人で突っ走りすぎなのです。先日だって、友達を助けるために怪我を押して無茶をして出血多量で死にかけなん  
て……そんなの、放っておけるわけがありません」

……あれ？

もしかして私、エリーゼさんに怒られてる？

「だけど、そんなあなただから、誰かのために傷付くことを恐れず  
戦い、誰かのために泣くことのできるあなただから、私は私の総て  
を預けたいのです。騎士として生まれ、騎士としての誇りと魔導を  
胸に育ってきた騎士にとって、仕えるべき主に仕えるということは、  
何事にも代え難い歓びなのです。固く考えることはありません。ヴ  
イヴィオはただ、私のことを、あなたの騎士だと認めて下されば、  
それでいいんですよ」

『お嬢様。私からも、お願い致します。どうか、騎士エリーゼの願  
いを、叶えてやってはくれませんか？』

ヴィヴィオとエリーゼしかない病室に、初老男性を模した機械  
音声が響く。

突然会話に割り込んできたザイフリートに、ヴィヴィオは再び驚  
かされる。

「ザイフリート？」

『古代ベルカの時代から、騎士とは誇り高い生き物です。騎士として生まれ、騎士としての誇りと魔導を胸に育ってきた騎士にとって、仕えるべき主に仕えるということは、何事にも代え難い喜びなのです。騎士エリーゼは今、仕えるべき主を見つけ、その主に仕えることを望んでいます。お嬢様。どうか、目の前の騎士の最初で最後の願いを、聞き入れてください。それが、古くより誇り高い者達に仕えてきた、私からの願いです』

「お願いです、ヴィヴィオ。私を、あなたと同じステージで、あなたのために戦わせてください」

騎士は、仕えるべき主を求めている。そういうこと、なんだよね、きつと。

正直、いきなりすぎて戸惑うし、私がエリーゼさんの主に値する人物だとは思えない。だけど、エリーゼさんは私のことを主に値する人物だと見てくれている。

ザイフリートの言葉と、エリーゼさんの視線が突き刺さる。

……私も、覚悟を決めないといけないのかな。

エリーゼさんの想いを受け止める、覚悟を。

「……………ひとつだけ、条件があります」

「なんなりと」



「私とエリーゼさんが『騎士と主』で在るのは、私がそう在るべきだと判断したときだけです。普段は……私が『友達』としてエリーゼさんに見て欲しいときには、友達として私に今までどおりに接してくださいませんか？」

それが、私の願い。私が、まだエリーゼさんと友達でいたいから、友達としての関係が心地よくて、このままで在りたいから、私のわがままでそんなことを願ってしまう。

「分かりましたわ。だけど、忘れないでくださいね。私はヴィヴィオの友人であると同時に、ヴィヴィオの騎士でもあるのですから」

「はい」

「ひとたび私があなたの騎士となれば。誰かを助けるために傷付くあなたのことを私が盾となって守り通します。泣いている誰かを救うために主ヴィヴィオが泣かないといけないのなら、私が剣となって主を泣かせる相手を薙ぎ払います。あなたは一人で戦っているのではありません。そのことも、忘れないでください」

強いな、そう思う。

エリーゼさんは本当に強くて、気高い。

私のわがままを受け入れてくれたエリーゼさんの想いを胸に刻みつける。そのくらいしか、今の私にできることはないから。

「では、これからもよろしく願います。我が主、高町ヴィヴィオ」

「は、はい。よろしく願います……」

再び頭を下げるエリーゼさんに、私も頭を下げる。

「では、主ヴィヴィオ。早速、私に命令を下さいませんか」

「え？」

エリーゼさんが、とても強い瞳で、私のことを見つめる。その深い色をした瞳を見つめるだけで、私はどういうわけか、エリーゼさんが求めている命令を、理解することができた。

だから、なるべく騎士の主らしく、エリーゼさんに命令を告げる。

「……で、では騎士エリーゼ。主、高町ヴィヴィオが命じます。私の友達を……アリカ・フィアットを救<sup>たすけ</sup>いることを、手伝ってください」

「主が命、確かに承りました」

二人揃って畏まり合い……そして、どちらともなく笑い出した。

「ヴィヴィオ、主が騎士に告げる初の命令で、口上をかまないでくださいな」

「す、すいません。慣れてなくて……」

「これから、慣れていってくださいね。我が主」

少しだけ咎めるような口調でエリーゼさんがそう言ってからもしばらくの間、私もエリーゼさんも、クスクス笑いが止まらなかった。

私の心は決まった。

エリーゼさんという、心強い騎士も味方についてくれた。

だから後は、戦うだけ。

友達を助けるために。泣いている友達を救うために。

他でもない、高町ヴィヴィオだから、高町ヴィヴィオとして。

受け継いだのは、本当の想い。

手にしたのは、全力で護りたい大切な人。

私が私で在ることに、もう迷わない。私が私であることは揺るがない。

今日この日に、私はようやく、本当の意味で“高町ヴィヴィオ”になれたから。

私は、全力全開で、アリカちゃんを救<sup>たすけて</sup>ってみせる。

それが私だということ、友達ということ、だから。

憧れは胸に秘めて。

私は、アリカちゃんを救<sup>たすける</sup>うために、戦います。



### 第十三話 高町ヴィヴィオ（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございました。

以上が、ヴィヴィオがアインハルトに出会う前、あるいは少し別の世界での、ヴィヴィオの想いの物語、その前編部分です。

テーマは『憧れ』『決意』『成長』といったところでしょうか。

熱い心を胸に抱いた、高町ヴィヴィオの物語。

ここで一旦の区切りですが、物語は後編へと進みます。

以降は未だカタチになっていない物語ですのびし時間をお過ごしください。週一更新、全26話を想定しています。

また、もし要望があれば、あらずじ部分で触れた『外伝』つまり『他の仲間たちの物語』もまたこちらに掲載・連載再開しようかと検討しておりますが、果たしてそれを望んでいただけるほどの物語を描けているのかどうか。

あるいは、それだけの人数の方々に周知していただけているのか。

それはおそらく、このお話を読んでくださったみなさまによって決めていることだと私は考えています。

みなさまの生の声こそが、お話を形作るために必要なモチベーションになるのです。

まあ、要するに『感想くださいお願いしますマジで』ということです。

なにをするにしても、一方向通信だと、やはり色々拭えないものなので。

それに、なるべく多くの人に見て『面白い！ 読んでよかった』と思っただきたい、という欲張りな願いもありますし。

そういう意味でも、みなさまからなにか反応があると、私は嬉しいのです。

最後に、決して短くないヴィヴィオ達の物語にここまで付き合ってくださった皆様方と、この話を作るにあたって協力や助力を下さった皆様方、そして原作『魔法少女リリカルなのは』およびその製作スタッフのみなさまに、多大な感謝をこめて。

長々と語らせていただきましたが、ヴィヴィオ達の紡ぎだす熱い心の物語、そして私の語りも、ここで一旦閉幕とさせていただきます。

では、次は14話、未だ誰も知らない、新しいヴィヴィオ達の物語で再びみなさまと相見えることを心待ちにしています。

天海澄でした。

## 第十四話 それぞれの想い

冷たい潮風が、サイドポニーに結われた髪と白いジャケットを揺らす。

周囲に在るのは、海に沈んだ廃都市を模した、レイヤー建造物の数々。

『試験開始1分前。二人とも、準備はええか?』

耳に響くのは、独特のイントネーションを含む女性のアナウンス。

「高町ヴィヴィオ。問題ありません」

《そのデバイス、ザイフリートも準備完了しております》

そのアナウンスに答えるように、ヴィヴィオとその愛機ザイフリートが声を上げる。

そして、それに少し遅れて。

「高町なのは。こちらと同じく、問題ありません」

《Raising heart, no problem. preparation completed》

目の前にいる人物とその愛機が、同じように声を上げる。

《お嬢様。目の前の人物は、強いです。どうかご注意を》



「分かってるよ、ザイフリート」

ザイフリートの声に頷き、改めて目の前の人物に視線を向ける。

高町なのはと、レイジングハート。

時空管理局航空部隊所属のS+級魔導師。現在の管理局の中でも、最強の一角を担う存在。

自分よりも遥かに格上の実力を有する、ヴィヴィオの憧れの人。

「ヴィヴィオ」

それまで必要最低限のことしか喋らなかったのはが、不意に口を開いた。

「……なに？」

「今ならまだ、棄権できるんだよ？」

「……もしも。ママが私と同じ立場だったら、棄権するの？」

「……………」

『試験開始30秒前』

「……そうだね。ヴィヴィオは、私の自慢の娘だもんね」

「はい。想いも、強さと優しさの意味も、全部ママから教わりまし

た」

『試験開始20秒前』

「だからこそ、胸を張って主張します。私が、友達を助けるために。他でもない、私自身の意志によって、ここに立っていることを」

「天に誓って？」

「天と星に誓って」

『試験開始10秒前』

「……ヴィヴィオの意志は分かった。だから、後は」

「うん。話し合おう。お互いに、分かりあうために」

『全力全開、本気の勝負！』

『時間です。試験を開始してください』

重なり合った、二人の言葉。

それと同時に、二人の影が交差する。

お互いの想いを伝えるための、全力全開真剣勝負。

どうして、このようなことになったのか。

話は、数時間前に遡る。

時空管理局の嘱託資格の取得は、実はさほど難しいものではない。

所定の試験を通過し、相応の技能と実力があると認められれば、その日からでも管理局の業務に関わることも不可能ではない。中には、例えば現管理局航空機動隊所属の高町なのは三等空佐のように、嘱託資格を得る前から協力者として管理局の業務に参加することもあるくらいだ。在野の実力者に対して、管理局は門戸を広く開いていると言えるのかもしれない。

逆に言えば、それほど簡単に管理局の業務に関わることができるとするのは、管理局はそれほど慢性的な人手不足だということに他ならない。

そのような状況で、子供とはいえAAAクラスの魔導師が二人、それも聖王教会騎士団長の推薦書を持参して来れば、その申し出を

断る理由もなく。

高町ヴィヴィオ、エリーゼ・ダウムラー両名は、いつそ呆気ないほどに軽々と、管理局AAA嘱託資格を習得することに成功したのだった。

だが、二人にとって嘱託資格を得ること自体は目的ではない。

二人の目的は、あくまでも自分達の友人を救うこと。

そのためにどこでなにをすればいいのか。

その調べは、すでに行っているのだ。

そしてそれを確実に行うための、根回しも。

「……しかしまあ、まさかヴィヴィオがウチに来るとはなあ……」

課長室のデスクに座ったまま、小柄な関西弁の女性が苦笑を浮かべている。

「人生、なにが起こるか分からんもんやな。この行動力はさすが、なのはちゃんの娘と言うべきか……」

その女性の手元にあるのは、聖王教会騎士団長直筆の推薦書、そして二人が書いた、その女性が課長を務めることになった？この部署？への勤務志望書。さらに二人は知らないが、聖王教会騎士団長と個人的に親しいこの女性に対して、彼女からの直接の依頼もとい個人的なお願いも慣行されている。

「それで……私達は『機動六課』で働けるんですか？ はやてさん」  
結論を急ぐ、ヴィヴィオの言葉。

その言葉に、彼女　？元？機動六課課長、そして？現？機動六課課長八神はやては、これもまた苦い笑顔で答えた。

「うーん。私としては、ここまでの熱意を持つヴィヴィオ達の意欲を削ぐようなことはしたくないんやけどなあ……」

煮え切らない返事。

いつも快活でハキハキとしている彼女の言葉の歯切れが悪い理由を、ヴィヴィオもまた理解していた。

「分かっています。私達がココで『ブルースフィア事件』に関わるためには、最後の試練を乗り越えないといけないってことは」

「せやけど……本当にやる気なんか、ヴィヴィオ？」

「はい。誰がなんと言おうと、私は絶対に譲りません」

はやての瞳をまっすぐと見据え、ヴィヴィオははっきりと告げた。

「新生機動六課への配属条件『高町なのはの撃破』その試験、謹んで受けさせていただきます」

## 『ブルースフィア事件』

それは、三年前にロストロギア『ブルースフィア』の回収任務にあたっていた聖王教会の騎士ミラージュ・フィアットが殺害され、ブルースフィアが何者かに持ち去られた事件、だと思われていた。

しかし最近になって、その認識が間違っていたことが、別任務にあたっていた八神はやて特別捜査官の調査や、クロノ・ハラウン提督の遭遇した事件によって明らかになっていった。

彼らが遭遇した一連の事件は、根の部分で三年前の事件と繋がっていたのだ。

だが、それだけの事実だけならば、専任の捜査本部が立ち上がるほどの事件ではなかった。

聖王教会の騎士が一名亡くなっているが、事件の中心であるブルースフィア自体は正体不明のエネルギー結晶体であり、内包されるエネルギーを利用する手段が管理局の技術力を以ってしても見出せないことから、今すぐ対処が必要なほど危険なロストロギアではないと判断されたからだ。万年人手不足の管理局には、そのような薄い可能性？にまで人員を割いている余裕はない。

だが、今年になってからその認識を覆す事件が二件、同時期に発生した。

そのうちのひとつは『聖王信仰紛争』と一部関係者に呼称され、最終的に数十名の聖王騎士の洗脳被害および死亡、そして一人の少女の拉致を含む顛末を引き起こした事件。

そしてもうひとつは、ブルースフィアを管理していた管理局地上支部が次々に襲撃され、最終的に百名を超える被害者を出した『陸士部隊連続襲撃事件』。

この二つの事件の主犯格である人物の名は、メアリ・フローラ・リーゲン。

その正体も、思想も、目的も、出身も、その一切が不明。

はつきりしていることは、彼は多大な被害を出してまでブルースフィアを収集していたということと、彼が純粋な悪意を以って他人を不幸にすることを好む、最低最悪の人間であるということ。

そして、その正体不明の人物によって、時空管理局も聖王教会も、甚大な被害を被ったということだった。

この事態を重く見た時空管理局および聖王教会は、同時期に起きたこれらの事件の合同対策本部を設立することを決定する。その部隊のトップとして白羽の矢が立ったのが、聖王教会上層部に独自のコネクションを持ち、尚且つ管理局史上に残る広域次元犯罪『J・S事件』を解決に導いた実績を持つ機動六課の元課長、八神はやてだった。

それらの事情に加え、八神はやて自身も特別捜査官として、間接的にブルースフィア事件に関わっていたのだ。J・S事件をきっかけに協力体制を敷きつつある時空管理局と聖王教会のブルースフィ

ア事件合同捜査本部の長として、これほどの適材は他には存在しないだろう。

それ故に、八神はやての心中は複雑だった。

彼女がかつて、数年の時間と根回しを行って設立した機動六課。

その解散時、八神はやては言っている。

『その必要があれば、なにがあっても私がまたこのメンバーを集結させる』

だが、八神はやて自身は本当にそうなることを望んではいなかったし 再びそのような事態に陥るとは思ってもいなかった。

様々な逆境を乗り越え、管理局『三提督』と聖王教会を密かにバツクに着け、さらに運用時には厳重なりミッターによる制御をかけることで一部隊に保有できる戦力を誤魔化すことでようやく収集できた、これ以上ないほどの戦力を保有していた機動六課メンバー。

それを、今度は時空管理局と聖王教会の双方が正式に着いているとはいえ、それだけのメンバーを再び集結させなければならないほどの事件なのだ。

確かに、時空管理局にも聖王教会にもメンツの問題があるのだろう。双方に甚大な被害を生じさせた次元犯罪者を野放しにしておいては、犯罪に対する抑止力としての働きを望むことができなくなってしまう。そういう意味でも、可能な限り迅速な解決するために、少々過剰ともいえる戦力を投入することはあり得ない話ではない。



だが、今回に限ってはそういうことではない、ということをはやては理解している。

時空管理局も、聖王教会も、恐れているのだ。

J・S事件の再来となる、重大な広域次元犯罪を。

しかも八神はやてだけでなく、かつての機動六課主要メンバーのほとんどが、間接的にこの事件にすでに関わっている。機動六課解散後、それぞれのメンバーはまったく別の部署に配属されたのに、である。

一体、どれだけの規模の事件となるのか。

専任部隊の部隊長としては、頭のひとつも抱えなくなるというものである。

「しかも、それとはまた別の問題もあるしなあ……」

書類を手に、一人になった課長室で、はやてがひとりごちる。

『機動六課に新しい機動隊員を迎えるのであれば、相応の試験が必要である』

そう直談判したのは、他でもない、戦技教導隊に所属する課員だった。

彼女の言い分そのものは、一種のエリート部隊である機動六課においては不自然なものではない。現在の部隊の性質上、以前のように教育を施しながら任務の中での成長を望むほどの余裕はないし、

そもそも以前だって将来有望だと期待される新人を探してスカウトしたのだ。今回のような新規人員の補充に当たって、隊内の訓練の指導を行う最高責任者が苦言を呈するのはむしろ必然とも言える。

しかし、今回の彼女の言い分に限っては、少なからず私情が混じっているとはやては踏んでいる。

そして、それを責めることができない、ということも。

「結局のところ、どっちも頑固やからなー」

高町なのは。

彼女の強さと、優しさと、絶対に引かない強情さ。それを見事なまでに受け継いだ彼女の愛娘、高町ヴィヴィオ。

なのはには、なのはの主張がある。

ヴィヴィオには、ヴィヴィオの主張がある。

そんな両者の主張がぶつかった場合、どちらも絶対に引かない。そんなこと、二人を知る人間なら誰もが知っている。

だからこそ『話し合い』が必要なのだ。

それ故の、ヴィヴィオに課された配属条件。

落とし所としてはこれが最善だと、はやても思っている。

なにせ、あの熱血直情娘の意志を受け継いだ人間なのだ。下手に

拒んでは、勝手に着いてきて独自のコネをフル活用してなにがなんでも事件に関わろうとするだろう。そのようなことをされるくらいなら、試験のひとつでも課した方が良く。即戦力ならそれで良し、実力不足なら、彼女も愚かではないということを信じ、それで納得してもらうしかない。

それが、機動六課の責任者としての考え。

ならば、八神はやて個人の意見が、どうかというと。

「本当は、まだあの子には汚い世界を知らんでいてほしかったんやけどな」

すでに叶わぬ願いだと理解していても、そう思わざるを得ない。

確かに自分が魔法に出会ったのは、今のヴィヴィオと同じ年齢のときだ。ヴィヴィオがその年齢で魔法に関わることもまた、あり得ない話ではない。

だからと言って、諸手を挙げて賛成などできるハズもない。

子供が、可能な限り子供のままでいられる世界。

たったそれだけを願うことが、こんなにも難しいなんて。

「私達大人にできることなんて、あとは見守るだけ、なんかな」

呟き、思いを馳せるのは、二人の『話し合い』。

久しぶりにヴィヴィオと言葉を交わして、驚かされた。

いつの間にか、ヴィヴィオはただの子供でいられなくなっていた。それを、負の側面ばかりから見ることはナンセンスなのだろう。それは、ヴィヴィオが大人になったと言い換えることもできるのだ。子供の成長を喜ぶのは、古今東西変わらず大人の喜びであり、楽しみである。

ならば、たった一ヶ月の間にそこまで成長した娘を、なのははどう見るのだろうか。

「せめて、二人が納得のいく結果に終わるとええんやけどな」

ため息と共に零れた、八神はやて個人としての結論。

結果としてそう成ることを願いつつ、はやてはデスクから立ち上がり、『試験』を控える訓練場に向かったのだった。

乾いた潮風が、流れるようなブロンドの髪を揺らす。

その紅と翠の双眸に映るのは、海に沈んだ廃都市を模して造られたレイヤー建造物。本物の海の上に形作られたそれらには実体があり、触れたり物理攻撃での破壊も可能なのだと説明を受けている。

範囲は、レイヤー建造物が構築されている五百メートル四方の空間。水深は深いところでも百メートル程度、上空への距離制限は無し。

攻撃設定は非殺傷必須。カートリッジの使用等細かい制限は特に無し。ただ『相手が戦闘不能になるまで』戦闘を行うこと、そののみがルールとして設けられている。

それが一番難しいのだと、彼女 試験官である高町なのはを良く知る自分は理解している。

そんなことを考えながら、高町ヴィヴィオは白いバリアジャケットを身にまとい、レイヤー建造物の中で最も高い廃ビルの屋上に佇んでいた。

「それほど、高町なのはは三等空佐……ヴィヴィオのお母様は強いのですか？」

そのヴィヴィオの横に控えるのは、騎士甲冑を装着したヴィヴィオの従者、エリーゼ・ダイムラー。

まだ試験開始まで少し時間があるためか、二人ともデバイスは待機状態のまま首に提げていた。

「強いです。その戦技も、心も、意志も、あの人の持つ、なにもか

もが」

「しかし、ヴィヴィオもまた強くなりました。魔導師ランクAAA＋、それに聖王の魔法まであるのです。私は、今のヴィヴィオなら勝てるのではないか、と思っているのですが」

「確かに、私は強くなりました。だけど、それでもまだ、あの人が持つ？強さ？の足元にも及んでいないと思うんですよね」

この三年間、その強さを一番近くで見てきたヴィヴィオだからこそ分かる。

三年前、その全身全霊を以って助けられたヴィヴィオだからこそ理解している。

魔導師ランクががどうだとか、事件を解決してきた実績だとか、そんなものは関係ない。

どんな相手にでも、自分の想いを貫き通す。不屈の闘志と強い想い。

それこそが彼女の本質なのだと、ヴィヴィオは痛いほどに理解していた。

「しかも、ただでさえ強いのに……あの人を倒すことよりも、あの人を説得することの方が、私は難しいと思います」

自分よりはるかに格上の、自分が目標とする憧れの相手。

そんな相手と戦わないといけないというのに、そう語るヴィヴィ

才の表情は、どこか誇らしげに緩んでいた。

「……ヴィヴィオは、本当にお母様のことが好きなんですね」

「はい。強くて優しい、私の大好きなお母さんです」

そう言い、ヴィヴィオは微笑みを零す。

その表情は、ヴィヴィオがまだ9歳の女の子だということを実感させられるほどの、年相応に柔らかく無邪気なもので。

その微笑みが、真剣な表情に変わった。

「でも、私は負けませんよ」

それまでの笑顔とは異なる、9歳の少女の浮かべる表情とは思えないほどの力強さを湛えた瞳。

その視線の先に映るのは眼下に広がる海であり、そして本当は海ではなくもつと遠くのなにかを見据えたもので。

「ママが私のことを心配してくれているということも、きちんと段階を追って少しずつ大人になってほしいと思っているってことも、知っています。だけど いえ。だからこそ、曲げられません。えへんと胸を張って、ママの娘だと主張できるように。そしてなにより、私が私であるからこそ」

憧れと想いと信念。

強さと優しさの意味。

それを貫き通すための、知恵と戦術。

それらはすべて、間違いなくあの人から教わったもので。

その上で今の自分が導きだした、意志と答えがある。

「私は、私自身の想いを貫き通すって、決めたんですから」

その言葉は、彼女に仕えるエリーゼに向けられたものであり、他でもない自分自身に向けられたものであり、そして今ここにはいい、大切な人に向けられたものでもあり。

「お供します。どこまでも、あなたが望むその場所まで」

「ありがとうございます、エリーゼさん      騎士エリーゼ」

主と騎士。

その心に強い想いと決意を秘めて。

自分の意志を大切な人達に伝えるために、その時を二人で待つのだった。



「どうして、こうなったんだろうねえ……」

新生機動六課の本部として充てられた、海に面した場所に位置する五階建ての建造物。

その屋上で、手すりにもたれかかるようにしながら、彼女　高町なのはは、レイヤー建造物の並ぶ海をぼんやりと眺めていた。

元より、目は良い方だ。

その廃ビルのような建造物の屋上に、二人の影を確認することができる。

その影が、自分の愛娘とその友人のものだということは、その顔が見えずとも容易に想像がついていた。

「いつの間に、大きくなったのかな」

呟き、その言葉に苦笑する。

娘の成長が思ったよりも早くて、思っていた以上に自分が母親であることに。

考えてみれば、自分はまだ22歳で、そして娘はまだ9歳になったばかり。二人とも、そんなことを考えなければならぬ年齢では

ないハズなのだ。

学校に通って、友達と遊んで、毎日の様々なことに感銘を受け、日常の中で時間をかけてすこしずつ成長することが許され、そんな娘を見守りながらゆっくりと導くことが許される年齢であるハズなのだ。

それなのに、現実はどうだ。

なのはが長期の教導任務により、家を空けたのはほんの一ヶ月間だけ。

たったそれだけの間に、ヴィヴィオは純粋な子供ではいられなくなっていた。

たったそれだけの間に、ヴィヴィオは驚くほどに成長していた。

その成長を、一人の母親として喜ぶべきなのか、子供でいられなかったことを悲しむべきなのか。

その答えは、ヴィヴィオの『お話』を聞いた後でも、なのはの中で判断がついていなかった。

「やっと見つけたよ。なのは、こんなところにいたんだ」

少し錆のついた扉が開く音に少し遅れて、良く通る澄んだ声が聞こえた。

「フエイトちゃん」

その声の主である、長年付き合ってきた親友の名前をなのはは呼ぶ。

フェイトはその声に柔らかい笑顔を浮かべると、そのままなのはの隣に立ち、なのはと同じように手すりにもたれかかってから口を開いた。

「『男子三日会わざれば刮目して見よ』なんて言うけど、それって娘もそうなんだよね」

「そう……だね」

「ホント、子供って成長が早いんだ。まだ小さい子供だと思っても、気付けばいつの間にか大きくなっている。……親にとって子供ってのはずっと子供だけど、子供から見ればそうじゃない。私達が思っている以上に、あの子たちは大人なんだ」

流れるように紡がれたフェイトの言葉。

どこか独白のように聞こえるそれには、実感がこもっているようになのはには感じられた。

「子供ってね。本当に 私達大人が知らないうちに、びっくりするくらい成長しているんだよ」

「さすが、二人の子供を育てたお母さんは違うね」

「だって私は、なのはよりも先輩だもん。その辺のことは、なのはよりも分かっているつもりだよ？」

なのはのため息の交じった声に、フェイトは少しだけ胸を張って、悪戯っぽく微笑んだ。

「……そっか」

フェイトの言うことは、全面的に賛同できるとなのは思っ。

子供の成長は早い。

それを今回のことでは実感させられている。

だが、それを頭で理解していても、心で受け入れられるかどうかというのは、また別の話だ。

気付けば、子供は親が知らないうちに成長している　変わっている。

親の視点から見れば、短期間でのあまりに急激な変化は子供がいきなり別人になってしまったかのような錯覚すら覚えるだろう。

親にとっては、子供はいつまでも子供であるというのに。

だからこそ。

親には、子供の成長を受け入れるための時間が必要なのだ。

「……フェイトちゃんは、エリオとキャロが機動六課に入隊するって聞いたとき、どう思ったの？」

「……本当は、入ってほしくなかった。二人には複雑な事情があるってこともあるけど、それ以上に、二人に危険な目にあってほしく

なかった。子供は子供らしく、笑顔でいられる……子供のままでいられる場所にいてほしかった」

それは親としての愛情であり、親としてのわがままでもあるのだろっ。

子供には安全な場所にいてほしい。子供でいられる環境の中で、ちゃんと順番を追って成長してほしい。

子供が、早く大人になりたいと思っているのに？

自分のやりたいことを見つけて、困難に立ち向かうだけの意志と決意を持っているのに？

「やっぱりフェイトちゃんも、そう思うんだ」

「そりゃ、ね。でも、基本的には喜ばしいことだと思うんだよ？  
子供が自分の意志で、自分がするべきことを見定めて一歩踏み出そうとしているんだから。その成長を喜び、後押しすることもある、親の務めだと思う。だけど……」

「だけど？」

「やっぱり、寂しいよね。親としては」

「……うん。そうだね」

雛鳥が、いずれは巣立ちするように。

子供はいずれ、親の下を離れる時が来る。

そのことを寂しいと思うのは、そんなに悪いことなのだろうか。

「結局のところ、私のわがままなんだよね、これは」

「そうだね。これは、なのはのわがままだよ。表面上は正論で固められている分、余計にタチが悪いかも」

「うっ……」

「でも、私はなのはの気持ちを否定できない。似たようなことは、私も考えたことがあるから。それに、ヴィヴィオならなのはを納得させられると思うし……本当なのはだって、ヴィヴィオのことを認めてるんでしょ？」

「……一人の母親としては、ね。だけど、教導官としてはもちろん、試験は必要だと思うよ」

「はあ。親子揃って、本当に頑固だよね」

わざとらしくため息をつくフェイト。

その口元は「仕方ないなあ」とでも言いたげに緩んでいた。

「むー……」

「……そろそろ時間だね」

「わ、ホントだ。結構話しこんじゃったみたいだね」

「ヴィヴィオの『お話』聞いてあげるんでしょ？」

「……………うん。ヴィヴィオの？ママ？として、かっこ悪いところ、見せられないよね」

言い、なのはは自分の両頬を叩く。

それから「良し」と一声、気合いを入れて。

次の瞬間には、なのはの表情は引き締まっていた。

「さて。ヴィヴィオは、どんな『お話』してくれるのかな？」

子供のことで悩むこと。

子供の成長を喜ぶこと、それを少し寂しいと思うこと。

子供と一緒に笑うこと。

そして、子供と『お話』をすること。

それはきっと、本物の親子だからこそ許された特権であるのだと。

最後にそう結論付けてから、なのははフェイトと共に、海上に浮かぶ訓練場に向かったのだった。

## 第十四話 それぞれの想い（後書き）

はやてとクロノが遭遇した事件と、『陸士部隊連続襲撃事件』。

十三話のあとがきにあった別の話です。

需要があれば、こっちにも加筆修正して投稿します。

需要があればいいな、とか思っはいますけど……



## 第十五話 戦っても伝えたいこと

『全力全開、本気の勝負！』

「ザイフリート！ リミット？・リリース！」

『B a l m u n g f o r m』

試験が開始されるや否や、ヴィヴィオは即座にザイフリートの形態を変化させた。

ザイフリート第二形態、バルムングフォーム。

片刃の長剣となったザイフリートを上段に振りかぶり、ヴィヴィオは一気になのはとの距離を詰めた。その加速を殺さず、ほとんど突進の勢いでザイフリートを振り下ろす。

その一撃を、なのはは回避せずにレイジングハートで受け止めた。デバイスとデバイスがぶつかり合い、軋む音を立てる。さすがに切断は叶わなかったが、ザイフリートの刃は僅かにレイジングハートに食い込み、ヴィヴィオが力を加え続けることで少しずつその傷を広げている。

その状態で、ヴィヴィオはザイフリートの柄から左手を離し、そのままなのはに向かって掌を突きだした。

『セイクリッドクラスター！』

瞬間、虹色の閃光と共に、空気を震わす炸裂音。爆煙が二人の姿を覆い隠す。

魔力散弾、セイクリッドクラスター。一発でも高い威力を持つ高密度魔力弾を、指向性を持たせて対象の至近距離で爆散させることで散弾銃のような高威力の面攻撃を行うベルカ式の攻撃魔法。

ヴィヴィオの魔力でそれを放てば、並の魔法使いであればシールドごと吹き飛ばす大威力魔法となる。

だが、他にもないヴィヴィオ自身が、そんなことでなのはと墜とせるとは考えていない。

一撃必殺の威力を持つ砲撃魔法だけでなく、異様に高い防御力もまた、なのはの武器なのだ。

即座に反撃が返ってくると考え、爆煙が漂う中、ヴィヴィオは警戒を解かない。

そして、その予想は的中する。

煙が晴れてきた途端、煙に覆われたヴィヴィオの視界に映ったのは、戦場においてその美しさに感動すら覚える、力強い桜色の光点。咄嗟に身体を捻った直後、桜色の閃光がヴィヴィオの眼前を、周囲の爆煙を吹き飛ばしながら通過した。

ショートバスター。

なのはの持つ数々の砲撃魔法の中で最速を誇る一撃。

その一撃と共に煙が晴れ、再びヴィヴィオの前に晒されたのは  
の身体は、無傷。その白と空色のジャケットに欠損は一切無し。

分かつてはいても、その反則級の防御力には戦慄を覚えざるを得  
ない。

その上で、ヴィヴィオは再びなのはとの距離を詰めるために、足  
元に魔力を溜めて加速した。なにも考えずただ突っ込むだけではな  
い。同時に10の魔力弾殻を形成、上下左右背後と異なる軌道を描  
かせながら、全方位からの強襲をかける。

だが。

ヴィヴィオが接敵する直前、ヴィヴィオより僅かに早くなのはを  
射程距離に収めた10の虹色の魔力弾殻は、同じく10の桜色の魔  
力弾殻によって、まったく同時に撃ち落とされていた。

「!？」

その事実、ヴィヴィオの顔が驚愕に歪む。

高速で飛翔する誘導魔力弾を同じ誘導魔力弾で撃ち落とすだけな  
ら、ヴィヴィオにだってできる。それだけであれば、さほど驚くべ  
きことではない。問題は、10の魔力弾を一瞥もせず、ヴィヴィオ  
に視線を向けたまま同時に撃ち落としたということだ。

信じられないほどの、空間認識能力。

完全に死角を狙った数発ですら、見向きもせずに撃ち落としたの  
だ。

元より囷、撃ち落とされることを前提で放った魔法とはいえ、こ  
うも卒の無い対応をされるとは思ってもみなかった。

それでも、ヴィヴィオはプランを変更しない。

二人の間合い一メートル以下、すでにシールドを展開したなのは  
に、ザイフリートの刃を再び振り下ろす。

『Schwarze Wirkung』

刃とシールドが触れた瞬間、付与していた魔法が展開される。

古代ベルカ式のバリアブレイク。

その一撃により、まるで薄いガラスのように、なのはのシールド  
が音を立てて碎け散る。

「っ」

先ほど見せた防御力が信じられないほどに呆気なく破壊されたシ  
ールド。

初めて、なのはの表情が僅かに歪む。

その状態のなのはに、なにかをさせる隙を与えない。

間髪を入れず、ヴィヴィオは次の魔法を発動させた。

『インパクトキャノン！』

拳に上乘せして発動する、高速大威力砲撃。

虹色の奔流がなのはの身体を呑みこみ、吹き飛ばした。

間違いなく、直撃している。

だが、まだだ。

高町なのはは、この程度では墜ちやしない。

『Plasma Smasher』

ザイフリートを介した魔法の並列処理により、追撃の詠唱が完了する。

フェイトのそれとは異なり、早撃ちを前提として魔導式を書き換えた帯電砲撃魔法。それを、虹色の奔流から解放されたばかりなのはに向かって発射する。

『ファイア!』

空気を焼く、高電圧の砲撃。

紫電を纏う雷砲撃がなのはの身体を包み覆い隠す。

直後、なのはがいる位置を中心に爆発が起こる。空気が震え、爆音が轟く。

『氷結の国の主よ、氷雪の泉と白き風によりて、万物を包みこめ』

その状況でさらに、ヴィヴィオは詠唱を重ねる。

砲撃魔法と詠唱魔法を組み合わせた三連撃。

最後の詠唱魔法で、なのはのいる周囲の空間ごと薙ぎ払う。

『ニブルヘイム！』

古代ベルカ式の空間系氷結魔法。

空気すらも凍結させる冷気の檻が、なのはの近くにあった廃ビルごと世界を絶対零度に限りなく近い氷の世界に創り変える。廃ビルは氷の中に封印され、余波によって周囲の海面が氷河になり変わり、空気中の水蒸気が一瞬で凝結し、霧となって周囲を覆い尽くす。

目を凝らす、なのはの姿は確認できない。

撃墜されて氷河の下に沈んだが、氷漬けとなった廃ビルの中に隠れているのか、それとも……。

「……………」

少なくともその姿を確認するまでは、警戒を解くことはできない。

ザイフリートを構え直し、並列思考によってもしなのはが撃墜されていなかった場合、のシミュレーションを開始する。

ヴィヴィオとなのはは、魔法の資質としてはかなり近いものがある。

魔法の方式の違いがあるとはいえ、両者ともに純魔力の直射・集束の適正が最も高い。つまり、親子揃って砲撃魔導師としての高い適性を持つということだ。

だが、こと砲撃魔法に関しては、ヴィヴィオはなのには絶対に敵わない。魔力の直射・集束技術といった純粋な実力から魔法の最大出力、それらの長所を活かすための機動・戦術・経験などあらゆる点において、なのはは一日の長どころか10年以上もの経験や知識の蓄積があるのだ。

純粋な砲撃魔法戦においては、なのはへの勝ち目はない。

それ以前に前提として、魔導師としての経歴が違い過ぎる。

自分よりもはるかに格上の相手……自分よりも強い相手に勝つためにはどうすれば良いのか。

それに対する答えはいくつかあるだろうが、この戦いにおいて、ヴィヴィオが出した答えは『相手よりも優れた点で勝負する』ことだった。

なのはの長所は、極めて優れた砲撃魔法関連の技術の他にも、豊富な魔力や高い防御力、戦いに対する並外れたセンスと空間把握能力だ。

だが、欠点として、純粋なスピードや詠唱魔法技術といった、射砲撃魔法以外の適正をほとんど持たない、砲撃特化の魔導師だといふことが挙げられる。教導官という職務上、他の魔法や近代ベルカ式の技術も有しているとはいえ、適性の低いそれらの魔法技術を実

戦で使うことはほとんどないのだ。

対して、ヴィヴィオがなのはに優っている点は純粋な近接格闘技術と並列処理能力、詠唱魔法技術、そして聖王の魔法だ。また、ベルカ・ミッドのハイブリッド魔導師であるため、魔法形式に縛られることもない。なのはほどの高い魔法出力を持たず、また砲撃魔法ほどの適正はないとはいえ、それらの長所は欠点を補ってあまりあるのだ。

最大出力で劣るため、悪く言えばそれらは器用貧乏と評することもできるだろう。

だが、少なくともそれらの点に関しては、間違いなくヴィヴィオの方が勝っているのだ。

それに、一番肝心な心、想いでも、負けているつもりはない。

想いを通すために……それが、ヴィヴィオの選んだ道なのだ。

「……………」

なのはが絶対零度の世界に呑み込まれてから、およそ30秒。

未だなのはの姿はなく、魔力の反応も感じられない。

それ故に、緊張が解けない。

物音ひとつない静けさが、何故だか怖ろしい。

やがて、塩気を含んだ冷たい海風によって、霧が晴れ始めた。



ヴィヴィオの髪が風に揺れ、眼下に白く氷結した海面が見える。

そして、桜色の光点も。

『Straight Buster』

聞きなれた、女性の声を模した機械音声。

同時に、ヴィヴィオの四肢を桜色のリングが拘束した。

「バインド!？」

予備動作にすら気付けなかった拘束魔法。

反射的に脳裏に浮かぶのは、一対一の戦闘での、砲撃魔導師の必勝法。

不味い。拙い。マズイ。

焦りの言葉は浮かぶが、強固なバインドを即座に解除することはできない。

必死で解除の魔導式を構築し続け やがて桜色の砲撃が、ヴィヴィオの身体を呑み込んだ。

直後、爆発。

反応炸裂砲撃、ストレイトバスター。

なのはの反撃によって、今度はヴィヴィオが煙に包まれる。

それとは対照的に、なのはの周囲を覆っていた霧が完全に晴れる。

ようやく姿を現したなのはのジャケットは、上着が欠損し、腰の飾り布も三分の一ほどが消失していた。

決して無傷ではない。

だが、戦闘に支障があるほどのダメージではない。

詠唱魔法を含む三連撃を以てしても、ヴィヴィオがなのはに与えたダメージはそれだけだった。

それなのに、なのはは煙に包まれたヴィヴィオを見て、動こうとしない。

ただ、ヴィヴィオの動向を確認するように見守り続け……やがて、煙が晴れる。

その中から姿を現したのは、ヴィヴィオを覆い隠すほどの大きさの虹色の盾だった。

「聖王の盾、か」

ポツリと、なのはが呟く。

「話には聞いていたけど……Sランク砲撃までなら、完全に防げそうだね」

その言葉には、どこか関心したような声色が含まれていて。

拘束を解いたヴィヴィオは、聖王の盾もまた解除し、改めてなのはと向かい合った。

「私自身の能力は反映されないから、Sランク以上になると防げないけどね」

「そんな重要な情報、？敵？に教えていいのかな？」

「だって、なのはママが本気になったら、聖王の盾どころか聖王の鎧があっても防ぎきれないよ。それに……」

「……それに？」

「なのはママは、敵じゃない。私の大好きな、優しくてちょっと厳しいママで……そして私が、本気の想いを伝えないといけない相手です」

だから大丈夫だよ、とヴィヴィオは笑ってみせる。

その笑顔にあるのは、なのはに対する全幅の信頼。

そこだけを切り取れば、微笑ましい親子のやり取りに過ぎない。

「……甘いよ。ヴィヴィオ」

抑揚のない、どこか怒気を含んでいるようにすら感じられる声。

なのはが努めて感情を殺しているのだと、ヴィヴィオにも理解で

きた。

「ヴィヴィオがこれから関わろうとしているのは、そんな甘い世界じゃない。確かに聖王の固有スキルは有用な魔法だけど……それだけでは対抗できない相手は、必ず存在する。それだけじゃない。僅かな油断や隙が、命取りになる」

言われずとも、理解している。

なのはは敢えて、追撃をしなかった。

その意味と、それが示しているものを。

「まして私達の相手は、メアリ・フローラ・リーゲン。おそらく……ううん、間違いなく管理局史に残るほどの、最凶最悪の次元犯罪者。もしかしたら死ぬかもしれないし……死ぬよりもひどい目にあわされるかもしれない」

それもまた、理解している。

なにか目的のために人々を害するのではなく、人を害するために害する、最悪の悪意を持った人間。命を奪うことに、冒涇すること、後悔どころか歓喜を覚えるような悪鬼羅刹。

それにヴィヴィオは、個人的にメアリに目を付けられている。

負ければ、間違いなく、死ぬよりもひどい目に合わされるだろう。

そんなことは、とうの昔に理解しているのだ。

「……ヴィヴィオ。ママ達のことは、信じられないかな」

それまで抑揚のなかったなのは声色に、僅かに感情の色が混ざる。

「確かに大変な相手だよ。だけど、私達は必ずメアリを倒して、ヴィヴィオの友達も救ってみせる。私だけじゃなく、フェイトちゃんも、はやてちゃんも……機動六課のみんながいる。みんなの強さは私が保障するし、ヴィヴィオも知ってると思う。……ヴィヴィオが無理をして危険な目に合う必要はないんだよ？」

ヴィヴィオに訴えかけるなのは声は、僅かに震えていた。

その、今にも泣き出しそうな声に、ヴィヴィオは答えた。

「……私だって、みんなのことを信じているよ。はやてちゃんに、フェイトママに、なのはママ……機動六課のみんなが揃えば解決できない事件はないし、泣いているみんなを救うことができると思う」  
「なら」

「だけど！」

その声は何故だが、良く響いた。

「私は、決めたんだ。私が、アリカちゃんを救<sup>たすける</sup>うって。……私じゃないと、ダメなんだよ。私じゃないとアリカちゃんの妄執に、決着をつけられない！」

感情的に、叫ぶ。

「私は、アリサちゃんに伝えたいんだ！ 私とエリーゼさんがアリカちゃんを救いたいくらいにアリカちゃんのことを大切だと……本当の友達だと思っっているって！ アリカちゃんは一人じゃないって、伝えたいんだ！」

それこそが、ヴィヴィオの嘘偽りのない想い。

ただ、助けるだけではダメなのだ。

保護して、カウンセリングを受けさせるのでは足りないのだ。

伝えたい。

大切な人を亡くした、その悲しみに囚われていた、大切な人に。

あなたは一人ではない、と。

私達はこんなにも、あなたのことを想っているのだと。

私達は？友達？なのだと。

だから。

「だから私は、絶対に引けません！」

そう、宣言する。

他でもない 友を想う、熱い心を教えてくれたその人に。

「……………分かった」

ヴィヴィオから視線を逸らし、俯くのは。

表情こそ見えないが、その表情は一瞬だけ、今にも泣きそうなものに見えていた。

「ヴィヴィオがそれだけ、強く決心してるなら」

俯いたままなのはが紡いだ言葉に、ヴィヴィオは少しだけ期待する。

『強く決心しているのだから、その想いを認めよう』

そう、なのはに認めてもらうことを。

しかし。

「もう、手加減なんてしない。……ヴィヴィオが友達を助けたいと思っているのと同じくらい」

淡々と語りながら、俯いていた顔を上げるのは。

その、強い力の籠った視線と、目があった、瞬間。

「私はヴィヴィオのことを、大切に想っている」

背筋が、冷たく泡立った。

「っ!？」

ほとんど反射的にザイフリートを構え直し、複数の防御魔法式を発動させる。

その頃にはすでに、なのはの周囲には、30を超えるデイバインスファイアが生成されていた。

「……嘘」

『デイバインシューター……シュート!』

様々な軌跡を描き、同時に襲い来る30を超える誘導魔力弾。機関銃の一斉掃射、あるいはフェイトの放つフォトンランサー・ファランクスシフトにすら匹敵する弾幕密度。

そのすべてを一度に撃ち落とすことは、今のヴィヴィオにはできない。

一方向からの防御にしか対応できない聖王の盾や、発動の不安定な聖王の鎧では対応できない。

できることといえば、狙いを付けられないように弾幕の中を不規則な軌道で飛行し、こまめに誘導魔力弾を破壊することだけ。

そこに在るのは、勝つための戦術の差でも、想いの強さの違いでもない。

ただ純粹で、残酷なまでの、実力差。

『D i v i n e   B u s t e r 』



結論として、それだけでは、対策として不十分だった。

軌跡を予測されないように、弾幕の中を縦横無尽に飛び回るヴィオ。

その上でなのはきっちりと、ヴィヴィオに狙いを付けていた。

しかし、それ以上の一体何が、今のヴィヴィオにできていたのだろうか。

今のヴィヴィオにできる、ヴィヴィオなりの全力。

なのははそれを、実力でねじ伏せただけに過ぎない。

全力を尽くした死闘でも。

その幕切れとは、得てして呆気ないものなのである。

『デイバイン・バスター！』

防御の上からでも相手を撃墜する、管理局でも最強クラスの純魔力砲撃。

デイバインシューターの回避に集中していたヴィヴィオは、その砲撃を避けることができず。

その小さな身体は、周囲を旋回していた誘導魔力弾ごと、桜色の砲撃を直撃を受け。

白いジャケットの破片を散らせながら、砲撃の残渣で砕けた氷の

海に、墜落した。

氷の浮かぶ海水が、ひどく冷たい。

力なく沈んだ海の中は暗く、音の無い世界。

そんな中で、ザイフリートを握ったまま、ヴィヴィオは考える。

こうなることは、ある程度は予想していた。

今の自分が全力を出せば、なのはにダメージを与えることは可能だろう。だが、なのはへのダメージが戦闘不能レベルに達する前に、自分が競り負け撃墜される。

まさかただの一撃で墜とされるとは、思っていなかったが。

おそらく今の自分がなのはとの勝負を繰り返したとして、なのはに勝ち星を上げることができるのは、おおそ一〇〇分の一といった具合だろう。まったく勝ち目がないわけではないが、その勝利の目はかなり薄い。それが、自分となのはとの間に存在する絶対的な差。

その上で自分は、その一〇〇分の一の勝利を呼び込まなければならない。

そこまで予想していて、偶発的な要因を含む一〇〇分の一を期待するほど、ヴィヴィオは愚かでも楽観主義者でもない。

逆に言えば、今一回を勝てば、後の九十九は負け越しても良いのだ。

ただ一回。なのはに本気の想いを伝えられれば、それで良い。

それが分かっているからこそ。

ヴィヴィオには、この日のために用意していた？切り札？がある。

《お嬢様。戦闘区域内の魔力散布量、規定値に達しました。……今がチャンスです》

直接頭の中に響く、ザイフリートの機械音声。

その声を意識に浸透させながら、作戦を再び組み直す。

切り札発動の条件となる、なのはの最強の一撃をなんとか耐えることはできた。

だが、そのダメージは確実に蓄積されており、ジャケットもかなりの部分が破損している。

魔力を消費して最低限のジャケット修復は行うが、間違いなく次

の一撃は耐えきれない。

自分が墜ちるのが先か、それともなのはを墜とすのが先か。

二人の間にある圧倒的な差を埋めるための、一か八かの大勝負。

……上等だ。

大仰なことになっているが、言葉にしてしまえばなんということはない。

ただ、大切な人に、想いを伝えるだけだ。

そのくらのことができなければ、アリカを救<sup>たすける</sup>うことなんて、到底できるハズもない。

自分がしようとしていることは、そういうことなのだ。

怯んでなんかられない。

負けてなんかられない。

躊躇う場合じゃ、もつとない。

『うん。分かった。……行こう、ザイフリート』

《仰せのままに》

ジャケットを最低限修復し、浮上を開始する。

不屈の心は、この胸に。

『ザイフリート！ リミット？・リリース！』

さあ。

反撃を、始めよう。

飛沫しぶきを上げて、勢いよく水中から飛び出したのは、白いジャケットに身を包んだ少女。その身に目立った怪我こそないものの、ジャケットの損傷具合から、ダメージが蓄積されていることは明らか。だが、その表情にも、虹彩異色オッドアイの双眸にも、諦めという感情は少しも含まれていない。

飛散した氷の粒が、魔力の光を受けて虹色に煌めく。その輝きの中を飛翔し、その少女 高町ヴィヴィオは、空中に待機していたのはと再び相対する。

交錯するのは、視線と想い。

煌めく虹色の光の粒を背景に、ヴィヴィオはなのはに力強い視線を向ける。

しかし、そのヴィヴィオの手には、ザイフリートは握られていなかった。

「……どういつもりなの？」

デバイスを起動していない、一見すると無防備な状態。

だが、その状態でもなのはは警戒を緩めない。いや。むしろ、そんな状態で再び戦場に立ったヴィヴィオに対して、先ほどよりも警戒を強めていた。

『Yggdrasil Form』

氷の浮かぶ海上に響く、ザイフリートの機械音声。

その身をデバイス形態にすることなく、待機状態である、剣十字を簡略化したようなひし形十字のまま、ヴィヴィオの胸元に留まっていた。

「……………」

なのはの問いかけに、しかしヴィヴィオは即座に答えない。

無言のまま、ゆっくりと、右手を掲げる。

「なのはママ」

その小さな右手を天に向けてから、ヴィヴィオはようやく口を開く。

「想いを伝えるのって、難しいよね」

「……そうだね。気持ちだけでは、想いは伝えられない。意味がない。だけど、力だけだと、想いは伴わない。それは、ただの押しつけになってしまう。だから、『お話』を聞いてもらうのは……本当に、難しいんだ」

「うん。……ちゃんと、分かってるんだよ。今の私じゃ、まだ？足りない？んだって。私の手はこんなにも小さくて、か弱いから。……」

それは。

少女の想いが、本物の？強さ？に変わる瞬間。

「この手にあるのは、打ち抜く魔法！ 涙も、痛みも、運命も！！」

直後。

周囲が、虹色の光の粒に包まれた。

「これは……」

前方のヴィヴィオへの警戒を維持したまま、周囲の様子を確認するなのは。

目算で、およそ直径一〇〇メートルの範囲内に、虹色の光の粒が漂っている。それは魔力集束の際に発生する現象。周囲に漂う魔力がヴィヴィオの影響化にあることを示している。

だが、ヴィヴィオはそれを一点に集束させることなく、ただ漂うままにしているだけ。周辺魔力を支配下に置いたまま、なにをするでもなく放置している。

通常の集束魔法のプロセスを踏まない集束魔法に、なのはは戸惑いの表情を浮かべていた。

「セイントライト・ブレイカー」

しかし、どうやらすべての魔力の統制を放棄しているわけではないらしい。

気付けば、ヴィヴィオが掲げたその掌に虹色の光の粒が集まり、一振りの刃を形作っていた。

なのはがかつて考案したストライクフレームの半実体魔力刃と良く似た、しかし根本的にまったく異なる術式の魔法。

ヴィヴィオが創った虹色の刃は半実体魔力刃ではなく、完全実体魔力刃。以降、ヴィヴィオが持つ虹色の魔力刃は、完全に質量を持つ物質と同等の挙動を取る。その、魔力というエネルギーに質量を持たせ、完全に物質化するということが、どれほど異質な能力なのか。

それは、管理局の技術を以ってしても為し得ない、ほとんど実現不可能なレベルの技術。

それを可能にするのは、聖王だけが持つ固有スキル『聖王の魔法』、その第三の魔法。



## 『聖王の刃』

魔力の出自を問わず、自身の制御化にある魔力を物質化する特殊技能。

そして、聖王だけが保有するその能力を前提として起動する、ザイフリートの最後の形態。

フォルム？・ユグドラシル。

古代ベルカの神話に登場する、すべての世界を統べる世界樹の名を冠するその形態は、純粹に周辺の魔力を主の制御化に置きその制御を補助すること、ただそれだけに特化している。

正に、すべての人間の頂点に立つ、聖王の名に相応しい最後の形態。

これこそが、ヴィヴィオの？切り札？

聖王である自分にのみ許された特化技能。

だが、それも未だ完全ではない。

ヴィヴィオは周辺魔力の制御、その状態を最大限に活かすために必要な、最後の『聖王の魔法』を未だ習得できていないのだ。そのため、今のヴィヴィオの実力では、周辺魔力を制御化におけるのは僅か三分だけ。集束効率も悪く、発動後には魔力が枯渇してしまう。

現時点で未完成、不完全な魔法。

それでも。

「なのはママ。これが今の私の、全力全開、最後の魔法。これを撃つたら、きっと私は、墜落すると思います」

それ故に。

「三分間。私の魔力が尽きるまでに、防ぎきつたらママの勝ち。撃ち抜けたら私の勝ち。もし私が勝ったら、私のお話を聞いてください。この勝負……受けてもらえますか？」

周囲を漂っていた虹色の光の粒が、少しずつヴィヴィオの周囲に集まっている。

その光景は、まるで輝く夢の世界のようで。

その虹色の光の世界に、不意に、桜色の光が混じった。

『Blaster Mode』

「分かったよ、ヴィヴィオ。その勝負……受けて立つ！」

なのはの周囲を、4つのブラスターピットが旋回する。

「ありがとう、なのはママ」

その答えを受けて、ニツコリと微笑むヴィヴィオ。

そして      どちらともなく、叫んだ。

『全力全開!』

宣言し、力強く虹色の刃を掴む。その瞬間、その刃を中心として、周辺の魔力の集束が始まる。

同時に4のブラスタースピットがヴィヴィオに迫る。その先端に形成されるのは、半実体魔力刃によるストライクフレイム。

その接近を正面から受け、ヴィヴィオは刃を振るう。その軌道に合わせて虹色の粒子が散らばり、光を受けて強く輝く。すれ違い様ヴィヴィオはストライクフレイムことブラスタースピットを叩き切った。

「な!？」

時間を追うごとに、完全実体魔力刃にさらに魔力が集束される。

集束過程の魔力粒子がキラキラと、刃やヴィヴィオを包み込むように、まるで夜空の星のように煌めく。

その刃の軌跡に描かれるのは、おとぎ話に出てくる光の剣を彷彿とさせる、虹色の粒子の帯。

集束斬撃。

周辺魔力を集め、高密度に圧縮した魔力を斬撃に乗せて放つ、集束魔法の最上級技術。エクストラスキル

ヴィヴィオが大切な人に教えてもらったことに、自分で編み出したもうひとつを加えた、今のヴィヴィオの集大成。

自分になにかを為すための、一撃必殺、全力全開！

名付けて、セイントライトブレイカー！

「はああああ！」

ブラスターピットの後部から延びるバインドケーブルを、ピットごと薙ぎ払う。制御を失った桜色の魔力が雲散霧消し、虹色の魔力として再構成される。

『デイベイン』

その隙になのはが、二発目の砲撃のチャージを行っている。ロードされたカートリッジの数は4発。推定でオーバーススランク相当の威力を持つ、なのはの十八番。

ザイフリートの能力でも、人の体内の魔力までは制御化に置くことはできない。

よってその発動を妨害することはできず、聖王の盾で防御することもできない。避けようにも、残った二基のブラスターピットによって回避を妨害されることは明らか。排除している間に、先ほどのように撃墜されてしまう。

それが分かっているから　　ヴィヴィオは、敢えてなのはとの距離を一気に詰めた。

ヴィヴィオの動きに合わせて舞い散る、虹色の光の粒。その間にもヴィヴィオの持つ刃に魔力が集束され、輝きが段々強くなってい

く。

光り輝く尾を伴って飛翔するその姿は、まるで流星のようで。

そうして虹色の流星と桜色の砲撃が、正面から激突した。

虹色の光の粒と火花を散らせ、歯を食いしばりながら、砲撃に耐えるヴィヴィオ。受け止めきれなかった砲撃の余波がジャケットを削り、風を生む。時間を追うごとに集束魔力の量は増えるものの、そうして集束した魔力を、集束した端から桜色の砲撃によって削られていく。少しでも気を抜けば押し切られ、撃墜されるだろう。

だが、それでもヴィヴィオは、諦めない。

胸に抱いた、本当の想いを伝えるために。

「……私は……」

歯を食いしばりながら、本物の想いをカタチにするために。

「私は、アリカちゃんを、絶対に、助けるんだ！」

声を大にして、叫び。

そのままの勢いで 桜色の砲撃を、虹色の刃で薙ぎ払った。

「……」

その事実、顔を驚愕に歪ませるのは。

制御を失った桜色の魔力が散らばり、本来霧消するハズのそれらの魔力が即座に虹色の魔力へと変換され、ヴィヴィオの刃へと集束される。

『Saint Light Breaker』

なのはがなにかをする前に、最後の十数メートルの距離を一気に詰める。

振りかぶるは、虹色の光の粒を散らせる、虹色の刃。

「セイントライト」

その刃を振り下ろす、最後の瞬間。

「ブレイカー!!!」

なのはが一瞬だけ微笑んだような、そんな気がしたのだった。

## 第十六話 親子だから・友達なのに

『既視感』という言葉をご存じだろうか。

初めて来た場所なのに、以前訪れたような気がする。

初めて体験することなのに、以前にも同じようなことをした気がする。

そういった、自分が知らないことを過去に経験したことがあるように感じる、不思議な感覚。

それと似た感覚を今、ヴィヴィオは味わっていた。

「……以上。ここまでで、なにか質問はある？」

地面にへたり込むヴィヴィオとエリーゼの前で講釈を垂れるのは、管理局最強の砲撃魔導師。

その状態でふと脳裏に浮かんだのは、エリーゼと和解し、二人で共にシャッハに師事しながら訓練をしていたときのこと。

毎日朝早くからクタクタになるまで訓練をし、昼にはアリカの作った昼食を食べ、それからそれぞれで過ごしたり、三人で遊んだり。

毎日が大変で、けどとても充実していて楽しかった日々。

考えてみれば、あの輝いていた日々からまだ一ヶ月も過ぎていな

いのだ。

その、ほんの少し前の出来事が、それこそ今の状況に既視感を覚えてしまうほどに、遠い昔のことのように懐かしく感じられてしまう。

……そう。あのときのことが懐かしいと良い思い出になるほどに、なのはの教導はすさまじいものだったのだ。

「……特に質問もないみたいだし、今日の訓練はここまで！」

『ありがとうございます！』

「……ありがとうございました……」

お手本のような挨拶を返す旧機動六課時代のフォワード勢とは対照的に、息も絶え絶えのヴィヴィオとエリーゼ。

「ヴィヴィオ、エリーゼ、大丈夫？」

「……大丈夫、です……」

「同じく……」

スバルの気遣いに言葉を返すも、その言葉とは裏腹に今にも倒れそうな様子の二人。

そんな新人に、フォワード勢は揃って苦笑を浮かべていた。

「まあ、なのはさんの教導は、初めて受けるとそうなるよねえ……」



「そうね。こうして最後まで着いてこれただけでもすごいわよ」

時間にして一ヶ月程度に過ぎないとはいえ、ヴィヴィオとエリーゼは教会騎士の訓練を受けてきた。その間に体力や魔力も成長し、最初の頃に比べて強くなっていると思っていた。

そういう僅かな自信の下に挑んだ機動六課での訓練の結果が、これだった。

「どうしてみなさん、そんな平気な顔してるんですか……」

「うーん。僕達はまあ、経験者だし、それにこれでも鍛えてるしね」

「そうそう。後輩には、まだ負けないよ」

フォワード年長組の二人だけでなくヴィヴィオと年代の近い二人もまた、疲弊しているものの比較的まだ余裕のありそうな表情を浮かべる。

考えてみれば、それは当たり前のことなのだ。

スバルは災害救助のエリート、湾岸救助隊 通称シルバーのエキスとして、ティアナは次元世界を股にかける管理局のエリート執務官として、そしてエリオとキャロも自然保護隊の隊員として、それぞれ現役で働いているのだ。

増してや、彼女達はかつて丸々一年間、なのはの教導を耐えた実績がある。

自分達のような、一ヶ月程度の経験しかない素人と比べてはならないだろう。

「ほら。それより、もうお昼ご飯の時間だよ。私もうお腹ペコペコだよー」

「そうね。早く行かないと混むから、ちょっと急ごうか」

「うんうん。ほーら。ヴィヴィオもエリーゼも、早く行こうよ」

そう言いながら、スバルはヴィヴィオに向かって手を差し伸べる。

「は、はい……」

そのスバルの手を取り、ヴィヴィオは立ちあがった。全身の関節が軋み、それ以上に疲労感がひどいが、歩けないほどではない。

ふとエリーゼの方を見ると、エリーゼもまた差し出されたティアナの手を取り、少々危なっかしい足取りで立ちあがっていた。

「二人とも、歩ける？ アレだったら、私とエリオがおぶって行くけど」

「だ、大丈夫、です！」

ありがたい申し出だが、あまり甘えるわけにもいかない。

無理やりガッツポーズをし、無事をアピールする。

「私も、問題ありません、よ」

「そう？　なら、いいんだけど」

「でも、無理するんじゃないわよ？」

自分達が年少組というのもあるのだろう。

スバル達が、自分達を気遣ってくれているのが分かる。

だからこそ、考えてしまう。

自分はあの日から、一体どれだけ強くなっているのだろうか。

今の自分には、スバル達に気遣われる程度の能力しかない。魔導師ランク空戦A A A+で、なのは仕込の砲撃魔法とベルカ・ミッドハイブリッドの魔法があつて、固有スキルである聖王の魔法があつて、それでもなお自分は未だ弱い。

そこらの魔導師に負けない自信はある。

だが、その強さと、自分が想いを貫き通すための強さは、また別なものだ。

それは今の自分では、まだ足りない。

一体いつになったら、大切な人を助けられるだけの能力が身に着くだろうか。

心のどこかに一抹の不安を残したまま、ヴィヴィオは仲間達と一緒に食堂に向かったのだった。

『戦闘の際には、最低でも二人一組で行動すること』

それがなのはの提示した、新生機動六課に配属されるための条件だった。

だが、その提示は本来であれば、わざわざ配属条件として提示されるようなものではない。

何故なら、それは機動六課に限らず、全次元世界に存在する武装組織の基本認識だからだ。

なのはやフェイトなど、機動六課の分隊長クラスは単独行動を取ることもあるが、それはあくまでも彼女達がスタンダードアローンで活動できるほどの類稀なる作戦実行能力を持つからである。いわば彼女達が例外なのであり、なにより実戦経験の少ないヴィヴィオ達には、スタンダードアローンでの活動は許可できないというのも当たり前前の話だろう。

その、武装組織では至極当然ともいえる条件が、なのはが見せたヴィヴィオ達への最大級の譲歩だった。

それはヴィヴィオの全力全開の『お話』を聞いたなのはの、最大の親心なのだろう。

そうして、ヴィヴィオとエリーゼが正式に新規隊員として加入すると共に、三年という年月による隊員達の状況の変化　ヴァイス陸曹長の武装隊復帰やティアナの執務官就任など　により、六課内では分隊の再編成が行われてた。

スターズ1　高町なのは

スターズ2　ヴィータ

スターズ3　高町ヴィヴィオ

スターズ4　エリーゼ・ダイヤモンド

ライティング1　フェイト・T・ハラオウン

ライティング2　シグナム

ライティング3　アギト

ライティング4　ヴァイス・グランセニック

フォワード1　ティアナ・ランスター

フォワード2　スバル・ナカジマ

フォワード3　エリオ・モンディアル

フォワード4　キャロ・ル・ルシエ

その他、アルト・クラエッタがヘリパイロットに就任し、その穴を埋めるためにロングアーチに若干名の補充人員を迎えて、旧機動六課はブルースフィア事件専任の？新生？機動六課として再び活動を開始した。

その中で、ヴィヴィオは基本的にエリーゼとコンビを組んで活動することになる。

また、平時は旧機動六課時代と同じように訓練を行い、ブルースフィア関連と思われる事件が発生すれば即座に行動できるような体

制を組まれていた。それは、かつての機動六課の体制を踏襲しつつも、過去の経験を踏まえ、凶悪犯罪であるブルースフィア専任の部隊としてより先鋭化された組織体制である。

そして、ヴィヴィオが新生機動六課に配属されてから一週間後の今日。

新生機動六課の……そしてヴィヴィオにとっての、初の任務が開始されていた。

「……………」

「やはり、緊張しますね」

「そう、ですね」

時刻は、次元標準時刻で朝の六時。

いつもなら、朝の訓練を始める時間帯であり。

そんな時間に、ヴィヴィオとエリーゼは機動六課の制服に身を包み、次元航行艦に搭乗していた。

M級次元航行艦『アンタレス』。

旧機動六課のメンバーには馴染み深いし級次元航行艦『アースラ』よりも小型の艦で、次元航行能力を有するものの長期の航行を想定していないため、艦内のプライベートルームなどは必要最低限しか用意されていない。

しかしその分小回りが利き、また旗艦とならず前列に出て直接戦闘を行うことを想定されているため、武装はかなり充実している。操舵主の腕にもよるが、そのまま戦闘機のような高速戦闘行為も可能な戦闘艦である。

それだけでなく、アンタレスの周囲にはさらにアンタレスを護衛するように三機のM級次元航行艦と、一〇機のS級次元航行艦が隊列を組み、同じ速度で航行を行っている。

計一四機もの次元航行艦を導入するほどに厳重な体制を敷かれているが、それほどに仰々しい任務の内容は、言葉にしまえば至ってシンプルなものだった。

『ブルースファイアの護送』

たったひとつの、それも使用方法の不明なロストロギアを輸送するためだけに、これほどに厳重な警備体制を敷いているのだ。

だが、これでも万全とはいえない、と考える関係者もいる。

それだけ、このロストロギアを狙う人物は厄介で、危険なのだ。

「ああ、ヴィヴィオ。エリーゼも。こんなところにいたんだ」

「あ。なのはマ……高町分隊長」

「お疲れ様です。高町分隊長」

「にやはは。そんなに畏まらなくてもいいよ」

ヴィヴィオとエリーゼしかいなかった展望休憩室に、なのはが姿を表した。

その出現に緊張する二人に、なのはは「肩の力を抜いてもいい」と告げ、窓の外に目を向けた。

それに倣ってヴィヴィオとエリーゼも窓の外に視線を向ける。

「……………」

「……………」

「……………」

ヴィヴィオと、エリーゼと、なのは。

会話が生まれず、なんとなく気まずい雰囲気生まれる。

思えば、ヴィヴィオがなのはと『お話』してから今日までの一週間、仕事以外でまともな会話をしていなかった。それはなのはが忙しく、また自分達が慣れない仕事に戸惑い、終わっても訓練のせいで疲労困憊のためすぐ眠ってしまったりで、タイミングが合わず、中々会話の時間を取れなかったためである。

つまり、全力全開でお互いの想いをぶつけあった、あの『お話』の日から、二人は意見を交わしていない。

それ故に、ヴィヴィオは　そしてなのはも　唐突に生まれたこの空間に、まるで親子喧嘩をした日の翌日のような、言葉にできない気まずさを覚えていたのだ。



切っ掛けはたったの一言で良いハズなのだ。

それなのに、ヴィヴィオもなのはも、中々口を開くことができない。

この場で改めてなにを話していいのか、咄嗟に思いつかないのだ。

そうして、一分ほど嫌な沈黙が続いた後だろうか。

「……そういえば、機動六課の初任務も、今回の任務と似ていたな」

不意に、その目を窓の外　星の海に向けたまま、なのははそう  
呟いたのは。

「そうなのですか？」

その呟きに即座に食いついたのは、ヴィヴィオではなくエリーゼ  
だった。

エリーゼには、なのはと個人的な交友はない。そのためエリーゼ  
はなのはの人となりをも聞きしたもののしか知らず、仕事以外のこと  
で直接会話を交わすのはこれが初めてとなる。

その初会話の内容が、少し不器用な自分の主兼友人とその母親の  
ために向けた助け舟だというのは、従者としてはなんともらしい話  
なのかもしれない。

「うん。あのときはロストログア、レリックを輸送していた列車を  
強襲したガジェット……AMFフィールドを搭載した量産兵器なん

「ただね、それからレリックを守る任務だったんだ」

当時の事情を知らないエリーゼにもわかるように、説明を加えながら事件のあらましを話すのは。

その話に、ヴィヴィオとエリーゼは耳を傾けた。

「今でこそそれぞれの道を進むエリート局員だけど、あの頃はまだフォワードのみんなも新人<sup>ルキ</sup>でね。私達はリミッターのせいで碌に力が使えなかったし、キャロとエリオは実務経験のあったスバルとティアナ以上に完全素人で、そのせいでピンチにもなったけど、なんとかそれ乗り越えて。そうやって危なっかしいところを抱えたりしながらみんな少しずつ成長して……そうやって事件を解決していったんだ」

そう、しみじみと語るなのはの表情には、どこか遠い日々を想う哀愁のような懐かしさが含まれていて。

「あれから、もう三年か」

最後にそう呟いたなのはの表情から、その複雑な感情を窺い知ることはいくできない。

だからこそヴィヴィオはなのはがなにを感じているのか、理解できたような気がしていた。

「……ああ、ごめんね。なんだか、一人で話しこんじゃって」

「いえ。中々興味深いお話でした」

「そうだよ。マ……高町分隊長は、家でも中々そういうお話をしてくれませんか。だからそういう意味でも、昔のみんなの話が聞けて、

面白かったです」

「無理しなくていいよ、ヴィヴィオ。ここにはどうせ、私達しかないし」

公私を分けた呼び方に未だ慣れないヴィヴィオの様子に、なのはクスリと笑みを浮かべた。

それから、柔らかい笑顔のまま、今度はエリーゼに視線を向けた。

「エリーゼも。他の人がいないときは、上司としてじゃなくてヴィヴィオの友達として私に接してほしいかな」

「……分かりました。では、なのはさん、と」

「ママ。エリーゼさんに、あんまり無茶ぶりとかしないでよ?」

「ヴィヴィオこそ。まだ、上司への口の利き方がなっていないようですよ?」

きゃいきゃいと、皮肉にもならない皮肉を言いあう二人。

さすが、親子というべきか。

二人の間にあった気まずい雰囲気は親子らしい喧嘩によって、いつの間にか消えてなくなっていた。

その代わりに、二人の会話には段々と遠慮というものが無くなっていったようではあるが。

それはある意味、照れ隠しのだろう。

本物の親子だからこそ、恥ずかしいのだ。

「大体、ママの教導は厳しすぎる。教会のシスターシャツハだって、なのはママほどは厳しくなかったよ」

「そ、そんなことないよ！ 私だって、ちゃんと二人の成長具合を確かめて、考えながらメニューを組んでるんだから」

「それは分かってるよ。なのはママは優秀だから、教導内容に間違いはないとわかるよ。分かるけど、それとこれとは話が別なの！正しい正しくない以前に、なのはママが組む教導のメニューが常軌を逸しているの！」

「そ、そんなことないの！ え、エリーゼちゃんもそう思うよね！？」

分が悪くなったのか、エリーゼに助け船を求めるのは。

しかし、エリーゼの返事は、それとはまた少し違う種類のものだった。

「……なのはさんって、学院で聞いていたよりも、フレンドリーな方なんですネ」

少し驚いた表情を浮かべるエリーゼの口から零れた率直な干渉に、そういえばとヴィヴィオは思いだす。

ヴィヴィオは知らなかったが、ザンクト・ヒルデ魔法学院には、

高町なのはファンクラブが存在していることを。

「……………ちなみに、どういう話を聞いていたの？」

「えーとですね。学院の方では高町なのはファンクラブがあつたんですけど、面白半分に『地獄の鬼教官』とか、『管理局の白い悪魔』とか、そんな風に」

「そ、そう……」

エリーゼの話を聞いて、ガツクリと肩を落とすなのは。

自分がそれなりに有名人であることを知っていても、自分の娘の学友の世代にそういう印象を持たれていれば、それはショックを受けて然りだろう。

「ほら。なのはママは、ひとつのことに集中すると周りが見えなくなるんだから。なんでもやり過ぎなんだよ、基本的に」

「それは、ヴィヴィオも人のことは言えないと思いますが」

「う……」

「というか、『高町ヴィヴィオを見守る会』でも、ヴィヴィオさんの普段の行動や態度から、さすがなのはさんの娘だと言われているんですよ？」

「それ、喜んでいいことなんだよね……」

淡々と、自分の主兼友人ですら容赦なく諭していくエリーゼ。

「『高町ヴィヴィオを見守る会』……」

「わ、笑うなー！」

「……ちなみにさっきの話ですが、正直なところ、私もなのはさんの教導は……その、ちょっとどうかと思うくらいに厳しいと思います……」

「う、今それを言うの……」

「と言うか、エリーゼさんは、どっちの味方なの！？」

「……強いて言うなら、私は正しい者の味方でしょうか」

不必要に熱くなった人間を見ると、自分は却って冷静になれるということなのだろう。

じゃれ合いのような軽い親子喧嘩のハズが、いつの間にかエリーゼに会話の主導権を握られていた。

「……もっと普通に、お話ししましょう。意地を張るのも、遠慮するのも、全部無しです。ヴィヴィオさんも、なのはさんも、それができる人だと、私は思っていますから」

喧嘩をしてちよつと気まづくなったり、意地を張りあつたり、相手に遠慮したり。

どんなに仲の良い親子でも、本音でぶつかり合える間柄だからこそ、意見や気持ちがすれ違うこともあるだろう。お互いの想いに納

得できず、先日のなのはとヴィヴィオのように『お話』が通じないこともあるかもしれない。

それでも、どんなことがあっても、ちょっとしたきっかけでいつもの関係に戻ることができる。

それが、本物の親子ということなのだから。

「……うん。そうだね。エリーゼちゃんの言うとおりだ」

「すみません、エリーゼさん。なんだか、余計な世話をかけさせてしまつて」

「いえ。友人として、当然のことをしたまでです」

だからこれで、仲直り。

昔は色々あったけど、今になって考えてみれば。

そんな風に、ときに喧嘩するほどに本音でぶつかり合えない親子など、悲しいだけではないか。

「……次の交代までまだ時間もあるし……せつかくだから、三人でお話しようか」

「うん！」

「いいですね。お供させていただきます」

「じゃあ、なにか飲み物でも買ってあげるよ。なにがいい？」

「私も、良いのですか？」

「もちろん！ ヴィヴィオの友達なんだから」

「ありがとうございます。……では私は、ブラックコーヒーで」

「随分と、渋い趣味だね」

「私はキャラメルミルクで」

「はいはい。分かってるって」

言い、展望休憩室の隅にある自動販売機に向かうのはと、それに追従するヴィヴィオとエリーゼ。

学校のことや仕事のことなど、取りとめのない話をしながら自動販売機に硬貨を入れ、中から出てきた缶を取りだし、窓際の席に着こうとした、そのときだった。

「……あれ？なのはママ、エリーゼさん。あの艦、なんだか位置がおかしくない？」

ふと視線をやった窓の外、その星の海の中に見える、アンタレス以外のM級次元航行艦。

そのうちの一機、アンタレスの右舷後方を担当する航行艦『ベガ』が、アンタレスの右舷真横に来ていたのだ。

「……そう、ですね。あの艦は、もっと後ろにいるハズですが」



「……ただの間違いならいいんだけど……」

「なのはママ？」

「なんだか、嫌な予感がする」

そう呟いたなのはの行動は早かった。

即座に気持ちを切り替え、ブルースフィアを警護している班現在の時間はフォワードチームの分隊長であるティアナと責任者であるはやてに、直接思念通話を飛ばす。

《フォワード1、ロングアーチ1、聞こえますか？》

《なのはさん、ですか？ はい、聞こえます》

《はい。こちら部隊長。高町分隊長、どうかしましたか？》

その思念通話のやり取りが、ヴィヴィオとエリーゼにも送信される。

当事者同士の双方向通信ではなく、艦内にいる魔導師全員に聞こえるように思念通話のチャンネルを開いているからだ。

《右舷後方担当のベガの位置がおかしい。アンタレスの右舷真横に來ています。八神部隊長はアンタレスに確認をお願いします。フォワードチームは念のため、警戒を強めてください》

《了解！》

《了解。ちよつと、あちらさんに確認してみるわ》

それぞれの返事後、開いたままの思念通話のチャンネルを通じて、ベガ側への通信内容がヴィヴィオ達の耳に届く。

ベガ側の管制官との短いやり取りの後、ヴィヴィオ達がいる展望休憩室から見えるベガが、すぐに反転を始めていた。

「……速度の目測を間違えたのでしょうか？」

「……………」

その、元の位置に戻るために反転を始めるベガの姿に、ヴィヴィオは言い知れない不安のような違和感を覚えた。

また、エリーゼも似たような違和感を抱えているらしく、無意識なのだろう、その手は首から下げた十字架型のデバイスを握っていた。

「ヴィヴィオ、エリーゼちゃん。デバイスの起動準備」

それは無論、歴戦の猛者である高町なのはも同様のようだった。

「……………」

違和感の正体は分からない。

だが、口では疑問を投げかけつつも、ヴィヴィオもエリーゼも自然となのはの指示に従い、デバイスに手を伸ばす。

「わざわざ反転しなくても……速度を緩めるか、その場で停止すればいい。なのに、あれは」

回頭の途中なのか、先端をこちらに向けた状態のベガを見つめながら、なのはが話す。

その、次元航行艦の尖った先端が、アンタレスに迫っているように見えた。

「対衝撃準備！」

なのはの声に、ヴィヴィオは咄嗟にデバイスを起動し、衝撃に備えるために姿勢を低くしてから浮遊、振動に備える。

次の瞬間、轟音と共に艦体が大きく揺れ、一瞬の停電の後にけたたましいアラートが鳴り響いた。

ブルースフィアを取り巻くこれまでの展開を鑑みると、ブルースフィアを狙った襲撃が行われることは明白だった。そのため、大型ではないとはいえ計一四基もの次元航行艦による護衛を用意し、襲撃のパターンをいくつも予想し、対策を立てていた。

故に、現在の状況もまた、想定範囲内の出来事ではある。

だが、それを理解していても、ヴィヴィオは驚かざるを得なかった。

まさか管理局の護衛艦を乗っ取り、それを直接ぶつけてくる、なんて。

本当にそんなことをしでかすとは、予測していても予想できなかったのだから。

「信じられない……」

耳をつんざくようなアラート音と赤いランプの点灯の中、ヴィヴィオは窓の外へと視線を向ける。

そこから見えるのは、寸分の違いもなく、M級次元航行艦『ベガ』が、ヴィヴィオ達の乗る『アルタイル』の横っ腹に突き刺さる、あまりに現実離れた様子だった。

「ヴィヴィオ！ エリーゼ！ 大丈夫！？」

完全にヴィヴィオの想像の外側にあつた光景に茫然とするヴィヴィオはしかし、なのはの声によって現実に取り戻された。

「スターズ4、エリーゼ・ダイムラー。問題ありません」

「す、スターズ3、高町ヴィヴィオ。こちらにも、問題ありません！」

「……良かった。だけど、状況は最悪みたいなの」

なのはは一瞬だけ安堵の表情を浮かべるも、その表情はすぐに苦々しいものに変わった。

「通信も念話も妨害されてるみたい。……よってスターズ分隊は、これから直接、ブルースフィアの護衛に向かいます。ヴィータ副隊長とは、現地で合流することを期待して」

「いえ。そちらに行く必要はありませんよ」

即座に公私を切り替えたなのはの言葉を遮ったのは、未だ幼さの残る少女の声だった。

その声は、機動六課に所属する誰の声でもなく　しかし、その声はヴィヴィオ達が良く知る、絶対に忘れることのできない声だった。

「誰が何人向かおうと……ブルースフィアを護衛することなんて、不可能なんですから」

法衣を模して形作られた騎士甲冑。

先端に八面体の結晶が取り付けられた、銀色の杖。

ヴィヴィオと同じくらいの、小柄な体格。

そしてその双眸はヴィヴィオのそれと良く似た、綺麗な蒼と紅の瞳。

「ま、まさか……」

「そんな……っ！」

「久しぶりだね。ヴィヴィオ、エリーゼさん」

まるで夏休み明けに友人と久しぶりに出会ったように、懐かしそうに優しい笑顔を浮かべるその少女のことを、ヴィヴィオが忘れるハズが無い。

ヴィヴィオが救<sup>たすけ</sup>いたいと願ったその少女のことを、思い出さなかった日は無い。

言いたい言葉はたくさんあったハズなのに、それが言葉にならない。

伝えたい想いはたくさんあったハズなのに、それがカタチにならない。

会いたかったハズなのに。

救<sup>たすけ</sup>いたかったハズなのに。

言葉が。

想いが。

気持ちが。

願いが。

胸に抱いたそのすべてが心の中でぐちゃぐちゃになって、なにがなんだか分からない。

ヴィヴィオが想って止まない、大切な人。

アリカ・フィアットが、そこにいた。

## 第十六話 親子だから・友達なのに（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

天海澄です。

2011/11/27現在、週一更新が続いている『魔法少女リリカルなのは Vivid symphony』ですが。

次回12/4更新は所用により、お休みをいただくかもしれません。

12/11頃には第十七話を更新をすると思いますので、お待ちいただけると幸いです。

それとできれば、感想や評価をいただけるとありがたいです。

他の作者様にも似たようなことを仰る方は多々いらっしゃるようですが。

自分としても、やはり『話を評価してほしい』という思いはありますので。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1871y/>

---

魔法少女リリカルなのは ViVid symphony

2011年11月27日11時51分発行